

ごめんください、  
足尾のこと  
教えてください！

— 科 研 版 —

## この冊子を手にとりくださった方へ

志村春海

この本の制作者の一人、志村と申します。私は、平成二四年度から三年間、栃木県日光市の足尾地域で、地域おこし協力隊<sup>1</sup>として暮らしながら聞き取り活動を行いました。その聞き取りの内容の一部をまとめた冊子が「ごめんください、足尾のこと教えてください！」<sup>2</sup>「ごめんください、足尾のこと教えてください！」<sup>2</sup>です。冊子では足尾の生活やそこに暮らし続ける人々（ときには理由があり足尾を離れた人々）のお話を紹介しています（たとえば、製錬所から出てくる煙を被<sup>かぶ</sup>った植物のことを「チョリチョリ」と言っていたり、各家庭にお邪魔すると必ずある自前の鉱石のコレクション、坑夫さんから何う技術が詰まった坑内空間の仕組みや、坑夫さんならではの仕事感など……）。テープレコーダーで録音しながら聞いたお話だけではなく、ちょっとした立ち話やお茶飲みのときの会話、大量の昔の写真や古文書を家の中で広げさせてもらいながらのお話など、さまざまな場面をひっくるめて聞き取りを行なってきました。

そのような対話を通して足尾の知らない一面に、衝撃を感じると同時に、無意識に出てしまう言葉や思い出話、人間らしい感情に出会えることは尊いと思えました。またその一方で、こうした曖昧な語りを文字として残す難しさに悩みましたが、聞き取りの手法に詳しい好井裕明先生にアドバイスをいただくことで、これらの良さを崩さないまま形にしてこれました。

私は平成二六年度で地域おこし協力隊の任務を終えましたが、科学研究費の支援を受けることで

平成二八～三〇年度まで継続することができました。本冊子はこの六年間の活動内容をまとめたものです。各章では執筆者それぞれが関心のあるテーマについて執筆していますが、読者の方にご理解いただきたいことがあります。本冊子で紹介する聞き取り内容には、歴史的事実と異なることや主観的に表現されていることがあるかもしれません。また、執筆者によって、語りの表現や引用の方法が異なります。これらは、語りの言葉をありのままに残すことや、その語りを聞いた私たちがそのときどう受け取ったかということを大事にしたことによるものです。その点をご理解いただいたうえで読みくだされば幸いです。

また、本冊子の後半部分は資料編として過去の冊子をそのまま掲載しています。前半部分の本編と繋がっていることもありますので、ぜひ見比べながらお楽しみください。

最後に、足尾について語ってくださった方々をはじめとして、さまざまな形でご協力いただいたすべての皆様に感謝いたします。

## 注釈

「1」地域おこし協力隊

平成二一年から総務省の取り組みとして開始した制度。過疎地域に、地域外の人材を一定期間誘致し、その地域の活性化を促進する活動を行う。

「2」「ごめんください、足尾のこと教えてください！」「ごめんください、足尾のこと教えてください！」

日光市のホームページからダウンロード可能。https://www.city.nikko.lg.jp/tikisinkou/ashioiktiori.html



## 目次

この冊子を手にとりくださった方へ「志村春海」 2

足尾の概要「三浦一馬」 8

一〇〇年続いた生協——三養会……………「好井裕明」 13

コラム 三養会、最後の灯りが消えた日……………「市乃瀬昌弘」 31

長門修造さんの戦争とシベリア抑留……………「志村春海」 34

コラム 地域おこし協力隊って何をやっている人なの？……………「中村哲也」 45

足尾のなかで老いるということ……………「三浦一馬」 47

変わりゆく足尾の納涼祭／足尾高校定時制と聞き取り

プール制という工夫……………「好井裕明」 76

コラム 残していきたい足尾の記憶……………「中山貴仁」 96

コラム 足尾の魅力を伝える……………「長澤美佳」 97

国鉄足尾線の廃線に対抗した特別乗車運動……………「中村哲也」 98

コラム 寺子屋の今……………「中山京」 114

“足尾を調べる”ということ——村上安正先生……………「志村春海」 116

番外編 足尾を知るためのオススメ資料……………「好井裕明／三浦一馬／志村春海／中村哲也」 132

おわりに「好井裕明／三浦一馬／志村春海／中村哲也」 144

資料編 「こめんくください、足尾のこと教えてください！」……………「好井裕明」 151

「こめんくください、足尾のこと教えてください！」 その2……………「好井裕明」 215





栃木県の日光から車で山の中へ三〇分ほど進み、約三キロに及ぶ長いトンネルを抜けて、やっと足尾にたどり着きます。今では想像しがたいことですが、周囲を山に囲まれたこの場所は、かつて鉾山都市と呼ばれていました。

一八八七年、経営母体が古河鉾業<sup>[2]</sup>（現、古河機械金属株式会社足尾銅山事業所。以下、「古河」とする）に変わったことで、足尾銅山は急速な発展を遂げ、日本一の銅の産出量を誇るようになりました。平地が少なく、周辺の町から離れていたため、生活に必要なものは古河から提供されていました。たとえば、鉾員の住居である社宅や風呂場、水場、トイレ、購買所は、古河の関係者であれば利用することができました（その後、古河関係者以外でもこうした施設を利用できるようになりました）。また古河は、祭や運動会といった年中行事を主催したり、映画や演劇、歌謡を興行したりするなど、住民の文化活動も積極的に担っていました。こうして古河は、足尾住民の生活をまるごと支えていくこととなります。山奥であるにもかかわらず、そこには最先端の都市的な生活が存在し、最盛期には三万人近くの人びとが暮らしていました。群馬から行商に来る人もいたといえます。こうして銅山を中心とした足尾特有の社会が形成されていったのです。

日本の銅鉾業は、戦時期の銅線需要の拡大に伴って発展していきました。その過渡期には、巨大な資本を持つ財閥による独占体制が定着しています。古河もまた、こうした財閥の一つで、戦後の

解体の影響を受けましたが、一九六三年に銅の輸入が自由化されるまで日本の銅鉾業において重要な位置にあり続けました。

しかし、環境規制の強化や資源の枯渇、採掘条件の悪化により、一九七三年二月、足尾銅山鉾山部は廃止され、閉山となります。その結果、これまで古河を中心に形成されていた町の構造が変化することになり、人口が急激に減少しました。また、足尾内でも人口の流動があり、役場や学校、商店などがある通洞地区に人口が集中していきました。古河は、関連企業の経営や坑内から排出される汚水の処理のために足尾に残っていましたが、かつてのような影響力はありませんでした。こうして足尾に暮らす人びとは、これまで古河が支えてきたものを再編成する必要に迫られていったのです。

閉山対策として、企業誘致や観光事業の推進、トンネルやバイパスの建設などさまざまな施策<sup>[9][10][11]</sup>が講じられましたが、人口減少や高齢化は進行していきました。二〇〇六年には、足尾町、今市市、日光市、藤原町、栗山村が合併して日光市となっています。

この冊子を編纂するための科研費チームが聞き取りの活動を本格化させたのは二〇一六年ですが、そこから現在に至るまでの間にも、過疎化を感じさせる出来事がありました。購買所であった生協の閉店や支所となった役場の機能の縮小、閉山後に誘致され留まっていた最後の企業の撤退……。そして、人口はついに二〇〇〇人を割りました。今回の聞き取り調査は、このような状況のなかで行われたものです。

#### 参考文献

・足尾町郷土誌編集委員会『足尾郷土誌』（一九九三年）

- ・足尾町役場企画課「広報あしお 縮刷版 第一号」(足尾町、一九九〇年)
- ・足尾町役場企画課「広報あしお 縮刷版 第二号」(足尾町、二〇〇六年)
- ・岩間英夫「産業地域社会の形成・再生論 日立鉱工業地域社会を中心として」(古今書院、一九九三年)
- ・除本理史・関耕平「足尾銅山閉山と自治体財政」『東京経大会誌 経済学』二四三号(二〇〇五年)
- ・村上安正「足尾銅山史」(随想社、二〇〇六年)
- ・生井貞行「銅山閉山にともなう足尾町の変容」『経済地理学年報』二八一号、一九八二年
- ・生井貞行「鉱山都市の衰退と経済再建 栃木県足尾町を事例として」石井素介・長岡顯・原田敏治編『国土利用の変容と地域社会』(大明堂、一九九六年)
- ・日光市「平成26年度 日光市統計書」
- ・武田晴人『日本産銅業史』(東京大学出版会、一九八七年)
- ・山下克彦「四産炭地域の変容と地域振興の取り組み」山本正三・千歳壽一・溝尾良隆『現代日本の地域変化』(古今書院、一九九七年)

## 註釈

- 〔1〕これまでの研究において鉱山町の一般的な特徴として、単一の資源に依存した「一鉱山・一企業・一集落の性格が強い」、「鉱山が築き上げた社会は閉鎖された、地底での共労・運命共同体的性格(岩間一九九三・六)、町の発展が「採鉱↓起業↑発展↑繁栄↑衰退のサイクル」をたどるものであり、こうした性質は「他都市との有機的な結合がはかりにくいほか、新たな産業を展開するための用地の規模や条件も乏しい」とわれています。(中略)基幹産業の鉱山業の衰退が、地域全体に直接的な影響を与える(山下、一九九七・八二・八三)。
- 〔2〕足尾銅山は一八八七(明治一〇)年に官営から古河の経営者、古河市兵衛により買収され「以後昭和四八年の閉山までの九十六年余りの期間に六七万五、一三九トン(但し自山銅)を産出した。総産銅量が推定八三万トンであるので、そのほとんどが古河の経営に移ってから産出されたものでした(村上二〇〇六・二五―二九)。
- 〔3〕足尾銅山は古河の発祥地でありながら、経営が基盤に乗ると事業は鉱業だけでなく広く、足尾外に分散していく傾向にあったと考えられています。「足尾銅山で採鉱・選鉱・粗銅製錬を、日光にて精銅製錬を行っている。工業のうち、機械工業と通信機の工場は小山市を中心に展開し、その他の工場は古河電工が横浜

市、富士電機は川崎市中心というように分散」しています。また、古河本社と足尾の関係の特徴は「企業の発祥地で、採鉱から製錬までの一貫した総合的生産設備を有し、かつ大鉱山都市を成立させている。それだけでなく、この鉱山から生じた莫大な利潤は、企業を大資本や財閥へ育てあげたための原動力」となりました(岩間一九九三)。

〔4〕四方を山で囲まれ、極端に平地が少なく約九五%の山地が占める」(『足尾郷土史』:三)。

〔5〕たとえば、社宅では「採鉱・選鉱、精錬などの各事業所を中心にしてそれぞれ社宅が形成され」、「地区の階層性も見られ、所長、副所長などの管理職員の住居地区は駅の近くの交通の便が良いところ」にあり、組夫などの居住地区は町はずれの生活環境が不便なところ」(生井一九八二)に建てられていました。多くが木造平屋建てで、一つの長屋に三〇五軒の世帯が居住し、光熱費は無料であるが、浴場、水場、トイレは共同でした。そのため、そこで暮らす人びとはみな同じような生活を送り、必然的に密な関係性が形成されていきました。

〔6〕詳しくは、武田晴人、一九八七、『日本産銅史』を参照。一九二〇年代では、とくに電線需要の増加で国内での銅需要は拡大し、産銅業のなかで「需要の七割を占めるに至った電線工業への原料銅の供給」が重要となる。「電線工業では『東京線』と呼ばれた普通品市場では中小企業が入り乱れて激しい競争が展開する一方で、有力三社(古河・藤倉・住友・引用者注)は外国企業との技術提携を進めて電力・通信の両分野にわたるケーブル製造を拡大し、安定的な地位に立つようになった」。そうしたなか、古河商事は古河鉱業と協定を結び、積極的に輸入銅を受け入れ、当時割高な鉱業部産銅に代わって銅線市場での地位の安定化を図った。(武田一九八七:二四七―二五〇)

〔7〕一九七〇年と一九七五年の国勢調査の比較では地区別の人口は「社宅部は本山の一〇〇%減を筆頭に、砂畑八二・一%、遠下七九・〇%というように、通洞の二六・六%減を除いて、大幅な減少」となり、急激な人口移動が生じた(『足尾郷土誌』:六六)。

〔8〕一九七三年一月に町が行った足尾町全世帯を対象とした「鉱山部廃止に伴う各般に及ぼす影響予測調査」には以下のようにある。回答数は二五九四、回収率は八六%でした。これによると居住希望としては「閉山にかかわらず住む」と答えたのは四五・六%、「今後の情勢をみて決める」が四三・九%、「転出する」が一〇・五%で、このうち「転出する」と答えた世帯の世帯主の職業は「古河鉱業 足尾事業所」六六・三%、「古河事業所 下請け」が八・八%、「商工業」が四・〇%、「サービス業」が二・二%、「その他」が一八・七%でした(『広報あしお 昭和四八年二月二五日特集号』より)。このように閉山後に古河の正社員たちは足尾に見切りをつけ関連会社へ移動したいと考えている一方で、残りたいと希望する約半数の一

八二世帯。けれども、古河が発表した人員計画では町内での配置転換は計四二六名であり、推定で六六二名が整理対象人員となり解雇されることになっていました。つまり、足尾に残りたいと希望したとしても、その半数も残ることはできませんでした。

〔9〕閉山直後から足尾で調査を行ってきた生井さんの研究（生井 一九九六）は閉山の影響を知る上で非常に重要なものです。

〔10〕閉山直後の一九七四年、古河の関連企業は一九社で従業員は八一九人であったが、一九九一年には六社が廃業、四社が事業転換、七社が従業員削減となり、全体の従業員は二〇八人と七四・六％の減少となりました。また、誘致企業に關して、一九七一年から一九八八年までに一一社が参入、従業員は三四一人でした。けれども、一九九一年には四社が廃業、三社が規模の縮小となり、全体の従業員数は二五五人となくなってしまいました。他方、生活面において影響を商店などの数を細かく記録していた。それによると、足尾銅山の採鉱部と精錬部門の撤退により「書籍・文房具店、豆腐・納豆店、菓子・パン店、美容・理髪店やタバコなどの住民の日常生活に密接に結びついた業種や酒場、パチンコ・釣堀などの余暇施設を廃業へと追いや、住民の生活に支障をもたらした」（生井 一九九六・二二五）と述べている。ただ、生井さんが調査を行なった一九九一年には誘致企業七社が足尾に定着していたことや銅山観光のオープンなどもあり「企業城下町」的産業構造から、相互間の独立性の強い様々な産業によって成り立つ構造へと変化した（生井 一九九六・二二六）と評価していて、足尾にも明るい兆しが見えていた様子が伺える。

〔11〕「めんく」ださい。足尾のことを教えてくたさい。その二「用語集」にも閉山とその経過が詳しい。

〔12〕通洞地区では鉱員住宅が多く建てられていましたが、閉山後は「一部が町に移管され町営住宅となり、他は社宅として古河鉱業の新規および残存事業に関わる従業員が居住」（生井 一九八二）することになりました。足尾町としては住民の流出を防ぐためにも古河の社宅を買い上げ特別公営住宅にする必要があり、一九七六年～一九九〇年では「町が宅地を造成して居住者に安価に貸し出しそこに持ち家の建設を促進する方式（一九八七年からは住宅等建設資金利子助成も開始）」と、町営住宅を居住者に譲渡する方式とを通じて、持家支援政策を開始した。ただし、いずれの方式においても土地は町有のままである。町営住宅・特別町営住宅との違いは、持家が個人所有となっている点である（関・除本二〇〇五）。現在、かつて一五地区あった社宅は銅山会社から町へ譲渡がなされ六地区で特別公営住宅として残っています。水道などが整備さ、二軒を一軒にするリフォームがなされるなどして今でも生活している方もいらっしゃいます。当時の面影はわずかに残っていますが、一部では住民が完全に撤収した後も、そのまま放置され廃墟と化しているものもあります。

## 一〇〇年続いた生協——三養会

好井裕明



さらっと書かれているこの文章に、私は驚きました。足尾には百年以上続いている生協があるのだと。足尾で生活文化の聞き取りを始めて、多くの方からお話をうかがいました。それぞれの方からまとまった語りではないものの、必ず出てくるのが三養会であり生協なのです。私たちは、三養会を長年ささえてこられたTさんに何度かお話をうかがい、数多くの写真や貴重な資料をみせていただきました。他の方々からも資料はいただいています。この章では、Tさんの聞き取りなどを中心にまとめたいと思います。

そもそも足尾銅山生活協同組合なのに、なぜ「三養会」なのでしょう。古代中国の学者東坡は『群談採餘』の中で「安分以養福（ふんにやすんじもって福を養う）寛胃以養氣（いをゆるやかにして氣を養う）省費以養財（ついでをばいしてもって財を養う）」と記し、人間生活にとって最も大切なことは、福、氣、財の三つを養うことだと説いたのです。これが語源で、「三つを養う」ことから、「三養会」と名づけられたのです。ただの購買組合ではないのです。足尾で暮らすうえで、人間としての暮らしをたてるうえでの理念を高らかに掲げた興味深い名前ではないでしょうか。

Tさんからいただいた資料に『県内生協の歩み 足尾銅山生協三養会』があります。この冊子から三養会の歴史を概観しておきたいと思います。

「皆様方には、一〇〇余年にわたり、ご愛顧を戴きましたが、この度、諸般の都合で、閉店することになりました」

### 三養会の歴史から

私の手元に一枚のチラシがあります。二〇一六年九月のものですが、二〇日から月末までの「閉店セール」を案内しています。

くらしの生協

# 三養会だより

（最終版）

## 2016年 9月20日より 30日まで

会員みなさまに贈る！

閉店セールのご案内

皆様方には、100年余にわたり、ご愛顧を戴きましたが、この度、諸般の都合で、閉店することになりました。

つきましては、閉店セールを行いたいと思います。期日は、

9月20日～9月30日まで（9月25日は休店致します。）

価格につきましては、現在の価格の半額程度と致します。

但し、（魚・野菜・市場関係の食料品については、半額にはなりません。）

皆様お誘い合わせの上、ご来店をお待ち申し上げます。

渡良瀬売店

通 洞売店

TEL 93-3760

TEL 93-2645

※ 長い間のご愛顧、誠に有り難うございました。  
改めて、感謝とお礼を申し上げます。

一九〇六年（明治三十九年）六月、「足尾鉾業所の直営配給所とは別に、山に働く労働者のための購買組合、本山三養会を設立し直営配給所で取り扱わない日用品の供給を開始したのが始まり」、一九三一年（昭和六年）四月一四日に、それまでの独立していた五か所の購買組合を「統一して単一組合として発足、古河鉾業(株)足尾鉾業所の従業員をもって組織する産業組合法による購買組合として設立」したのである。

そして、「足尾銅山従業員の生活用品はすべて、当生協が取り扱うこと」となりました。

一九五〇年（昭和二十五年）九月に産業組合法の施行に伴って、組織変更を行い、足尾銅山生活協同組合三養会として発足。一九六一年一月一日をもって、名実ともに完全独立、役職員数一四〇名によって、自主運営をすることになったのです。

昭和三〇年代初め、県内生協の一部で店舗の近代化が始まります。従来は「対面販売」であって、米、味噌、醤油、月賦品代金などは、掛売（給料より差引き）、他の商品は現金販売で、その都度、商品別の伝票を起票する供給方法だったのです。

一九五八年（昭和三十三年）二月に、愛宕下売店を「セルフサービス店」に改装して「レジスター」による販売を開始します。組合員からの評判もよく、残りの七店舗も逐次セルフサービス店に改装したのです。

一九六五年（昭和四〇年）二月に養鶏部門に進出したのですが、足尾は寒冷地のため採卵率が低く、一九七六年（昭和五一年）六月に閉鎖しました。

一九七一年（昭和四六年）には、組合員に無添加の食品を供給したいとの願いから、約二四坪の建物と二坪の冷蔵庫による生協自前の食品加工所をつくり、職員四名で主に総菜品を生産する体制をつくりました。

また一九五五年（昭和三十〇年）前後より、佐藤艶子先生講師で春、秋二回ほど組合員の主婦延べ三〇

〇人を対象に各地区で料理講習会を開催し、地域の食生活の水準を高めたのです。

娯楽面では、一九六八年（昭和四三年）には「都はるみショー」「生協寄席」などで多数の芸能人を招いて催しを行いました。また日曜日ごとに生協会館を無料で開放し、薬湯の利用ができるようにしたのです。

一九五四年（昭和二十九）年には、組合員を対象に生命共済事業を開始しました。

一九五一年（昭和二六年）ごろ、全国生協の中で、先進地域の五生協が、生協相互に共通する諸問題などについて研修したいという目的から「五社会」を作り、年二回生協のトップが出席し討議を重ね、生協発展に寄与してきました。

一九七三年（昭和四八年）二月に足尾銅山が会社都合により閉山。足尾の人口も一挙に七〇〇〇名台に減少。この事態は三養会にとっても死活問題であり、運営の全体的見直しをし、本売店（約三〇〇世帯）、砂畑売店（約三五〇世帯）の閉店と職員の一部勇退を余儀なくされたのです。

女も男もワンワンいた——Ｔさんの聞き取りから

### 金券と利用券

「金券っていうのは昭和二七、八年かな。その頃ね、アルミとか貨幣（足りなくて）、一円とか五円とか、つり銭に困っちゃうんで、一円、五円、一〇円という生協独自の券を作り、生協内部で実際の金として使った



利用券

んですよ」

「こっちは商品券なんですけども、今の贈答用の商品券ではなくて、米やみそなど掛売で売ったんですよ。それで翌月給与から天引きしますってことで。すると赤字になる人は、毎月毎月これ(商品券)を生協で現金代わりに貸すんですよ」

「(金券や商品券も使えず生協を利用できなくなる人っていましたか?) あんまりいいですね。労務課との相談をしたなかで、商品券を売ってくださいうる人がはつきりわかるんですよ。たとえば商品券三万円分売ってくださいうることになったとき、労務課に話をして「こういう話があったんだけど、売っていいですか?」と聞いて、「ああ、いいよ。来月(その人は働けるから)」という連絡があるわけ」

### パンを売る

「パン工場があった、木の箱に三〇か四〇くらい入って、四、

五箱くるんだろ。それをみんな待っていてね、パンだから掛売通帳なんだよ。……あの時はまだ若かったから、「あんちゃん、パンくん」な「おう」とか言って、手なんて洗わなくてさ、「おう」なんて言って渡してさ。ジャムなんかも、今の感じじゃなくて、一斗缶にジャムが入ってきていて、しゃもじで、経木を丸めて、くるっと丸めて(しゃもじですくったジャムを)包む。それで量り売りのしたの」

### 年二回の大売り出し

「七月と一二月の大売り出しをするよね。お客さんを集めるためにね、都はるみショーだとか、島倉千代子ショーだとか、水前寺清子だとかね、生協主催でやったんだよ。生協寄席というのもあったんだよ。Wけんじが来ただろ、漫才のね」

### 生協会館について

「あの当時、一日五〇円くらいしたんかな、その券買って、薬湯に入ったり、テレビ見たり、将棋したりお茶飲んだりして、一日つぶして帰る人が多かったですよ。要するに、日帰り温泉だよな。……朝九時頃に始まって、夕方三時頃までって形で、年寄りがいふん来たね、家族連れとかも。ショークースに三養会から前日にお菓子持ってきて、置いたり、缶ジュースやサイダーとか置いて」

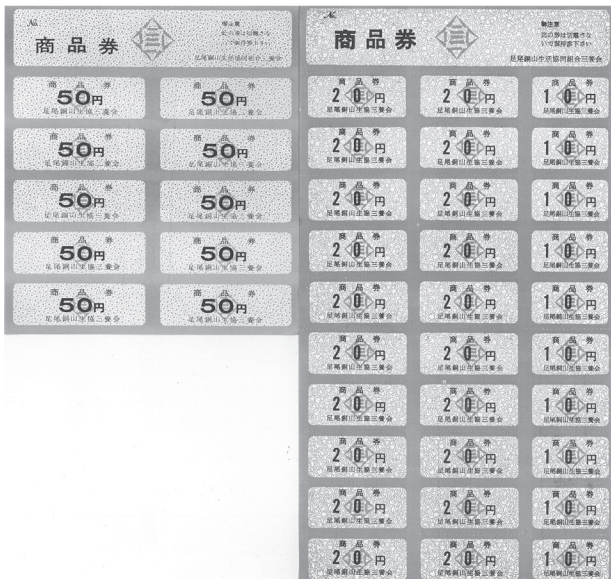
### デパートみたいな三養会

「今思えば、本当にデパートみたいなもんだったよね。デパートですよ、本当に」  
「通洞三養会、すごく良かったもん。道路一つ挟んで反対側に家具センターなんかがあって。何でもそろったの」

「衣料品係とか、雑品係とか、そういうのがいて。渡良瀬の生協で一六人くらい。通洞でも一六人、一七人。通洞の方が(店は)大きかったけれども、いたんですよ。店長がいて、店長の次の人っていて、あとは魚屋が一人、八百屋が一人、食料品が三人くらい、あとは雑用係だとか、いっぱいいたの」

### 女も男もワンワンいた

「(話を交えて、若い男女の結婚などを聞く。若い男女はどこで出会ったのか)それはね、どこにでも。女も男もワンワンいたから。たくさんいましたよね。映画館もあったでしょ。「今晚、映画行かないか?」な



商品券





生協会館(旧五日荘)山側から見たところ。生協会館となり日曜に会員に開放。薬湯、囲碁、将棋、軽食(うどん)などを提供した。



対面販売の店頭風景。各売り場で重さを計り、伝票を切ってからレジに持っていく。



昭和三〇年頃に、改装した通洞売店。対面販売をしている。



当時の専務理事が月に数回各売店を視察。量り売り対面販売の頃。秤もまだ旧式だった。



秋の漬物の時期。白菜を大量購入。各家庭で一五から二〇個白菜を買った。

んで、目星のつけていた人なんかいるわけだよ。映画に行ったり。あとは中禅寺湖なんか皆で、五人か一〇人かで歩いて行って」

「いや、ワンワンいたというのが凄いなと」いました。本当に(女も男も)いました」

### お客さんへの工夫は

「あんまり、ありませんが。ただ言えるのは、業者の人に話をして、新しい商品なんかも入れてみたりとかさ、結構値段安くがんばってもらって、あんまり儲けなくて売ってみたり」

### なぜ大規模店舗が来なかったのか

「(人がたくさんいた頃、どうして他の大規模店舗などが足尾に入ってこなかったのか?) ああ、前にそれ言われたことあるんですよ。よく生協がやっていられるねって。よそから資本が入って大きなスーパーだの作れば別だけれども、まず土地がないというのが一つあるんですよ。古河の土地だから。それと以前社宅にちよこちよこトラックが来ていたんだけど、社宅への販売お断りなんて言って、追い出したこともあるんですよ。社宅内での販売はご遠慮くださいと」

### 生協の日常から

Tさんから、数多くの写真を見せていただきました。すべてが当時の足尾の暮らしを記録している貴重なものなのですが、私の判断で二〇枚選んで、Tさんに簡単な説明をつけてもらいました。





化粧品販売のマネキンが各店を回った。マネキンとは商品の販売促進をする販売員のこと。



オーシャンウイスキー販売拡充のため生協に寄贈されたオート三輪トラック。



ウイスキーの宣伝看板と福引大売り出し。当時お酒は貨物列車で足尾に入ってきた。



戦後は、まだランドセルなど珍しい時代があった。ランドセルの色は、赤と黒。



ウイスキーの飲み方を教えるカクテル教室。生協だけがこうした催しものをやっていた。



昭和三十六年頃、栃木県内生協で順次各店をセルフサービスとした。愛宕下売店が最初。



レジスターを導入した中才店。当時レジに打ち込む商品の分類記号を「ヨキミセサカエル」とした。たとえばヨー①は菓子という分類。



鮮魚売り出しの店頭風景。築地から足尾まで卸された魚を持ってきた。

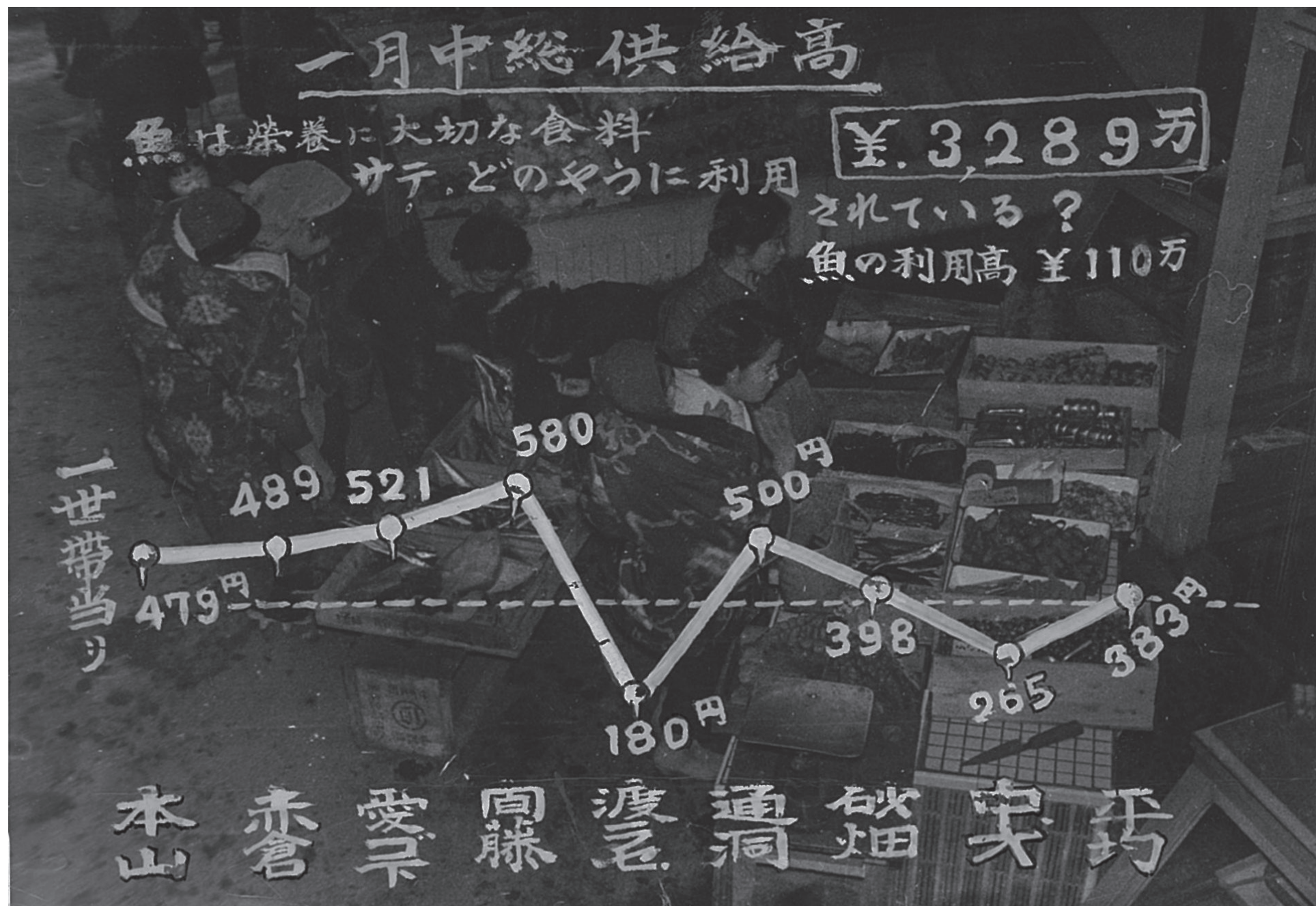


店員のレジスター講習会。当時レジスターは一台数十万円した。



渡良瀬店。写真の右にある計量器から左に見える新型計量器に変わりつつあった●●頃の店内と店員さん。





月当たりの総供給高。小滝坑が閉坑になるまでは、小滝店もあわせて九店舗あった。間藤が一番高いのは、上の平に住む人も買ったから。通洞には他にたくさんお店があったので、供給高は、そこまで高くない。





足尾にとって三養会とは何であったのか

多くの写真や語りを紹介してきましたが、三養会を考えるうえで、興味深い資料があります。『生協三養会』というタイトルの冊子です。B五版で一〇頁ほどですが、毎月組合員に向けてだされていた月報なのです。実際に見ることができたのは一〇六号（一九六一年七月一日）から二二三号（一九七一年一月一日）ですが、当時の様子がよく伝わってきます。

各地域売店からの発言。組合員の主婦で構成された家庭会からの要望、家庭会が実施した工場見学記。毎月の総供給高や毎月の生協の予定など。セルフサービス方式が導入された象徴的な道具としてレジスターがありますが、その名前をつけた「レジスター」というコラムでは、よい品物をよりよく提供するには、どうしたらいいのかなど生協の向上を考える多くのエッセーが掲載され、まさに「盛況であった生協」の日常の熱気が伝わってきます。

カラーテレビや洗濯機、暖房器具など当時高価だった耐久消費財も組合員価格で安く購入できたり、冬になればスキー、スケート用品の紹介もありました。洋服や下着などの普段着の紹介、石鹸や洗剤など生活用品、またマヨネーズやインスタントラーメン、ジュースなど食料品の紹介も毎月載っています。

たとえば一一一号（一九六一年二月）を見てみましょう。「レジスター」というコラムでは、掛売帳を大切に、店員と客のやりとりをもっと効率よくすべきだと書かれ、別の頁では足尾中学校が当時制服化を検討していることが取り上げられ、①全生徒が気軽に同じ服を着られること、②親にとって医療費負担が軽減されること、③情操教育に役立つこと、が主張されています。興味深かったのは、女子通学服の合理化が唱えられ、「ヒダのとれない洗濯の楽な製品」を開発中だと書かれていたことです。制服が変わることは賛成だが、できれば洗濯が楽なほうがいいと、普段の暮らしへのまなざしがしっかりと反映されているのです。

また一一四号（一九六二年二月）では、歳末販売に協力した足尾高校生へのアンケート結果が載っています。三養会へは「商品全部に値段をつけること」「ソロバンは四つ玉に切り換えること」「一日二五〇円の手当は少なすぎる」と注意し、お客さんへは「いまだに尺貫法で買う人がいるが、早くメートル法を覚えてほしい」「私たちの計算をもっと信頼してほしい」「閉店後当然のように買い物をする人がいる。時間は守ってほしい」と注意しています。当時の買い物の様子が目に浮かんでくるようです。

三養会では、毎年夏冬に総供給量の目標達成もあり、大売出しをしていました。そこで行われた福引で豪華賞品が当たったり、都はるみショーや生協寄席に行けたりしたのです。私が個人的に調べたかったのは、日本万国博覧会でした。一九七〇年に大阪で開催され、半年間の会期中に六〇〇〇万以上の人が入場したのです。まさに日本中が熱狂したイベントでした。足尾ではどうだったのでしょうか。

二〇二号（一九七〇年二月）に、歳末大売出しで日本万国博御招待四〇名決定の記事が載っています。この四〇名とあわせて栃木県生協全体で九八名が当選したようです。二〇六号（一九七〇年六月）には、参加した男性の「万博見学記」が載っています。二日間で四〇館しか回れなかったこと、ソ連館とアメリカ館の対比、日本館の見事さ、古河の七重塔パビリオンに触れた後、日本企業のみどり館・全天周映画（アストロラマ）でみた渡良瀬川沿いを疾走するC五二の映像の迫力に感動したことなどが書かれていました。

『生協三養会』には、もっと多くの内容がみちています。この膨大な資料を読み込めば、足尾の暮らしについて興味深い分析もできるでしょう。ただそれは私のとっての今後の課題にしたいと思っています。

日本最初の職域生協としての三養会。それは足尾銅山閉山という出来事を境に急速に人口が減少



し、高齢化も進んできた足尾という街で、人々が日常の暮らしをたてていくうえで、不可欠な地域生協でもあったのです。古い資料からは、当時、日々の糧を得たり、娯楽や教養を楽しむうえで、生協がいかに有効に機能していたのかが読み取れ、古い写真をみれば、当時の街の繁栄や人々の暮らしの「熱」を感じ取ることができます。

閉山後は、移動がしづらいお年寄りにとって、歩いて買い物ができる貴重な場所であり、知り合いとつきあううえで重要な場所だったでしょう。だからこそ、百年続いた三養会が、ただ儲からなという企業論理だけで閉じられたしまったことは、残念でならないのです。

#### コラム

### 三養会、最後の灯りが消えた日

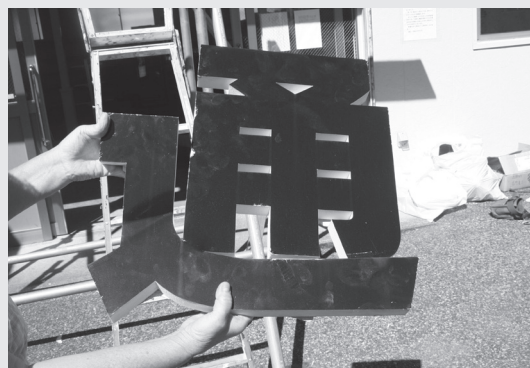
市之瀬昌弘

足尾のみなさんお久しぶりです。日光市足尾地域の第三期の地域おこし協力隊を務めました市之瀬です。私の任期中に歴史的に見ても、そして地域住民の方にとっても、重要な存在であった三養会が閉店しました。そんな三養会が閉店するまでをここでは、少し振り返ればと思います。私が地域おこし協力隊として、着任して間もなくのことでした。「三養会が閉店するらしい」そんな噂話が、聞こえてくるようになりました。私は、最初は商店が閉店してしまうのか残念ながらもぐらいの感覚でしたが、足尾銅山のことを学んでいくと、三養会が足尾銅山では欠かせない重要な役割を担っていることが分かってきました。

そこから、私は三養会について地域住民の方に聞き取り調査を行ったり、足尾銅山閉山前の三養会の資料などの収集をはじめました。最初は、三養会に勤めていた方々に足尾銅山閉山前の当時の販売方法や仕入方法、閉店時には通洞、渡良瀬にしかなかった店舗が、各地域に店舗や出張所があったことなど、他にも多くの当時の様子を教えて頂きました。また、聞き取り調査をさせて頂いた際には、当時の貴重な三養会が配布していたチラシや利用券、伝票なども見せて頂くことができました。次に、三養会を利用していた方々にも、お話を聞かせて頂き、当時の三養会の活気や、利用する側の目線、現在のお買い物事情など、当時を思い出しながらも、閉店することへ



通洞商店看板撤去中の様子



通洞商店看板撤去中の様子

きました。足尾での思い出の一つ一つが、大切な宝物であり、私は足尾のことが大好きだと感じさせてくれます。この場を借りて、足尾でお世話になった全ての方々に、心よりお礼を申し上げます。今後も、ぜひ足尾にお邪魔させていただきます。

の寂しさを感じることができました。

三養会の歴史を学び、関わってきた方々のお話を聞いていくと三養会が閉店してしまうことが、私にとっても寂しく感じるようになっていました。

閉店の日が、近付くにつれて私は、渡良瀬の三養会に足を運ぶことが、自然と多くなりました。店内の商品が少しずつ無くなっていく様子や、住民の方との何気ない会話など、その瞬間を大切にしたいと感じていたからだと思います。

閉店当日も私は渡良瀬の三養会にお邪魔しました。直接、従業員の方にお礼を伝える方や、お店に行けない方は電話で気持ちを伝えていました。三養会が住民の方にとって、大切な場所であったことがわかります。そして、迎えた閉店の時には、住民の方から従業員の方々に花束を手渡していました。その光景は、私が足尾で活動した中で、一番、胸が熱くなった瞬間でした。

その後、私は都合により足尾を離れることになりましたが、今回改めて、足尾のことを思い出しながら、この文を書



渡良瀬商店最後の様子

# 長門修造さんの戦争とシベリア抑留

志村春海

平成二四年の夏に、元足尾町役場が閉鎖し、新しく銅山観光の隣に足尾総合支所が出来ました。その一階には小さな展示スペースがあり、聞き取りの内容をそこで紹介する展示を始めた。夏には、足尾の中の戦争に向合う内容を心がけました。この章では、平成二六年度夏に実施の「長門修造さんの戦争とシベリア抑留」のパネル内容を掲載します。





この展示では、足尾出身の長門修造さんが昭和一八年に志願兵として出兵してから、中国で終戦を迎えた後にシベリアで抑留され、昭和二二年に足尾に戻るまでのルートと各地での出来事をまとめました。聞き取りの内容が中心となるため、歴史的事実には必ずしも当てはまらない部分もあるかもしれませんが、出兵した方個人の貴重な記憶を紹介するものですので、ご理解をお願いします。

〃の中は長門さんの語りです。

# 1 足尾——一九四二年(昭和一七年)頃、一八歳。大日本帝国陸軍志願

「軍国主義——憧れの兵隊」 足尾で学生生活や工場で働いていた頃に見聞きする情報は、軍国主義一色。長門さんもちがれを持ち、引き込まれるように兵隊に志願した。〃あの頃、私が学校に行っても軍国主義で「兵隊、兵隊」ってね。今ならいろんな会社に入って課長とかになれば〃どこのあれは出世した〃と言うけれど、当時は軍隊に行くのが出世だからね〃私は今の野路又の高校跡の所に工場があって、そこで働いていたんだけど兵隊に志願していったんですよ。(中略)「空だ、男の行く所は」なんて看板があって、飛行機の特攻隊とかああいうのにみんな憧れちゃったんだよね〃

# 2 宇都宮——一九四三年(昭和一八年)一月二〇日、一九歳。東部三六部隊(高野隊)歩兵第六六連隊補充隊

# 3 下関から釜山への移動——昭和一八年一月二八日、下関出発。一月二九日、釜山上陸

下関から釜山までの船の移動は、玄海灘の波が激しく困難なものだった。〃私らはね、足尾にいるから船なんて乗ったことないでしょ、だから船酔いが大変でね、「死んだ方がいいな」と思ったね。船がググーっと上がったたり下がったりして、立っていられないんだよ。あっちにぶつかったりこっちにぶつかったりしてね。参っちゃったね〃

# 4 青島(桜ヶ丘)——一九四三年(昭和一八年)二月、一九歳。北

支派仁四二二〇部隊「若佐隊・竹本隊」第四一師団要員入隊第一紀  
教育一等兵

「中国の風景」 内地での訓練中と中国では食事情や物資の状況が違っていた。〃中国に行ってね、日本で玄米飯を食べていたのが米の飯になったんだよ。銀飯。「あれ、こんなに違うのかな」と思ってね。だけれども、腹いっぱい食べることはなかったね。青島は海の直ぐ側だから魚とかが沢山出たね。神社にお参りに行ったり、国防婦人会の人達が「兵隊さん、兵隊さん」って日の丸の旗を振って迎えてくれたりしたね。(中略)一方で、あの頃は道路脇には中国人が真っ黒になって死んでいるんですよ。(中略)餓死というのかね、みんな死んでいて泥だらけになって蠅がブンブンいたって構わないんですよ。昭和一八年頃だね〃

「ビントの軍事教育」 青島では、軍事教育を本格的に受ける。簡単に言えばね、教育とは軍事精神を鍛える所さ。(中略)朝昼晩で「一つ、軍人は忠節を尽くすを本分とすべし」なんてね。五箇条の御誓文っていうのがあるんですよ。(中略)一週間にいろんな当番をやるんですよ。食事当番から馬の世話、茅掃除とかね。それが皆軍事教育の一部なんだね。



キャプション

(中略)軍事教育っていうのはもうビンタだね。それが教育なんだよ。「いやあ、えらい所にきちゃったな」と思ってあの頃は本当に涙が出たよ。自分が好きで志願して来ちゃったからしょうがないなと思ってね。ビンタも一回、二回じゃないんだから、二〇回くらいぶっ飛ばされるんだから。それでも、口の中が切れちゃってね、朝ご飯にみそ汁を食べる時に口の中が痛いんだよね。ビンタの傷が。それが教育なんだよ。ビンタが教育で、軍事精神をぶち込むんだよね」

#### 5 済南——一九四三年(昭和十八年)七月、一九歳。北支那方面軍第二二軍幹部教育隊転属。第二期教育

石門——一九四三年(昭和十八年)十一月五日、二〇歳。北支那方面軍下士官候補者隊

昭和一九年一月二〇日 上等兵

昭和一九年七月二〇日 兵長

昭和二〇年一月二〇日 伍長

#### 6 興安南省洮南——一九四五年(昭和二〇年)七月一日二才興安南省洮南弘二四一七一部隊(大西隊)

「盗んだスイカでいきつなぐ」 長門さんが中国にいる間、多くの日本軍が南方に向かった。手薄になった満州を侵攻してくるソ連軍と戦うため、長門さんの所属する部隊も新京に集結。物資も弾も少ない中で、戦いに備えていた。『一週間も一〇日も満州の平原を歩いてね。食べ物もご飯なんか炊いたら敵に見つかっちゃうからね。中国はスイカとかを作るのが上手なんだよね。もの凄く美味しいんだよ。八月の頃は暑くて一番果実が熟していて、見渡すかぎりアクアウリとスイカ。食べ物が多かったから「しょうがない」って中国人が作ったスイカをかって、それをご飯の代わりに幾日も食べたんだから』

「通信隊である会話」 配属先の通信隊では、様々な情報をいち早く知ることができた。『私は、原子

爆弾だって終戦前に知っていたんです。中国で幹部候補生と仕事をしていた時があったんですが、その人から「アメリカで新型爆弾が出来た。マッチ箱一つで富士山が吹っ飛んじゃうんだよ」と八月六日の投下前に聞きましたよ」

「終戦の時」 『日本の玉音放送で天皇の放送があった時に、放送室にみんな入ってね「ああ、これで日本は負けたのか」と思ってね。いやあ、だけれども、まさか負けるとも思わなかったし、勝つとも思わなかったね』

#### 7 新京——一九四四年(昭和一九年)八月一九日、二二歳。武装解除

「武装解除」 『武装解除って、みんなロシア人が来て裸にされちゃってね。みんな取られちゃってさ、惨めだったよ。(中略)女の人(日本人)なんてね、頭の毛を切っちゃったり散切りにして、顔に尿とかを付けて汚くして襲われないようにしてね。略奪されないように、みんなだいたい一〇人、二〇人のまとまりになって行動していたね。また、逆に日本が攻めていた時は、敵に対する略奪や強姦などもあった。』

#### 8 新京——黒河省黒河—ブラゴエスチensk—ブカチャーチャ(昭和二〇年九月一〇日〜一〇月)

「行き先もわからないまま北へ」 ロシア人にシベリア鉄道に乘せられて、どこに行くのかも分からず、北へ北へ進んだ。逆らうことはできず、まさかシベリアに行くと思わなかった。」

#### 9 ブカチャーチャ——一九四五年(昭和二〇年)八月一六日〜一九四七年(昭和二年)四月二五日、二〇〜二二歳。第二三收容所。炭鉱内作業

「收容所の生活」 シベリアに抑留され、收容所の第二三收容所に入って鉱山で働く。ロシア人から

「ヤボースケ トウキョウ ダモエ（日本人、東京に帰れるぞ）」といつも嘘をつかれていて、帰れるのかはわからなかった。ライゲル（元罪人収容所という体育館のような収容所で生活し、終戦直後は外が零下五、六〇度ある気候の中、板一枚の上に毛布一枚で寝るためとても寒かった。翌年からは、暖房も設置されたため建物の中は寒さが解消されていく。寒すぎて凍傷や凍死、疥癬、夜盲症になる人などがいた。朝っぱらに起きて「おい、朝だぞ、起きろ」なんて言うと、頭のおでこあたりが紫色なんだよ。寒くても凍っちゃっていてね。そういうのが毎日で、ほとんどが来たばかりの少年兵だったね」

戦争に来たばかりの若い兵隊は、体も弱く病気になるやすかった。

「天皇万歳」ではなく「おかあさん」と泣きながら亡くなっていくのを何度も見た。

「墓が掘れない」 死体は、自分たちで日本人墓地に埋けることになっていた。『一〇人くらいの屍が集まると大きなソリで日本人墓地まで乗せて行くんですよ。そこで穴を掘るんだけど、零下四五度もある地面はコンクリートと同じくらい固い。とてもじゃないけれど掘ることなんかできないけど、命令だからしょうがない。薪で火を燃してみたりするけれど、一〇センチくらいしか掘れないんだよね。今度は自分が参っちゃうから、しょうがないから死体の頭とお尻だけを穴の中にちよっと入れてね、雪とかああいいうのをかけたりしたんだよね』

「ロシアの鉱山」 炭坑では、カンテラを交換する仕事などをしていた。『炭坑の中も日本と違っていてね、もうロシアっていう所は野蛮だったね。仕事でカンテラを交換に行くんだけど、日本の炭坑なら立坑で上がるんだけど、ロシアでは梯子を降りて行くんですよ。（中略）あとは日本ではちよっと真似できないような技術があったね。日本だったら手で発破をかけた後に削ったりす

るんだけど、ロシアの方ではモーターの機械で「ガチャコンガチャコン」って自動で削ってね。そういう所は楽だったね」

「知らない土地での入院」 腸出血になったため、半年くらい病院のような所で寝たきりになる。『ロシアの看護師っていうのは陸軍の少尉くらいの階級で偉いんだよね。そういう人が看病をしてくれただけで、コップみたいなやつに火をばっとなつけて燃したものを胸に当てるんですよ。それが効いたんですよ。四ヶ月も寝たきりで、髪の毛も全部抜けちゃってね、酷い目にあったんだよ』その後、体の丈夫な人と病人が選別され、もう働けない病人だった長門さんは日本に帰ることになる。

## 10 ナホトカ——一九四七年（昭和二年）四月二四日、二二歳。港出発

「共産主義教育」 一ヶ月ほどナホトカで共産主義教育を受ける。『朝から晩まで共産党の歌を歌わされるんです。歌を歌わないと、日本に帰さないと言われるから、みんな一生懸命だよ』

「帰国への実感」 日本に向かう船にのる港でのエピソード。『もう海がみえたんですよ。『あー、これは本当に内地に帰れる』って思った。それまでは本気にできなくて、また騙されて収容所に戻されるんじゃないかと思った。だから私は、海が見えたから近づいて海の水を飲んだら、辛いんだよ。本当に。『あ、これは辛いから、川じゃないんだ海なんだ。あー、これで日本に帰れるのかな』ってそこで初めてね『あー、これで内地に帰れるのかな』と思ったですよ』

## 11 海の手で

「軍艦と貨物船の違い」 清洋丸の造りがキャシャで驚く。『階段みたいなのを降りて船底へ行くと、鉄板一枚でね。軍隊ではそういうことはないんだけど、鉄板一枚の造りで「ペラペラ」って動いているんだよね。だから、鉄板が水圧でつぶれないように角材でつつかい棒をしてあるんです



もん”

「ある少年兵の告白」 帰国する船の中で、少年兵から終戦前の中国で、軍用品の毛布を中国人に売っていたという謝罪を受ける。『内地に帰る時にね、少年兵が「班長殿、俺今だから言うんだけど、戦闘の時に毛布を中国人に売り飛ばしちゃったんだよ」って言われたんだよね。我々の軍事教育の中では、私腹を肥やすために中国人に売り飛ばしたりなんかすることはなかったですよ。それが終戦間近には、なあなあでそういうのがあったんだね、それを白状したんですよ。「いやあ、これだもん。日本は本当に戦争に負けるな」とそう思ったですよ』

### 11 京都舞鶴——一九四七年（昭和二年）四月二九日、二二歳。舞鶴駅上陸

「久しぶりの日本」 一端、舞鶴で入院（どのくらいか）をしている間に、支給されたお金（いくらもらったかは全て使ってしまった。うとんが一〇円。足尾に来る時には五円だけしか残らなかった。退院後、シラミなどを除去する消毒薬DDTを頭から被って消毒したり、お風呂に入れてもらい、綺麗な服に着替えて足尾へ向かう。

### 12 上野・桐生——一九四七年（昭和二年）五月、二二歳

足尾までの電車がなくなってしまっていて、一晚電車の中に泊まる。

### 13 足尾——一九四七年（昭和二年）五月、二二歳

「畑が出来ている」 朝一番の電車で足尾に向かう。来る途中で、足尾の山が畑になっているのに驚く。『山が畑になっているのが電車の中から見えただね。内地の人みんな苦労したんだなと思うたね。これが一番足尾に来てたまげたね』

戦前に働いていた野路又の工場働き、その後家でやっていた馬車引きの仕事を行う。自宅での靴製造業や坑内での仕事、古河の工場で八〇歳まで働いた。現在は趣味の民謡を楽しんだり、鉱石を使ったオブジェ制作などに励む。

### お話を振り返って

この展示の準備でとても印象に残っていることがあります。展示に使う内容（掲載内容）を、長門さんに校正してもらったために、原稿をお渡ししました。その翌日、長門さんから珍しく電話がありご自宅に行った所、「原稿を読んでいたら、色々なことを思い出してしまい、直すべきか迷っている」ということでした。よく聞くと、読んでいたら眠れなくなったりしく、話した内容が改めて目の前に出されて困惑したような嬉しいような、興奮したような感じでした。その後、日を改めて、長門さんの家で、原稿を私が読み上げ確認してもらいました。長門さんが「そうなんだよね」とうなずいたり、じっと聞いたままだったりしていました。結局のところ、大きな修正はせずに原稿は仕上がったのですが、長門さんの感情がどういうものだったのか、私にわかることはできないと改めて思い出すことがあります。

現在、全国に約五〇〇〇人（平成三〇年四月一日現在）が地域おこし協力隊として活動しています。平成二一年度に総務省によって創設された地域おこし協力隊の制度は、今年で一〇年目の節目を迎え、全国各地の隊員による活動と実績の積み重ねによって「地域おこし協力隊」の名前は社会で認識されるようになってきました。

ですが、みなさんの中には「地域おこし協力隊」の名称や人を知っていても、はたして彼ら（彼女ら）が具体的に何をするために来ているのか、よくわからない人も多いのではないのでしょうか。それもそのはず、地域おこし協力隊の活動は、事前に決められた活動があるわけではありません（二部を除いて）。地域おこし協力隊は若者が都市部から地方に移り住み、そこでの生活を通して地域特有の資源や魅力を把握しながら、地域が元気になる活動を協力隊員自身が考え生み出していくところに特徴があります。たとえば、ある協力隊は地域の自然を堪能できる観光ツアーを企画したり、別の協力隊は耕作放棄地を活用して地域の気候にあったブランド野菜を考案したり、また別の協力隊は空き家を利用して民泊業を営んでみたりと地域おこし協力隊の活動は隊員の数だけ違いがあります。そのため、自分の住んでいる地域の協力隊がどんな活動をしているのかを知るためには、実際に協力隊の活動に興味をもって見る、聞くしかないのです。

コラム

地域おこし協力隊って何をやっている人なの？

中村哲也

ГЛАВНОЕ АРХИВНОЕ УПРАВЛЕНИЕ  
при Совете Министров СССР

ЦЕНТРАЛЬНЫЙ  
ГОСУДАРСТВЕННЫЙ  
ОСОБОЙ АРХИВ

ул. Вильямская, 3

№ 8228

# СПРАВКА О ТРУДЕ

ИМЯ, ФАМИЛИЯ	НАГАТО СЮДЗО
МЕСТО РОЖДЕНИЯ	преф.ТОКИО, у.КАМИЦУГА, г.АСИО
ГОД РОЖДЕНИЯ	1924 г.
МЕСТО ПРЕБЫВАНИЯ В ПЛЕНУ	ЛАГЕРЬ № 23, БУКАЧАНА
ПЕРИОД ПРЕБЫВАНИЯ В ПЛЕНУ	18.08.1945 г. - 25.04.1947 г.
СУММА НЕВЫПЛАЧЕННОГО ЗАРАБОТКА	2027 руб.

Достоверность данных подтверждена.

Вышесказанная сумма невыплаченного заработка подлежала выплате при репатриации. Однако этот расчет не был произведен в силу запрета вывоза советских рублей за пределы СССР.

Директор  
Центрального государственного  
особого архива  
В.Н.БОНДАРЕВ

28.11.1992

3-1008

№ 8228

国庫會議付属華高公文書館  
中央国立特別公文書館  
ウィボルスカヤ通り3

## 労働証明書

氏名	長門 雅造
生まれた場所	熊本県上郡宮前足尾町
生まれた年	1924年
捕虜の場所	第 23地区 プダチヤチヤ
捕虜の時期	1945.8.16 - 1947.04.25
支払わなかった賃金総額	2,027 ルーブル

資料の真実を確認するに正確である。上述の賃金総額は帰国の時支払うべきであったが、ソ連ルーブルの外国への輸出禁止のためにできなかったものである。

中央国立特別公文書館館長  
V. N. ボンダレフ

1992年 6月25日

労働証明書。足尾に戻って来てから、自分で申請して手に入れたということでした。

昭和二十一年九月一日生

氏名 長尾修造  
住所 新嘉坡主都賀路足屋町向家二丁目七番地  
職業 藥劑師  
右ハ昭和二年四月十五日舞鶴港ニ上陸セルコトヲ證明ス  
昭和四年四月二十九日  
厚生省舞鶴引揚授護局長

給與金品記載欄			
品目	支給數量	支給率品目	支給數量
外食費	五元五角	支給率	三〇%
支給額	一六・四九	支給金額	一六・四九

(機)團急用味噌醤油料配購入券

受給人員 壹人當味噌三〇勺  
配給基準量 五日分醬油四勺五分  
配給數量 味噌合勺々  
昭和 年 月 日  
厚生省舞鶴引揚授護局長

シベリアから帰国した際の証明書のようなもの。左上の切り抜きは、何かの配給の引換券だったそうです。

ただ、地域おこし協力隊の活動は千差万別ですが、活動の根底には共通している点もあります。それは、よそ者（地域の外）の視点から地域の魅力を発見し、それを活かそうとしている点です。そう考えると協力隊の活動は、地域の人が気づかなかった、又は見過ごしていた地域の価値を再発見する機会をつくっているともいえます。

現在、足尾地域には二人の地域おこし協力隊が活動しています。その二人が足尾のどんな魅力を発見し活かそうとしているのか。ぜひ、その活動に興味をもってもらい、みなさんで応援していきましよう!!

#### 参考

・日光市地域おこし協力隊公式ウェブサイト <https://nikko-kyouyokutai.jp>

## 足尾のなかで老いるということ

三浦一馬

銅山を主要産業としていた足尾にとって、その閉山は町自体の存続に関わる大きな出来事であった。それにもかかわらず、閉山から四五年経った今もそこに残り暮らし続けている人びとがいる。僕が聞き取りをして知りたかったのは、足尾はどのように変わっていったのか、語り手一人ひとりが感じてきた変化でした。この章では町全体の歴史としてはなかなか残らない、けれども、その人にとっては重要な変化をまとめました。



## 変わりゆく足尾の納涼祭

### ある年の納涼祭

私が足尾に通い始めて三年が経ちます。普段の足尾は人もまばらで、ひっそりとした雰囲気。足尾のイメージとしてありました。なので、ある夏の日、夜の足尾支所前には普段では想像できないほど人びとが集まって櫓を囲み、輪になって踊っているのを目にした時、何か大変なことが起きてしまった気持ちになり落ち着かなかったのを覚えています。足尾の方にとって、納涼祭は一年の中でもっとも足尾が盛り上がる行事の一つで、私とは違う意味で胸高鳴るものであるということ、ある日、聞き取りをさせていただいた女性に納涼祭のことを尋ねた時に感じました。「太鼓の音を聞くと体が踊り出しちゃう」と語り、今年もこの季節が来たと行って、着ていく浴衣の話を楽しくに話されていたのがとても印象的でした。

### 納涼祭と囃子方

納涼祭はもともと夏季に別々に行われていた銅山が主催する「盆踊り」と足尾町商工会が主催の「夏まつり」を一九六四年より合同で行われるようになります。その頃には主催は足尾町、後援に足尾銅山、商工会、地区協議会、観光協会となっていました。一九六五年には既に五日間に縮小されています（広報 あしお「六九号、一九六五年七月」）。

今では、一日限りのお祭りとなってしまったが、かつて納涼祭は銅山きっての一大イベントであり、最盛期には七日間から一〇日、毎晩行われたそうです。納涼祭の会場の中央には大きな四階建のやぐらが祭りのために設けられ、それを囲む人の輪は何重にもなっていたといえます。

それだけ盛り上がるお祭りなのですから、その囃子方も高い技術を持った人たちでした。囃子は大太鼓、小太鼓、つづみ、樽、鐘、笛、唄で構成され、その経験者たちには祭りの数日前に会社から囃子方選ばれたという通達が届きます。そして、その練習には古河公認で仕事の早上がり、認められていたそうです。他にも古河が積極的に支えていた地域の催し事はいろいろありますが、年に一度の納涼祭で囃子方など責任のある役割に着くのは名誉なことでもあり、同時にプレッシャーのかかるものであっただろうと思います。前田三郎さんは当時の様子を描いた文章には以下のようにあります。

『唄は今年も誰々さんだよ』という具合に、すばらしい喉を聴かせてくれる人の名前も噂されて、町中に盆踊りのムードが拡がっていく。（中略）（宵の口は子供が多いが）「日がどっぷりと暮れる頃には、何時の間にか踊り手も、見物する人も増えてくる。仕事から上がって、一杯やってから悠々と現れる人は、大体ベテランである。この人達が加わることで、踊りは一層盛り上がる」

（足尾を語る会 一四号・二二―二三「盆踊り唄」に誘われて）

今回、私たちに祭りのことを教えてくれたAさんはこの納涼祭で長年の唄い続けて来られた方でした。聞き取りはAさんのご自宅で行い、足尾の聞き取りではめずらしく奥さんが必ず同席してくれるので二人への聞き取りとなります。聞き取りは毎回「終始笑っていたなあ」という感想に尽きるものでした。一時間ぐらいいはなんだかんだと世間話をしてから、「さて」とこちらから話題を切り

出して聞き取りが始まるのが恒例でした。そうした雰囲気の中でもAさんが、これは譲れないとばかりに語気を強めて語るのには直利音頭を始めとする足尾の民謡についてでした。Aさんは民謡の唄い手として、足尾町の合併の際に作られた足尾の民謡のCDでその唄声が収録されるほどの腕前で、CDを聴かせていただいたこともあるのですが、普段の雰囲気からは想像できないほどの勢いと張りのある声でした。「本当にBさんが唄ってるんですか」という失礼な質問に対しても照れ笑いしながら「そうだ」と答えてくれるAさんでした。

唄い手になるきっかけは古河に入社してすぐの一九歳、会社の宴会で唄った時に上司にその才能を見咎められたこと。他の唄い手たちの多くが民謡経験者である中で、初心者だったAさんは囃子を聞く踊り手たちに言い煽られながらもAさんは唄い手としてやぐらの上に立ってきました。

Aさん それは何かから真似してね。踊っている人は「そうかい、そうかい、そうかいね」ってね、ぼんぼん言うんだから、それがないと「交代」って言われちゃうんだから。声が悪くて「ぼんおーどーりー（ー）」なんてやると、「どうした、どうした」って言われるんだから。

奥さん 「音頭取りはどうしたー」なんて（笑）

Aさん あおられちゃうんだよね。

聞き手 本当に、一緒に作っているというかけ合いというか。

Aさん 昔は鼓が聞こえない時があったら、「鼓、どうしたんだコノヤロー、鼓が聞こえないぞ」ってな、鐘の人が。ちゃんちゃか、ちゃんちゃか真剣に叩きながら、踊りながらやってる人もいたんだから、その鐘の人が聞こえなくなったら、すぐに親方がやぐらに上がってきて「鐘はどうした」って。

（二〇一七年一〇月二〇日）

唄や囃子方が上手くないと遠慮なく野次られ、調子が良いと合いの手が入ったり、踊りに一体感が増したりと当時の祭りは囃子方と踊り手が互いに引き立てあうことで成り立っていました。先に引用した前田さんの文章にベテランの踊り手が祭りの盛り上がりには欠かせない存在であったことも、こうしたことから納得がつかます。

こうしてAさんの話を聞いていると、四方の山々や体に響くような鼓や鐘の音、すっと伸びていく唄声と怒鳴るような掛け声が響いて混ざり合って町全体が鼓動していたかつての納涼祭を想像することができました。

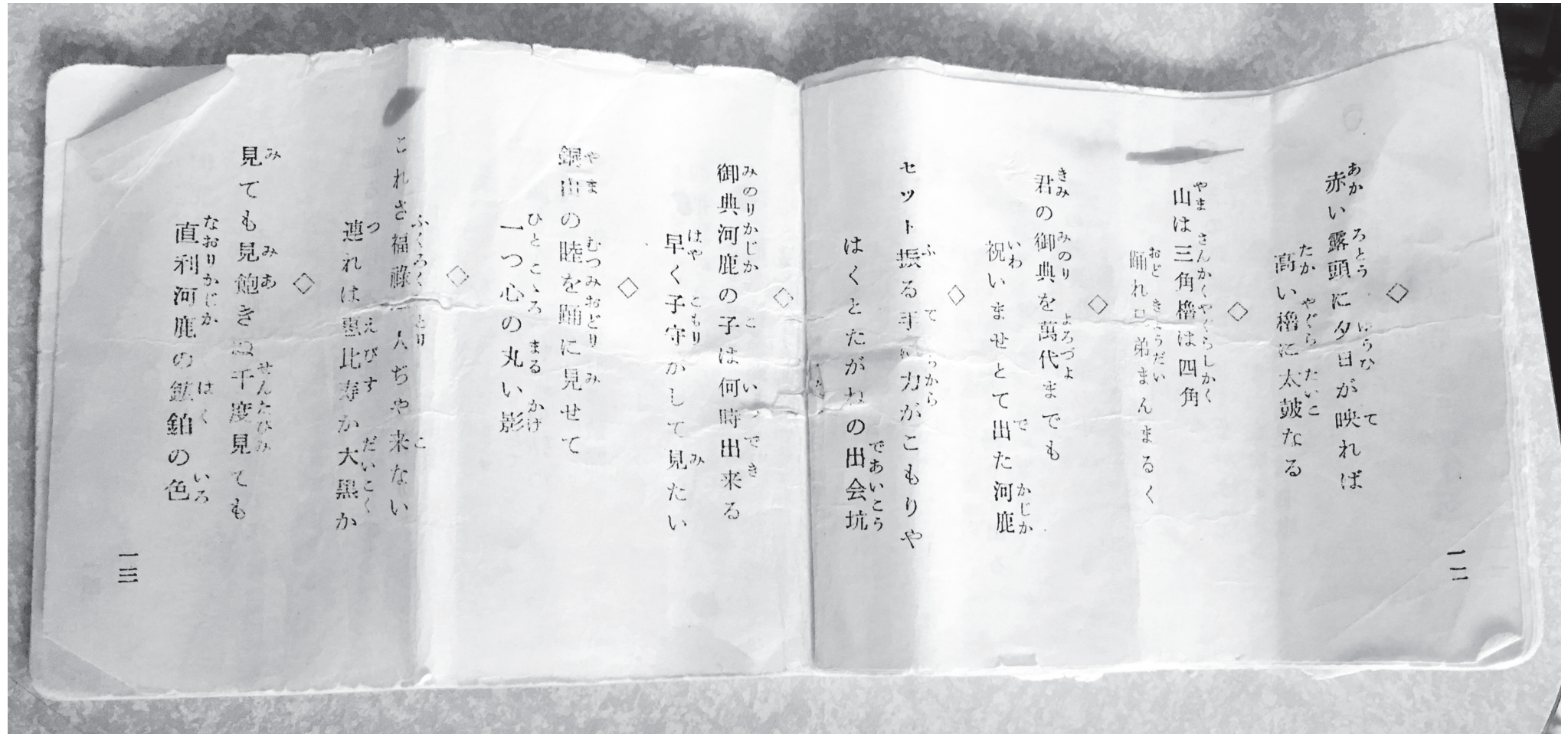
## 閉山後の納涼祭

銅山が閉山してから足尾の町は大きく変わっていききました。銅山中心で成り立ってきた町で銅が採れなくなれば、もうこれまで通りには生活していくことは出来ません。足尾に残るためには別の仕事に就くことにならざるを得ない訳ですが、そのように全員が残ることが出来たわけではなく、多くが足尾を離れる選択を余儀無くされました。二五〇〇人以上がその年に足尾を去り、その多くが社宅からの流出でした。先ほど、納涼祭のお話を聞かせてくれたAさんは閉山から約一カ月、来る日も来る日も同僚たちを送り出す日々が続いたといいます。また当時、足尾では離れていく人の移動だけでなく、地区間の人口の移動も始まっており、多くが現在中心部となっている通洞地区に集まって来たため、地区ごとの固有性は消えつつありました。Aさんは当時の町の様子を「めっちゃくちゃだった」と語ります。

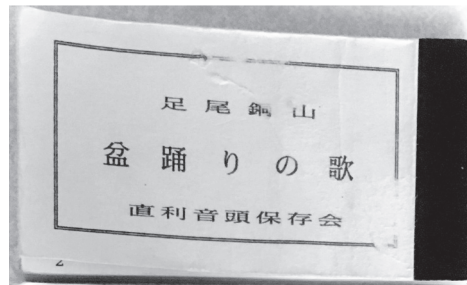
聞き手 あの、やっぱり閉山の後の雰囲気って変わりました？

Aさん もう、めちゃくちゃだよ。うん。

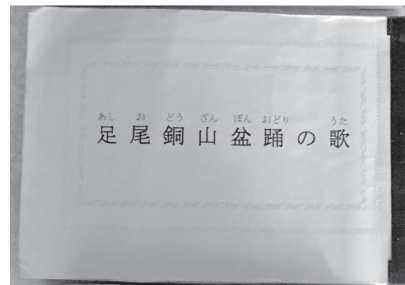




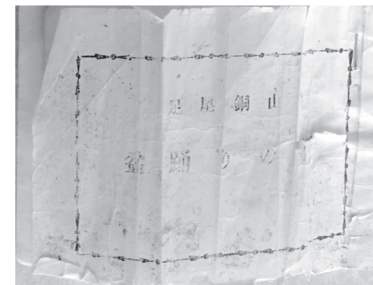
歌詞カード③本文



歌詞カード①表紙



歌詞カード②表紙



歌詞カード③表紙

上段：どの歌詞を歌うかはそのとき気分  
で決める。よく歌われる歌詞には  
マーカーで印が付けられている。  
下段：歴代の歌詞カード。右から順に古  
いもの。Aさんが愛用しているの  
は一番右のもの。

聞き手 それは静かになったってことですか？

Aさん 毎日、見送ってさ。だから、俺らなんか機械方で修理なんかしたから、悪いから二の番で入ってくれてなって、引っ越し手伝い。引っ越し手伝いだって三〇回から四〇回ぐらいやったかな、トラックに乗せて小山の方に行ってとか。だから、大変だよ。三〇人じゃきかないよね。丘の人は行っちゃうがね、忙しいから。ところが残ってたから、やってやるよって。通洞の部落の人はあそここの家が引っ越しだっていえば、行っって積んで行っってやったのさ。

今まで家族のように付き合ってきた仲間たちを見送る体験はどのようなものだったのでしょうか。そして、足尾に残ることになったことをAさんはどのように引き受けてきたのでしょうか。当然、閉山は毎年行われていた納涼祭にも影響しました。きっと今年の納涼祭は中止だろうと多くの人が思ったことでしょう。しかし、驚くことにその年でも納涼祭は行われました（広報あしお「一九七三年七月、八月に記載あり」）。

Aさん もう本山がつぶれちゃって、通洞が無くなって、本山が無くなって、通洞だけ盆踊りやって。それで全部、会社無くなって、閉山になっちゃったろ。それで二月に閉山になったから「八月が来たら、お盆どうするんだ」って。

聞き手 帰ってきてても何にもないですもんね。

Aさん ね。その時、みんなあっちこっち出ていくんだ。二月に閉山が決まったんだから、五、六月にどんどん引っ越して、（みんな）「今年は終わりだな」なんて言ってたんだよ。「もう、終わりだな」って。そしたら（役場にいた学校の先生が）「終わりにしたらだめだ」って。それ

で「どうするんだ」って言ったら、「足尾に（囃子方が）何人残ってる」っていうわけさ。それしたら、「三人か四人残ってる」って言うんだよね。その人が出ていった人を上手く呼んで「やらなきゃだめだ、一回やればまた続くから、なんとかやっちゃうべ」ってそういうことになったのさ。

（二〇一七年八月四日）

さらに、納涼祭を行うために苦労したことは祭に欠かせない太鼓を集めることでした。太鼓は古河から各地区へ保管を任されており、閉山後は各地区にそのまま太鼓が残されることになりました。そのため、各地区で革の張り替えるなどして大切に保管されていた太鼓を貸し出すことを渋る地区もあり、これを説得しなければならなかったと言います。

こうして閉山後であったのにも関わらず例年通り納涼祭が行われたことは大きな意味を持ちました。一つには、これまでのように古河の主催とはいかなくとも、残った人たちの思いで納涼祭を継続出来たこと。これは無くなっていくものが多い足尾の中で大きな希望となったのではないのでしょうか。もう一つには、お盆の時期に行われる納涼祭が足尾を離れなければならなかった人たちの戻ってくるきっかけになった事です。これは今後も続くことになる納涼祭の雰囲気大きく左右することにもなるような意味を持ったことでした。

それから数年間の納涼祭に参加するのは、それを見に来た人たちだけでなく、かつての囃子方たちもおり、飛び入りで囃子に加わったそうです。古河にも認められ、ヤジが飛び交う荒々しい頃の納涼祭を体験して来た、一流の囃子方たちが入ってきて囃子を盛り上げる。その時、かつての足尾の納涼祭の雰囲気に戻ってきたんだとAさんは教えてくれました。

Aさん 最後の方になると、九時過ぎぐらいになると「よし、いっちゃやるか」っていう仲間が



いたんだよ。それが今年、一人が二人しか来てなかったんだよ。いつもは足尾の盆踊りの時、他から来てるんだよ。そうすると「Aさん、最後だからいっちゃうよ」って言うよ、並ぶんだよ、すごいんだよ。そして、笛吹くのも違うんだよ、プロ級だ。〇〇と△△さんが笛吹いてくれるんだよ。そうすると、午後九時三〇分ぐらいまでパンバンバン、そうすると頭から（唄う声も）「はー」って出てくるんだよ。だけど、踊りは早くなるんだよ。だから、最後のぐらいいは変わるんだよ。笛が息がつけなくて速いよってなると、太鼓が変わるんだよ。

（二〇一七年一〇月二〇日）

祭りの終盤、かつての囃子方たちが飛び入りで盛り上げに入ってくると、音色が変わる、雰囲気が変わる、それにつられてAさんの唄声も前よりもっと伸びるようになってくるようになる。囃子方、唄い手、そして踊り手とともに作り上げる納涼祭が、かつての足尾が戻ってくる瞬間でもありました。こうした納涼祭が閉山後も足尾で続いてきた事は残った人たち、出て行った人たち、どちらにとっても昔を思い出せる貴重な時間だったと思われれます。

そして、一年に一度の納涼祭で帰ってくる人たちに足尾に残った者として唄を聴いてもらい労いの言葉を受け取りながら、また次の年にも戻ってくる人たちを待ち続けてきました。

Aさん 今でも一人でいて、「どした？」なんてたまに電話が来たよ。何十年ぶりに来たよな。「寂しくなったんべ」って聞いたたら、「足腰良くなってな」って言ってた。それものすごく釣りが好きで、一緒に鮎釣りなんか行ってたから、「もう川なんか歩けないよ」なんて。「釣りやってるか？」って言うから「やってないよ」って言って、「その田場だって飛び越せないのに、おっかないからやってない」って言ったら、「そうか」なんてな。

今ぐらいなら年中鮎釣りに行ってたから。「その罰が当たったのか、魚の罰なんか」って言ってたけど。「そろそろ魚の罰があたるな」なんて、「じゃあ鉄砲うちはどうだ？」って言ったら、「そんなのみんな死んじゃってるがね」って。足尾に残ってるのはみんな悪口言いながらやってるよ。（中略）「お前なんて元気な方だ」なんて言われるよ。「まだまだ盆踊りで唄ってるんだから」って。

聞き手 だから、八月にお盆に帰ってくるでしょ。そうすると、「ああ、いい唄聴かせてもらってるよ」って言うてる人がね。

Aさん （納涼祭を観に来て、すぐには）始めは誰が唄ってるかなんてわからないがね、閉山になってお盆に帰ってきてから「Aさん、ああ！」なんてね。

こうして、閉山後も足尾に残ることになったAさんが唄い続けることは変わっていく足尾だからこそ意味を持つようになりました。Aさんは祭りで唄い続けながら変わっていく足尾で「戻ってくる」人たちを想像し、その期待に応えようとしてきました。彼ら／彼女らを向かい入れる役割を担い続けること、こうした意味を持ちながら六〇年以上も唄い続けてきたのだと思います。そして、現在ではこうしたAさんが想像する納涼祭も少しずつ変わっていき、唄い手としては二〇一七年を最後の年としました。

### おわりに 変わっていく歌詞と納涼祭

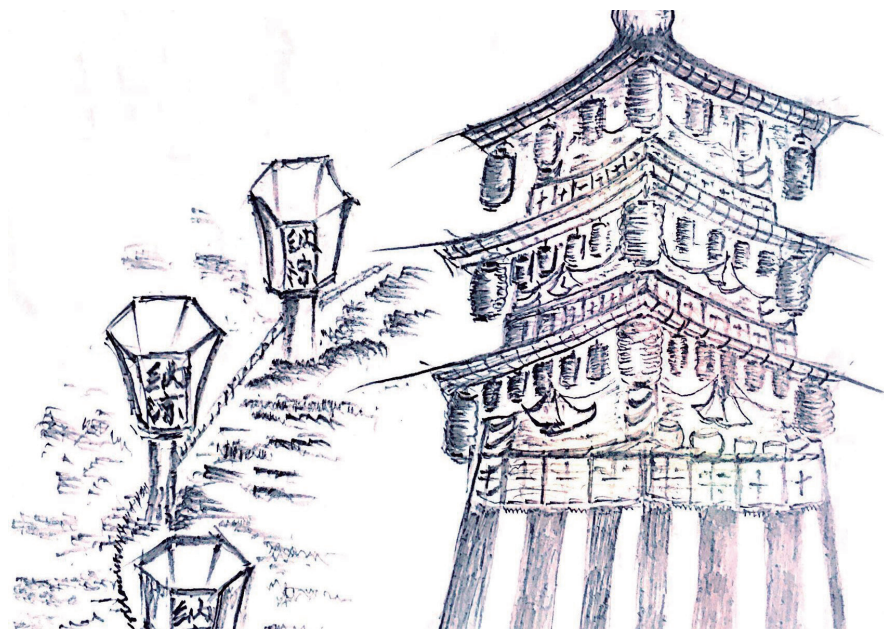
納涼祭で使用する直利音頭は昭和初期から使われるようになったようで、唄は選鉱場での女性たちの作業唄であり、囃子は八木節、踊りは「石投げ踊り」といった要素を混ぜ合わせて作られたものとあり（「わたらせ川」五号一一〇頁）、足尾銅山の歴史のなかでは比較的新しいものといえます。

歌詞については、杉本賢治さんによると、「銅山が募集によって選択したが、この募集が何時から行われていたかは明確ではない。戦争や銅山の盛衰に因って一定ではなく」募集が行われ、歌詞は定期的に追加されてきました。たとえば、杉本さんによると、歌詞にある「青葉の小滝」は精煉所が廃止されしばらくしてから、つまり大正期に作られたものであることや歌詞に使われる「河鹿」には具体的な名前が付されていること、「ラジオ」や「テレビ」など時代を表すものの名前が使われること、「鳶の葉入り」の盃は模範鋳夫に贈られた品であり模範表彰があった時代であったことなど「銅山の労作唄として生活、人情や友情など、その時代を反映した秀唄も多く収録されている」といいます(杉本一九九六)。

また、「広報あしお」には、一九六九年六月と一九七三年七月に足尾町で広く公募がなされており新しい歌詞が追加されたようです。ちょうど閉山の年であった一九七三年八月に新しく追加された歌詞にはやはり閉山をテーマとした歌詞がありました。

銅山は閉めても心はとじぬ 新生足尾の道開く

このように納涼祭はその時々の中ですれすれ変わっていくものなのです。閉山から四五年が経つ現在でも「直利保存会」の方々を中心に納涼祭は続けられています。今も踊りを誘う太鼓の音を聞くことができるのは本当に大切なことです。ただ、月日を経つにつれ、年々「戻ってくる」人は減っていき、昔のようにはいかないこともあるかもしれません。そうだとすると、かつて、直利音頭の歌詞が募集してきたように納涼祭は少しずつ変わっていくものであったことを考えれば、変わってゆくことも足尾の納涼祭の重要な要素なのだと思います。



納涼祭の様子(作：星勤さん)

## 足尾高校定時制と聞き取り

定時制が気になっていく

かつて足尾には五つの小学校と三つの中学校、そして高校が一つありました。けれども、現在では少子化のため小学校と中学校が一つずつになり、高校は二〇〇七年に廃校となりました。そのため、足尾の子どもたちは高校進学をきっかけに別の地域の高校に通うになります。学校というのは単に教育の場であるだけでなく、地域コミュニティの中心であり、将来の地域の担い手を育ていく場でもありました。さらに足尾では小学校と高校の前身が銅山による私立学校だったこともあって、ある時代では高校を卒業してそのまま銅山に就職することが一つの流れであったことから銅山の盛衰と大きく関係するものでした。私は調査で足尾に通うようになった当初、廃校に注目し、これが地域社会に与える影響から足尾の変化を探っていきたいと考えていました。

この調査に協力してくれたのがBさんという方で、足尾高校で長年教員をされていたこともあり学校関係に詳しく、実際に各小学校の跡地を案内してもらったこともありました。現在も三つの小学校は建物が残ったままで、すっかり廃墟の様相を成すものもありました。そんななか、高校跡地では建物は全て壊され綺麗な更地となっており、山間地のため平地が少ない足尾ではそこだけが不自然に空洞となっていました。そこへ訪れた時、かつて高校があったことを示す石碑を見ながらBさんは「なにも全部壊しちゃうことないのになあ」とつぶやいていたのを覚えています。新任教

師として足尾高校に赴任して以来、定年まで勤めあげてきたBさんにとって、この場所は特別な場所であったのだと思います。そんなBさんに足尾のことを窺っているうちに、私の関心は学校全般から楽しそうに語られる足尾高校の定時制へと変わっていききました。聞けば、赴任してからわずか一年で全日制から定時制への異動を希望したと言います。それほどまでにBさんを魅了した定時制とはどんな場所だったのでしょうか。ここでは、今はなき足尾高校の定時制について共に歩んできたBさんのお話を基にまとめてみました。

### 初めて見た足尾の印象

Bさんが足尾へやってきたのは一九六四年の閉山の一〇年前でした。まだ足尾には一万五千人以上が暮らしていました。Bさんは足尾に縁もゆかりもなく、漠然と鉾山町の足尾としてしか知らなかった外の人として足尾にやって来ました。初めて足尾を見た時のことをBさんはこう振り返っています。

長澤さん それでも鉾毒の町みたいなイメージはなかったですか？

Bさん いやあ、だから驚いたよ。物の本で足尾って言う地名ぐらいは知っていたみたい。だから、意外性は感じなかったけど、調べて日光の隣とかね。僕はびっくりしたね、その頃、桐生から行くでしょ。びっくりしたのは原向の堆積場。今はコンクリートで整備されてるけど、僕が来た昭和三十九年はそのままなんです。いわゆる茶色の土の堆積場、この頃はその面影が見られるのは少ないですけども。歴史館の横に捨て場がありますよね、規模は小さいですけど、あれがぶわーってつながるわけ。コンクリートのところが全部そうですから、かなり長いでしょ。あれを見たときはかなりビックリしたな。



中山さん 最初に足尾に来た時の印象っていうのはどんな感じだったんですか？

Bさん うーん、ビックリさせられて、あとはちょうど列車の座席を隣合わせた人がおばさんで「うちに寄ってみますか？」って言うんですよ。それが掛水の足尾機械製作所の工場長の奥さんらしくて、そこへお邪魔してお茶をこちそうになったんですけれど。そこで学校のおんぼろの自家用車を待って、初めて社宅に行っただけですかね。それで社宅のイメージの違いはあったかな。僕も横浜ゴムで社宅住まいだったんですけど、いわゆる普通の二階建ての一戸建てとか、長屋にしたって三軒の二階建てとかで、ああやって平屋なのは。それでまず聞いたのは、今でも覚えているんだけど、「この町に本屋はありますか」なんて聞いたのは覚えてるんですけど。僕はあまり驚かない人間だから、あまりハッと思ったことはないな。

Bさんが足尾に来た当時<sup>②</sup>、まだ日光へは車で三〇分ほどで抜けることができる日足トンネルはなく、険しい峠道を行くしかありませんでした。そのため、町外への交通の主流は足尾と桐生を結ぶ足尾線（わたらせ渓谷鉄道）で、足尾へ行くためにはこれに乗り、山の中へぐんぐんと進んでいかねばなりませんでした。山を抜け、車窓から見たものは鉾山町特有の、他の地域にはない景観でした<sup>③</sup>。Bさんが語るように、外から来た人間にとって足尾といえば鉾毒事件のような暗い印象が先行してしまい、それ以外の社宅や水場、風呂など銅山独特の暮らしやその雰囲気<sup>④</sup>というのはそこに足尾踏み入れて見えてくるものでした。たまたま「列車に隣り合わせたおばさん」<sup>⑤</sup>にお茶をご馳走になって初めて社宅に入っていたシーンは足尾にあったおらかな雰囲気を感じさせます<sup>⑥</sup>。

さて、こうして足尾高校の全日制の教員として赴任して来たBさんですが、その頃、ちょうど戦後生まれの方々が高校生となる時期で生徒数が増加しました。全日制では卒業生数がこれまでの一

四〇名程度から約二三〇名に増加しました。ちょうど日本全体が勢いづいていく変化期でもありました。そんななか、Bさんは全日制でたった一年教えた後、自ら定時制へ異動します。当時、山奥の足尾に赴任することは一般的には敬遠されるものであったにもかかわらず、さらにその定時制に赴任したいという人は多くはありませんでした。それでもBさんは「定時制の方が面白そうだったから」<sup>⑦</sup>と異動願を出したといえます<sup>⑧</sup>。

### 足尾高校定時制

足尾高校の前身は一九三三年に足尾銅山実業高校で銅山の経営する学校でした。その後一九四四年に足尾工業学校、一九四八年に足尾町立高等学校になります。一九五〇年には県立足尾高等学校。全日制と定時制の両方を備えていました。その後、足尾高校は県立になり「今まで大学に進学させるのに足尾の在来<sup>⑨</sup>の学校の中等教育程度では非常に困難な状況下にあったのですが、県立となって勉強さえ大いにすれば他の県立高と同じく進学ができる」という長年の念願が足尾に実現した（広報あしお一九六五年三月、コラム「足尾とところどころ」）ことになります。その後、定時制は一九七九年に閉校、足尾高校も二〇〇七年に閉校とされました。

創立記念誌『20年誌』には定時制が創設された頃の様子が描かれています。当時の教師は全日制との兼任で、専任の教師はおらず授業もままならなかったようです。初の専任教師となった方はこう振り返っています。

「当時の定時制生徒は全部で百名くらいで制度もとのわず、寺子屋時代ともいうべき状態で、生徒会を作ることになっても、総会は労働組合式になったり、教師が兼務を忘れて家へ帰ってしまったり、校庭で町内野球があると、一時限目は授業にならなかったり、町で定時制といっても何

のことか分からず、夜間部というところとわかるという状態でした」(『20年誌』「初期の定時制」中村康哉)

定時制のこと自体、足尾町民にさえ知られていないというなかで、やっと教員の体制が安定してくるのは一九五一年ごろからだっただろうです。その後、足尾の定時制では完全給食の開始、運動場の夜間照明の設置など、徐々に教育の場としての環境が整えられてきました。

当時、定時制の生徒はほとんどが日中仕事をしている方や経済的な理由で学校に通えなかった方、看護学校の生徒で資格のために高校へ通う必要のあった方が生徒として入学していたので、場合によっては教師よりも生徒の方が年齢や給料が上であることもありました。そのぶん、それぞれ多様な多様、個性的な人たちが集まっていたといえます。そうしたなかでは、物事を何でも討論をして決める自由な雰囲気があり、分け隔てのないやり取りがあったそうです。

### 定時制の演劇

ここで、Bさんが足尾高校の定時制を語る上で欠かせないものとして定時制生徒会<sup>1)</sup>を中心に行われていた演劇について触れたいと思います。定時制では年に一回足尾町で行われる芸術祭<sup>2)</sup>に演劇を上演することが恒例となっていたと言います。『20年誌』には、定時制が設置された八年後の一九五八年から参加してきたとあります。しかし、一九六四年にあることを理由に一旦中断されました。それはちょうどBさんが定時制へ移動する前年のことでした。そして、定時制の生徒会顧問となったBさんは演劇を再開することにしたそうです。

Bさん 定時制は伝統的に演劇をやっていた。それで僕が来た昭和三九年<sup>1964</sup>というのはオリンピックの年なわけ。それを口実にして演劇が無くなったの、中断したわけ。「みなさん、

演劇よりもオリンピック観たいでしょう」と。

三浦 演劇ってというのは一年に一回やるもの、

Bさん うん、その頃には芸術祭がありますからね、ちょうどそのころ生徒会の顧問していた人が演劇にあんまり熱心じゃなかったんでしょね。それで僕が定時制に変わって復活しちゃったわけ。熱中したね。

三浦 先生は演劇してたんですか？

Bさん 全然素人。

三浦 なんでもいきなり。

Bさん 生徒会が主催して演劇をやるという伝統がずっと続いていた。それで足尾町に芸術祭<sup>3)</sup>には素人演劇の伝統がずっとあったわけ。そこには社会人や役場、鉱業所の人も参加したし、高校も参加して。そういう伝統があって、この頃の生徒会は楽しくて。ほとんどの行事は生徒会がやる。卒業式と入学式以外は生徒会がやる。遠足、運動会、海水浴とかね。一回生徒会長を連れて下調べに行ったことがあるけど。僕はずっと生徒会を任されて、意気揚々として(笑)結婚したのに、演劇が始まると帰りは一〇時か一時ごろになる。定時制の授業が終わってから練習で一〇時か九時、授業は五時に始まって八時ごろ終わるのかな。二時間ぐらいやると一〇時になるでしょ。

演劇に関しては素人だったにもかかわらず、Bさんが頑張って復活させました。それは演劇というのは定時制の伝統であり、それを芸術祭という町の行事に参加して発表することは定時制にとって大きな意味を持つと感じていたためでしょう。

演劇の脚本は既存のものを使用したとこのことで、脚本の研究や稽古を行い、小道具作りには毎年

予算を使いすぎると怒られるほどでかなり熱心に取り組んでいました。実際に一九六九年に生徒会が発行した広報誌には練習時間は「九月…週三回、十一月、一月一日…日曜を除く、時間八・三五〇九・三〇」、注意書きとして「おそくても一〇・三〇までに」と書かれていました。演劇の練習はなかなか大変なものだったことが伺えますが、「この頃の生徒会は楽しくて」と語るように充実した日々だったようです<sup>⑩</sup>。

けれども面白いことに、こうした演劇に生徒たちが必ずしも賛成であったわけではなく、毎年演劇を続けるかどうかについても議論されていきました。それは何でも討論して決める定時制ならではの言えるもので、簡単には慣例に従わないというような生徒たちの姿勢が垣間見える気がします。当時、演劇の参加についてのアンケートを行っており、一九七〇年では「賛成票二一、反対票二一、どちらでもない一八」であったと生徒会発行の広報誌に書かれていました。それでもBさんが押し通す形で進めて、毎年終わってみれば「やって良かった」と生徒たちも感じていたそうです。

#### 閉山と定時制

こうした定時制の活動や雰囲気は銅山の閉山が近づいてくると変わっていくことになりました。生徒数の減少、それに伴う教員の減少で行事が行えないようになり、教員の余裕もなくなりかつての定時制特有の雰囲気はなくなっていました。そして、何よりも定時制の存続自体が危ぶまれるようになっていきました。こうした不安定な社会状況を受けて高校だけでなく町全体の話題となり、問題となった、全国紙に掲載されるほどの大きな事件が全日制で起きてしまいました。Bさんはこうしたことの背景に銅山の閉山があったことは否めないと振り返ります<sup>⑪</sup>。

Bさん その昭和四〇年ごろから荒れだしてきた。荒れた原因っていうのは確かに閉山が四八年

だけど、その前兆だったり、合理化の問題とかありましたでしょうし。もう一つは若い先生が多くなった。学校の生徒も増えてきた。今まで歳とって足尾でがっちり教えていた先生がいなくなつて、生徒の質が変わったといえど語弊があるかもしれないけども、いわゆるいろんな幅を持った生徒たちも増えてくるわけですね。そういう点で先生が若くなって抑えが効かなくなつたっていうこともあるし。それから生徒の質の変化もあるでしょうし。それがどれくらい影響したかわからないけど。

(二〇一六年六月一日)

この事件は一九七三年三月、八名の生徒たちが留年となったことが発端でした。当時、多少成績に問題があったとしても何とかして進級させるのが暗黙の了解とされていきました。けれども、その年に着任した校長先生が成績の基準を満たさない生徒には厳しく対応するよう指示したため、多くの生徒が留年することになりました。Bさんによると、この校長は鉾山町で暮らす子供たちに対して「暴力的だ」という偏見を持っていたので厳しい態度をとったのではないかと思います。そして、留年した生徒をめぐっては留年の代替案として、全日制から定時制へ転学させるという提案が校長から出されました。これにBさんはこれに猛反対をしました。当時のBさんにとってこの措置は定時制を低くみたものであり、定時制にやりがいを感じていたBさんにとって許せるものではありませんでした<sup>⑫</sup>。

Bさん 校長に変人扱いされたのは大論争したからなんです。全日制の生徒を退学させる代わりに定時制に移させてくれと。だけど、それはおかしいと、全日制から定時制に行くっていうのはおかしいじゃないかと。今から考えてみると、確かに定時制に対する侮蔑じゃないかっていう風に考えたんだけど、考え方によっては転学を認めても良かったんだよ



な。今から考えればね。だけど、それが校長の勘に触ったみたいで。

志村 定時制に移すのは良くないんじゃないかっていう意識は定時制の先生方、全員で持っていたものなんですか？それともBさんだけで。

Bさん いや、大論争やったんだよ。転学に賛成する人と、反対する人と。どちらが多かったのか。最終的には転学はさせないと。確かに生徒からの批判もあったと思うんだ。彼らにとっては友達ですからね、全日制でなぜすぐ退学という形をとるんだと。僕が言ったのは全日制に復学させろと、それで「どうしても定時制のほうがいいんだ」と言うんだ。たら納得するって言ったんだ。それを全日制を退学させといて、定時制に移させるっていうのはおかしいっていう論法をとったんだけど。

(二〇一六年六月一日)

また、閉山によって不安定な状況になったのは生徒たちだけではありませんでした。鉾山関係者が新たな職場へ移動を余儀なくされ、それに伴い多くの子どもたちも転校したため、教員も人数過多となり人員の配置転換が行われることとなりました。当時の新聞報道には以下のようにあります。

「足尾高校でも五百二十六人の生徒のうち二百人がいなくなる。小、中学校(足尾中、足尾、本山、原小)では千六百三十人のうち六百二十一人が銅山関係従業員。また足尾町の二幼稚園(足尾、本山)には現在百十一人いるが、来年同町で小学校に入学するのも八十二人。(中略)県教委の推定通りに児童生徒数が減ると、高校で十二人、小、中学校四校で二十四人の先生が『余る』ことになる」

(『読売新聞』一九七二年一月一六日)

「教職員の大半は地元出身者で、三十五歳以上の中年層のため『生徒が減ったから』といってすぐ

に他校へ移動するのは困難」とみられている」

(『下野新聞』一九七二年一月一六日)

高校においては一二人の教員が異動することになることが予想された。ただし、Bさんによると、この配置転換で苦勞したのは小中学校の先生たちで、彼ら／彼女らは地元出身の方が多く、既に結婚し足尾に定着していました。一方、足尾出身ではなく独身が多かった高校の教員のなかにはむしろ足尾を離れたと思う人の方が多かったそうです。Bさん自身は「結婚していたということと、少人数教育が非常に好きですから」と足尾に残った理由を語っています。けれども、残った先生たちも教員の数が減ったことで本来の専門以外にも複数の教科を掛け持ちしなくてはならず、大変なことだった日々を過ごすことになりました。

そして閉山から三年後、ついに足尾高校定時制の廃止が検討され始めます。高校の進学率の上昇に伴い、全国的に定時制自体を希望する人が減少し、定時制の統廃合が進められた時代でした。その時、すでに足尾高校の定時制の生徒は八名。最盛期の一九五七年には一七五人以上が在籍しており。Bさんが定時制に異動した一九六五年では一五四人が在籍していましたので、これは大きな変化と言えるでしょう。その後、一九七六年には募集を停止し、一九七九年に最後の卒業生四名を送り出し定時制は廃止となりました。

こうして、閉山の影響を受け変わっていく定時制でBさんは教員として過ごしてきました。それはこれまで通りにはいかないことの連続だったことは想像に難くありません。Bさんが力を注いでいた演劇も一九七一年を最後に途絶えてしまします。また、銅山の不振のなかでは、働きながら定時制に通える余裕がないばかりか、足尾の外へ働きに出ていく人もあり、定時制自体が足尾の中で存在感を失っていくことになりました。

こうした変化の中で、定時制の担っていた役割も変化してゆくのでした。かつての定時制では多

くの生徒がすでに足尾町で職を得ており、多くが卒業後も足尾に残り続けていました。つまり、定時制の教育とは直接的に足尾の次の担い手に関与できる場であり、地域の未来に関わっていくことでもあったのです。そうであるからこそ、Bさんのように定時制に深く関わることは地域での重要な役割を果たしているという実感につながるものであったと思います。このことはBさんが定時制の廃止後に投稿した新聞記事に描かれていました。

「二年間の全日制課程勤務後、定時制に移り、魚が水を得たように、自由に、自分の教師としての信念で活動しました。(中略)全日制の生徒の多くが、卒業後地域外に出るのに較べて定時制卒業生のうち二百人ほどが、この町に住み、中堅として活躍しています。定時制がこの地域に果たした教育の意義は大きなものです。そして卒業生の子弟たちが数多く高校に入学しています。(中略)一人でも多く『落ちこぼれの子』をつくらない、これは父母や教師の共通の願いです。(中略)今、この町の観光開発の目玉として日本一という坑内観光の工事が進められています。しかし観光開発とともに、この町が鉱山研究のメッカになることが私の夢です」(『毎日新聞』一九七九年八月二九日「毎日郷土提言」)

### おわりに——聞き取りとBさん

今回の語り手であったBさんとは元協力隊志村さんの紹介で知り合いました。教員をしていたためか、足尾に暮らしている方とは少し感じが異なり、一步引いて足尾を眺めている感じを受けました。志村さんからは「聞き取りでというよりも、プロジェクトのアドバイザーとしてお世話になるかもしれない」と伝えられていました。こうしたBさんへの聞き取りは筆者には聞き取りでもありませんでしたが、同時にどういったことに関心があるのか、どうすればそれを知ることができるのかと

いう研究の問いを洗練させられる、悩み相談の場でもあったと思います。わからないことを教えてもらったり、考えたことをそのまま投げかけてみたりしていくうちに私が何に関心があるのかが定まっていきました。正直に言って、これが聞き取りなのかと言われれば自信を持って領けないところもあります。

Bさんへの聞き取りは自宅の一軒隣の、書斎として使っている一軒家にお邪魔することが多かったです。壁一面が本棚であり、どれもびっちりとした様々なジャンルの書籍が並んでいて初めは圧倒されました。一つ一つの質問にしっかりと考えてからゆつくりと丁寧に答えてくれる姿が印象的で、時には一分近く長考してから答えてくれることもありました。回を重ねるごとに、このように本に囲まれて、Bさんと向かい合ってゆつくりと聞き取りをしていくことに慣れていくと、まだまだ調査自体に不慣れであった私の思考をゆつくりと整理しながら言葉にすることができました。

そんな聞き取りの冒頭やその約束のために連絡したとき、必ず「最近では墮落で」とか「毎日怠惰に過ごしてばかりで」というような「日々いかに何もしていないか」という話から始まります。とくに、時代とともに、定時制高校や自分の生活がどのように変化してきたかという話題のとき、Bさんは皮肉交じりに話します。先ほど引用した新聞記事と現在のBさんの語り口はまるで違うのです。

けれども、「外の人」として足尾にやってきてから現在に至るまでのさまざまな出来事を、私たちに辛抱強く教えてくれるBさんの姿は「先生」そのものです。足尾が変わり、そこでのBさんの役割が変わっても、変



高校跡地と記念碑(筆者撮影)

わらずにそこにあるもの——それは、自分を頼る者たちに対するBさんの誠実な姿勢なのではないでしょうか。

#### 参考資料

- ・栃木県立足尾高等学校、一九六九、『栃木県立足尾高等学校 定時制 20年誌』
- ・定時制閉校記念実行委員会、一九八〇、『栃木県立足尾高等学校 定時制閉校記念誌』
- ・足尾町郷土誌編集委員会、一九九三、『足尾郷土誌』
- ・近藤和子、一九九四、『高校定時制始まりの頃』足尾町民がつづる足尾の百年 銅山に生きた人々の歴史 一〇〇頁
- ・杉本賢治、一九九六、『足尾の盆踊り歌と直利音頭』足尾を語る会会報『六号、三四—三九頁、足尾を語る会』
- ・前田三郎、二〇一〇、『盆踊り歌』に誘われて『足尾を語る会会報』一四号、二一—二四頁、足尾を語る会
- ・茂木真弘、一九九九、『足尾に残る銅山唄』『わたらせ川』五号、一—一六頁、わたらせ川協会

#### 注釈

〔1〕昭和四十（一九六六）年の校内行事（生徒会・部活が主として関係したもの）。全校スケート大会、予餞会、会食会、フォークダンス、\*修学旅行、古峰原高原遠足、校内球技大会、校内県南球技大会、県南定時制体育大会、キャンプ（中禅寺湖）、県下定時制総合体育大会、\*校内生活体験発表大会、校内体育祭、生徒会他校訪問、他校との親善試合（足工・足高）、文化祭、学校長との座談会、足尾町芸術祭演劇参加、\*駅伝競走大会、定時制新聞発行（\*印は生徒会が直接関わらなかった行事）

〔2〕他の大きな要因としては、高校進学率の高まり。それに伴って、クラスは普通科二学級、機械科二学級、家政科一学級の編成になり、昭和三十九年に鉱業科が廃止され、機械科三学級となった。生徒数の大幅な増加である。このことに伴って、様々な変化が見られた。(1)生徒の多様化。今まで少人数のこじんまりした学校が中規模になったこと。生徒の学習意欲。生徒の様々な意識に多様化が見られた。(2)教員構成も今

まではベテランの先生が多かったので学校経営が安定していた。生徒の増加に伴い、若手新採教員がたくさん赴任するようになり、年齢構成に大きな変化があった（ベテランの年配層の教員は足尾に赴任しながらない傾向があったらしい）。(3)上級生と下級生の問題。(4)科別意識。(5)学校の施設、設備の問題。などなどあったと思います。

#### Bさんのコメント

〔1〕僕にとって、栃木県は父の故郷、絹村（現・小山市に合併）であること、戦後に中国から引き上げてきた父の実家があるぐらい。採用試験に合格して、赴任希望地を聞かれたけれども「どこでも良い」と言ったら足尾だった。だから、足尾は全然知らないところでした。もう足尾に住んで五十数年。この地でこのまま生きるでしょうね。死ぬまで。

〔2〕三重県で受ける授業で鉱毒事件の触れることはなかったようです。だから、足尾について暗いイメージは持ちませんでした。いやだから驚いたよ。低いトタン屋根の長屋群。原（足尾内の地区名）などの大きな堆積場、高校寮のあった「上の平」から見ると山や精錬所。鉱山町は初めてですから。

〔3〕昭和三十九年ころは、今のようには、日足トンネルはなく、桐生から足尾線（現在のわたらせ渓谷鐵道）に乗って足尾に来る。足尾に近づくにつれて、山また山、渡良瀬川の溪谷。平野の伊勢で長く育った僕にとって初めての風景。足尾に入るとビックリしたのは、原の堆積場。今は長いコンクリートの壁で整備され、堆積場は緑化されていて、昔の面影はありませんが、長く続く、茶色い廃石の山がぶわーってつながっている。コンクリートのところが全部そうですから、かなり長いでしょ。あれはを見たときはかなりビックリしましたね。

〔4〕列車の席で隣り合わせた中年のおばさんが、「うちに寄ってみますか？」と言うんですよ。足尾駅で降りて、掛水（地区名）の社宅に行ったわけです。初めて足尾の地を踏みました。社宅は一軒屋でかなり広い家でした。この女の方は、古河系の工場の幹部（工場長？）の奥さんだったようです。奥さん何と話を話しかか覚えていませんが、「この町には本屋はあるのですが」と尋ねただけを覚えています。

〔5〕この家でお茶をご馳走になり、高校に電話をしてくれました。本当に親切でした。これが足尾なのです。高校から、大型のおんぼろ自動車（高校の公用車）が迎えに来てくれて、高校に行き、校長などに挨拶して、その日は終わり。学校で一丸旅館が予約されていて、そこで一泊。この一丸旅館の女将さんは気持ちの良い方で、優しく、親切な方でした。今は黄泉の国の人になってしまいましたが、足尾に来て、この宿に泊



まった多くの人が懐かしく思っているのではないでしょうか。

〈6〉昭和三十九年はまだ独身で、教材研究のために、かなり遅くまで残業していたものです。その頃は新卒採用の教員はさほどの校務分掌もなく、部活動も社会研究会というあまり活発でないクラブでしたので教材研究に熱中できたのです。良き時代でした。

〈7〉定時制の職員室の雰囲気は私には良いものでした。昭和四十四年四月当時教職員は校長（全日制と兼務）を含めて十八名いました。定時制の職員室は休み時間になるとよく生徒が入ってきて、コーヒーを飲みながらよく雑談に興じたものです。私の高校生時代は劣等生で職員室は鬼門でしたので、なおさら和やかで賑やかで楽しいものに感じました。

〈8〉足尾での生活は「上の平」の高校寮から始まりました。「上の平」は昔は古河の職員用住宅でしたが、後に町営住宅となり、高校の教職員も多く住んでいました。私が赴任する昭和三十九年前後から、若い独身者が多くなり、独身寮がいつばいになり、一般住宅にも独身者が住むようになりました。一部屋でしたが、食事は賄い付き、風呂は共同風呂。その後、野路又に高校の独身寮ができました。

〈9〉文化祭は、学校を解放し、多くの町民が来校した。何年度だったか、職員と生徒で「鹿沼こんにゃく・みそおでん」の店を出し、好評を得たことがある。売れすぎて品物が足りないほどだった。冷たいコーヒーを出してお客さんに怒られたのを覚えている。定時制の職員と生徒が一体になって出来たことも定時制ならではのことだろう。

〈10〉私が定時制に赴任した頃は、在校生は百二十名ほどいたし、それなりに、生徒会活動・部活動などは盛んであった。昭和四十年を境にして徐々に生徒数は減少し、それに伴って、活動も盛んでなくなっていた。生徒たちは昼間働き、夜遅くまで部活動などの活動をよくやっていたと思う。演劇などやっている時は、夜十時ごろ下校ということもあった。よく頑張ったと思う。自分自身もよく一年中働いたものだ。若さのなすことでした。

〈11〉今から考えると、定時制を希望した生徒に強い希望があるとすれば転入させても良かったのではないかと考えます。この生徒は一年留年して卒業したと聞いている。他の生徒はどうだったのか。退学した生徒もいると聞いているが。校長のとった留年の措置は正しかったのか。全日制の職員会議でどのような議論が行われたのか。留年を決定する以前に何らかの教育指導、救済措置は取られたのか。今では不明確である。

〈12〉私は副担任を含めてあまり担任を持たなかったが、担任をして、一番苦労したのはいかに退学者を出さないかであった。退学の理由は非行による退学。欠席日数の不足による退学。成績不振による退学。私が受け持った昭和四十五年度卒業生の機械科の生徒は十四名卒業したが、数名やめている。一人は職場の事故で死亡（この時は泣けて仕方なかった）。他は欠席しがちで退学してしまった。何回か家庭訪問したがダメだった。家庭訪問をすると、父親がいて、昼間から酒を飲んでいるらしく、私も勧められ、断ったことがある。一人も退学者を出さず卒業させることは至難の業か。卒業していった生徒は今どのように暮らしているのだろうか。

私は社会科の教師として社会科目の全科目（倫理・現代社会・世界史・日本史・地理）を、ある時期は免許外として、国語まで教えた。教材研究にいつも四苦八苦したものだ。自分でプリントを作り、それに沿って授業した。教科書をあまり使わないので、生徒から教科書を買って損した、などと言われたものだ。試験はそのプリントから出したので、ほとんど赤点（欠点）は出なかった。本当に、良い授業をやったか、後悔している。三十七年間の教師生活で本当に良い授業ができたことはあったのだろうか。先日、教える子から先生の授業は面白かったと言われたことがあるが、本当かな？。



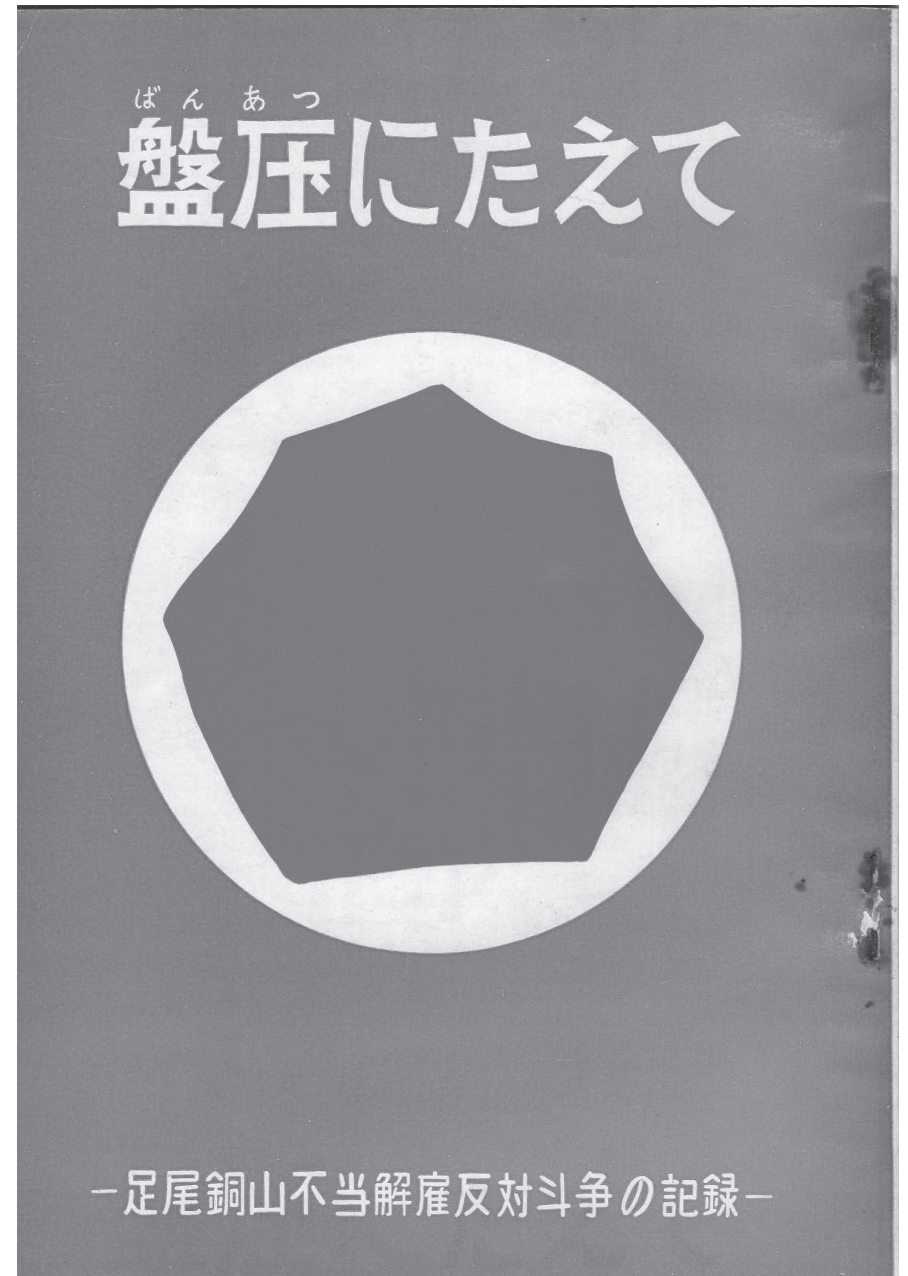
### 勇退勧告を受ける

「だからね、これ（勇退勧告）は俺んどこも来るなっつうんで、緊急にみんな集めて、来たときは、喧嘩は絶対にしちゃだめだ。できればテープレコーダー持って行って録れと。それがだめならね、一回向こうが言ったら、あんたこう言いましたねって、どんな下手な字でもいいから、自分の目の前で書いてくれるって。そういう指示を出して、やったんだよね。で、テープレコーダー持っていったのは私だけだったんだけど、それでああだこうだ言ってね、最初、ドスンと（風呂敷包み）出し

### はじめに

足尾での暮らしや文化、仕事の話をうかがっていて、銅山閉山五年前に会社が二五名に勇退勧告（事実上の解雇通告）を行い、それを不当として、七人の労働者が地位保全を求めて裁判闘争をしたという事実を知りました。足尾銅山の歴史をまとめた本などには、そうした出来事があったとはつきりと記載されていません。しかし、足尾で生きてきた人々の暮らしを考えるうえで、こうした生活や労働をめぐる闘いがあったこととそれをめぐる語りをまとめておくことは大切でしょう。そして、なによりも、不当解雇裁判を闘った当事者の語りは生き生きとして、印象深いものでした。

当事者の男性七人のうち、五人にお話をうかがうことができました。ただ裁判をめぐる話や厳しかった当時の暮らしの話だけでなく、自分はなぜ労働運動に専心するようになったのか、自らが生きてきた歴史など興味深い語りと出会え、一方的に事実や思いなどをただ聞き取るというより、むしろ、私たちが彼らと語り合うという感じの聞き取りとなっていました。ことも多かったです。この章では、五人の語りを抜粋しながら、不当な解雇処分に暮らしの場からひるむことなく立ち上がり、足尾だけでなく全国から多くの労働者の支援をえながら、裁判闘争を続けてきた彼らの生活と闘いについて、簡潔にまとめたいと思います。



不当解雇の裁判を初めて1年がたった昭和41年8月1日に出された冊子。表紙のデザインについての説明が裏表紙にあります。「白色は平和、緑は自由と幸福、赤は情熱、力、闘争力、独立。白色で丸い部分は太陽を、真中の七角は銅の結晶体と七名の仲間を表します」



たら、(向こうが)たまげてね。「えーっ」なんて後引いてんさ。「ダイナマイトじゃないから安心しろ」なんて言ってるね(笑)。風呂敷包みにわざわざ包んでいったね。「何ですか」って言うから、テープって言ったら、「ああテープ録んじゃあ、だめ」と。「ああそう、テープに録音できない、人に聞かせられないこと言うんじゃあ、聞いてもしようがないから帰る」って。まあどうせ止めにかかるって思ってたから、ゆっくり待ってたん。そしたら労務課長がね、課長も東大出なんて言うけど気がいいんだよね。それで「ちょっと待ってくれ。相談してくる」なって言ってる。向こうが(別室へ)退却して、相談して。「じゃあ、録っていい」っていうんでね。それで昔のテープレコーダー(大きなオープンリールのデッキ)だから、彼らの前にマイクおいてね、(課長の前に)マイクを置いてね、さあどうぞって、始まった」

「ちやうど私は子供が生まれて四日目くらいでしたね、掛水倶楽部に呼ばれたのがね。労務係が家に来たんですよ。『掛水倶楽部に来てくれ』ということ。日にちは忘れちゃったんだけど「いついつ、何時に来てくれ」と。それで、そこで「あなたも、勇退してもらいたい」ということになった。理由は要するに「会社のためにならないことを、組合の大会でも職場でも言っているから」とね。……私は何も解雇されることもないし、理由は何ですかと言ったら、副課長は、会社の炭鉱や鉱山を回って、その人が行くところで必ず(労働者の)首を切ると言う人だったんですね。その副課長がいきなり「自分の胸に手を当てて考えてみろ」なんて言われてね。考えてみればわかるだろうと言われてね。私は目をつぶっちゃってね、そこで寝っ転がってやろうかなと思っただけでも、座って腕組して、目をつぶってしばらくいたんですよ。そうしたらね、次と呼んでいる人の時間が迫ってきたから、副課長が「あんたは会社のためにならないことを言うんだ」と言ってる、怒鳴ったんですよ。『いてもらうのが困るから、次の人が来るから』と言ってるね」

「私はね、要するに会社に対して良いようにならないと。会社の主張に因縁というか異を唱えていると、だから会社の方針の妨げになると。だけど組合の運動のなかでの主張なんだから、正当な組合運動だということなんですよ」

経営の合理化から、勤務状況の良くない人だけを勇退勧告の対象とするという会社側の説明を組合が論議して承しました。だが蓋を開けてみれば、実際に該当する人だけでなく、普段から労働運動を熱心に行っていた活動家も対象になっていたのです。明らかにこれは「運動潰し」です。

彼らは、勇退を勧告される場やそのやりとりを面白おかしく語ってくれました。説明を漏らさず録音しようとテープレコーダーを持ち込み、対応に慌てる根は気のいい課長の姿。「会社のためにならないんだ」と恫喝され、その場に寝転んでやろうかと腕組みし黙り込む姿。その状況が目に見えるようです。労働者をできるだけ効率よく都合よく管理しようとする会社側、会社と常に対抗し、働く権利や労働条件や状況を少しでも良くしていこうと運動する彼らが生きている現実の落差が彼らの語りからにじみ出てきます。

勇退勧告の場というのは、要するに辞めてほしいということを経営者が労働者に丁寧に説明すべき場なのです。にもかかわらず理由の説明もなく、「お前の胸に手を当てれば、わかるだろう」と言われ、首になるような覚えもないと黙っていたら、恫喝してくるとは驚くべきことではないでしょうか。

## 『ガンバロウ』を出し続ける

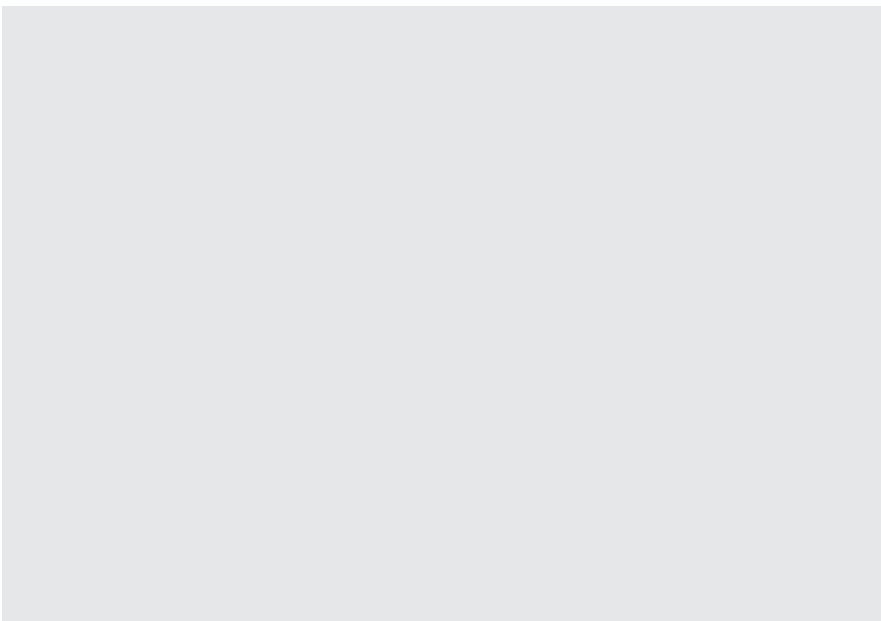
彼らは、勇退勧告を受けた翌日から、事実を労働者に伝えようとガリ刷りのビラを出しました。

それは『ガンバロウ』と名付けられ、裁判が終了するまで一三〇号近くまで出し続けられたのです。彼らの一人から話をうかがっていたとき、「そういえば、こんなものもあるよ」と部屋奥を探して出された黄ばんだわら半紙の束。それが『ガンバロウ』だったのです。

裁判を進めるうえで、七人は反対同盟委員長、副委員長、事務局、財政、生活、家族会、情宣とそれぞれその担当を決め、役割を分担します。『ガンバロウ』は情宣を担当したガリ切りの名人が刷り続けたのです。

「高校時代にガリキリを教えてくれる先生がいて覚えたのです。学校新聞なども発行していたのですが、それからガリ切り担当になって。銅山に入ってから、私はガリ切りを知っていたので、支部の機関誌を担当したんですね。で、『ガンバロウ』の話は解雇されてからになるのですが、勇退勧告だったわけですから、だから断ることもできるだろうという私の判断だったんですね。だけれども労働組合の方は一切関知しないということで、独自にやらなくてはいい。掛水倶楽部に呼ばれて勧告されたわけですよ。その次の日には個人名でガリ切りやって、坑口で配っちゃった。「私、首を切られようとしています」とね。それでみんなびっくりしちゃったんです。勝手に『ガンバロウ』という標題をつけて配っちゃったんですけれども……。じゃあ『ガンバロウ』ということで、我々の機関誌を出していこうと。裁判の経過だけではなくて、職場の仲間の支援も受けなくちゃいけないのだから、職場の現状の苦しさとか要求とかそういうのも取り上げてね、みんなを励ましなが、自分たちの闘いを支援してもらえたら良いのではないかということ、それでみんなで原稿も検討しながら書いてきたのです」

「原紙が擦り切れるほど、刷りましたからね。本山坑、通洞坑、小滝坑と三つありましたけれども、



「ガンバロウ」追加

## 勝ったぞ、連帯の力

### 「解雇無効、不当労働行為」と判決

定期十ヶ月前に付いた元電報の最終公判  
参加者は、各地からの守る会の仲間や赤旗  
をばはじめ野田、渡部、毎日、共同通信など  
各紙の記者にとりかこまれる。「判決をむ  
かえた覚悟は？」、「勝敗についてどう思っ  
た？」生活者のブル制は……とことろつ  
ぎばやの質問攻めにあう。「勝利以外に判  
決はありせん」ときつぱりいい切る委員  
長斎藤は審判はひしめきたつ。十一時を  
二十五分まわった、裁判長以下が審判。  
「ただいまが判決をいいます」「主  
文——由論人が被申請人の従業員として  
の地位を有することを仮に定める」「たんな  
るといって、裁判長の口の動きを待つめる  
処置員の傍聴席。一瞬、いうにいわれぬ静  
けさば法廷を覆さる。ロウバイした会社側  
古川本社事務係長、田中興業事務係長の顔  
をなし、「全買勝利だ」声にならぬ声、頭  
と目で審判官はうなづきあう。  
足尾への連絡、各地への電報にとびつく  
仲間をよび裁判長の判決は驚く——全文  
は五頁あるもので、大蛇に巻かれて  
はいるが、会社側にとっては痛いところば  
びびりかかっている。「会社は各々々々非  
協同としていたが、これはすべて組合活  
動の一環としてやられたもので、職場の不

ガンバロウ

1969年7月10日  
大 94 号  
加本業上労働関係問題  
研究資料の労生労働対抗同盟  
事務局 有 蔵 持

### 判決速報

満を持えたことなど非協力はいいない。ま  
た差別や脅迫などをあけていたが、これは  
他の人々もやっていたことだからに  
とりあげたものである。もし問題があるな  
ら、規則により此類なことをすべきであ  
るに、突然解雇するのは解せない」と前置  
きし、「会社の真の解雇理由は、申請人が  
組合活動や民主運動に熱心であり、労働者  
階級の利益を守るために会社の一方的合理化  
に反対したためである」と断言した。「  
不況」のために合理化をして、賃上げのた  
めに甘切りにしたとする会社の主張にあい  
まいな理解を出しながらも、はっきりと解  
雇の乱用、不当労働行為とした判決は、  
労働者側にとって不利な判決をしがちな現在の裁  
判制度の中にあっても、労働者が職場の仲  
間と連帯し、連帯や全買の仲間とスクラム  
を組めば必ず勝てることを実証した。  
判決後、会社側との交渉で地裁副院長は「  
賃金は払うが職場にはいれない」と相安の  
中にくれ口で欺瞞してききました。私たち  
は受ける立場にたります。今月からは働き  
人と共に同じ組合員として、労働者の生活  
と権利を守るためにガンバリます。  
長いたたかいの御支援を厚く感謝し、今  
後ともたたかいていこうことを誓います。

「ガンバロウ」94号

組合員全員に行きわたるくらい刷らなきゃいけなかったから、一〇〇〇枚以上は刷ったでしょうね」

「いやあね、最初はね、黙ってみんな『ガンバロウ』やビラを」取らなかったですよ。会社から取るなっていう指示がありましたから。だけどだんだんやっていくうちに取るようになりましたよ。(裁判や状況が)わかってきたのか。だから裁判だけのことをやっているのではなくて、仲間の問題で抗議したり、仲間をオルグってサークルのようなかたちでやりましたからね。そういう点でだんだんだんわかってくれて、で署名してくれたりね。そういうのも出てきたんですよ」

「だから、坑口まで行くの。朝に行って、みんな出勤のときに『ガンバロウ』やビラ配るの。そうすると、管理職が来て「取るな」「ここは会社の場所だから駄目だ」とか言ってるね。「ふざけんじゃない。これは権利だ」とか言ってるね。突っぱねてやりました」

聞き手：『ガンバロウ』を渡したら、その横に『ガンバロウ』を捨てなさいという箱が置いてあったとか？

「本山の連中は、あんまり捨てていくっていう人はいなかったんじゃないかな。みんな持って行ってね。「がんばれよ」とかね。それで配った後に支部に行って、支部でお茶飲んだりしてね。(組合の)偉い連中は「早く帰れ」と言っていたけれども、俺らは「馬鹿野郎、俺らはまだ組合員なんだ」と言ってるね、いろいろなことを話したりしてきましたね。俺らは首切られたって、裁判をやっているのだから、ここの人間なんだっていうところだね、意思表示をして、本当に会社と労働者とながっているんだよということを見せていたいというのね。みんなが帰ってくる頃は必ず坑口で話

したりしてね」

組合があてにできず、個人で会社に立ち向かわざるを得なくなりました。勇退勧告があった翌日、事実をみんなに知らせようとすぐにガリ切りし『ガンバロウ』第一号が出たのです。裁判の最初はマスコミも注目し、新聞記事や報道もありました。しかしそれ以降は自分たちから情宣しなければ、不当に首を切られようとしていること自体も忘れ去られてしまうでしょう。だからこそ自分たちの裁判経過を報告するとともに銅山で起こる様々な問題も取り上げ、働く仲間とともに「ガンバロウ」と、朝早くから坑口に立ち、『ガンバロウ』を配ったのです。

『ガンバロウ』を配り始めると、「ビラ紙屑はこの中へ」と書かれた箱が会社の門のところに置かれました。でも誰もビラを捨てませんでした。最初、ビラをとらなかった仲間たちも、裁判の経過がわかるようになり、理不尽な解雇であることがわかると、様子が変わってきたのです。

ビラ配りを制止しようとする会社側のやりとりなど彼らの日々の運動の姿や熱が語りから伝わってきます。法廷での裁判も重要ですが、なによりも『ガンバロウ』作りやそれを配る現実のなかにこそ、労働運動の日常の深さが象徴されていることを感じました。

さまざま嫌がらせや切り崩しを受ける

彼らが裁判という手段で会社と対抗しようとするとき、会社側はさまざまな嫌がらせや彼らの切り崩しをしていきました。今より給料がいい職場を紹介するから裁判をやめろとか、親戚を脅して、身内から裁判をやめるよう説得させたりとか、まさに「あめと鞭」であり、硬軟相混ぜた手段が使われたことがわかります。会社を守るために、労働者の暮らしに圧力をかけていくという現実。それは足尾だけでなく当時も今も、日本のいたるところでみられるものでしょう。多分それくらいはや



るだろうなと思ひながら、同時に、それを笑いながら軽妙に語る彼らの言葉の後ろに息づいている怒りや呆れを感じていました。

「解雇されたのが二〇人くらいかな。そのなかで裁判闘争をやったのが七人ということ。一〇人くらいでやる予定だったのが、一人減り、二人減りでね。会社の圧力というのも相当強かったんですよ。……元労働組合の偉い人が圧力をかけてきたりとか」

「切り崩しというのはすごかったですよね。親戚の義理のおじさんになるんだけど、「あんたのこと首にするよ」というくらいまで。（おじさんが）「お前、裁判やったって大変だぞ、やめろや」って言うてくるようなね。だから「縁を切ったって言うてこいよ」と言っただけです。（Bとは）縁を切ったから関係ないよ、と言えよ」と言ったりね」

「私に直接来たんじゃない、私が信頼している職場の人がいて、彼はS課長と仲が良かったの。その人が「こういう職場があるから」と私のところへ来て、「裁判をやめろ」というようなことはありました。月給五万円だったの。そこを斡旋するからと。当時は坑内で一日働いて、一か月働いて三万六、七千円でした。Aさんあたりにもそんなような話があつて。で、何て言うんですかね、いくらかふらついているような人に対しては、高圧的に社宅を出ろと言ったり、攻撃をかけてくるような感じとか。……そうですね、それとやっぱり、奥さんの方から切り崩しをしていくってね」

生活にも不当解雇の影響が直撃しました。チケット制にして共同風呂から閉め出されたことが印象深く誰からも語られました。それまでそのような制度はなく、社宅にある共同風呂には自由に入

れたのです。風呂へ入ること。それは身体の汚れを落とし、疲れを癒し、明日への活力をつけるという日々の暮らしでもっとも基本で重要な営みともいえるでしょう。解雇したのだから社宅から出るという指示もあったのです。裁判をさせないために、日常の暮らしにまで土足で踏み込み、彼らの生活する権利を侵害しようとする権力の姿がそこに象徴されています。

ただ興味深かったのは、こうした権力に対して、彼らと同じ場で暮らす人々が自分の判断で認めようとしなかったり、彼らとどう付き合っていけばいいか、最初はためらいをみせながらも、心ではずっと支援していたことです。

「社宅を出ろとは言われたんです。それでね交渉したんです。そんなことはまかり通らない、我々には居住権があると。それで会社もそのままになっちゃったんじゃないかな。（聞き手…お風呂も嫌がらせがあったと聞きましたが）ええ、チケット制をやりました。でも券がなくても風呂へは入れました。（共同浴場の）番をしている人たちがそのまま（会社の指示を）無視してやってたということです。券があったことは間違いないです。だけれども、労働者がそこまで会社の立場に立って嫌がらせはしていませんでしたね」

「風呂に入っていくでしょ、そうすると皆が下を向いてサーッと風呂から出ちゃうの。俺としゃべると、話をしたというんで、誰かに言われるんじゃないかと。ある人が私としゃべっていると、別の人がそれを会社に言うんじゃないかって。みんな猜疑心になっちゃうの。そういう組合潰しというか、団結を潰すようなことが平然と行われていたんです」

「我々が解雇されてから、今度はお風呂の券を作るようになったんです。社宅の券。結局私たち

が入らないように券制度をつくった。月別になっていて、お風呂場の窓口に人がいるんですよ。その人が(券に)判子を押すんですよ。解雇されてしまったから券は配当されないので。子ども券もないんですよ。でも、子どもにはそんな関係ないがね。そうすると、その人はいいい人でね、誰かが券を忘れたとするでしょ。それをわざと「くれや」って言ってもらって、うちの子どもの名前を書き換えて、子どもに渡したの。そういうふうに守ってくれた人もいるわけ」

「聞き手：社宅に住んでいる周りの人はどうでしたか？」やっぱり、今まで近い人は皆、離れていったですよ。あんまり近くない人で労働組合の話をよく聞いてくれた人なんかは、陰ながら応援してくれたらね。うんと近かった人は逃げちゃったり。それとあとは、助けてくれたり。ジャガイモが採れたから持っていけやとかね。「もろこしを茹でたから持っていけや」なんてね。……あとは社宅によってもうんと違うんですよ。俺がいた所は精錬所といって、精錬所の社宅で愛宕下という所なんですけれども、そこは案外、会社側の人が多いんですよ。会社側というよりも、(社宅に入れたら)「はいはい」というようなね。で、坑内関係というのは反骨が強いので、「ふざけんな」という感じで。……だから、三養会に行っても、女房らなんかはかわいそうでしたよね、白い目で見られるというようですね」

### プール制という工夫をして乗り切る

彼ら男たちは不当解雇に正面から立ち向かい闘ったことについて、自分たちは正しいことをやってきたんだと、意気揚々と、生き生きと楽しそうに語ってくれます。ただ気になるのは解雇され収入が途絶えるなかで、裁判をしていた間、どのように暮らしていたのかということでした。どうしても誰しも脱落することなく裁判を進めることができるでしょうか。彼らはみんなで相談し、家族が

一緒になることが大事だと考え、家族会とプール制という工夫を考え実践していくのです。

「「プール制をやろう」ということで、やっぱり家族が一緒にしないと、食べていかないと、家族や子どもがいたりするとね、ちようどね、子どもが小さかったからね。……みんなプールです。働いた賃金も全部一切合切、お金は財政担当が管理する。「あんたのところは何人家族だから」という風に。それをみんなで決めてね。一人いくらかなんて。それと親がいるうちといないうちでは違うからね。親は働いていないから。そういうことで「一か月、お前のところはいくら、お前のところはいくら」という感じでね、生活費を出していく感じで。仕事はどうするんだということ、労働担当が、あんたらは、どこ、「俺はこっちの方が良い」とかね。「土方仕事の方が良い、山仕事の方が良い」って、そういうようなことで、仕事にいったんだよね」

「(働いて)得た金を全部集めるんですよ。家族構成で分けるんです。今の会計みたいに伝票を打って、親にはいくらか、家族構成でいくらか、それによって賃金が決まったんですよ。……働いた人のお金を集めて(わけた)」

当時足尾だけでなく日本各地で労働運動は盛んでした。合理化による不当解雇の裁判闘争は行われていたのです。彼らは各地の実践を参考にして自らの暮らしと闘いを進めていったのです。いただいた資料の中に、当時の「伝票」がありました、個人的内容があるのでコピーは載せませんが、昭和四十六年一月分でした。本人給、妻、家族何名、手当の欄があり、決められた額が記入されています。そこから同盟費、生協、電気料、貸付金が差引かれ、家族ごとに割り振られる月額が一番下の欄に書かれていたのです。

「子どもが生まれたばっかしだったし。女房もショックは大きいですよ。母乳が出なくなっちゃって。ミルクを買わなくちゃいけないから、ミルク代を出してくれたり、そういう配慮はしてくれただすよね。だから別に不満もなかったし。着るものもね、皆でお下がりをくれたりしてね。だから着物も買わないですんだし。本当は最低限の生活だったんですけども、不満はなかったんですよ」

「厳しい。子どもが可愛いそうですよ。ボーナスもらう時期になると何買ってもらったって、子ども同士だから言いますよね。けれども俺らの子どもたちはそういうことがないでしょ。ボーナスがないんだから。一か月の給料もね、七人で闘っていたけれども、五人しか働かなかったときとか、三人しか働かなかったときとか、ほかの人たちよりも（生活費の額が）低いですよ。だから生活は相だね（厳しかった）。だけれども、ひもじい思いをさせないということふうなことで」

「正常で働いていた時の金額の三分の一以下。だからものすごく参っちゃいますよね。家内もいて、子どもも長女が生まれたばかりだったものですから。町に働きに、両親がいましたから。反物を売ったりしたんですよ。そり引きもやりましたし、ダンプの運転もしました、いろんなことをやりました」

働いて得た賃金を家族の事情に合わせて配分し、暮らしを切り切っていた「ブル制」という工夫。厳しさの中でそれぞれの家族が協力してわちあう人間的な厚みに裏打ちされた理性的で醒めた、見事な実践だと言えるのではないだろうか。

#### 裁判が進むにつれて周囲の反応もかわっていく

裁判についてもここではまとめきれないくらい、彼らは多く語り、たくさん資料をいただきました。当時重大な社会問題や冤罪事件を扱った自由法曹団から著名な弁護士や若手弁護士たちが担当してくれたのです。彼らが毎回払った弁護士料は足尾に来る旅費にも足りなかったといいます。それでも弁護士さんたちは手弁当でやってきました。慣れない陳述書をどのように書いたらいいのかなど、自宅で裁判をどう進めるのかを相談する彼ら。彼らは慣れていたのですが、弁護士さんたちは南京虫に噛まれることはまいていたようです。他の労働者の陳述書も数多く見せていただきました。彼らが普段仕事などさぼっていないことや正当な組合活動、労働運動をして、他の労働者からも人間的な信頼を得ていたことなど、いかに解雇事由が不当で、恣意的で、事実にもそぐわないものであるのかを例証する内容でした。これらはすべて裁判の証拠として出されたのです。

公判は月一回のペースでありました。宇都宮地裁で行われ、公判内容がすぐに『ガンバロウ』で情宣されていきます。会社のさまざまな圧力の中で、多くの仲間が支援し、陳述書を書いてくれたと思います。

当時足尾の街では、古河が一番だという空気があったのです。だからこそ彼らが裁判を起こしたこと自体驚きだっただろうし、否定的で悲観的な雰囲気もあったでしょう。しかし、公判で会社側の証言がでてくるあたりから、雰囲気が変わっていったといえます。周囲の人々も、実際のところ、どのような理由で解雇されたのかがわかるようになり、その不当性を理解し始めたのです。

「まさか会社は裁判するなどとは思っていなかったでしょう。これまで不当行為だろうというのは何回もあったんですね、でも裁判にかけたということはないんですよ。……いわゆる街の雰



困気として、一番偉いのは鉦業所だというわけですから。町長はその次だから。そういうような雰囲気でしたから、だから裁判を起こす者もなかったし、裁判やつてもすんなり会社が勝つだろうというような話だったから。裁判に勝ったって、大騒ぎだったですからね、会社を負かしたというね」

「そうですね。裁判で会社の証言が出てくるわけですよ。いわゆる解雇理由が出てくるわけですよ。そうすると、その理由をそっくりそのまま職場の人間に伝えるようにして、組合が何にも助けてくれないんだということを書いてね、職場に配ってね。「ひでえなあ」ということになってくるわけですよ。……真の解雇理由を会社が出してきたのは、みんな嘘だというようなものばかりで職場の皆も「なんだ」という感じで、それから真の輪というのが、グワッと広がっていききましたね」

「だから、だいたいね、裁判が始まって、そうだね四、五年たってね、だいたい筋がわかってきたんで。ある人が言っていたのは「ただ、なんて言っているのかわからなかった」って。嫌で避けたのではない。激励していいのか、慰めの言葉を言っているのかわからないので、私は避けていた、かわして避けていったんだっていう話でね。ちょっと救われたけれどもね。最初は腹が立ったよ」

裁判の中身も興味深かったのですが、法廷で昼ご飯を食べたという話に思わず笑ってしまいました。法廷内で飲食などとはできないでしょう。今も昔もそうであるはずです。でも、彼らは、うまいうまいと言いながら、傍聴する人々と一緒にキノコ汁を食べたのです。担当した裁判官の裁量というか力量というか、当時の地裁のおおらかな様子が見えるようです。

「いやあ豪華だったですよ。うちの親父さんがキノコを採る名人だったものですから、ちょうど

キノコの時期なんかはね、Aさんの母親が魔法瓶にキノコ汁をいっぱい持ってきて、それを法廷の中で分けながらお昼ご飯をしたりしてね、ハハハ、いやあ、うまいうまいと言いながら食べたんですけどね」

「常時やりましたよ。でも、それはうまくないということで、いつ頃だったかな、裁判所の事務長に交渉しようということで、俺と弁護士二人で話をして、「法廷ではまずい」と。「じゃあ、どこでやるのか、廊下でやるのか」と言ったら、調停室というのがありますよね。離婚とかそういうようなことを調停する部屋です。そのような部屋なら良いのではないですかということで。でも俺ら（の裁判）が終わってから、そこもダメになったようですね」

#### なぜ裁判をしたのか

裁判は宇都宮地裁の一審で彼らが完全勝訴しました。その後会社は控訴し、東京高裁で和解が成立したのです。控訴の時点では、足尾銅山は閉山しており、労働者としての地位保全が確認されたうえでの実質的勝訴としての和解が打診されたようです。

公判の期間は、控訴も含め七年間でした。やはり日本の裁判は長いと思います。彼らは、なぜ裁判という手段を選んだのでしょうか。

「危機感というよりも、名誉回復ですよ。だって、会社は不良鉦員だから首を切ったのだと。けれども、俺らは不良鉦員ではないわけだから。一生懸命やっていて、会社も休まないわけだし。……七人分全部の名誉回復ですよ」

「当時、合理化というのがあって、解雇の理由は欠勤が多いとか、仕事ができない人とか、会社が必要としない人という、そういうことだったんですね。組合大会の中でも委員長がそういうようなことで、全体を納得させた。ところが実際はふたを開けてみると、特定の活動家の首を切ったということなんですよ。……「なんだ、こんなことで組合は嘘ついた」と、会社に対する怒りというよりも、組合に対する怒りの方が強かったですね。……当時は労働組合の人たちの裁判闘争が各地であつたんですね。そういう時代的な背景もあって「じゃあ、俺らも裁判をやろう」ということになったんです。単純な、労働者としてひとつ意地をみせてやるというような、そんなものはありませんでしたね」

「どうしてああいうふうに気楽に聞えたのかなという感じですよ。全国的にそういうような闘いがあつた。じゃあ我々も闘っていこうという、そういうようなことがものすごくあつたのかなと。あと一つは会社に対して、俺らはひるまないぞという、そういうような意地ですよ」

人間としての名誉回復。労働者としての意地。不当な権力に立ち向かった理由として彼らが語る言葉です。ただ私は彼らから話をうかがってきて、ある表情が心に突き刺さっています。社宅にうかがい、不当解雇の裁判について話を聞きたいと言ったとき、ある奥さんが私たちに示した何とも言えない表情です。語りたくないという否定ではないのです。なぜそのようなことを聞くのですか。聞いてどうするのですか。話を聞いたとして、当時の暮らして自分たちが体験した苦痛や苦悩、怒りや悲しみ、そして喜びなど、本当にわかるのですか。そんなことを訴えるような無言の表情なのです。

名誉や意地を貫き通すために闘う。ただその闘いは、法廷場面や集会だけではありません。不当

な理由で壊された日常を再建し、いかに生きていくのか。妻や子どもと彼らがいかに暮らしてきたのか。その日常にこそ闘いがあつたのだと表情が訴えていると感じました。日常での闘いを聞き取るのは、まだまだこれからなのです。

## コラム

## 残していきたい足尾の記憶

中山貴仁

地域おこし協力隊として足尾に来て約二年が経過しました。ここまでたくさんの方々に助けられ、協力隊として活動することができました。私は足尾の歴史を地域住民の方から聞き取って、冊子としてまとめるという活動をしています。聞き取りをしていると個人の記憶を残すことの重要性を感じます。足尾には様々な産業遺産があります。その多くは、当時では最先端の建造物で、足尾にヒト・モノ・カネが集中したことを示す遺構でもあります。そして、それらは大抵、「社会」や「時代」という言葉を引き合いに、大きな物語で語られます。それとは対照的に、一人の人に足尾の歴史を聞くことは個人のレベルからの視点であり、産業や社会に比べると小さなものですが、そこには「生活」や「仕事」、「人間関係」など私でも理解し易いテーマで歴史が語られます。だからこそ興味深く、足尾の歴史を知る手がかりとして残していかなければと感じます。これから、より多くの人の話を聞いて、残していけるように頑張っていきたいと思います。



キャプション

## コラム

## 足尾の魅力を伝える

長澤美佳

地域おこし協力隊として足尾に着任し、自然や動物を身近に感じることで暮らしをとるも贅沢なことだと思っています。

これまで、地域の方から足尾についてたくさんのお話を聞かせていただきました。銅山の歴史のみならず、人々の暮らしや思い、生きる知恵、人情など、書籍や資料では知ることのできない貴重なお話ばかりです。そして、何よりもお話をして下さる方の生き生きとした表情こそが、その時代時代の足尾の歴史を物語っているのだと思います。

私は多くの方に、「銅山＝足尾」だけではなく、違った角度からの足尾の魅力を伝えていきたいという思いから、野生動物の写真展や絶滅寸前の在来野菜の栽培に取り組んでいます。そして、これらの活動ができるのは地域の方をはじめたくさんの方々のご理解とご協力のおかげであり、いつも温かく、親身になって相談にのって下さることを心から感謝しています。今後も、頑張っ



キャプション



国鉄足尾線の廃線に対抗した特別乗車運動 中村哲也



## 1 はじめに

「足尾町には、電車が走っている」

このように言ってしまうと、それはごく当たり前のことで「電車が走っていることぐらい当然だろう」と思われるかも知れません。ですが、足尾町に電車が「いま、ここ」で走っている事実の裏側に、廃線の危機に対抗した住民運動の歴史があることをとだけの人気が気づいているのでしょうか。

足尾町で暮らす人々にとって生活を脅かした歴史的な出来事には、足尾銅山の閉山と国鉄足尾線（以下、足尾線）の廃線問題がありました。足尾銅山の閉山が主に雇用や地域産業の衰退といった経済的な問題であるのに対し、足尾線の廃線問題は町民の生活の足に関する問題です。足尾町は「陸の孤島」と表現されるほど周りは山々に囲まれ、当時、車社会が浸透してきたとはいえ学生の通学や日常的な買い物などには鉄道という移動手段は地域生活に欠かせないものでした。この足尾線の廃線を巡る住民運動は、町の交通手段がなくなるかもしれないという危機感を抱いた一部の町民らによって特別乗車運動（さくら乗車）を行ったところから始まります。足尾線を残すための住民運動は約二年半の間、継続的かつ連続的に行われ、次第にその活動は一部の町民の活動から町全体の活動として取り組まれるようになっていきます。

この取り組みについて、私は次のことに興味を持ちました。①なぜ足尾線の廃線を阻止するための活動が一部の町民の活動から町全体の取り組みへと広がったのか。そして、②なぜ特別乗車運動が長い期間の間、続けてこられたのか。このことに着目しながら町民への聞き取りや資料を渉猟していくと、町民の足尾線に対する価値観の変化が浮かびあがりました。

そこで本章は、足尾線の廃線問題に対する特別乗車運動の歴史を取り扱いながら、町民と足尾線

の関係性を描写したいと思います。

## 2 足尾線の廃線問題の概要

足尾線の歴史は古く、その歴史は大正元年一二月三十一日、足尾銅山から採掘された銅を搬出する交通手段として同線の前身である「足尾鉄道株式会社」として、私鉄から始まりました。その後、私鉄であった足尾鉄道は大正七年に国が重要路線として買い上げ、日本国有鉄道（以下、国鉄）足尾線となり、渡良瀬川沿いに群馬県の桐生駅から足尾本山駅までの四六kmを沿線住民の生活の足として、さらには産業物資輸送の足として走り続けてきました。

この足尾線の廃線に関する問題は、昭和五五年一二月二七日に当時、国鉄によって運営されていた特定地方交通線、いわゆる赤字ローカル線の廃止促進が盛りこまれた「日本国有鉄道経営再建促進特別措置法」が施行されたことに始まります。

国鉄は第一次廃止対象路線の選定承認申請を昭和五六年六月に運輸省に申請しました。足尾線は第一の廃止承認申請は免れたものの、乗車人数が減少している現状に廃線の危機を感じた一部の町民らによって、同年七月から独自に三〇人ほどの特別乗車（さくら乗車）を開始します。町民のこうした地道な活動が行われる最中、昭和五七年一月に国鉄が承認申請した第二次廃止対象路線三三線の対象路線に足尾線が含まれると、廃線の撤廃に向けて一、一〇〇名の町民を集めた大会が開かれました。町は、この大会で採択された決議書をもって運輸省や国鉄に陳情に行き足尾線の存続を訴え続けました。この陳情により、一時は廃線が延期されたものの、昭和五九年六月、当時の運輸大臣が足尾線を含む第二次廃止対象路線三三線のうち二七路線の選定を承認したことにより、足尾線の廃線が現実のものとして歩み寄ってきました。そこで町は、廃線を阻止する一縷の望みをかけて廃止除外基準の一つである「ラッシュ時ラッシュ区間千人以上乗車」に着目し、昭和五九年七月か

ら昭和六二年一月までの期間、町全体で積極的な特別乗車運動を開始していくようになります。

この特別乗車運動によって廃止除外基準の一つである「ラッシュ時ラッシュ区間千人以上乗車」が達成され続けると、半年に一回、足尾線の廃線を具体的に協議する「足尾線特定地方交通線対策協議会」は四度（約二年間）に渡って審議の中断を余儀なくされています。しかし、このまま活動を続けられれば足尾線の廃線は免れるかもしれないという雰囲気は漂いはじめていた最中、昭和六一年一月二八日、国鉄の分割民営化を決める「国鉄関連八法案」が可決され、足尾線存続についての住民運動も転換を余儀なくされていきます。そして、約二年半もの間続けられてきた特別乗車運動は国の一方的な廃線を阻止し、所期の目的を達成したとして昭和六二年一月一四日に終結します。そして、現在は、一部路線が縮小しながらも町民や観光客に愛される私鉄として走り続けています。

### 3 町民の特別乗車運動の取り組みと町民・行政・企業との連携

#### 組織的な活動と町民相互のつながり

生まれてから足尾町で生活が続けている七〇代の男性は、特別乗車運動について次のように話しています。

「特別乗車は、当然俺もやったよ。（組内で）当番を決めて、月に二、三回ぐらい乗ってたかな。乗車数としてカウントされる時間と区間が決まっていたから、特別乗車をする日は会社が始まる時間に間に合わなくて、有給休暇をとっていたよ。会社も活動に理解してくれていたから、何か言われるってことはなかったね」

この男性の言葉からは、足尾線の廃線を阻止するための運動が企業をも巻き込んだ取り組みであったことが窺えます。そして、「当番を決めて」という男性の言葉の背景を追っていくとこの活動が組織的に行われていた事実が浮かびあがります。

特別乗車運動が始まった当初、足尾線に乗る・乗らないは個人の判断に委ねられていました。その意味で活動は不安定です。ですが、廃線除外基準である「ラッシュ時ラッシュ区間千人以上乗車」という一つの目標が定められたことで「不安定な活動」が目標を達成するための「計画的な活動」に変わっていきました。その中で、町民の特別乗車は「組内」（くみうち）という地縁組織のグループ単位で行われるようになります。組内の中で当番表をつくり、誰々が何日の何時にとどこからどこまで乗車するかを決めていました。この組内を一つの単位として組織的に乗車運動を進めていったことが一人ひとりの活動負担の軽減に繋がり、さらに当番の人が何らかの事情で乗車できなくなれば、組内の別な人が当番の変わりに乗車するなど町民同士が互いに協力しながら活動が行われていました。

この活動に参加していた男性は次のように話しています。

「みんなで活動していたから、自分だけやらないという気持ちにはならなかったよ。そりゃあ、大変なときもあったけどさ。周りの人と協力してやってきたからさ」

特別乗車をするのは月に数回とはいえ、それが約二年半もの間継続していけば少なからず活動の負担感が生じてきます。実際に聞き取りのなかでは大変さを語る声もありました。ですが、町民はその活動をやめるという選択肢にまではいき着かない。上記の言葉には、その背景にある一つの要因として町民同士のつながりの深さを物語っているように思います。



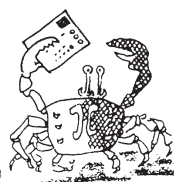
(11) 昭和60年6月10日

広報あしお

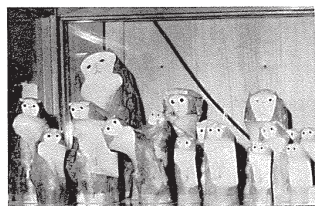
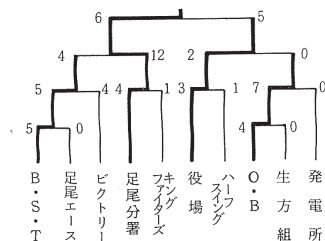
第308号

# ひろば

みなさんのページです  
何でもけっこうです  
話題をお寄せください



優勝した「足尾分署チーム」



功績章

大野重郎氏

足尾町消防団長であり、大野重郎氏(松原)が、永年の功労を認められ、去る五月二十一日、栃木県知事から功績章を受章いたしました。

功績賞、受賞  
おめでとーございます



製作中の栗原さん

7月1日から登記関係手数料の納付は「収入印紙」から「登記印紙」へ

昭和六十年七月一日から登記所の経理が特別会計によって行われることになりましたので、これに伴い、不動産登記簿や商業・法人登記簿等の謄抄本交付、閲覧、証明等の申請に要する手数料は、七月一日からは、従来のように「収入印紙」ではなく、「登記印紙」によって納めていただくこととなります。

この登記印紙は、七月一日から全国の集配郵便局や登記所最寄りの郵便局・印紙売りさばき所で販売されます。

新たに販売される登記印紙は、百円、二百円、四百円、千円、五千円の五種類です。

この登記印紙は、登記簿の謄抄本等の手数料を納付する場合だけに使用するものであり、売買や相続等による所有権移転、抵当権設定、会社の設立、取締役等の変更等の登記の申請の際納付する登録免許税は、これまでどおり収入印紙で納付していただきます。

なお、登記簿の謄抄本、閲覧、証明の手数料は、七月一日から改定されます。

詳細は、最寄りの出張所へお問い合わせください。

第308号

広報あしお

昭和60年6月10日(2)

## みんなで乗ろう足尾線 !!

間藤駅・桐生駅間 44.1 km

去る四月五日に開催された、第一回足尾線特定地方交通線対策協議会会議において決定した「ラッシュ時ラッシュ区間」実施調査は四月から六月までの三か月間実施されることになり、四月八日を調査開始日として、土曜・日曜・祝祭日を除く毎日、カウントしていましたが、国鉄足尾線存続期成同盟会の調査により、足尾町民をはじめとして沿線市町村の方々の乗車協力の結果、下表のとおり四月平均乗車一、〇九〇人、五月平均乗車一、二〇四人と両月とも一、〇〇人以上の乗車を達成いたしました。

この一、〇〇人以上乗車の実績で、二回目となる対策協議会では六か月間の会議中断にもちこめる目処がつかしました。

六月中も、存続運動の目標である「ラッシュ時ラッシュ区間一、〇〇〇人クリア」の達成と定着化に向け、ご協力をお願いいたします。

国鉄足尾線存続期成同盟会調査による(国鉄足尾線ラッシュ時ラッシュ区間乗車数調査一覧表)

4月					5月				
調査日	上り1番	上り2番	計	備考	調査日	上り1番	上り2番	計	備考
8月	349	665	1,014	85	1水	635	713	1,348	
9火	279	650	929		2木	427	750	1,177	
10水	219	744	963	37	7火	427	734	1,161	
11木	301	818	1,119	46	8水	416	801	1,217	43
12金	359	727	1,086	39	9木	413	909	1,322	
15月	327	774	1,101		10金	326	731	1,057	
16火	344	780	1,124		13月	401	726	1,127	
17水	473	773	1,246		14火	438	730	1,168	
18木	343	827	1,170	80	15水	441	724	1,165	
19金	338	822	1,160		16木	442	723	1,165	
22月	340	794	1,134		17金	421	812	1,233	
23火	288	730	1,018		20月	377	766	1,143	
24水	340	732	1,072		21火	421	727	1,148	
25木	272	753	1,025		22水	425	743	1,168	
26金	335	790	1,125		23木	658	700	1,358	
30火	364	798	1,162		24金	367	740	1,107	
月平均	329	761	1,090		27月	392	915	1,307	51
					28火	408	746	1,154	
					29水	521	816	1,337	
					30木	432	709	1,141	
					31金	383	909	1,292	
					月平均	436	768	1,204	

(注)

備考欄の数字は、各駅調査日の足尾各駅からの乗車数(このほかに、特別乗車100人が、毎日乗車)。

沿線市町村の乗車運動実る

(4月平均乗車一、〇九〇人  
5月平均乗車一、二〇四人(同盟会調べ))

対策協議会の会議中断も目前に!

6月11日から  
通洞駅無人化

通洞駅が6月11日から、駅職員のいない無人駅となります。切符(普通乗車券・特急券・急行券)は列車内でお買い求めください。なお、定期券・回数券は足尾駅でお買い求めください。

毎月5のつく日は「国鉄足尾線啓蒙の日」です。

#### 町民・行政・企業の連携・協力体制

特別乗車運動には町の役割も大きく働いています。町は積極的に国や県と交渉し足尾線の存続を訴えてきました。そして町役場の職員も毎日交代で特別乗車運動に参加する傍ら、町長の業務命令により職員の公務出張は足尾線を利用していました。さらに、企業も従業員の特別乗車運動に理解を示すだけでなく、従業員の出張には足尾線の利用を奨励するなど活動を積極的に応援、協力をしていたそうです。

町民が特別乗車運動を継続できたのには、町民一人ひとりの意思や町民同士の関係性もさることながら、町民・行政・企業が一体的に連携・協力しながら進めてきたことが大きいように感じます。この三者の連携・協力体制が特別乗車運動を町全体の活動として位置づけ、そのことが町民の運動を後押ししていたと考えられます。

でも、足尾町に限らず、時には対立する住民と企業、住民と行政といった利害関係の異なる者同士がなぜ、足尾町では協力する関係として結びつき、町全体の運動としての位置づけが築かれたのでしょうか。そこには、それぞれの組織が持つ目的が「足尾線の存続」という一つ事象によって集約されていることが影響していたと考えられます。足尾線は町民が生活路線として利用しているため、車を運転できない学生や高齢者などを中心に廃線になると生活に困ってしまう方が出てきます。企業も産業資源を輸送する産業路線として活用していたことから廃線になると移送手段の変更を余儀なくされてしまう。そして行政は、足尾線が廃線することは第二の閉山として地域産業の衰退を招き、さらには生活が不便になることで町民が町を離れ、人口減少の加速化が危惧される。つまり、町民、行政、企業のそれぞれに持つ目的が「足尾線の存続」というビジョンに集約化・統合化され、

共通の目的を達成するために連携・協働関係が促進され、町全体の活動として広がりを見せたと考えられます。

#### 4 町民が特別乗車運動を継続できた背景

##### 特別乗車運動に対する町民のモチベーション

歴史的に見れば、地域におこる何らかの危機や変化に対抗する住民運動は、全国各地の様々なところで散見されます。ですが、その運動が町全体の取り組みとして継続的かつ連続性をもって長期間続けられてきたケースとなるとそう多くはありません。それは住民運動を始めた頃のような隆々とした住民のモチベーションが時間の経過とともに減退していくからです。そう考えると、なぜ足尾線の廃線に対する特別乗車運動では約二年半の間、町民の活動のモチベーションを維持することができたのでしょうか。このことに着目していくと町民が特別乗車運動の成果を目に見える形で把握、感じていたことが大きく影響していたと考えられます。

町民は特別乗車運動による乗客数の累計や廃止除外基準であるラッシュ時ラッシュ区間千人乗車が達成され続けたことによって、半年に一回、足尾線の廃線を具体的に審議する「足尾線特定地方交通線対策協議会」が四度に渡って審議を中断させている事実を把握していました。当時、この活動に参加していた男性は次のように話しています。

「あの活動（特別乗車運動）は、大変だったけど足尾町に鉄道がなくなると困る人も多いから、自分の番（その日、乗車する当番）じゃなくてもできるだけ足尾線を利用していたよ。最初は、活動をしたところで足尾線の廃線は変わらないんじゃないかって思う時もあったけど、廃線の話し合いが延期に

なったりすると、「もしかすると」っていう思いにはなったよね。自分達の行動で足尾線が残せるかもってあの時は思ったよ」(内筆者補足)

この言葉からは、町民が特別乗車運動に関する情報に接する機会があり、そのことによって足尾線の廃止を阻止できる可能性を抱いていたことがわかります。つまり、活動とそれに対する成果の積み重ねの体験が、町民の内面に可能性や希望を抱かせてきたことで特別乗車運動に対するモチベーションが維持されていたのではないでしょう。

### 活動の成果を伝えてきた町の広報

活動と成果の因果関係が町民にフィードバックされていたことが、町民の活動に対するモチベーションに影響を与えていたとすれば、活動の結果や途中経過が町民に伝わらなければこの現象は起きません。では、どうやって町民は情報を入手していたのでしょうか。この情報伝達の役割を果たしていたのが町役場の広報誌でした。町役場が毎月発行する広報誌(広報あしお)には、昭和五十六年六月(第二五〇号)から廃線撤廃運動が終結する昭和六十二年四月(第三三〇号)までの間、毎号で足尾線の廃線に関する特集記事が掲載されていました。そこでは乗車数の状況や国や行政の動きが逐一掲載され、町民に向けて定期的に情報発信と特別乗車運動の推進を呼びかけていました。新聞や雑誌のように購読する一部の人を対象にした情報発信ではなく、町の広報という全町民に向けて発信、配布する情報媒体を活用したことで、町民は自然と足尾線の廃線問題に関する情報と接する機会を持っていました。つまり町の広報誌が自分達の活動がどのような成果や結果に繋がっているのか把握することを可能にし、特別乗車運動に対する町民のモチベーションを高め、維持するために大きな役

割をもっていたと考えられます。

### 5 町民の足尾線に対する価値の変化

運動を始めた当初、足尾線廃線に対する住民運動の目的は移動手段の確保でした。ですが活動を継続していくうちに鉄道の車窓から見える四季折々の町の景色や町の中を鉄道が音を鳴らして走る姿に愛着を感じるなど、町民の内面に足尾線が単なる移動手段との認識から町に溶け込む魅力の一つとしての思いを抱くようになります。このことは直接、特別乗車運動をしていた大人達ばかりではありません。町で生活する子ども達もその思いは同じで、当時、小学校六年生の女子児童は足尾線の存続に向けた啓発作文の中で次のように書いています。

「(中略)お父さんやお母さんは、車を使っているので、あまり足尾線を利用していない。お父さんたちにもたくさん乗ってほしいと思う。でも、お父さんも足尾線のことを考えていないわけではない。足尾線の写真をたくさんとっているからだ。足尾線沿線の美しい背景をバックに次々と自動車を書し出す。お父さんの撮った足尾線の写真がカレンダーになって、町中にはあってある。お父さんは、ニコニコしながら「足尾線を残すためにとらなくちゃな。」といった。私は足尾線のまわりの景色は本当にすばらしいと思う。だから、本当に親しまれるんだと思う」(『広報あしお縮小版』第三一〇号 六六七頁)

また、同じく町内の中学校に通う女子生徒は次のように書いています。

「『乗って残そう足尾線』、『みんなで乗ろう足尾線』、という言葉は小さい小さい子供でも知って



いるほど、私たち足尾に住む人には耳慣れた言葉になっている。(中略)私は以前、足尾線に乗ると「足尾線は遅いからイヤだなあ。」とよく言っていた。だけど、今は足尾線はいいなあって調子のいいことを言ってしまう。本当にこの頃そう思うのだ、それは景色だ。親せきの人は私の家に来た時、「足尾の川の水は、どうして透き通っているの?」と不思議そうに言っていた。私は川の水は、どこでも足尾と同じだと思っていたから、こちらの方が、そんなに不思議がるのが変だと思ったものだ。でも、たまに出かけると、どこへ行っても足尾みたいな所はない事に気付いた。(中略)日本のどこかに、乗ってみたら水がきれいな川を「ヨイショ、ヨイショ」と登っていくと、景色がとってもきれいな、あまりもうからない国鉄があってもいいじゃないの、なんてつくづく思う。今何でも、せかせかしているから、ノンビリ、ゆっくりとした足尾線を残してもらいたいと思う(後略)

〔広報あしお縮小版〕第三一五号六八五頁

この言葉からは町民の中で移動手段の一つとして考えられてきた足尾線に対する認識が変わってきたことがえます。それは特別乗車運動が子どもから大人まで町全体で『足尾町に足尾線がある』ことの意義と価値を見つめ直す機会になっているように感じました。このことは、足尾線が単なる移動手段としての価値を超え、代替不可能な地域固有の魅力として独自性と固有性をもつ存在に位置づけられていったように思います。もし、足尾線が移動手段としての価値しか持たないようであれば、車社会が普及し、鉄道以外の他の移動手段が充実していくことで特別乗車運動はもっと早く収束に向かったのかもしれない。ですが、足尾線が町に欠かすことのできない魅力の一つとして町全体がその存在価値を再構築したことで、足尾線を守ることを目的とした特別乗車運動の意義と価値が高められていたように思います。

## 6 特別乗車運動の終結と課題

昭和六一年一月二八日、国鉄の分割民営化を決める「国鉄関連八法案」が参議院で可決成立し、また時期を同じくして古河鋳業(株)が鉄道輸送を陸上輸送への転換と足尾線からの完全撤退を発表すると、足尾線存在についての運動も転換を余儀なくされていきます。そして昭和六二年一月十四日、当初の目的は達成されたとして特別乗車運動の終結が宣言されます。その後、国鉄足尾線は民営として東日本旅客鉄道株式会社(現・JR東日本株式会社)が二年間の運営を引き継ぎ、そして平成元年三月二十九日からは第三セクター方式の鉄道会社として設立された『わたらせ渓谷鉄道』が路線の運行を継続し現在に至っています。(一部路線の縮小)

住民が何らかの危機や問題に直面したとき、連帯してその危機を乗り越え、問題を解決するため起こす住民運動は抵抗としての性格を帯びています。その意味では、足尾線の廃線に対峙してきた特別乗車運動は『抵抗としての住民運動』といえます。そして『抵抗としての住民運動』の目的はあくまで危機の回避、問題の解決であり、それらが達成されることで終結します。足尾線の廃線問題に対する住民運動も、鉄道の存続という事実に到達することによって終結することになりました。それは目的が移動手段の確保であっても地域の魅力を守ることであっても変わりはありません。そして足尾線の路線存在が決定すると町民の足尾線に対する関心は次第に低下していききました。このことについて、特別乗車運動に積極的に関わっていた男性は次のように話しています。

「この活動(特別乗車運動)は足尾線を残すことばかりに目がいつてしまった。なんで足尾線を残したいのか、足尾線を残してどう活用していきたいのかということまで、みんなで考え、話合いながら活動していけばよかったって今になって思うよ」(内筆者補足)

この男性の言葉からは、「足尾線を残す」ことから「足尾線を活かす」ための住民活動が芽生えなかったことがうかがえます。

足尾線と同じように廃線の危機に直面した和歌山県の貴志川線では(二〇〇三)、足尾町の動きと同じように対策協議会の立ち上げや署名運動、ノーマイカーデーによる利用促進運動など地域ぐるみで存続運動が行われていました。ただ、足尾町と異なるのは、住民の有志によって「貴志川町くらしと環境よくする会」や「貴志川線の未来をつくる会」など、貴志川線の存続を手段として沿線住民の生活をどう良くしていくのか、地域の未来にどう繋いでいくのかまでを描いて活動していました。つまり、貴志川線の廃線の危機に対する住民運動は、廃線を阻止する『抵抗としての住民運動』と貴志川線の存続を手段として町の未来像をみんなで創っていく『提案としての住民運動』を合わせ持ち、和歌山鉄道として継続されていくことが決まるとその鉄道を活かしたまちづくりが地域の中で展開されていきました。

足尾線の特別乗車運動の歴史は、「足尾線を残す」役割を果たしました。そして、現在、国鉄の後を引き継いだ「わたらせ渓谷鉄道(旧足尾線)」を中心に車両のイルミネーションや、足尾銅山の観光と連携した観光事業、沿線の風光明媚な自然を堪能できるトロック列車など地域の魅力を活かした、又は引き出す様々な企画が行われています。ただ、これから未来に向けて「足尾線をどう活かしていく」のかを町民自身が考え、具体的な活動を創っていくためには、未来の足尾町を担う子ども達に特別乗車運動を続けてきた大人達の足尾線に対する『思い』を伝えていくことも大切なように思えます。きっと、その先に町民、行政、企業(わたらせ渓谷鉄道)が連携・協力した新たなまちづくりとして、「足尾線を活かす」ための新たな町民運動が生まれていくのかもしれない。

## 7 終わりに

ここまで足尾線の特別乗車運動の歴史について私が見たり、聞いたり、調べたりしてきたことを通して感じたこと、考えたことについて書いてきました。こうした記述は、別の角度から見れば違う捉え方があるのかも知れませんが、私自身の主観から「足尾線の歴史はこういうふうに見えるよ」という内面の世界を伝えることによって、これまでとはまた一味ちがう足尾町に対する視点が提供できればいいなと考えました。

“足尾町には、電車が走っている”

こうした何気ない日常風景の中にも、足尾町の歴史が存在していることを様々な方に知っていただけでも幸いです。

まさか、6年も足尾に いる ことになる とは！

私と同時期に地域おこし協力隊として活動していた、中山京さんは、退職後も足尾で暮らしながら塾や寺子屋の活動を続けています。そんな中山さんの6年間の足尾の生活を改めて振り返ります。

志村 中山さんは、地域おこし協力隊で足尾に来た直後から、プライベートでも中学生への塾を始めましたよね。その経緯はどういうものでしたっけ？

中山 私たちの前任から「足尾だとなかなか塾に行くことは難しいけれど、学校以外での勉強をして将来の準備をしたい子がいる…」という事で紹介してもらったんです。僕も、大學生の頃は家庭教師のアルバイトをしていたり、英語や中国語が得意なので役に立てればと思いました。子供達を通して足尾の方との関係が作れたり、足尾の状況や子供目線の足尾や過疎地域の特徴や良さもわかりました。それに、親御さん達が手料理の差し入れをくれたりして、逆に良いきっかけになりました。美味しい手料理に囲まれて、だいぶ体重も増えました…。

志村 新しい地域に来たばかりなのに、そうやって業務時間外も活動していてすごいと思っていました。しかも、(同僚だからこそ言わせてもらおうと)グータラな中山さんが、子供に對してのことになると、真剣に考えているのも良くわかりました。塾は発展して寺子屋にもなったり、塾は今でも続いているんですね。中山さんが「子供を相手にしたことに関わって、その成果がわかるまで期間で最低でも6年間はかかるから、それまでは足尾に「続ける」と言い出したことは、とても印象に残っています。改めて、6年目を迎えた今ほどのように感じていますか？

中山 ここだけ、少しだけお待ちください…。ここだけ、少しだけお待ちください…。ここだけ、少しだけお待ちください…。ここだけ、少しだけお待ちください…。少しだけお待ちください…。少しだけお待ちください…。少しだけお待ちください…。ここだけ、少しだけお待ちください…。





“足尾を調べる”ということ

——村上安正先生

志村春海



足尾で働いていたときに制作したという手書きの図面



ご自宅の資料の一部

私が足尾の地域おこし協力隊に入ったばかりの頃、「何から手をつけたら良いものか……」というところで、公民館図書室の本とにかく目を通していました。公民館の一角には、村上文庫という書庫があり、鍵付きの棚には、鉱山関係、労働運動関係、鉱山をテーマにした小説や詩集、発行されたものだけではなく、企業や鉱山学会が作ったパンフレットといった、足尾を多方面から知るための資料が入っていました。ラインナップから、どことなくただ事ではないような気配が……。手作りのような資料も混ざっていたり、「郷土史」「歴史」の範囲を越えるような幅広さ、そして村上文庫ってなんなのだろうか？ 足尾ってどのように研究、理解されているものなのか？ など、何もわからないながらも、足尾の深みのようなことを感じた瞬間でした。

その後、村上安正さんは、足尾のことを知るためには必ずお名前が出てくる、重要な方であることがわかりました。たとえば、今では聞くことが不可能な戦中・戦後の足尾の状況も言及している『足尾銅山労働史』や『足尾に生きた人々』。そして銅山を技術的、文化的にも理解するための辞書的な存在である、『足尾銅山史』など、丁寧に聞き取りを資料化していることが伝わる著書ばかりです。

著書の中の遠い存在だと思っていた村上先生と話ができたのは、「ごめんください、足尾のこと教えてください！」発行がきっかけでした。冊子を読んだ村上先生がお電話をくださり、その後も冊子の感想や、修正や補足のご連絡をいただきました。それから、電話や手紙で連絡を取り合うようになり、二〇一六年に初めて足尾でお会いし、葉山のご自宅でお話を伺う機会にも恵まれました。

先生のご自宅には、今までの研究活動の資料ファイル、MOデータ、戦後から続けている日記ノートの束や、ご自身で制作した坑図などが、書斎に机の下スペースから、天井までの本棚までぎっしりと保管してありました。インタビューでは、聞き取りの哲学のようなことが自然に言葉の

節々から滲み出ていて、こういう風に足尾に向き合い続けた方がいたのだなと、改めて衝撃を受けたのを覚えています。

村上先生は、古河機械金属に在職し、その期間に『足尾銅山労働史』の編集を手がけることをきっかけに聞き取り活動が始まっています。閉山時には転勤し、足尾を離れますが銅山で働いてきた立場、足尾に住んでいた方の立場でもあり、かつ工学や技術者の立場からも客観的な研究を続けられました。

村上先生からお電話やお手紙をいただく度に、先生が足尾のことを本当に想っていること、そして足尾の様々なことを議論する相手を探していることが伝わりました。具体的な鉱山の内容や議論に関しては、私では到底、村上先生のレベルに追いつくことはできませんが、先生は私たちの質問を快く受け入れてくれました。

二〇一八年に入院中の先生とお会いした際に、今だに足尾の研究で、まだやりたいテーマがほとんど出ていましたし、議論をする仲間を求めています。村上先生に、そういう仲間や環境が揃ったら、また違う先生の研究活動や、足尾理解の広がりにもなったのかもしれない。私には、その役割は担えませんでした。村上安正さんという足尾に向き合い続けてきた一人の研究者について、少しでも紹介できればと思います。

なお、村上先生の貴重な資料のうち、書籍関係は栃木県立図書館に寄贈する予定と伺っています。

二〇一六年一月二〇日に私たち（志村、好井、三浦、市ノ瀬）は村上先生のご自宅にお邪魔しながら、お話を伺いました。その時にいただいた資料の抜粋と共に、お話の内容を紹介します。

## 聞き取りのきっかけ

村上先生 就職して三年目ぐらいに、労働組合の機関紙、全国版に投書を出したことがあったんです。そして、足尾のことは何も知らないんで、勉強しようとした。それでそういうものを

総合してやっているうちに、僕のとこに回ってきた仕事で、古老の聞き書きだったんです。それが足尾銅山の思い出と資料編に入ってますよね。それをやって新聞に連載で一回ぐらいやったかな。その後、争議、鉱毒事件とシリーズでやることになって、聞いた内容を文字化し、目を通してもらい、また話を聞いて手直しをしてまとめた。聞いた

そういう能力を認められたからか、労働組合ができて一〇年目に、一〇年史をやるということになった際に、当時私はまだ二五歳だったんですけど、組合から「お前がチーフやれ」って言われて。相当きついんですけど、それも無休でやらされたんです。仕事が終わって、空いてる時間をそれに費やす。三年かかったかな。それでできたのが足尾銅山労働史。たまたまその時に都立大学にいた共産党系の方が色々教えてくれましたね。

もう一つは当時、思想の科学というのが盛んになった時代。昭和三〇年代ぐらいから雑誌を出したりした時代で、生活つづり方とかやまびこ学校とかが入ってきて、そういうものからの歴史をたどるという流れがあった。もう一つには、労働運動史を作った時には組合員が呼んでくれるにはどうしたらいいかと考えたわけです。それには歴史的確証がおけるものはおいて、取材した人の中から話を聞いて織り込んでいくということを、無茶ではあったけどやっただけです。

好井

それまでお話を聞いた人の語りを織り込んでいく「労働運動史」というのはなかったん



ですか？

村上先生

なかったです、あっても議事録ですよ。組合の議事録を集めたのが労働史だった。読んでも、面白くないし、明治の時代、大正にも労働運動はあったし。それから戦後の食糧危機の時代の問題もあって、複雑な事件が重なって、戦後に山がおかしくなってきた、なんとか立て直そうっていう体制を総合的に物事を見ないと表せないという気持ちがあった。しかも、私は鉾山の経験者で一代目ですから。そしたら、割と評判が良くてね。他の組合にも宣伝のパンフレットを作ったんですよ。

足尾に生きた人々——歴史認識

村上先生

結局、聞き取りというのは、話し手と聞き手の相互関係ですよ。それが改善していくといろんな展開が出てくるし、ほかの話が出てくるのが一番いいと思う。だから、中国人と朝鮮人の問題がだいぶあったんですよ。それで中国人の問題については下野新聞の『声の欄』で父親が捕虜の収容所の責任者をやっていた人の娘にいてね、それが僕のところに来て、聞いてきたので、教えたりしたというケースはありました。だから、そういう人たちには大事にしてやって。

もう一つは朝鮮人の問題ですけど、栃木県で足尾の朝鮮人の問題で講演した人がいるんですけど、「残虐な行為を受けて、ひどい目にあった」と言うんですよ。その人の説だと、「六キロのレール、長さ二・七メートル、二本を麻縄で縛った荷物を持って、はしごを二〇〜三〇メートル上がる仕事は残虐だ」と言うわけですよ。だけど、線路夫の仕事というのは本来、六キロのレール運びは一番軽い仕事なんですよ。それを「いじめられ

た」と言ってる。「途中で仕事をやめて逃げたときに、高跳びしたときに選別ももらった」と言う話もあったんだけど、そういうことは抜きにして、残虐行為だというのであればちょっと違うし。

また、中国人の問題がありますね。一トン積みまのトロッコで三〇〇キロから四〇〇キロぐらい積んだトロッコを四人で押した、三人で押したと書いてあるんですよ。「体力のなくなった人たちが三人四人で押させるのは残虐行為だ」ということでNHKの記者が来た時に私は「三人四人で押するような坑道というのは幅はいくつなのか」聞いたんですよ。普通の坑道の幅は、一メートル三〇とか四〇なんですよ。だから、どう押しても二人以降は押し切れない。それを三人四人で押させるということは札をかけて、仕事をやりまっすって言ってきた人に対して、無理をして配番したのは残虐行為ではないわけですよ。むしろ、本来は収容所で寝てると食事は半分になっちゃうわけですよ。そうなることやせ衰えちゃうからやっていたのに、仕事内容だけを引き抜いて「ひどい」と言うのはね。とうとうその時には記者は黙ってしまったんですよ。だからね、そういう外国人の問題というのは、慎重に考えないといけないんですよ。

聞き取りの様子——語り手との関係性

村上先生

（資料を見ながら）最初、南助松さんに話を聞きに行っても、なんにも喋らなかった。「俺はもう今日は会いたくない」って、そういうのが何度もありましたよ。やっているうちにだんだん情が移ってきてね。「他の人は来て、本を作っても何にも言うてこない」って。「そういうことをやられると私は話したくない、顔も見たくない」って。結局、聞き書きが一番いいのはお互いに信頼関係ができて、絆ができてくると、それが生きてくるんで

すよね。これは理屈じゃないんですよね。だから、相手によって全然違うわけですよ、門前払いだったこともありますけどね。

聞き手

この本で紹介されている白井さんには何回くらいから話を聞けるようになりました？

村上先生

白井さんは南助松が生きていたときには直接、話はしなかったんです。それでもね、行くとき奥さんだけ残った時には、細かい話はしないんだけど、打ち解けた格好で「どうぞ、お茶入れますから」ってことで。そういう仲になった。足尾で一番問題なのは現場で働いていた人がいないでしょ。いないけども、何か残したいという想いはありますよね。だから、何が問題なのかということなんです。働いていて誇りに残っていて、息子に伝わったり孫に伝わったりして聞く話がありますよね。だから、それは大事にしくちやいけない。それで、こういう資料など理論的なものを集めたうえで整理をしていく努力が必要だと思っています。

冊子「ごめんください、足尾のこと教えてください」について

聞き手

私たちの冊子について、楽団演奏の友達のお父さんのことについて補足してくださいましたよね。<sup>(2)</sup>

村上先生

合同委員会というのがあって、体育とか音楽は別のグループになっていてそれぞれ予算がついているんですよ。それに対する予算とこともあるから。あとは合同の全山運動会というのもありましたから。

聞き手

じゃあ合同委員会による演奏と楽団の演奏は別？

村上先生

音楽だけです。だから、いわゆる式辞をやる時は労務課が管理を持っていた。あとは削

岩機<sup>(1)</sup>の字が岩を削る機械となっております。これは違って、僕は錐という字を書いているんです。削るんじゃないで叩いて砕く。発破をかけるための穴を空けるんです。英語で言うところ、Rock drillです。岩石にドリリングする、穴をあける機械。これはいつの間にか登用漢字になって。それまではひらがなで書いてたんです。

聞き手

古河も「さく」ってひらがなですもんね。

村上先生

ダイナマイトの穴を掘って入れないと屈伸できませんよね。あと〈すかり〉の問題。見たことある？

聞き手

掛水倶楽部にあるやつですかね？

村上先生

あそこは前は銅山記念室があって、そこには出してたんだよ。銅山観光に行く近所に風呂場があって、その棚の上に石の結晶がゴロゴロ乗っかっていた。そこに黄鉄鉱とか黄鉄鉱、石英とかの結晶がつながっているようなものがたくさんあったんですよ。

それで面白い話があるんだけど、昔、坑内に働いている連中と、中禅寺湖に温泉に行つて、そしたら、「金がないけど、どうしようか」ってなって、〈すかり〉があって「これでどうにかならないか」って言って。金じゃないんだよ、黄鉄鉱だから鉄なのに。そしたら、「お金はいりません、その代わり石を譲ってください」って。七、八千円、飲み放題でお土産も付いて帰ってきた。

聞き手

珍しかったということですよ。

村上先生

価値がわかんなかったんだろうね。向こうが錯覚を起こしたなら詐欺じゃないよね、ハハ。でも、〈すかり〉の持ち出しの取り締まりはあったんですね。出てくると火薬袋に入れて持ち出した。だから、出そうなきには火薬検査っていうのをやるんだ。坑口で

係員が待っていて、開けてチェックされて没収される。

聞き手 〈すかり〉自体は使えるものになるんですか？

村上先生 使えはしないよ、飾りに使ったり。全部じゃないけど。二割か三割くらいだね。

歴史をまとめる意義——正統派ではないけれど

村上先生 せっかくやるんだからね、聞き書きが歴史ではないと言っただけで、違った意味での隠れた歴史があるんだから、そういうのを確立してやるのが学問的にもいいことなんだと思うんですね。昔の正統派ではないんだけどさ。そういうことができればお手伝いしますよ。

あとは、聞いた話がどこまで確かなのかというのも加えていかないと、おかしくなっちゃう。一定の人の話を聞いて、正しくて他のものが駄目だとしてしまうのも駄目だし。むしろ、何にも言わない人でひと言、ふた言、出て来た言葉の方が重みがあることが多いんですよ。あとはそういう人たちを取り上げると、「今度はこういう人が見つかったよ」って言うってくれる人が出てくるんですよ。そうすると輪が広がってくる。

聞き手

『ごめんどさい、足尾のことを教えてください！』はそういう意味もあって、読んでくれて「こは違うよ」とか言うってくれる人が出てきてくれる方がいいですよ。

村上先生

あれを読んで一番生々しいのは植生盤のところで、現に植生盤の仕事で子供を大学にやった人のいるし。それから植生盤の前の仕事で、河原から砂利とか石を運ぶへいっばち。

戦後は履物がない時分で、坑内でも地下足袋が足りない時代だったんですよ。だから、

藁を買ってきて、草鞋を作ってたね。草鞋作りのアルバイトもあった。昭和二二、二三年ぐらいですね。

以下は、お邪魔した当日にいただいた資料を抜粋したものです。一部中略していますが、太字のところは太字のまま、記載通りの言葉のままで掲載しています。

2016/1/20

私の聞き書きノート

村上安正

私の経歴

1931年3月下町の商家に生まれる。1945年3月東京夜間大空襲で被災して足尾に転居し足尾工業学校に転学。1958年通洞坑の現場係員に転属。1971年末本社に転勤。1971年3月定年で退職。以後2001年まで他社で勤務する。その間閉山後に足尾記念室や坑内観光の事業に参画する。

私の聞き書き記録

1955年4月『ぜんこう』編集部からの依頼で、古老野田勇太から明治期からの聞き書きを中心に「足尾銅山の思い出」を1回連載後、以後鉾毒事件の対象8年争議まで計30回分連載（1956年8月）1956年3月『足尾銅山労働運動史』の編集責任者になり、執筆から編集発行までを任される。戦前の運動者へのインタビューは南助松ら6名、他に在籍中の坑員対象の座談会を17回開催し記録する。1958年7月に本書を発行（690P）、その座談会妙録は拙著『足尾に生きたひとびと』



228Pに入れた。

尚拙著『足尾銅山史』2006年3月654Pでは、限定した鉦山史ではなく総合史とすることを心掛け、主要な聞書の活用も心掛けて書いた。別紙に近代の記録を抄載。

(中略)

メモ、会話、日記から編集、自伝、口述を資料で補完する。

#### 口述史と歴史の違い

聞き手は話してが体験した事実を話したことをまとめ、それを引き出し、それを歴史的事実を照合しながらまとめる。―職場のこと、家庭生活、事件など。

歴史は文書などの史料をベースにしてまとめるが、口述資料を加えることで豊かな表現になる。日立の『鉦山と市民』は正史と聞き書きを共存した著作で、塙作楽が監修。

#### 口述史の持つ危険

口述内容の格子を決める。口述対象者(個人または小集団)。話の糸口、進行のため聞き手と話し手との信頼感が大切。本題から離れた内容も見逃さない。発言者の膨張癖や寡黙癖にも注意する。聞いた内容は精査をして誤りを正す。

特に坑内仕事の口述は、閉山後40年以上を通過、坑内現場勤務者は殆ど珪肺で世を去る。採掘跡は全く見られず。往時の状況をまとめて検証できるのは私を含め数人しかない。また資料の内容を吟味して選択しないとんでもない誤りを冒すことがある。また父母が坑内や生活の体験談を聞いた場合には、真偽を充分検討する必要がある。また口述史専門家の下した断定が誤っている場合もあるので要注意。

#### 戦時下に虐待されたとする足尾での中国人、朝鮮人の実情について再検討する。

中国人は軍が爺ヶ沢に合宿施設を収容所に入れ日常生活を管理、ここから引率して坑内係員詰所で受渡し、仕事が終わると隊伍を組んで退勤した。これが拘束時間。鉦山が現場で受け入れた中国人は作業現場まで日本人が案内した。その中には実作業できない者もいたが、この場合は収容所で休養させるべきだったが。休業中の食事は就労時の1/2しか支給されなかった。この場合の作業例では、1t積み粗鉦を積んだ鉦車を3人で押し運搬したという証言もある。NHK記者はこれが明らかに虐待の典型だったが、私はこれは温情だと論破した。そのわけは普通坑道の加背は1・4mと狭く一人押ししかできず、3人押し用の坑道は基幹坑道しかなく、脱線しても手助けが得られた。

朝鮮人は邦人が住居する社宅地域から隔離した社宅に集中居住し、これを仕切る朝鮮人が就業を強制的に督励しリンチしたことがある。1960年代に朝鮮人問題を告発した朝鮮人は強制労働の体験をこう述べる。彼は線路夫見習中の最初の仕事は、上部坑道の線路延長のため6kg/mレール2本(重量32・4kg)マニラロープで縛り、肩に吊るして高さ30m上げる作業だったが、これを半島人に対する虐待行為だと糾弾した。だがこのレール運搬車は初心者向けの最も軽い仕事だった。これを聞いた時、私は啞然として口がふさがらなかった。

#### 話し手の選定

雄弁者に頼り過ぎないこと。また個人だけを対象にせず、数人同じことを聞く。先ず話し手との信頼関係を作り、その内容を把握できるように心掛ける。

訥弁者からも片言や呟きでも聞き出す努力をする。

聞き出した話をまとめ、足りないところを補足し、事実突き合わせる。そして疑問点があれば直ちに書き出す。

私が学んだこと

初心者では期待できる答えが出ないことがある―「白井操の生涯」

まず聞き手に顔を覚えてもらい、話を聞き出すよう努める。その都度霊場などを出す。基本的な事実を踏まえ、これに対応する努力をする。その上で疑問に思うことや事実誤認を正す努力を重ねる。

(中略)

誤った解釈から生じた誤り

岩波文庫『近代はやり唄集』に載った「足尾銅山ラップ・節」の歌詞の中の下飯場の熟語に著者がつけたルビがげはんじょうになっていたが、正確なルビはしたんばになる。

これを筆者は飯場の本来の意味を全く知らなかったとしか云えない。飯場制度については平凡社版『世界大百科事典』や『広辞苑』にも載っているが見ていない。飯場については漱石の『坑夫』改版の注でも正確に記述していた。他にも大切を歌舞伎の大吉利になぞらえ、金州は、本来坑夫仲間て相手の名の頭文字で呼び合う単語だったが、注では遼東半島の地名を持ち出す愚を犯した。こういう誤りを改め正しい解釈に直すべきである。

足尾のこと教えてください ―から

抗葬には楽団演奏がある―銅山に共同委員会がある、体育競技や音楽隊の運営を助けた。運動会の行進もブラスバンドが先導した。

従業員は坑夫ではなく鉱員。削岩機は鑿岩機ではない。

鉱物結晶は、スカリと呼び珍重された。主に石英や方解石をベースに黄銅鉱などの金属鉱物の結晶が共生する。その在処は鉱床脇の空隙部で、入り口は狭いが中は広く人間の女性陰部に似た構造で、これが大直利につながる可能性が高い。直利が出ると退坑時に酒樽の鑑を抜いて酒を振る舞った。またスカリの持ち出し取締りのため坑口で「火薬点検」を行ったが、話し手はこれを知らない。閉山から45

年経って当時のことを知る者が激減した。その中で松木の植生盤運搬に携わった女性の発言は当事者しか判らない生の声が記録された。だが坑内の場合、次世代からの発言で物足りなかった。

#### 村上安正著書一覧(代表的な著書)

- ・村上安正『足尾に生きる：私の人生八〇年』随想舎、2012
- ・村上安正『足尾銅山史』随想舎、2006
- ・村上安正『山の町足尾を歩く―足尾の産業遺産を訪ねて』わたらせ川協会、1998
- ・村上安正『足尾に生きたひとびと：語りつぐ民衆の歴史』工房随想舎、1990
- ・村上安正編『足尾銅山労働運動史』足尾銅山労働組合、1958

番外編

## 足尾を知るためのオススメ資料

科研費チームが足尾に通いながら、出会った、足尾を知るのに優れた資料をご紹介します。



## 1 『広報あしお縮小版』

だけれども、一度は自分が住んでいる地域の広報誌を目にしたことがあるのではないだろうか。地域で起きている出来事や話題といったローカルな情報を扱っている市町村の広報誌は、新聞や週刊誌のように不特定多数の人に向けて情報を発信するのとは異なり、読み手として想定しているのはその地域で暮らしている住民で、その記事は極めて土着性と地域性が色濃く反映された内容になっています。

その地域固有の広報誌として、足尾町が昭和三四年一月から平成一八年三月までの期間に毎月発行していた「広報あしお」を凝縮して二冊の本にまとめたものが『広報あしお縮小版』です。本書の特徴は足尾町の時代的変遷を大局的に追うことができるほか、掲載されている町民の声を通じて、当時の町の雰囲気や臨場感を読み手に提供してくれるところにあります。また、四〇年以上の広報誌が凝縮されているので本に多少の厚みはありますが、町民向けの広報誌という性格上、専門的な用語が乱立することなく平易な文章で読み易いことも本書の特徴の一つ。

足尾町の歴史を知る入門書として、ぜひ手にとって読んで欲しい一冊です。

〔中村哲也〕

## 2 生井貞行「銅山閉山にともなう足尾町の変容」(一九八二年、「経地年報」二八―一、六〇―六九頁、経済地理学会)

足尾の歴史や産業技術などに関する研究は数多くありますが、閉山後の足尾についてまとまった研究は多くありません。その中でも、閉山直後の足尾で実際に調査を行い、各地区の人口や住宅の変化、財政、産業構成や事業所数の変化など町の変容を細かく記録した貴重な研究です。閉山の影

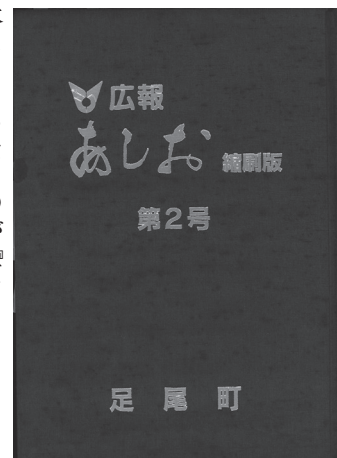
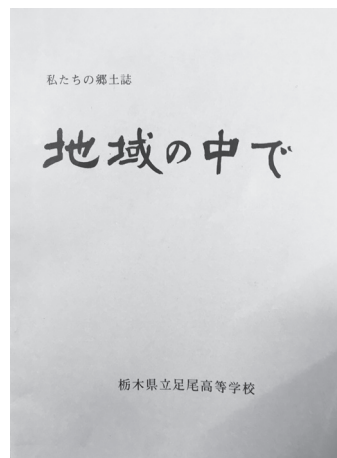
響といったときに古河関係の労働者とその家族に注目が集まりますが、その他にも銅山町を構成していた商店や娯楽施設など町部と言われる地区にどのような影響を与えたかを明らかにしています。足尾町がどのように変わっていったのかを知るうえで、とても参考になる論文です。日本の学術論文検索サイト「CiNii」から閲覧できます。

〔三浦一馬〕

## 3 栃木県立足尾高等学校『地域の中で』(一九八五年)

足尾高校普通科の授業の一環として行われた聞き取りの記録集で、昔の足尾について、それぞれに関心のあることを祖父母や両親、友達から話を聞いて調べたことを生徒たちがまとめています。これまで暮らしてきた足尾で、身近な語り手に対するユニークな視点から聞き取りがされていて、なかなか地域史には残らない細かなエピソードが紹介されています。ここで取り上げる二つの冊子はどちらも閉山から約一〇年経った時のもので、聞き手の生徒たち自身は物心ついた時に閉山を経験した世代だったということも興味深いです。自分が暮らしてきた町がほんの少し前までとは大きく変化していったことを知っていくことはどのような体験なのだろうかと考えずにはいられません。

この冊子で興味深かったのは閉山によって足尾から転出した後に、足尾に戻ってくるようになったある家族の記録です(22 閉山「一一五―一七頁」)。この家族は閉山後、父親が古河系列の会社へ転勤となったために足尾を離れるが、三年後には足尾にある別の古河系列の会社で募集があり家族会議の末、足尾に戻るようになったそうです。その理由は転勤先の仕事で忙しかったことと親戚の多くが足尾に残っていたことだったそうです。記述からでは何人がそうして戻ってきたのかはわかりませんが、



「Uターン組」とされていることから一定数はそうした方々がいたのかもしれませんが。出て行く人と残る人以外にも、戻ってくる人たちがいたことに気づかされました。足尾歴史館の二階にある学校関連の書籍コーナーにて閲覧できます。

〔三浦一馬〕

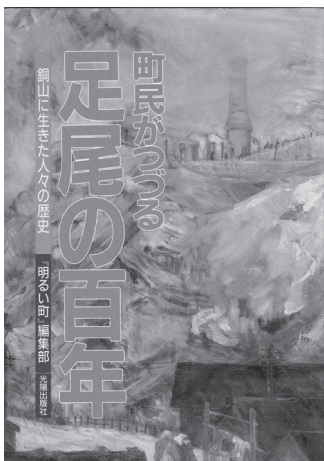
#### 4 足尾高校『あかがねの里から 足尾町見聞録』（一九八六年）

こちらも『地域の中で』と同様の足尾高校普通科による聞き取りの記録集です。ちょうど足尾線の開通に伴って銅山の労働者が増えた時期に山形県から足尾に働きにやってきた両親に聞き取りをしています（庄司伊都子「閉山前の足尾の生活」三五―三六頁）。今は無くなってしまった「婆火」という精錬所の近くの社宅で暮らしており、夏は火の粉が降りかかるぐらい近くで打ち上げ花火をしていたこと、雨の日には山水は濁ってしまったので、赤倉のロータリー近くの豆腐屋裏の井戸に水を汲みに行かねばならなかったこと、冬は凍ったダムでスケートを楽しんだことなどが描かれています。この冊子は聞き取りが中心で、生徒たちの心情とともに昔の足尾について描かれています。身近な町について身近な人たちに聞き取りをしていた姿が目に見えられました。足尾歴史館の二階にある学校関連の書籍コーナーにて閲覧できます。

〔三浦一馬〕

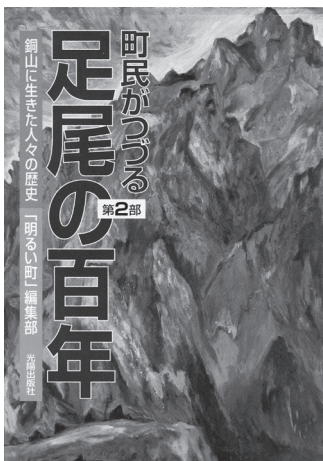
#### 5 『明るい町』編集部『町民がつづる足尾の百年 銅山に生きた人々の歴史』第一部・第二部（第一部一九九四年、第二部二〇〇〇年、光陽出版社）

足尾には『明るい町』という地域政治新聞があります。一九八九年に足尾は町制施行百年を迎えたのですが、それを記念して一九八八年九月から「足尾の歴史とともに生きてきた人たちの、貴重な人生体験」を聞き書きする「町民がつづる足尾の百年」という企画が始まりました。『明るい



町』に連載され、それをまとめたのが第一部、第二部の二冊です。足尾町民ののべ三六九名の語りがおさめられており、そこで生きている人々の声から足尾の生活と文化を知るうえで必須の本と言えるでしょう。「銅山に働く」「足尾の教育・文化」「思い出の名所・旧蹟」「銅山町の商店街」「苦楽を共にしたヤマの暮らし」（以上、第一巻）「銅山で働いた人たち」「町を支えた商人・職人さん」「歴史の跡をたずねて」「思い出のくらしと名所」「足尾の教育・文化・スポーツ」「革新のたたかいの足跡」（以上、第二巻）。いまはもう多くの方が亡くなられており、聞き書きされた語りは、当時の足尾を知るうえで、本当に貴重な記録です。地元新聞の地道で息長い企画に、私は敬意を表したいと思います。

〔好井裕明〕



#### 6 新井常雄『新井常雄版足尾銅山写真帖』（随想舎、二〇〇一年）・伊東信さんの写真

私たちが聞き取りで伺うことのできる、ちよつと前の昭和の足尾を記録している写真家の一人が新井常雄さんです。鉱員として働いていたことから、精錬所や仕事場、松木の写真が特徴的です。書籍が発行されていたり、平成二四年に栃木県文書館には撮影された写真のネガが寄託されており、同館で閲覧が可能です。その写真を私たちは見ることができます（実はこの保管を繋いだのは、村上安正さん。改めて当時から村上さんの資料の扱い方にも感心していました）。

新井常雄さんには、同僚の写真友達がいきました。そのうちのお一人である、伊東信さんには、私自身、協力隊在職中にお世話になりました。ご自宅で資料を見せていただいた時、木箱や缶箱に湿気で風化しないよう





に、丁寧に昭和三〇年代に自分で現像した白黒の写真がびっしりと保管されていました。伊東さんの写真は、ご自宅の砂畑の風景や、行事、休日の家族の山遊びの様子、そして閉山時の社宅の解体写真など、生活に密着した記録でした。手作りのアルバムや、多くの写真は、裏などにきちんと撮影日やメモ書きがあり、相当な資料であることは一目でわかりました。

たとえば、アルバム『砂畑橋が出来るまで』では東京タイムズ社賞を受賞した昭和三〇年撮影『砂側橋』写真から始まる記録です。「基礎工事は始められた」「一本のロームによって運れて来る 品物は二人の女によってリヤカーで坂を引っ張る 此れが又 大変な汗だった」(メモのまま記載)といった工事工程の説明から、完成のテープカットの様子では「花火も青空高く上げられはじめられた」初めて四輪車が新橋を通って砂畑へ入るのだ」などと、事細かでユニークなコメントセンスがあります。

伊東さんの冊子「ごめんください、足尾のこと教えてください」にも多くの写真を提供していただきましたが、制作中に永眠されました。残った大量の写真の保管方法をご遺族が悩んでいらっしやり、文書館にも相談の上で、新井さんの写真のように寄託することとなりました(現在栃木県立文書館でアーカイブ作業中)。

写真自体の美しさや、人の想いが詰まった資料の強さにも触れることの面白さを教えてくれる、足尾のカメラ愛好家達の存在。その資料の一部が、然るべき場所に保管されることによって今後、必要な方にも伝わることを願います。

〔志村春海〕

## 7 足尾町教育委員会・足尾町文化財調査委員会『足尾銅山の産業遺跡』

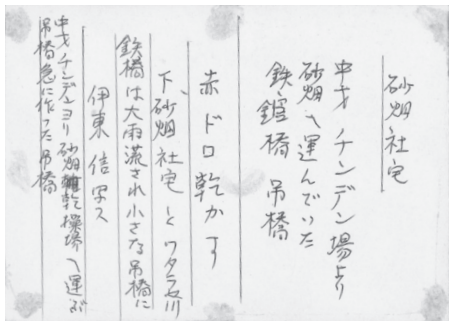
(二〇〇六年)

「日本で最初に架けられた細尾索道」「足字銭鑄銭座があった場所の検証」「製錬所の名物であった四本煙突」「神子内に残る軽便馬車鉄道の跡」「保存された渡良瀬橋」「積年の煙害に終止符をうった自焙製煉法」「囚人を使役して労働力を補った明治初期の足尾銅山」「国産第一号のさく岩機を制作した足尾銅山工作課」「間藤水力発電所から足尾町営電気事業への進展」「掛水社宅で没した『富岡日記』の著者『和田英』」「足尾銅山にいた隠れキリシタン『東庵』」「足尾銅山の私立校であった本山小・小滝小・実業学校」「県下に誇った足尾銅山附属病院」「日本最初の電気機関車の発達」「古河市兵衛没後の坑職夫の生活記録」「無用の長物であった製錬所の大煙突」「煙害で消滅した松木地域旧三村」「新聞で見る足尾銅山閉山の序章」等々。見出しから主なもの列挙してみました。まだまだ興味深い見出しが並んでいます。当時の写真や図版も多く、優れた調査報告書です。足尾銅山を考えると必見です。非売品なのが残念です。

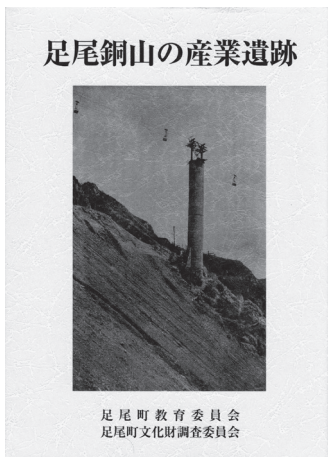
〔好井裕明〕

## 8 村上安正『足尾に生きる 私の人生八〇年』(随想舎、二〇一二年)

日本産業技術史学会の学会賞をとった力作『足尾銅山史』は、著者のライフワークです。自宅へお話をうかがいに行ったとき、銅山で働いていた時に著者が手書きで作成した坑内調査の図面を何枚も見せていただきました。私は、その詳細さ、ち密さに驚嘆し、著者のまじめな仕事ぶりに感動したのです。本書にも、そうした著者の誠実さや生真面目さが反映されています。「錦糸町時代 生い立ちから戦災まで(一九三二年～一九四五年)」「足尾時代 戦後の生活(一九四五年～一九四九年)」「ビジネ



「砂畑社宅中オチンデン場」の写真表面(上)と裏面(下)



足尾町教育委員会  
足尾町文化財調査委員会



ス生活 足尾鉾業所（一九四九年～一九七一年）「本社勤務（一九七一年～一九八六年）」「学会賞受賞まで」「わが人生を顧みて」「あとがき」。著者の自宅書齋には二階の床が抜けそうに思えるほどの文献や資料があり、倉庫には、さらにそれに輪をかけたくらい資料や文献が置かれていました。産業技術の立場から足尾銅山を徹底的に調べあげた在野として現場の研究者としての自負が著者の語りに貫いています。

〔好井裕明〕

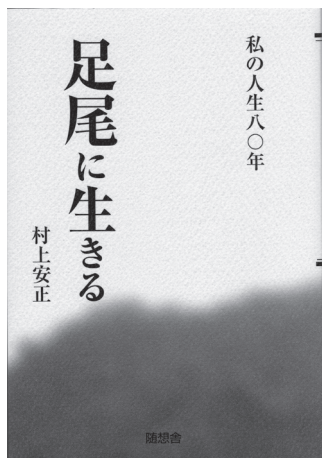
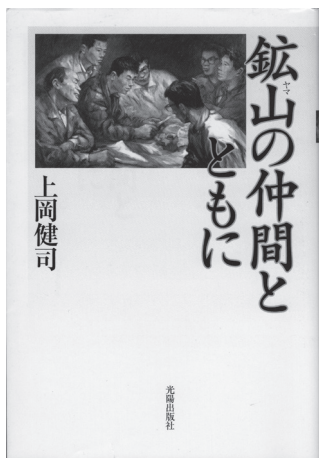
## 9 上岡健司『鉾山の仲間とともに』（光陽出版社、二〇一二年）

お話をうかがいにくくと、上岡さんは必ずにこやかな笑顔で迎えてくださいます。弁舌さわやかでユーモアたっぷりに労働運動のエピソードなどを語ってくれた著者。私はこの人こそ、足尾での本当の意味での知識人だと感じ入り、お話に聞き入っていました。明治以降、足尾銅山でどのような問題があり、労働運動が盛んになったのか。また運動が資本側の力でどのように抑え込まれようとしたのかなど、著者の人生語りのなかに、鮮やかに浮かび上がってきます。目次の章立ては次の通りです。

「坑内労働者のたたかい」「銅山の繁栄と我が家の暮らし」「軍国教育、そして敗戦の混乱」「労働組合運動へ」「不当解雇反対で裁判闘争」「町長・町議選をたたかう」「閉山―町民の団結」「長男を突然失う」「うつ地獄へ陥る」3・11東日本大震災後のいま「おわりに」

著者の暮らし、そして人生のなかに労働運動という「筋」が一本しっかりとして貫いており、その事実が読者に感動を与えていることがわかるでしょう。足尾銅山の労働運動を知る必須の一冊です。

〔好井裕明〕







## あ と が き

五年ほど前、志村さんから一通のメールが届き、足尾へ初めて訪れることになりました。その後、足尾の行政の方や学校の先生など、多くの方々の真摯で暖かい協力を得、地元の人々から、いろいろなお話をうかがってきたのです。私はこれまで差別問題や薬害HIV感染被害問題などで聞き取り調査をしてきていますが、今回は、これまでとはまったく異なる聞き取りを志村さんたちと行ってきました。

日光市の街おこし協力隊として、期間限定ですが、足尾に住み、顔なじみとなり、地域の人たちと日常的な関係をつくり、深い信頼関係を築いている志村さんや中山さん、市之瀬さん、長澤さん、中山さん。彼らを中心として、そして彼らに協力してもらいながら、私も生活史の聞き取りをしたと考えてのです。それと足尾に何回も訪れるなかで、聞き取りの成果は、確実に地元の人々に還元したいと思うようになったのです。そして、足尾で暮らす数多くの人々にお話をうかがう仕方は、ある意味「ゆるく」「無理をしない」聞き取りでした。それは、ただ学術的で根掘り葉掘り聞き、正確で深い情報を搾り取ろうとする聞き取りではありません。そうではなく、志村さんたちの生活実感を第一としながら、私のような研究者もそこに寄り添っていくという地域中心・地域還元型とでもいえる聞き取りでした。そして、本書は、聞き取りを実際に行ったメンバーが全員何かを書き残すという方針で、それぞれがまとめた足尾をめぐるテーマを出し、それをもとにして構成しています。

す。

本当に多くの人々からお話をうかがえました。それをすべて本書に記録することなどできませんが、本書には、多くの語りから得た足尾をめぐる「生きられた」「知が反映されています。これまで得られた多くの語りは、またどこかで役立てることができればと思います。聞き取りに協力していただいたみなさん、本当にありがとうございました。

なお、本書は、平成二八〇三〇年科学研究費基盤研究(C)「産業遺産の記憶と『生きられた』生活世界の社会学」・足尾の生活文化史聞き取りから」(研究代表：好井裕明)の成果となります。

〔好井裕明〕

足尾を初めて訪れたのは二〇一五年の冬でした。私はしばらく北海道で暮らしていたこともあり寒さにはある程度慣れていたのですが、身にしみるような寒さは北海道のそれとは違い、閉山した町というイメージともあいまって可悲しい気分になってしまったのを覚えています。けれども、聞き取りを通して気付かされたことは、確かに足尾は静かになっていく一方の町であるかもしれないけれど、そこで暮らす方々にとってはそうした足尾も生活の一部で当たり前のものであるということでした。

聞き取りに関わるようになったきっかけは元地域おこし協力隊員だった志村さんに誘われたことでした。そこで、同じく志村さんに呼び寄せられていた好井先生に出会い、当時は大学院を探して彷徨っていた私は日本大学に進学することで落ち着き、現在までなんとか聞き取りを続けていくことができました。

また、これは何処の馬の骨とは知れないような私にお話をしてくださった足尾の皆さんのおかげ



でもあります。昔の足尾のことを教えていただくという事でお会いすることになっていましたが、それとは別に本当にいろいろなことをお話しできたと思います。紙面の都合上、今回の冊子に取り上げることができなかったお話は多くあり、聞き取りのデータは全部で四七件にもなります。その他にも録音せずにお話をしただけだったり、何かをご馳走になったりと一緒に過ごしているだけの文字には表せない時間の積み重ねがありました。そうした時間はまだ駆け出しの研究者である私にとって調査するということはどういったことなのかを考えさせてくれました。

私はここからも聞き取りで足尾に通い続けていこうと考えています。聞き取りに協力してくださった方々、本当にありがとうございました。これからもよろしくお願いします。

〔三浦一馬〕

足尾の聞き取りで、よく覚えていた日があります。足尾に来て一年目の冬のある鉱員さんへの聞き取りで、おそらく、三時間以上はお邪魔していました。企業の福利厚生で行われていたスポーツや行事の面白さ、坑内の空間の広さや事故の話……。後半には、社宅の近所付き合いが時代とともに変わってしまったことを、話し手自身が、語りながら気づいていき、寂しさとも違う、もう戻れないことを確認するような、なんとも言えない瞬間になりました。正直、多くの情報に頭はいっぱいいっぱいで相当疲れたのですが、それでも大きな何かにぶち当たったような、聞き取り（らしきもの）の醍醐味を思い知りました。そこから幸運なことに、一緒に足尾の聞き取りを楽しんでくれる仲間も増え、ひとまずは六年間のまとめに取り掛かることができました。関わってくださった全ての皆様、どうもありがとうございました。

本当は、もっと掲載したい内容は沢山あります。まず、栃木県以外の下流部や、企業の視点は残

念ながら調査不足です。また、生活や山仕事に密着していた女性の視点を扱えなかったのも心残りです。それに、坑夫達の喧嘩話や、インチキ話、子供のガキ大将の話などは、とてもお行事の良い内容ではありませんが、生き生きとした素晴らしい話です。やればやるほど、次の視点が広がり、聞き取りは果てがないこともわかりました。

足尾には町史がないまま日光市に合併しましたが、さらに過疎化も進み、一次資料に触れたり、銅山としての足尾は遠くなっています。でも、それも今の足尾の現実で、足尾の人が足尾を好きなことや、語り出すと止まらない様子（時には話せない瞬間）も大事な姿ですし、これからどうなったとしても、終わりはないと思います。私も通う回数が減ったとしても、足尾に向き合い続け、これからの足尾に関わっていききたいです。

〔志村春海〕

私が足尾町に興味を持ちはじめたのは社会人として大学院生を過ごしていた時期でした。周囲の同級生達は自分のやりたい研究テーマが早々に決まり、実際にフィールドに出て調査をしたり、関連する資料を渉猟して論文の作成に向かって確実に前進している中、そのような優秀な学生とは程遠い場所に位置する私は何もできないまま時間だけが過ぎていました。

こうした悶悶とした日々を積み重ねていた時期にたまたま仕事で足尾町とかかわり、そこで地域の方々から足尾町の生活や歴史についてお話を窺ったことが私にとって足尾町との関わりの始まりでした。その時にどのような話を聞いたのか、その全容はすでに忘れてしまいましたが、足尾銅山や公害といった町の表面的で断片的な知識しか持ち合わせていなかった私に足尾町の歴史の奥深さや地域の魅力を丁寧に教えていただいたことを憶えています。

少しずつ足尾町に関する興味を覚えた私は、町に関する資料を集めては休日の日には足尾に行って地域を散策し、地域の方々からお話を聞くということをしばらく続けていきました。その中で地域の方々が語る足尾町の歴史は、教科書や公的な文書には載っていないような内容の面白さと熱量に溢れていました。そして文章には記されていない、残されていない一人ひとりの内面にある足尾町の姿をもっと知りたいと思っていたところ、このような生活史の聞き取り活動をしていたのが、当時、足尾の地域おこし協力隊として着任していた志村さんでした。こうして志村さんの活動に羨望の眼差しを向けつつ、時折、ホルモンを食べながら情報交換をさせていただくうちに、志村さんを介して好井先生や三浦さんに出会い、今回の活動に声をかけていただき参加させていただきました。今回の聞き取り活動には時間的な都合がつかず参加できない日々も続きましたが、それでも少ない時間の中で科研チームの皆さんや足尾の皆さんに会って話を伺えたことは、私にとって貴重な経験と財産となりました。大好きな足尾町に関わることができて嬉しかったです。そして本当にありがとうございました。

〔中村哲也〕

## 資料編

協力 日光市

ごめんください、足尾のこと教えてください！

—— 地域おこし協力隊による聞き取り抜粋集



## この冊子を手にしてくださった方へ

この冊子は、平成25年度から足尾で活動する地域おこし協力隊<sup>〔1〕</sup>が行った、生活史の聞き取りの内容を抜粋して掲載しています。聞き取りと表現していますが、最初は「足尾について教えてもらえませんか？」という立ち話から始まり、お年寄りの集まりや日常的なお茶飲み話など様々な場面で、地域の方にお話を伺ったものです<sup>〔2〕</sup>。私たちの聞き取りでは、話し手の方にとっての出来事の見え方や気持ちを大切にしています。そのため、中には曖昧な部分や歴史的事実と異なっているもの、適切ではない表現などが含まれることもあるかもしれません。けれども、過去がそのように記憶され、今このように語られるということも貴重な足尾における生活史の一側面だと考えています。話の信憑性について、疑問を持たれる方もいらっしゃるかと思いますが、「こういう生き方や想いもあったんだな」ということで読んでいただけたらと思います。

冊子を読んでみて「自分の経験や見方とは違うので、言いたいことがある」「意見や記憶を伝えたい」という方は、地域おこし協力隊までお知らせいただき、是非お話を伺わせて下さい。この冊子が、様々な視点に出会うきっかけとなれたら幸いです。また、冊子とは別に聞き取り全体の文字おこし資料を日光市役所足尾総合支所で保管しています。

最後になりますが、貴重なお話を聞かせていただき資料化にご協力くださった皆さま、いつも私たちの活動をご支援してくださる皆さまに深く感謝申し上げます。

<sup>1</sup> 総務省の取り組みで、人口減少や高齢化などの進行が著しい地域に、地域外の人材を一定期間誘致し、その地域の活性化を促進する活動を行っている。日光市足尾地域では平成23年度から導入。

<sup>2</sup> この冊子での基本的な聞き手は、地域おこし協力隊の志村春海（以下、S）、中山京（以下、N）。また、口述史の観点から、日本大学文理学部社会学科教授の好井裕明さん（以下、Y）にご協力いただきました。

02	この冊子を手にくださった方へ
04	凡例
05	<b>Q1</b> チョリチョリって、どういう意味ですか？
06	渡良瀬川と鮎 [2014年1月10日]
07	ハゲ山のウド [2014年2月10日]
10	煙に慣れる [2014年5月19日]
11	公害の足尾というイメージ [2014年8月20日]
16	足尾小話「お客さんからの土産」
17	<b>Q2</b> 坑内ってどんな場所なのですか？
18	坑夫のお父さんの仕事 [2013年7月11日]
20	カンテラの光 [2014年1月10日]
22	坑内の職場 [2014年9月18日]
28	足尾小話「坑内でのユーモア」
29	<b>Q3</b> 社宅の暮らして、どんな生活だったのですか？
30	鶏小屋にみえる [2013年11月26日]
34	夢のような近所付き合い [2014年1月10日]
38	部屋の広さ [2014年8月19日]
41	<b>Q4</b> 戦時中、外国の人とどんなやり取りがありましたか？
42	イモとコッペパンを交換 [2014年4月15日]
44	豊かな知恵を教えてください [2014年7月]
46	近所の人や進駐軍との交流 [2014年7月7日]
51	<b>Q5</b> キラキラした石、見つけたのですが……
52	鉱石のようなお菓子 [2013年7月11日]
53	喫飯所で鉱石を洗う [2014年3月5日]
58	坑内のしくみ
60	おわりに
61	地図
62	年表
63	用語集
64	クレジット

〔凡例〕

- 話し手の方は、次の通りに掲載しています。
  - 1…夫婦の場合は、夫、妻。兄弟の場合は、兄、弟。
  - 2…男性はM、女性にはF。複数の場合はMa、Mbと表記。
  - 3…市職員はPa、Pbと表記。
- 沈黙は、……。○○……。○○。○○。○○。
- 省略は、……（省略）……
- 話の途中で途切れている時は、「」で次の会話に続いています。
- 笑い声はカタカナ表記。もしくは（笑）です。
- 語りの中で誰かの発言の真似などは、「」で表しています。
- 冊子全体の共通する用語は63頁の用語集に掲載。
- その他の鉱山用語、地名や補足には注を入れ、典拠があるもの以外は協力隊が編集しています。
- （ ）の使い方は2種類あります。
  - 1…インタビューの状況や状態を表しているもの。
  - 2…文脈を理解しやすくするために編者が補ったもの。

〔聞き取り抜粋の編集方法について〕

- 聞き取りを行った時系列順に掲載しています。
- 聞き取り抜粋箇所後に、協力隊2名のコメントを掲載しています。
- 話し中に出てくる地名や言葉については、61頁「地図」、63頁「用語集」をご覧ください。

— 01 — チョリチョリって、どういう意味ですか？

高齢者の集まりで押し花を作る場面でのこと。会場付近で昔は植物が見当たらなかったのに、遠く(豊潤洞「1」)まで花を摘みに行っていたという話になった。その中で、「煙で植物がみんなチョリチョリになった」と皆さんが口々に言っていた。この「チョリチョリ」、私たちにはあまり馴染みのない言い方なので意味を尋ねると、製錬からの煙で植物がチョリチョリ(枯れたような、しなってしまうような感じ)になってしまうという意味だと知った。当時チョリチョリにならないように煙が来たら植物に新聞紙を被せて守ったという話は、このような会話だけではなく、新聞記事でも確認できる「2」。「公害の町」というイメージが先行し、実際の生活ではどのような風景があつたのか知らなかった。少し聞きづらいとも感じていた公害の話題だが、実際の生活の中に馴染みのある場面として、ふと登場する。

## 渡良瀬川と鮎

「2014年1月10日」夫、妻、志村、中山

偶然お会いした方に、仕事から生活風景、人間関係や当時のお気持ちなどの話を聞かせていただいている。初めてお話を伺った時は、台風時、銅山の施設が浸水し、水処理をする専門の方が苦勞されたとのこと。そこから公害の話題になる。昭和30年代の話。

夫「それで、鉋毒問題が出ると駄目なんだよな。インキキもある。鉋山も大変だった。……だから魚なんか今、渡良瀬川の

こあたりで鮎釣りやっているもんね。……だからもう、目の敵でいろんなのを取る気でいたんだよ。

S「ふーん。

妻「フフフ。

夫「そういうあれがあるんがね。それそのやつが言っていたもん、「まさか渡良瀬川で鮎釣りができるとは思わなかったよな」って。頭のやつが言ったんだべ。「鮎が死んだら賠償取れから放してみんや」って。そういうのがいたんだよ。そうしたら、「死なねえんだよな」って言って。

一同「ハハ

妻「ね、

夫「鮎が死んだら……」って言ったから確認してみると、「先が突かれたとか、跡があるから駄目だよ」って。知っている人はね、近くで鮎釣りができるって喜んでね。

妻「フフ。

「お話を聞いて」

S「ネガティブな内容や、当時だったら嫌な部分の内容でも深刻な感じにならずに話してくれた。鮎の例でも最後の「死なないんだよな」のくだりは皆で大笑いした。実話として嫌な気持ちもあるのに、一気に笑い話になってしまったのが不思議だった。鮎を川に放した人の様子も目に浮かぶようで、人間らしさを感じた。

下流あたりで、鮎釣りやっているでしょ。あれだって始めはその人らがずるくてさ。鮎を渡良瀬川に放して、「死んだら鉋毒のせいだ」って言って賠償とる気になって、始めはそれでやったんだよ。鮎放して死んだらそれ調べて、「これは鉋毒、鉋毒で死んだ」って。そうしたら、鉋毒が入ってないで、いたずらとかあいうので死んだって。だから一匹死ぬと大変だった。持ってきて調べて、「鉋毒だ」って言ったら直ちに「賠償とるべ」ってその人らがわざと放したんだから。鮎を。いたずらばっかりなんだもん。モリで突かれたとかそういう跡ばかりあって。んで、今度はそ

話し手の人柄のおかげで、こういう話題にユニークさが加わり、嫌な気持ちだけではない形で今知れることが凄い。また、笑い話だけでは収まらない出来事の周辺で起った事実も伝わる。

N「鉋毒による被害は広く研究されてきたが、このような足尾の住民が見聞したことや、古河が激動の時代に、当時の知識や技術を結集させて公害対策に取り組んだこともまた事実であると思う。様々な立場の方の色々な記憶を残すことが大切だなと思った。特に、公害対策に取り組んだ方々のお話を伺っていききたいと思う。

## ハゲ山のウド

「2014年2月10日」夫、妻、志村

足尾では山遊びをしている方も多く、このご夫婦は山菜やキノコ採りなど、季節ごとに山の幸を楽しんできた。ハゲ山として知られる、松木エリア「3」も昔は遊び場の一つだった。昭和30年代までの松木の話。

妻「会社の社宅が松木の方にもあったの。

S「松木の奥にですか？へー。それはどういう人が暮らしていたんですか？

夫「会社の人とか、

妻「製錬所に通う人とか、本山坑に通う人、そういう人たちの



社宅があったの。

S ― あ、松木にもあったんですね。へー。でも今って、ゲートで仕切られちゃっているじゃないですか「4」。昔は松木の方に自由に行けたんですね。

妻 ― 私らも行つて、ウド採りなんかをして。

夫 ― 昔は松木にウドが出たんでね、

S ― あ、そうなんです。私はもうゲートがある状態から来ちゃっているんで、なんて言うのかな、松木は立ち入り禁止の場所っていうイメージじゃないんですけれども。皆さんからのお話を聞くと、松木の川で遊んだり、松木を越えて中禅寺まで遠足に行っていた「5」とか、そういう話を聞くと、同じ場所なんだなと思って。

妻 ― いい所なんです。

夫 ― こっからよく、松木の久蔵を通って、中禅寺にみんな行っただですよ。

妻 ― 歩いて山越して。

S ― ああ、なんか遠足とかで行ったって聞きました。じゃあ、松木に遊びに行ったりしたんですか？

妻 ― みんな、この辺の人なんかも向こうに遊びに行っただ。

S ― 遊びに行くっていうのは、登山とかそういう、木の実とかそういうのを？

夫 ― 採りながらね。

の木が生えると日陰になっちゃうから、駄目なんです。

S ― あー、なるほど。ちなみに、その松木の場合って、その山に遊びに行っていた時は、やっぱりそのハゲ山だったんですか？

妻 ― そうそうそう。ハゲ山が多かった。

S ― じゃあ全然、

妻 ― 今と違かった。今と違う。

S ― なんか、ハゲ山、ハゲ山って言われて、木がないっていうのは、頭ではわかるんですけども、こういう風景だったのがあまりわからないと言うか。

妻 ― わかんないよね。

夫 ― ウドなんか出ても、鹿とかなんかみんな食べちゃう。新芽の上を。

妻 ― ハゲ山っていうか、そうね、何て言ったら良いだろうね。あの、道路の所に石がいっぱいあって歩いて、石が一杯あって。

S ― 全部ですか？

妻 ― 全部、山が全部そういう風になっていたの。

S ― 砂利みたいな感じですか？

妻 ― そうそうそう。そういう山なの。

S ― じゃあ、土が無い？

妻 ― ない。土が無いんです。

夫 ― 昔の製錬の煙で、岩がみんなやられちゃって、粉になっちゃう。

S ― へー、ウドか。

夫 ― 山のウドはいい香りがしてね。旨いですよ。

S ― へー。

妻 ― いい所ですよ。

S ― 足尾のいろんな方の話を聞くと、キノコとか山菜とか山椒もそうですよね。山ウドっていうのは、普通のウドとは違うんですか？

妻 ― 違うの。あのね、山のこう、ズリ「6」って言う、砂になって山が崩れているんです。その中にウドが出てくるんです。

S ― へー。

妻 ― だから、その中を掘って行くと、白いウドが真つすぐに生えているんですよ。今はトンネルで作っているでしょ、ウド、白いの。あんな風なの。それもね、自然の山のあれだから、香りがいいんですよ。全然違いますよ。

S ― 今はどう松木には生えていないんですかね？

妻 ― 今はどうね、無くなっちゃった。絶えちゃったの。みんな採りに行ったりなんかしてね、根をみんな持って来ちゃう人がいるんですよ。

S ― そうなんだ。

夫 ― 芽がいくらか吹いたから、

妻 ― それでばら、今度は山の緑が進んだでしょ。それなんであ

S ― へー。

妻 ― 粉になっちゃうんですよ。岩が弱って。それがそういう風に、ざらざらになつて。

S ― 岩が弱って、岩が更に砕けちゃうことなんです。

妻 ― そうそうそう。

S ― それって、危ないですよ？

妻 ― 危ないんですよ。

S ― ズルズルって、登っても滑っちゃいますよね。

妻 ― ズルって、下まで行っちゃいますよ。

夫 ― だから、行くとカモシカとかが落っこちて、死んでいることがありますよ。

S ― へー、カモシカがですか？

夫 ― カモシカなんか？

S ― へー。でも、人間もそこでウド採ったんですよ？

妻 ― そうそうそう。気をつけなさい。

S ― 気をつけて、その這って行つて？

妻 ― 這って行つて。

S ― えー、難しそう。

「お話を聞いて」

S ― 今の松木の様子と、岩が砕けるという表現で、初めてハゲ山がどういふものだったのかイメージできた気がした。偶然が上手く

重なり美味しいウドが芽生え、砂利山を這ってウドを採りに行く風景もあつたんだ」と、驚き。そして何より、本当に楽しそうに、美味しそうに話してくれたため、松木のウドを食べてみたかったと思わずにはいられなかった。

## 煙に慣れる

「2014年5月19日」Fa、Fb、Fc（Faの娘）、志村 中山

商店出身の幼なじみのお二人。町部「」からみた、銅山の社宅暮らしについて伺いした。現在80代のお二人の話に、片方の娘さんと私たちが加わり、昭和30～40年代の様子を思い出してもらおう。

S「ハゲ山についての話を伺うと、子供が山に遊びに行っても草が生えていないから姿がすぐ見えて安心したとか、煙が来た時に新聞紙を植物にかけていたというのも聞いたのですけれど、そういうのつてあつたんですか？」

Fa「そういう風にしないと。朝、煙が流れてくるんだよね。」

Fb「製錬の煙が朝に町部に来るんですよ。」

Fa「でね、みんなね、何か作り物をしている人は、みんな植物に新聞をかけたんですよ。」

Fb「新聞をかけたつてね、隙間から煙は入っちゃいますよね、それでもいくら違うんでね。」

かつたもんね。

Fb「茶色かつたもんね。」

Fa「そうそうそう。今行くと青くなっているでしょ？」

N「天皇陛下も青くなっているのを見に来ますもんね」[8]。

Fa「どのくらい青くなっているかをね。」

「お話を聞いて」

S「コンパクトに感じる足尾の中だけれど、住民同士の「同じ足尾でも」わからない場所があつたというのが住んでいる人の感覚のようだ。各地区で日常生活が事足りていたのだと思うし、煙が溜まる所と溜まりにくい場所がはつきり分かれていたんだな、と地図を見ながら想像する。」

N「足尾に来て、住民の皆さんからお話を伺ううちに、煙害がひどかった地域とそうでもなかった地域があるということがわかっていった。また、昔の写真を見ると、いかに足尾に緑が戻ったかがわかる。昭和30年に導入され、多くの女性が活躍した植生盤による緑化に関する聞き取りももつと行っていきたい。」

## 公害の足尾というイメージ

「2014年8月20日、M、志村、中山、好井、Pa、Pb」

公害に関して聞きたかったポイントは、①生活の中にあつた風景や感じたこと、②銅山従事者として公害にどう向き合い感じて

Fa「私もすっかり忘れていたけれども。」

Fb「花の咲いている人はみんなね、そういうのやった。」

Fc「私の小さい時の昭和40年代前半もやった。」

S「あ、じゃあ結構最近までのことではないんですね。」

Fc「いやあ、だいぶ前だよ、ハハ。」

S「やっぱり今の山の風景とは違うんですか？」

Fa「全然違う。あのね、町部はそんなことないですよ。」

Fb「赤倉、製錬の近所ですね、あのハゲ山見るとね。」

Fa「私ね結婚した昭和31年にね、嫁ぎ先の関係で赤倉に行つて1週間暮らしたんですけども、もう煙でね。初めて、同じ足尾にいてもね、もう真紫、煙が。もう喉が痛くて痛くて、いられなくてさ。1週間だから我慢していられたけれど、私、そうじゃなければいられなかった。で、あそこに住んでいる人はそれが普通になっちゃう。」

Fb「でも、赤倉に1週間いたんだ。」

Fa「1週間いたんだよ、お勤め、お勤め。ハハ。お勤めの意味でいたのよ。それでね、子供の時からそこにいた人はもう、平気ね。やっぱりその嫁ぎ先に住んでいた子供は煙が平気ですよ。やっぱり慣れちゃつてね。」

S「そういうのあつたんだ。」

Fa「だからあの辺の山はまるっきりのハゲ山。草一本生えていな

いたのか、の2点。閉山後も銅山関係で働いていた方と、足尾育ちの市職員2人も加わり、それぞれの経験を交えながら、昭和30年代から閉山あたりまでのことを思い出してもらおう。

S「私が足尾に来る前はどうしても教科書の「公害の足尾」っていうイメージが強くて、実際はどうだったのだろうと思って来てみたんですよ。煙が町に来た時に野菜とか、植物に新聞紙を被せたつていう話を聞きます。そういうことつて、子供の時の記憶でありますか？」

M「結局、もう煙がせめて来るつていうのはわかるんですよ。もう、あの、いると。」

S「えっと、それは煙に色とかがついているんですか？」

M「製錬の方から風に乗つて、うん。やっぱり植木なんか大事にする人は多分そういう風になつたんだと思うんだよね。」

S「やっぱりチョリチョリになっちゃう？」

M「あの、喉なんかやられたりなんか。うん。だけど我々が物心ついた昭和30年代はもうそういうのはなかったよね。だからその前が凄かったんだ。うん。だから通洞あたりは結局ハゲ山にはならなかったから。うん。」

Pa「たまたま山がガードになつているから。」

S「やっぱり本山に向かつてのエリアなんですよ」[9]。

**M** 田元交差点から本山の方は、そんなに酷い所はなかったね。  
**Pb** ーただ、やっぱり自溶製錬が31年に出来た「10」後の俺が小学校低学年の頃だから、その30年代の後半くらいには松原まで煙が来て。やはり喉が痛い、目が痛いというのが、そういう日が年に2、3回。  
**S** ーそういうじゃあ、年に2、3回のそういう煙が町部まで来る時っていうのは、例えば通常よりも多く作業していたとか？  
**Pa** ーガス抜きしていた。新聞にも載っているんだけど「11」。  
**S** ーちなみに他所から足尾を見ると、どうしても公害っていうイメージが強くなっちゃっていると思うんです。そういうイメージって、例えばMさんが働いていた頃には浸透してたんですかね？  
**M** ー別に従業員の中では、公害に対する意識っていうのはただもう。その、閉山になってからの方が騒ぎ始まったから、そういういろいろなこと。  
**S** ーあ、閉山以降に？  
**M** ーうん。閉山前っていうのはそんなに大きな騒ぎっていうのは無かったから。だから田中正造さんがどうのこうのっていうのは、閉山の頃の従業員っていうのは、そんなあれ持っていなかったから。その当時は。閉山になってから、いろいろな大きな騒ぎがだんだんだんだん出てきたような気がするね。そうだね、閉山前、そんなに大騒ぎしていなかったもの。

**Pb** ーそうですね。だからその煙、製錬の煙にしても、親父は製錬だったから別にその、「ああ今日は煙が酷いね」くらいの話しか。  
**M** ーないね。  
**Pb** ー会社が悪いとかそういう認識はないですね。  
**Pa** ーそれが日常だから。  
**M** ー我々だって、全然公害がどうのこうのって、全然その、考えたことないもん。もう、なんて言うのかな、地域に密着して住んでいるからさほどね、うん。大騒ぎしないけれども。逆に閉山になってからマスコミが騒ぎ始まったから、余計にそういう風になつてきて。  
**Pb** ー松木の山自体、Mさんにしても俺にしても、もう生まれた時から、  
**M** ーああいうんだから。  
**Pb** ーええ、いわゆる荒廃の、ハゲ山だったから。それが当たり前。  
**M** ーそういう感覚がないもんね。  
**Pa** ー山の絵を書けば皆茶色い色。……  
**M** ー「何騒いでいるんだ」って、最初は、ハハ。何でそんな大騒ぎするんだろっていう。ただね、下流方面でそういう風に大騒ぎしたっていうのは、そういうのはまだ耳に入っていないから我々には。うん、だからさほど、その公害に対するそういう考えっていう



上：松木ダム 昭和35年。下：早春の釣り。芝の沢の下の川  
 (伊東信撮影)



のは全然持っていなかったよね。これで食べてきたんだもんね。うん。ただ後からいろいろ話を聞くと、あ、酷いこともやったんだな、っう感覚はあるけれどもね。今はね。

Pa 一下流は水の害。鉍毒で、地元は煙の害。……

M 一まあ、とりあえず足尾の人間なんているのは、さほど公害に對しての考えは誰にしろ持っていなかったと思うよ。うん。

Pa 一でも、神子内川では泳いだけれども、渡良瀬川では絶対泳がなかったね。ハハ。

M 一だからそれはね、徹底している。それはね、足尾の人間はやらない。

S 一え、それはどういう理由からですか？

M 一結局、松木沢、久蔵沢と仁田元沢や、本山の出川が本山の横を通って流れて来ているだろ。であの、神子内川はあの渡良瀬の所で合流しているわけ。で、だからその渡良瀬の三養会の下の所では泳ぐけれども、合流地点はその公害関係の水が混ざっちゃっていることで、その下からずっとこまでは、

Pa 一誰も泳がない。

S 一そういうものだって伝わっていたんでしょか？ 親とかから教えられて、「じゃあ、その川で泳ぐのはやめよう」っていう風になっていた？

M 一向原の川の、川の近くまでは皆、川遊びしていたけれども、

渡良瀬川の近くはやらない。

Pa 一ダムより上は泳いでいた。

M 一そうそう。

S 一そうすると、やっぱり本山エリアの人たちっていうのは、まさに煙もだし、川の水も泳ぐのは控えなきゃいけない、となりますよね？

M 一だから、本山関係の人らは山を越えて庚申川に遊びに行くんだよね。

Pa 一舟石を越えて、旧林道。

Pb 一昔の写真を見ると、松木で泳いでいた子供の写真なんか結構ある。

M 一松木エリアにある松木沢、久蔵沢、仁田元沢の3つの川が流れている所で良く遊んでいたもの。

Pa 一あそこは、ゲートができるまで遊んでいましたもの。

M 一そうそう、魚釣りなんかみんな入ったんだから。あそこ。

Pb 一だから煙害はあったんだけど、河川の影響っていうのはそれほど無かったのかな。

M 一沢釣りの人は随分入っただろうね、子供はガラス箱とヤスでカジカやイワナ、ヤマメ釣りをして遊んでいたからね。……我々はただ、「渡良瀬川っていうのは泳ぐ所じゃないよ」っていう、そういう感覚は小さい頃から植え付けられているから。

Pa 一大黒橋の合流付近からが渡良瀬川って呼んでいたから。

D 一うん、そうそう

S 一じゃあ、神子内の方は違う？

Pb 一まあ、わざわざ渡良瀬川で泳がなくても、神子内川にしても内の笹川、そういう綺麗で淵のある川がかなりあったから。

「お話を聞いて」

S 一足尾に来た当初、町部から見える渡良瀬川は透明で綺麗に見えたけれど、「人が住んでいる所の水では誰も遊ばない」と教えてもらい、「足尾の人は、どんだけ綺麗な水で遊ぶんだ！」と驚いた。昔から教わっていた川の境目の話が、少しは今にも影響し

ているのかも……。公害について騒ぐつもりはないと言いつつも、

川の泳ぎ分けの例のように確かに生活の中での意識はあった。改めて公害を考えてみると、他にも何か思い浮かびそうだし、ずっと住み続けていると公害を立ち止まって考えることが難しいのかもしれない。

N 一住んでいると「あたりまえ」で疑うこともなく慣れてしまうことがあるのだと思う。自宅では電気、水道代がタダであったのだが「今でも時々水を出しっぱなしにしてしまう」という声を多く聞く。企業城下町であった足尾の人々特有の慣れは、奥が深くとても興味深い。

1 睦奥宗光の次男「潤吉」が古河市兵衛の養子になったことが縁で、睦奥宗光の別邸を柏木平に移築した。現在は残っていない。

2 「白い煙」が襲う。公害の原点。いまなお「朝日新聞」昭和46（1971）年10月1日金曜日 栃木県版。

3 高原木、安蘇沢など、足尾から中禅寺湖に向かうエリアなどを指す。

4 銅親水公園から松木エリアに向けての道には、足尾砂防えん堤上流工事用道路のゲートがあり、一般車両は通行禁止となっている。

5 昭和60年代くらいまでは、小学校の遠足は、松木から中禅寺湖までのピクニックが定番だった。往復8時間の道のり。

6 〆餅ずり。本来の意味は廃石のことだが、粗鉍を含めた発破で起すしたものの全般を指すようになった。〆村上安正「足尾銅山史」随想舎 2006年600頁

7 銅山関連施設のすぐ近くにある杜宅や三養会エリア以外の商店街エリアのことを町部と呼ぶ。赤倉、松原、赤沢など。

8 平成26年5月21、22日に天皇、皇后両陛下が1泊2日の日程で栃木県と群馬県を訪問。22日には足尾の銅親水公園や環境学習センターを訪れ、松木地区の緑化をご覧になった。

9 田元の交差点から松木に向かつて、間藤、赤倉などのエリアを指す。

10 昭和31（1956）年、「自溶製錬法」「電気集塵法」「接触脱硫法」を応用した脱硫技術を世界で初めて実用化し、従来に比べ亜硫酸ガスの大幅な排出削減に成功。

11 2の新聞記事のこと。

## 足尾小話「お客さんからの土産」

昭和20〜30年頃に子供だった方から見た、古河に勤めていたお客さんのお客さんの話。

**M** 一足尾では、水力発電を自前で持っていたわけだから、他からの電気を使わずに銅山運営やっていたからね。

**S** 一そういうような技術を駆使したことを足尾でずっとやってきたんですね。そんな風景で、生活にも染み付いていると思うんですけども、大学で足尾を離れた頃に、足尾の特殊性などを他所に行うて改めて感じられました？

**M** 一なんて言うんだろうな、足尾に集まった職員集団みたいな……。つまり、古河で働いている人は、東大卒とか旧帝大系を出た優秀な人たちがうじゃうじゃいたんだよ、いっぱい。私の子供の頃はね。うちの親父も古河で働いていたんだけど、そうすると、たまたまこの家にそういう人たちが酒飲みになんかよく来ていて。だからね、多分栃木県内では、当時の我々の子供だった頃の足尾の社会っていうのは、もの凄くハイソサエティだったと思うよ。俺は。

**S** 一きつと話している内容もそうなんじゃないかな。

**M** 一当然、で、連中は東京から来るわけだから、お土産に持ってくるものはね、子供がいっぱいいる家ていうのを知っているわけだ。それでその人たちが来る、ともうとても我々が目にしたことのないようなもの

のなんだな、お土産が。

**S** 一なんてすか、それ、例えば？

**M** 一例えば、私が今でもよく覚えてるのはね、鉛筆あるだろ。鉛筆1ダース。俺の名前が打たれているわけだよ。

**S** 一あ、なるほど。

**M** 一名前入りの鉛筆。

**S** 一あ、版が押してあつて金とかで名前が書いているやつですね。

**M** 一そうそうそう。あんなの、カルチャーショックだぞ。

**S** 一たしかに昭和20年代の話ですもんね。「凄いな」でありますよな。

**M** 一うん。それから、今はこんなのあたりまえだけれども、電気の湯沸かし器とかね、

**S** 一そういうの、当時もあつたんですね。

**M** 一この間、子供の家に行ったら電気湯沸かし器があつて「これ、お客さんすぐ沸くんだよ」なんてね。「こんな陶器のお皿に置くときすぐ沸けちゃうんだよ」って言うってたけど、あんなの俺たちがガキの頃にあつたよ。

**S** 一ハハ。でも、そういうのがお土産で……。へー、凄いな。

**M** 一で、だって我々が子供の頃、もうコーヒー沸かしで飲んでいたもんな。

**S** 一そうなんです、なんかコーヒーとか結構、どのくらいの世代だったかわかんないですけども、やつ

ばお酒落なものとか、結構貴重なものだった時代があつたということ、聞いたことがあるような。

**M** 一多分、私は昭和18年生まれだけど、その頃、まさしく小学校の低学年だ、ただだけれども、そのころに、バーコレターでコーヒー入れていた家なんてないぞ、あんまり。

**S** 一ハハ、凄いなあ。

**M** 一それはね、全部ね、そういう人たちが文化を持ち込んだわけだ。

**S** 一はい、そういう人たちがモノだけではなく、使い方や楽しみ方とか、そういうのを全部。

**M** 一それからそういう人たちが話している内容を、それとなく、こういう小さい家だから全部話が聞こえるわけだわな。全部。その内容のレベルの高さというかね。だから、そういう風土というのは、もう、その門前の小僧じゃないけれども、結局、染み付くんじゃないかな。自然と。

**S** 一なるほど。

**M** 一それと、今思えば、そんな人たちは足尾に来るのに東京から自家用車で自ら運転して来るんだよね。車種は何だったかわからなかったけど、時代から推測すると、ルノーかオースチン、あるいはヒルマンあたりじゃないかと思うんだけど。子供ながらに、そんな自家用車がうじゃうじゃ走り回っている東京ってどんな所なんだろう……、と想像を膨らませたのを覚えているよ。東京に一度行ってみてみたいですね。

## Q2 坑内ってどんな場所なのか？



観光用新坑口工事中出口  
昭和54年10月20日(伊東信撮影)



観光施設の足尾銅山観光「1」では全長1234メートルある坑道のうち700mが公開されている。その先は柵越しにライトを照らしながらごく一部を覗くことしかできず、現在の足尾しか知らない私たちにとって、坑内は遠い場所だ。「坑内には野球場くらいの広さの空間がある」「坑内で、奥に見える光めがけて進むと10分歩いても、その光にたどり着かなかった」などなど、足尾の人から耳にする坑内にまつわる話は、想像し尽くせない。今、実際に坑内で働いていた元坑夫さん「2」から直接話を聞ける機会は案外少なくなってしまった。

## 坑夫のお父さんの仕事

「2013年7月11日」兄、弟、志村、中山

昭和10年代後半に生まれ、昭和35年まで足尾で暮らしていたあの兄弟のお話。小滝坑に勤めていたお父さんの仕事について、当時の子供目線から覚えている内容をお伺いした。

S—お父さんに、坑夫の仕事を何か聞いていましたか？ 変な質問なんですけど、「仕事は大変だ」とか…。

N—やっぱり危険と隣り合わせ？

弟—どんな感じなんだろうね。私も自分の子供には、仕事の話 を全然してないからな。ハハ。

兄—出ていくんですよ。一日は間違いないで行っていましたね。「今日一日だって」言つて、いつもより1時間くらい早く出て、それでちゃんとお神酒かなにかをやるんでしょうね。見たことはないんですけども。

弟—それは坑内にあるんかね？

兄—坑内の入り口かな？ 坑内の入り口か何かに、ちゃんと朝、毎日一応はお参りはしているんだろうけれども、月一はちゃんとしていた。今日はお参りつて感じて、服装もちゃんとして行っていましたね。ネクタイなんかはしていませんでしたけれども。あの普通の人は、服装は鉱員だから作業服で行っちゃうんですけども、普通の服を着て行つたから。ネクタイまではいらないけれども、その日だけはちゃんと違うんだ、なんかね。

S—そんな話は初めてですね。

兄—月一、一日っていうのは僕は記憶にありますね。なんか、お袋なんかも弁当を作つたりするのがあるから、早くからやつていたみたいですね、そういうのは。

N—あ、ちなみにお弁当の内容っていうのはどうだったんですか？

S—やっぱり厚い弁当箱なんですか？

兄—あのね、薄くなるのはずっと後ですよ、足尾は。

弟—俺が知っているのは薄い弁当箱だったけれども。

兄—でもなんか楽しそうに、集まりがあつて、割とすぐに帰宅するっていう感じていたかね。そんなに締め上げられて働くような感じではなかったような気がするんですよ。……でもね、なんか働いている時間は短そうなこと言っていたね。坑内では長くは働いていられないと思うよ。朝から晩までね。本当にまともに働いたら体がもたないですよ、きつとね。だから、親父は結構喜んで働いていましたよ。……(省略)……余暇とか娯楽、夏の日の長い時は仕事が終わると野球、テニスを楽しんでいましたね。また、若者は柔道、剣道をしていましたね。用具も施設も整っていました。あとはやっぱり神様っていうのかな、足尾の人は山を大事にしていたみたいですね。月1回は親父も朝早

兄—あそう、俺の頃はやっぱりドカベンといわれるものですよ。でっかいやつで。ドカベンですよ。

S—それにお米とおかずなんですか？

兄—一緒ですね。

弟—思い出してみると、イカの塩辛を梅干しのようにお弁当箱の真ん中に埋めたおかずが大好きでしたね。

S—ちなみに、ちよつとネガティブな話になっちゃいますが、事故の情報は社宅にもすぐに伝わってくるものなのですか？ あんまり子供だったから記憶ないでしょうか？

弟—俺の記憶だとすぐわかる。外で遊んでいるとサイレンが鳴る。そうすると周りの大人たちが、わざわざわざわざする。すると誰かが、「あーだ、こーだ」って話になる。サイレンっていうのはね、毎日定時には鳴るんですけどもね、鳴らない時間に鳴る時があるんですよ。そうするとそういう落盤の事故なんですよ。兄—何回も聞いたことある。

弟—うんある。そんな話しよつちゅうある。しよつちゅうつか、まあ、あるわね。だから親父だつて部下の人たちにはよく言っていたらしいのですが、「下着だけは綺麗にしておきなさい」って。兄—何があつてもいいようにね。僕もそういう話はあつたけれどもね、直接あつたのは、僕の同級のお父さんが事故で亡くなった。その話はよく知っている。そこでやっぱり葬式。その葬式がやつぱ



り凄いで記憶にある。それしかないですよ。葬儀には、楽団のビッグバンドが入るんですね、ブラバンの。それだけは覚えてるんですけども。

S—その演奏はやっぱり、古河がやってくれたんですね？

兄—そうでしょうね。やってくれたんでしょうね。

弟—楽団っていうとそれ古河だ。

兄—事故の記憶といえ、それ一つしか知らないんですけども。

「お話を聞いて」

S—他の人からも教えてもらった葬儀の話題と通じる所がある。「下着だけは綺麗にしなさい」と声を掛け合ったり、山の神様を大事にしていたという習慣は、理屈どうのこうのを越えて、働いている人ならではの感覚や常識のように感じる。

N—葬式に古河の楽団が来たことに驚いた。足尾に来て、古河が手厚い福利厚生や文化活動を奨励したことをよく耳にする。付属の学校や病院もあったし、家や道路の修理まで行っていた。また、運動会やお祭にも力を入れ、それらの写真を見ると信じられないほどの盛り上がりを感じ取ることが出来る。

## カンテラの光

「2014年1月10日」M、志村、中山

坑内の道具の一つ、カンテラ「3」にまつわるお話。



通洞坑口前にて記念撮影 砂畑主婦の会 坑内見学（伊東信撮影）

S | 坑夫さん以外で坑内に行ったことのある人は少ないのだが、何人かの女性の方から見学に連れて行ってもらったという話もたまに聞く。

S—カンテラとか銅山の道具一式って、やっぱり皆さん自分のものを持っていたんですか？当時働いていた人は？

M—カンテラから始まって、途中でキャップランプ「4」になったから。カンテラを大事にして、ほとんどの家があったかしんないよ。だから、キャップランプになるまでは、みんなカンテラをつけて行つたから、山でもなんでも。男体山行くのでも、カンテラで行つたからすぐわかるんだよね、「足尾の人が来ているな」なんて。

S—えー。

M—もう、カンテラの光が違うから。「おお、誰だ、あれは？」って全然違うから。こうやって、山歩いていると、男体山登りなんて、「あれ、足尾の人か？」「あれ、本山のあれだよ」って。

S—光でわかるってすごい。

N—カンテラってどのくらいの光が出るもんなんですか？

M—あれね、火が出るでしょ？やっぱりそのままじゃ駄目で、やっぱり照り返していうんかね。

S—丸い部分のことですか？

M—それを、自分で作るんだよね。

S—へー、作るんですか。一人ひとり作るんですか？

M—自分で照り返してみたいのを作るのさ。それを作るには、電話のベルかな。電話のベルなんかを、ダンダンダンダンって叩いて。

S へー。

M ーそれが一番良いつて。それで磨くんだよ。真鍮磨きついつて。

S ー磨かなくちゃ駄目なんですか？

M ー鏡みたく磨かなくちゃいけない。

S ーちよつと見たくなる、その磨いている姿も。

M ーそれを自分らで、真鍮を丸く切つて、真鍮の板があれば切つて、トントントントンと叩いて突くの。それを、もう暇さえあれば外してこつ、中でも仕事の合間とかに磨くんだよ。それは自分のあれだから、だから、「何メーター先まで俺のは見れる」とか。

S ーやっぱり上手い人は、ずっと先まで見れるのですね。

M ーあんまり真鍮部分をでかくするとね、邪魔になるとかあるけれども。本当にね、バツと明るく、

S ー凄そう！

「お話を聞いて」

S ーカンテラが懐中電灯のように山登りなどでも使われていたことが面白い。自分で手直しも出来て、案外使いやすいのは。他の人も、カンテラの中に入れるカーバイトで火遊びをしていた、という話もよく耳にすることから、一般的な道具だったようだ。

N ー手作りのカンテラにはそれぞれ愛着や誇りがあつたよう。話にもあつたように、カンテラが使われなくなつてからも、ま

すよね。

M ー中には10人乗れるようになってるんだよ。

S ー10人も乗るんだ。

N ーエレベーターでの怪我、事故も結構あつたんですか？

M ーえー、落つたことあるんだよ。落つちやつて。

S ー落つちやつて。

N ーじゃあ、もうそうしたら？

M ー綱が切れて。

S ーえー、怖い。そうするともう全員ですよね。一気に本当に450メートルとか。

M ーそうね、最初に300メートル。そして、また違う所に150メートル下に行くから、450メートル地下。足尾ではそこが一番深いね。落ちちやつたのはたまたまだよ。ブレーキがあるんだけど、効かなかつたんだよね。落つちてね。

N ーえ、じゃあ全員お亡くなりになつた？ その事故の時は？

M ーいやあ、その時は一人くらいだったんじゃない？

S ーあとは怪我とかで？

M ーべつちゃんだよ。

S ーやー、怖いですね、本当に。…

N ー坑内での、300メートル下の熱さっていうのはどんなものですか？

た閉山になつてからも自宅で大切にしている方が多く、何度か見せていただく機会もあつた。

## 坑内の職場

「2014年9月18日」M、志村、中山

坑内の線路を作る線路夫だつた方のお話。閉山までの坑内の日常や感覚。

S ーなんかあの、銅山観光とかでは、エレベーター「5」みたいなやつを見たりするんですけども、あれに乗る時つて、振動だつたりスピードも結構早いですか？

M ー早いね。遅いのと早いのがある。

S ーあ、遅いのと早いのがあるんですか。

M ー場所によつて早い所と、遅い所がある。ケージの枠が見えるんだから、枠がくつついていて、枠が見えるわけだよ。

S ー結構怖くないですか？

M ー怖くはない。

S ー怖くはないんですか。へー。

M ー危ないんだよ、手なんか出していたらやられちゃう。だつて、手出ちゃうもん。

S ーですよね。本当にあの枠の中にピタッと収まつて動くんて

M ー足尾では一番下が、300メートルから更に150メートル下から合計450メートル。坑内の温度は34度はいつでも、湿気が凄んだよ。

N ーそうすると、仕事も何時間も出来ないですよ？

M ーもう決まつているから、時間で。長時間動くことなんて、出来ない、出来ない。で、俺らみたいに熱い所で働く時は7時間。普通の所は8時間働く。下は7時間で、手当がつくんだよ。だつて熱い所に行つて、下は7時間で、手当がつくんだよ。入つて、ただけ、歩く廊下の所には涼しさが届くんだけれど、作業の所までは届かないんだよ。

N ーでも、7時間ずつと、そうなんですか？

M ーいやあ、仕事をやってるのは12時半くらいまでだよ。それ以上はやらない。その後は飯を食つて帰ってくるようだから。飯を食つてそれで「ああ、帰らな」つて言つて、坑口に2時に出てくると、判座「6」をかけて、風呂に行く。

N ーじゃあ、え、ごめんなさい。出勤が何時ですか？

M ー7時。坑内関係は、朝7時から始まつて、熱い所で仕事をしている人は午後2時まで。2時までに坑口に出てくる。他の人は2時45分まで。

N ーで、7時から2時間くらい仕事をして、  
M ーまあ、それはもう、そういう感じで「ア」。

S いろいろ、移動とかもありますよね？きつと坑口に入ってくるのも。作業の場所に行くまでも時間がかかるものなんですか？  
M —そこは電車が出ていたでしょ、だいたい4キロかな、俺らがいた時は。4キロ。4千メートル。それで、帰りは歩くだろう？4キロ歩くだろう？

S —じゃあ、本当に、移動でも時間がかかりますよね。へー。

……(省略)……

S —いやあ、凄いなあ。全部人力で線路を敷くんですね、凄い。でもそういう人力で、例えばですけど、線路を坑内に1日で何メートルくらい作れるんですか？

M —いやあ、何メートルっていうことないよ。あれば。18尺のレールを半分に切ってから運ぶんだよね。じゃないと上がっていけないがね。

S —材料自体をつてことですね。じゃあ、そうやって材料自体を半分にして運んで、で1日作業をした場合って、例えばどのくらい？  
M —いやあ、……あれをだつて……発破かけたつて、1メートルくらいしか進まない。発破をかけると1メートル。線路の作業は、線路を半分の9尺にしてそれを担いで坑内に運んで行くんだけど、3日か4日作業を続けないと線路が入る大ききにならないからね。あとは、ズリをとる人が線路を「延長してくれ」って言えば、俺がそこに行つて延長するわけ。そうじゃなきゃ行かない、



昭和28年 朝の出動入坑(伊東信撮影)

俺も。とにかく裸だし、本当はおつかないんだけどね。熱くて

いられないがね。便所場もああい、どうしようもないよ、坑内だから、どぶ。どぶが流れているから、そこに小便でも何でもしちゃうんだから。下で顔洗っているんだから、

S、N —えー、

M —だつてしょうがないがね、分からないんだから。

S —全部一緒になつていんだ。

M —する所ないがね、あんな所で。

N —え、あのそういう下水っていうのはどういう？

M —掛樋「8」つて言うんだね、俺らは。掛樋つて、どぶとは言わないだよ。

S —でも、水はあれですよ、きつと坑内から染み出ている水とかもそこに流れているんですね？

M —そうそうそう。そういうのも流れている。で、飲む水は別にみんな持つて行くわけ。鉤車の中に水を入れたり、パイプで水を引いたりしているから、そういうのは大丈夫だよ。飲んだり食ったり。あとはご飯食うのは電熱器で熱せられるから。坑内の中が熱いから、パンツ一丁みたいになつて仕事をするんだよね。みんなね、熱いのが分かっているから。こんな長ズボンなんか着ていたら、動けないよ体が。

S —汗で多分濡れちゃつて動けないですよ、服が。へー。そう

なんだ。

……(省略)……

S —坑内での事故の話も聞くのですが、事故つていうのは知らないうちに酸素が無くなつていたとか、そういうことですか？

M —酸素がないんじゃない、ガスが発生するんだよね。ガスが、ガスで死んだ人もいるし。あとは落盤つてつきものだからね。落盤。

N —一番多いのは落盤事故が多いんですか？

M —そうだろうね。落盤は多い。そういう所にあんまり行かないけれどもね、落盤。

S —そういう、例えば落盤事故とかにあいやすい危険な職種はあつたんですか？例えば、最前線の進鑿とか。

M —進鑿は進鑿。発破かける専門だから。余計なことやらない。絶対に、もう。それで、支柱さんは枠を作るから。水や、鉄管は水が専門。俺らは線路が専門。だけど、やっぱり頼まれて手伝うことがあるんだよね。「今日は悪いけれども、手伝つてくれ」て。それで一人で夜中に坑内に行ったことがあるよ。一人で入つて行くんだから。一人で坑口から4キロ離れた所に歩いて行つて、300メートル地下へ、下へ降りて行つて。それで切羽「9」へ行く、地下へ入つて仕事やつてくるのさ。

S —一人で、その暗い所に入つて行くのつて、怖くないですか？



M「怖いと思ったことはないよ、ハハ。怖いと思ったことはないね、それは。ただ、嫌だなんていうのは」「こ、昨日人が死んだんだな」ていう。そういう所には行きたくないよな。そんな訳でね。」「こで、死んだんだよ。昨日」なんて。そんなのあるよ。

……(省略)……

N「1回こうやって坑内の方からのお話を聞いて、いろいろ想像はするんですけども、やっぱり絶対見てみないと分からないものですよ。そういう地下300メートルの様子っていうのは。」

M「は、経験しないと分からない。あの坑内が、300メートルか、3キロになっちゃうと、地震つてあるだろ。坑内だと地震じゃなくてね、盤ぶくれ」[10]。

N「盤ぶくれ？」

M「坑内に座っていると、盤ぶくれの衝撃の風で持ち上がっちゃうの。ポカンと。凄いからね、あれ。」

S「え？じゃあ、座っていると風でフツと、体上がるっていうことですか？」

M「飛ばされて、線路を引いたやつがみんな壊れちゃうから。ぐちゃぐちゃに。」

N「はー。」

M「また仕事をやらなくちゃいけない。」

S「大変だ……。」

M「それと、俺らはもう、「絶対、坑内では口笛を吹いてはいけない」て言うだろ？」

S「それは、どうしてなんです？」

M「山が怒るって言うんだよね。山が暴れる、って言うんだよね。事故が起きる。何かそういう話は聞いたよね。赤い着物は駄目だとか。」

S「それは、事故の時の赤い毛布を連想するから？」

M「なんでも赤いのがいけないって。口笛は駄目だとかね。響くんだよね。」

S「ふーん。あそっか。坑内の中って静かなんですか？」

M「静かだよ、何にもないよ。」

S「なんにもない。」

M「だけど、閉山後にポンプが調子悪くなると頼まれたんだよ。「悪いけれど、ポンプ見てきてくれ」なんて。それで、一人で行って歩いたけれど、何かあの掛樋、どぶね、坑道の脇に水が流れている所。そこを歩いていると、カラカラカラカラ音がする時があるんだよ。そうすると、電気の球、あれが引つかかっている時があるんだよ。カラカラカラカラ。気持ちよくはないね。」

S「ちよつと怖いですよ、ね、なんか。」

M「ああ、「ここの人が死んでいるんだよな」って思っても、あんまり気にしない。そういう思いは一杯あるね。」

「お話を聞いて」

S「サクサクと感情的にならずに話してくれた印象。事故の話や、一人で暗い坑内に入って行く所も、誇張せずに淡々と話しつつけてくれていて、それが余計、実際に仕事をしている人の感覚のように感じた。」

N「坑内の話は迫力があって、まるで異次元の空間が広がっているように感じられ、まさに想像を絶する。熱気、蒸気、爆音、爆風、さらには盤膨れ……。そんな死と隣り合わせの世界での仕事をわかりやすく説明して下さった。」

1 足尾にある主要坑口のひしうてある通洞坑の一部を利用して作られた坑内を見学できる市営の観光施設。

2 「坑夫」という言葉は「スコミ」ては用語言い換えて、「坑員」「坑内作業員」と表記するが、この冊子では現地の人が使ってきた言葉をそのまま掲載している。

3 カンテラ オランダ語 (Kandelaar) プリキまたは鉄板製容器に油を入れて、灯心を灯した。(村上、前掲書、611頁)

4 キップランプ (Cap Lamp) 頭上灯。ヘルメット前面の引掛金具にランプを固定し、光源との間はゴム管やキャブタイヤでつないだ。光源は腰のバンドに固定する。(村上、前掲書、611頁)

5 垂直に開鑿した坑道で、運搬、排水を目的にした大立坑を、ケージと呼ばれる稼働屋根と鉄骨構造のエレベーターのようなもので移動する。

6 判座はんざ 作業員の出入退勤を示す就業票。(村上、前掲書、614頁)

7 改めて一日のタイムスケジュールを伺ってみると次の通り。7:00 坑口に出動し判座をかける。↓坑内の作業場まで移動する。↓9:00 作業場に到着し、作業を行う。↓12:30 作業を終わらせ昼食をとる。↓13:00 坑口まで移動する。↓14:00 坑口に到着後、判座をもらって風呂に入て帰宅。

8 掛樋(かけひ) 坑道の側溝。(村上、前掲書、60頁)

9 「切羽(きりば)」。切場、切端とも書く。坑内作業場のこと。(金属鉱山研究会編集、「鉱山用語集」、東甲社、1976年、17頁)

10 盤ぶくれはんふくれ。坑道の側壁が地圧により歪み、開さく当時の坑道断面にくくく開さく空間にふくらんでくる状態をいう。側壁崩壊などが発生しやすくなり、坑道保持ばかりではなく保安上大きな問題となる。(金属鉱山研究会編集、前掲書、19頁)

### 足尾小話「坑内でのユーモア」

「坑内のな〜んか、見逃しているんだよな。ユーモアがいろいろあつたからな。」と振り返る方から、坑内のある場面を教えてもらった。

**M**「仕事が始まって坑内に入つて行くと、誰かが「俺なんか風邪気味だ。調子悪い。胃の薬くれ」なんて言つてな。「胃の薬飲んだらポット持つてくるんだわな。」なんだお前、ここにあるポットに入っている水を飲めばいいのに、それ飲まないんか」なんて聞いて。坑内には、小滝の方からわざわざ水を引いてあるんだけどね。「いやあ、あれだから、胃冷まして飲んでいるんだよ」なんて言つてその後「薬飲むからその水くれやうてさ。ハハ、その水で薬飲んでさ、「いや〜これは風邪に効くよ。いっせんに直ちやうな」つて言うんで、おかしいと思つていたら、中に酒が入っているんだよ。」

**S**「え〜ハハ。水じゃないんですね。」

**M**「水じゃない、酒だよ。どうか行つた時に飲むんじゃないか、酒持つていておいて。言わないんだよな、周りから。「後で気をつけろ」なんて言うんだけどもな。「言うなよ」なんてな。「係員やみんなに言うな」つて。「じゃあ今度俺も持つてきて風邪薬飲むべ」なんて言つて

**S**「ハハ、へー。」

**M**「だから坑内の中にもデタラメがいたり、頓知が利くんだよな。やっぱり飲んべえはね、なかなか上

手いよ。坑内の中でもわかんないよ、喫飯所だつてさ「あれ、このくらの筒のあれがあつたよな〜」なんて言つてな。「あのプラスチックの鉄管みたいなあれ、持つてきてくれや」なんて言つて、開けてみたら一升瓶が入っているんだもの。「あれ〜」なんて。

一同「ハハハ。」

**M**「喫飯所の端っこに隠しておくんだ。「ここなら見つかんない」なんて。「あそこ」一升瓶入つていたよ、飲んでたよ」なんて。みんな知恵を出してな。それと、つかい薬缶があつて、係員が回つてきた時に「何だこれ、何か煮ているのか？」なんて聞かれて。ヤカンで煮ているんだよ、芋煮たりしているんだよな。係員が来て鍋なんてかけていたらわかつちやうがね。

**S**「その見回りに来ている人は監視に来ているんですか？」

**M**「課長、局長とかあいうのが、ほら、一箇所だけじゃないから、坑内を回つていて「みんないるかな？」と見るんだよ。「苦勞さん」なんて。そういうデタラメやつているから。ヤカン煮た時はお汁粉だとかね。坑外にいた時も「おお、お汁粉だ、お汁粉だ」つて言つてな。

……（省略）……

**M**「そういう坑内のユーモアな話だとかな「中はこうだったよ」つてわかる組夫の人も今はいない。まず組夫だつて、秋田からも来ているんだから。いろんな人がダーつて来るから仕事で機関場に入つてもわか

らないよ。仕事中にその人たちが「ナンギしているから」つて言つていて。「なに？ナンギしている。なんだい？そら？」なんて、九州の人がさ「運転手さんナンギしている」なんて言うんだよ。したら、車ひつかけたりなんかあったんだべ。そしたら大変だべつて言うんで、て「難儀している」つて。でも、その言葉がわからないんだよ。ハハ。

一同「ハハ……、

**M**「で「難儀しているつて、なんか困っているんだべ」つて、なんとか方言で一生懸命しゃべっているんだわ。で、「難儀している」とか、こつちも「ん？はつきり？」つて。この、言葉が上がつたり下がつたりするのも違うし。鉤車のことも秋田では箱と言うから「箱がなんかした」と言つていたから、そういうのがわかんなかったり。

あとは、どぶのことを、掛樋つて言つたり。その、あればあるんだよ。やっぱり向こうの人らも、向こうにある鉤山で働いてきたんだべ、でも鉤車のことを箱つたり、「大変だ」と言うのは「難儀している」と言つたり、「困っている」で良いのに。京都弁みたいなやつとか、そういうのは「何言つているんだよ」つて。だけど、聞いているとわかるんだよ、何かあつたつていうのは。だから、「とにかく、そこへ行くか」つて。ハハ。そういうあれがね。聞くと秋田の人だったから。訳を聞いても、いっせいち秋田弁で言われても……。

一同「ハハハ……、

### Q3 杜宅の暮らしって、どんな生活だったのですか？



私たちの職場足尾総合支所の周りには一軒家や中層住宅が建ち並んでいるが、このエリアも平成10年頃までは社宅が並んでいた。当時の写真には、びっしりと黒い屋根の社宅が集まっているが、信じられない程の人の多さが際立っているような印象を受けた。現在でも足尾内の限られた場所ではあるが社宅が残っている。共同浴場、共同水場、共同トイレのことや、役職によって社宅の造りが異なるなど、町で会う多くの昭和生まれの方は何かしらの思い出や経験を持っていて、社宅暮らしはそんなに昔の話ではないことに気づく。

### 鶏小屋にみえる

〔2013年11月26日 夫、妻、志村、中山〕

平成8年から始まる通洞社宅解体まで、社宅暮らしをしていた元坑夫さんに色んな話を聞いてみた。社宅の暮らしの話題になった時に、少しずつ奥さんが話に加わってくれた。

夫—ただ、同じ古河でも炭鉱の社宅の造りと、足尾みたいに面積のない所での銅山社宅の作り方の違いがあるのはわかるね。もしも足尾に広々とした土地があるんだったら、13戸並び9戸並び、6戸並びの建物が連なっているような社宅っていうのはあり得ないよね。だから、閉山後の銅山観光オープン時に他所から訪

ちはしないですよ。そういう話はよく聞きましたよ。

S—そういう話はあったんですか？

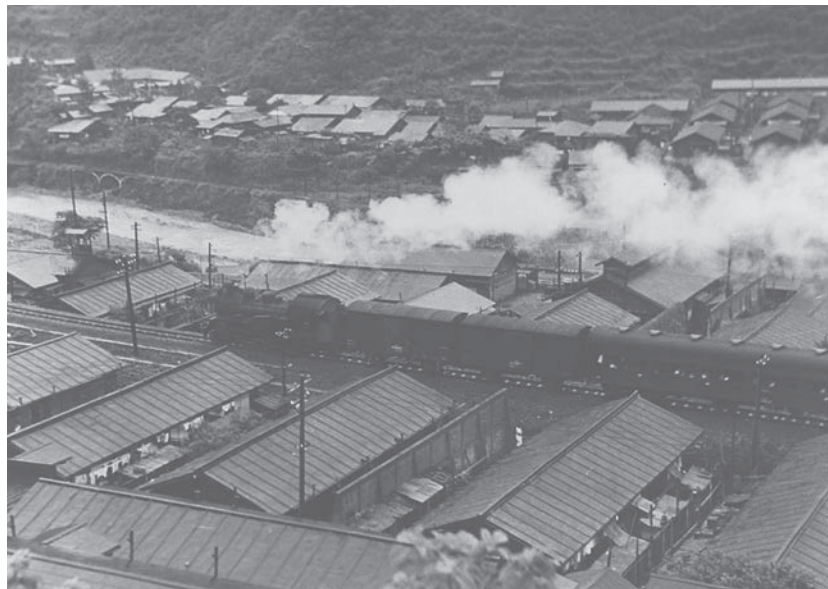
妻—そういう風に、鶏小屋のように見ちゃうんですよ、他から来た人たちは。

夫—銅山観光オープンの時は大間々方面に行く途中にね、養鶏場があるんですよ。そうすると、その養鶏場が言われてみれば、社宅のような形で並んでいるのね。だから、初めて足尾に見学に来てわ鉄の車窓から町を見ると、社宅がそう見えちゃったんだらうね。段違いに並んでいるから。

妻—足尾は線路沿いもみんな社宅でしょ、平屋で全部社宅だからそういう風に見えますよね。それに、1棟が長いでしょ。本当に1棟に5軒も6軒も世帯区分されている。私たちが渡良瀬にいた頃は1棟9軒並びに入ったこともあります。それが一番長かったですね。あとは5軒並びとかね。もう4軒とかいろいろですけれども、場所によつてね。狭い所はやっぱ長く作れないから短かったりね。だからね、そのくらいあれですよ。鶏小屋の方が幸せだよ、あんな綺麗な所に住んで。ハハ、酷いでしょ。

夫—そういうふうには、言ったってね。ショックだけだね。

妻—だってね、本当ベニヤ板で隣と仕切っている造りで、仕切りぞいに家具を置いていてね。隣の声は聞こえるし。隙間風は入るし、フフ。今思えばね、それが懐かしくてね。



昭和28年 中才社宅及び砂畑一部（伊東信撮影）

れた子供が、わ鉄〔1〕に乗って足尾に見学に来た時に「わし、鶏小屋だ。なんでこんなに鶏小屋があるの？」と不思議がっていたと話を聞かされた事がありましてね。確かに言われてみれば、子供心にそう映ったのではないでしようかね。鶏小屋と同じように見えたんだろうね〔2〕。……それだけに貴重な銅山社宅なんだですね。私の様に社宅育ちの者からすると違和感が無いけれど、当時訪れた人たちには心打つものが大きかったと思います。

S—その社宅の様子が珍しかったんですね。

妻—鶏小屋だってね、電車の車窓から見る感じでしょ。まあ、他にもいろいろ社宅が見えますけれども、もう社宅がびっしりあるわけですよ。鶏小屋とかね、もうそれを聞いて私たちも良い気持



S ― ああ、そうですね。

妻 ― 今のようない般的な一軒家に入っちゃうと、本当ですよ。声は聞こえなくて、ちよっと寂しい感じがしていますよね。昔はね、隣で何かあったり、何かあれしていると声が聞こえたりね、人の話が聞こえたりしますけれども。今はもう、サツシになっちゃうと静かなもんです。夏場なら網戸にしていれば聞こえますけれども。ハハ。

「お話を聞いて」

S ― 最初は旦那さんがお話をしてくれていた中で、社宅の話題になった時に奥さんが話に加わってくれたのが嬉しかったし、印象的だった。女性の方が社宅にいる時間が長いから、より話題があるのかもしれない。鶏小屋と表わされることに「いい気持ちがない」とはつきりしながらも、話しているうちに社宅の賑やかさや不便さに対して、親しみを持って懐かしんでいるようだった。

N ― 今ではだいぶ少なくなった社宅も過去には町にびっしりと軒を連ねていた。当時の写真やお話からそこにあった生活を想像すると、現代が失ってしまった大切なものがあるように思われる。



共同水場（伊東信撮影）

夢のような近所付き合

「2014年1月10日」夫、妻、志村、中山

社宅エリアでの人とのやり取りの様子など、風景が思い浮かぶように自然に話してくれる。一方で、当時の人付き合いなどを話していくと当時と今の生活の違いに気づいていくように話が進んだ。

妻 ― 社宅の中では今日あったことみんな知っていますよ。

S ― 社宅の皆さんがですか？

妻 ― 「今日こういう事故があった」って、みんな。

S ― それは人づてとかで？

夫 ― もうなんでもすぐわかる。そこらに共同風呂があるから、誰々が入院したとか、誰々がどうしたとかね。あとは、丁度子供を産んだ頃に、親の自分が風呂をひいちゃって子供だけで風呂に入れないから、「誰か連れて行ってくれるけ？」って頼んで「はいはい」って。「誰か子供を風呂に入れてくんねえかな、母ちゃんが風邪ひいてしまっ」って言うとおばさん「はいよ」なんて子供をお風呂に入れてくれた。だから、今考えると夢みたいだな、って。

妻 ― そういうあれはあるわね。

夫 ― だから、知っているおばさんが「ああ、任せておけ」って子供



S | 現在残る社宅エリアの一角。手前の砂利道にも奥に写る造りと同じ社宅があったのだが、住居者がいないため平成26年に入ってから建て壊された。

を風呂に入れてくれてさ、そしたら違う人が子供を連れて戻してくるんだから。だから風呂に入れてくれる人と、着物着せる人は違うんだ。赤ん坊なんて平気だよな、そのくらいね。

妻「やっぱり楽しかったですよ。あれがね、人との交流がね。」

夫「交流がね。」「どうした、どうした」って「誰々が入院した」とか、どうか。「大変だ」とか。

妻「今、本当に新聞でも読まなくちゃ。」

夫「新聞読んだって、近所の人が何やっているのかわからないんだから。本当にわからないんだから。」

妻「市営住宅だつてね、同じ階でも数件の人にしか行き会わないでしょ。」

夫「だから近所の人が何やってんかわからない。始めはこんなんじゃないかったんだよな。」

妻「始めはなんだかんだ。」

夫「そのうちだんだんとな。」

妻「で、今なんか誰が入院していて、誰が何処に行ったかわからない。まあ都会並になっちゃったのかな？」

夫「ハハ……。」

妻「社宅があつた時には、もう絶対に鍵なんて閉めないですよ。」

夫「そうだよ。荷物だつてさ、宅急便とかの荷物が留守だったから「隣置しておきました」だったからね。」「Mさん、いなかったから

隣置いてきたよ」なんてさ。

妻「言っていた、置いて行っちゃうんだよ。でも今はお隣に「荷物頼んでも良いですよ」って言うけどやつてくれない。だから、それだけやっぱり違いがあるんだね。」

夫「まあ手が回るから、（〇さんこういんだよ）って、昔はそういう風に「預けてきたよ」なんて言つてね、」

妻「干し物なんか、雨降つてるとみんな仕舞つて、」

S「近所の人が、あ、確かにそういう、洗濯物のことも……、」

夫「そういうんだつたし、なんか。」

S「あー、なんてなんでしようね。」

夫「なんてなんだかな。」

妻「今はもう鍵がかかっているから、入つて行くこともできない。ね、大変なことになっちゃつて。」

夫「ピンポン押すと、「誰ですか」なんて。直接来た方が早いって思うんだよ。そうするときは「誰ですか」なんてやっているから、「俺だ」なんて。」

妻「だから今みんな鍵を閉めていますよ、一人で暮らしている人は。私らは鍵を掛けていないけれども。」

夫「鍵掛けているんだよな……。」

妻「そうして、鍵を二重に掛けている家もあるしね。」「ちよっとお待ちください」って言われて待つてつと、

夫「鍵を開けきんない。」

S「開けるのが、大変になっちゃうんだ。」

夫「それが、最近来た人じゃないんだよな、昔からいる人なんだよな。その人がそうやつてんだからたまげるよな。」

妻「何、お宅鍵を二重に掛けているの？」って。……（省略）……干し物だつて何だつて雨に濡れたつて構わないつて感じだから。」

夫「この前も下ずぶ濡れになっちゃつてな。布団なんか取り込んでやりたいけれど、余計なことして怒られちゃうのよな。大声で「雨降っているぞー」って言つたよ。」

S「ハハ。」

夫「でかい声出してさ、「いるんけ、いるんけ？」って。」

S「へー、本当にそういうことは変わっちゃったんですね。」

夫「他の地域でもそうなんかな。」

妻「どうだろう。変わったんかね。わかんないけど。……昔はやっていましたよね、「お茶飲みしよう」って言つてね。」

夫「昔は家にあがつていった、喧嘩つけんだよな。」「わー、あれ、あがれ」なんて言うのと、すぐ焼酎出してさ、ハハ。危なくてしょうがないから。」「一杯だ、一杯だ」なんて言うのが、夕方になると「今日はMちゃんが来たから」って言つてさ、今度は焼酎こんなに入れてさ、「もう、飲んでくれた」って言つてさ、飲んでくれたつて喜んでさ、だからもう……、時代が変わつた。時代が変わつたつて言

うけれども、相当違うよね。人が生きていれば同じなんかもしれないけれどもね、年寄りの人が変わったなつて思うよね。」

妻「でも、あの一人暮らしの人は大変ですね。みんないくら認知症ができていますね。まあ、私もそういう、通る道になつているんでしょうけれども。」

夫「通つているよ。俺は、「おー」なんて言つて電話かけるけれど、こちにきて「あれか、あれか、名前知らねえわ」なんて覚えてなかった。」

S「でも他の方も、人との近所付き合いが無くなったとおっしゃっていました。それで、一人暮らしの方の孤独死の話になつたのですけれど、たまたま散歩していた時に電気がずつとつけばなしたつたんです。それで、近所の人に聞いてみても「今朝は見たよ」と言うことだつたけど、ずつと電気はついてた。それで、やっぱりそこのお家の方が亡くなつていたらいいのですけれども。だから、ちよつと声をかけることが出来なくなっているんだなと思つて。……（省略）……」

妻「だからね、なるべく声かけるようにしたいんですよ。だけれどね、やっぱり年寄りの家に行つて良いんだか、悪いんだか、わからないんだよ。あの、お金が無くなったとかね。そういうのあるからね。」

S「あー、そういう風になっちゃうんですね。」



露路 砂畑社宅 (伊東信撮影)

S | この写真を見た方が思い出したのは、飼い犬にはスピッツが人気だったこと。(写真に写るのはスピッツ系の雑種かもしれないけれど) 閉山直後には、足尾から引越した人がやむなく飼い犬を手放すケースが続出し、町には捨てられたスピッツが多かったという証言も。

夫「お金が無くなっちゃったとかで、そこに置いておいて、忘れちゃったと言っても認知症だから、後であつたなんて言ってもな。「誰かさんが来たからお金無くなった」って言うのが一番おっかないから。「どうしたよ?」って行けないんだよ。」

S「うーん、確かに。」

夫「お金、やっぱりボケなんだよな。お金あれしただのがわかんなくなっちゃうんだから。「鍵、鍵、鍵」なんて言ってる探しちゃうんだから。だから、ね。そういう「あー、あの人はあれかな、あの人はいるのかな、いるんかな?」とか、そういう風にしか思えないんだよな。」

S「うーん…。」

妻「「見たよ」なんて言う人もいるから「あ、じゃあ大丈夫だね」って言うけれど。最近は家を通りかかて、あの人もいるなとかね、夫「本当にね、考えちゃうと本当に忍びないな。「昔みたいなのがな」って言う人がいるけれど、本当に…。」

妻「昔はね、「なんかいたけー」なんて言ってる入ってきちゃうの。」

S「ハ、戸を叩かないで?」  
妻「「いたけー」なんて言ってる、「はい!」なんてって。そうすると、家の中まであがつてきちゃう。」

夫「違うもんな。「母ちゃんいるか?」とかね、そういうんで、ああ。まあ現代のあれにしてつけど、一生懸命喧嘩しないように、

あれしないように。

「お話を聞いて」

S「「夢みたい」な社宅の近所付き合いの話をしてながら自然に今へと話が広がった。話し手のお二人も「そういえば、今は違う」と改めて気づいていく感じだった。「昔は近所付き合いが強い」、「時代が変わった」という考え方は知識として知っているつもりだったけれど、この話にある豊かな生活感や人とのやり取りがまるつきり変化して寂しいような、もったいないような、自分はその生活感とは違う所にいるし、戻ることも出来ないんだなと感じた。」

N「明るく話す話し手のお二人からは、寂しさを強く感じた。同時に、実際の付き合い方が変わってしまったても、近所を想う気持ちは変わらない方々もいるのだと思った。」

## 部屋の広さ

「2014年8月19日」夫、妻、志村、中山、好井

会社の社宅は、役職によって条件の良い所に引越をする仕組み。現在も社宅で暮らすご夫婦に、今までの引越経験などをお伺いする。

Y「社宅の広さっていうのはどのくらいなんですか?」



夫— 広さはね、会社の役職によって変わりますね。古河さんは。

Y— 社宅の中でもそういう違いがあるんですか？

夫— あるんですよ。最初は6畳、3畳で、6、3畳の部屋の他に  
お勝手が2畳ぐらいあったんですよ。

Y— 6畳と3畳と、お勝手が、

夫— お勝手は2畳です。それが鉦員の最初の社宅なんです。それで、その2畳の所にお勝手があるんですけども、水道は引いていなくて、共同トイレで共同浴場なんです。だから渡良瀬社宅に今でも残っている共同水場と共同浴場があるから、見て行った方が良いでしょう。ここにしかもうないですから「3」。もうここしか残っていない、あとは全部壊しちゃったから。社宅は今言ったような6畳3畳の広さの所もあるし、6畳6畳になったりもします。職場での立場が上の方に行くにつれて、変わって行くんですね。鉦員さんから、その次が現場の係員、まあ主任くらいで、その上の会社という、総合職の一番、総合職までいかない下の係長くらいになると、その上になって、副課長になるとまたぐと上に行つて、で、会社のある程度になってくると、玄関があつてお風呂場があつてということなんです。だから、私も最初に入つた時は、家内とこの6畳3畳の社宅に入つたんですよ。それで、何年か勤めてから、内便所でお勝手も家の中にある社宅に入ることが出来ました。

妻— 2回目の引っ越し先には水道が入っていましたが、昭和50年頃には社宅もほとんど水道が家の中に引かれていましたね。

夫— それで、部屋の大きさが6畳6畳くらいか。

妻— そのくらい。6畳6畳くらいで、お勝手が3畳くらいですか。引っ越しのたびに、少しずつ大きくなっていくんですよ。

Y— そこはもう水道が入っているんですか？ 家に？

夫— その時は入っていましたね。それでその後はもう内便所のある所で、6畳6畳、4畳半か。それで廊下があつて、まああったんですよ。それでそこにしばらくいて、今の社宅に越したんですよ。それから今の所にずっと住んでいます。そこはね、8畳6畳、4畳半の、玄関があつてお勝手があつて、お風呂があつて、それに廊下。廊下が結構広いんですよ。4尺廊下だから結構広いんですよ。

妻— で、庭があつて。結構庭が良いので満足しています。

Y— あの、掛水倶楽部で公開していますよね。所長の「4」、

夫— 役宅ですね。役宅にも一般管理職から所長宅までですが、あそこは所長、副所長宅、参事宅です。

Y— その落差にすぐくびくびしたんですよ。

夫— そうでしょ、だから課長宅なんかは、重役役宅の前の方にあり、一般社宅と違う所は風呂がついているくらいかな？ ただ、屋根が瓦だったりするから向こうの方が立派かなと思うんだけど

ども。ほとんど掛水の方は本社採用の社員のキャリア組の入る所なんです。役宅のうち、掛水倶楽部でいくつかを公開していますけれど、女中部屋とかあつてすごいんですよ。あれは古河独特ですよ。

妻— 所長とか、あと会社の付属病院がありましたからその院長。副院長、そして先生たちが入ったので結構広いんですよ。Y— いやあ、だからね、今の部屋の数とか、仕事のね配置で家が変わつてくるとかもそうなんですけれども、基本的にそれって男性の理屈じゃないですか。で今話を聞くと、家庭会「5」というのもあるということですが、その奥さんたちの中ではそういう差はあつたんですか？

妻— だいたいいです。ないですけども、内面では「あそこのお家では、係長だから」「あそこのお家ではヒラだから」っていうあれはいろいろありましたよね。

Y— そういう話を聞きたい、ハハ。

妻— ハハ、まあ怖い。ハハ、そういうのはありましたけれども、まああまりいざこざとか、今ドラマやなんかでやるようなああいうのはなかったですよ。

夫— 個人差はあるけれども、極端にはないですよ。あそこは課長さんの奥さんだから多少はあつたけれども、むしろ組合員の奥さんの方が元気よかったです。

妻— あの、結構活動しましたよね。私たちはね。それで主婦の会つていうのがありまして、労働組合に旦那さんが入っている人が

主婦の会の会員になるんです。結構いろんなリーダーとかありますし、閉山の時とかは本社まで交渉に一緒に行ったり。ハチマキをして行ったりしました。

夫— 社宅などでなくて差をつけているかと言うと、一生懸命やらせようとして差をつけているんですよ。一生懸命やれば、

Y— 目に見えていくわけですね。

夫— そうそう。それで、一般鉦員さんからだいたい総合職になるのは、本社採用の総合職と、下から上がつてくる総合職では全然違うけれども、下から上のはせいぜい、いっても副課長くらい。まあ、運よくいつて課長くらいですよ。だから、あの20代の時に一生懸命やつて30くらいで職員にならないと、遅くなっちゃう訳だね。だからみんな一生懸命やつたと思うよ。そういう会社の仕組みだと思うよ。

「お話を聞いて」

S— 社宅は外から見ると、実際に中に入ってみるのでは随分印象が違ふ。今回のご夫婦が現在暮らす社宅は、少し高台の場所に立地していて、居間から綺麗な庭も見えてとても住み心地良がさそう。また、銅山の職種（地元採用、本社採用、坑内、坑外）の違いは、いろんな人に聞けば聞くほど、細分化していて同じ銅

山の仕事でも全く違うようなので、全体の組織がどうなっているのかも今後気にしていく必要がある。

N「実家のマンションで」どちらが上の階でどちらが下だ」だと

か「あそこのご主人は官僚で、あそこはこの会社の重役だ」といった噂があることを、ふと思い出した。ある意味どこの世界もそこは同じなのかなと思った。

- 1 旧国鉄足尾線のこと。群馬の桐生駅から足尾の間藤駅まで繋がっている鉄道だが、昭和62（1987）年の国鉄民営化の影響で、足尾線も廃止の対象となり、それを阻止するための乗車運動が展開された。2年間の東日本鉄道会社による運行を経て、平成元（1989）年からわたらせ渓谷鐵道として運行している。
- 2 他の方からも、社宅を鶏小屋と言いつわられていたと聞く。一方で、足尾に住んでいる一部の人はハモニカ長屋とも呼んでいた。
- 3 この時、現在残っている共同浴場、共同水場を案内してもらう。当時のままに残っているのは渡良瀬だけ。現在も住居として利用されているため、一般の見学はできない。
- 4 掛水倶楽部に隣接する役宅。
- 5 労働組合員の奥さんの集まり。



中国人殉難烈士慰霊塔除幕式 式典のようす | 昭和48（1973）年7月30日（新井常雄撮影、栃木県立文書館所蔵）

## Q4 戦時中、外国の人とどんなやり取りがありましたか？

聞き取りでは、戦時中の暮らしについて尋ねることが定着してきた。特に聞き入ってしまうのは、外国人捕虜、朝鮮人労働者、進駐軍と足尾の人たちとの関わりの話。例えば、小滝坑エリアには造りが異なる中国人慰霊塔と朝鮮人供養塔がある<sup>〔1〕</sup>。が、私たちは中国や朝鮮の方と足尾がどのように関係していたのかも最初は知らなかった。慰霊塔を見て初めて当時足尾に来ることになった人たちの存在を認識し、聞かせてもらった当時のやり取りから、戦争の影響により足尾に来ることになってしまった人たちについて想像するようになった。まだ、日本に来ることになった方の視点は圧倒的に足りないが、今後聞いていきたい。

## イモとコッペパンを交換

〔2014年4月15日〕M、志村、中山

第2次世界大戦中に学生だった方の当時の記憶。農家だったので一般家庭よりも食糧に困らなかったため、食料を分けるやり取りがあったようだ。

M—今の高等学校のグラウンド跡や、砂畑の橋を渡った所の左側に砂畑の寮みたいなお所ありますよね、あそこに白人捕虜収容所があったんです<sup>〔2〕</sup>。あと、かじか荘に行く途中に小滝の里がありますよね、あそこちよつと行った場所に斜め左の所に沢があるのですが、そこにも中国人が収容されていた<sup>〔3〕</sup>。あとは、本山

M—私の家にも食糧を求めて来ましたよ。日本語が上手な人がいましたけれども。それと、そこらへんに生える草があつてね。それを食べられると知っているから、みんな摘んでね。それでノノヒロツて知っていますか？らっきょうみたいなのがなっている草です。「それ採っちゃ駄目だぞ」って言っただけで、みんなむしって盗んで行く。でもね、黙っていたけれども子供だからね、「採るなよ」って言ったら採らないかなと思つたら採るので、石なんか投げたことあるね。

S—ああ、そうですか。

N—あの戦争中、戦前も戦後も含めて、やっぱりみんなが食糧難だったじゃないですか。その中でも、特に外国人の人は日本人よりも食べられなかった？

M—食べられなかったですね。日本人は、良い人は特別にいますけれども、悪い人もいます。その頃はあの、野路又のグラウンドの所に収容所がありまして、珍しいから当時子供だった私は、その囲いがしてある収容所に行つたんですよ。そしたらその柵越しに収容されていた人と話したんです。その方が「私は、中国人で収容されている者なのだけど、あのイモが食いたい」と言っただけですよ。「サツマイモとか、そういうのを食べたいんだけど、あなたの所にありますか？」と聞かれたので、家に買い出しで買ったサツマイモが少しはあつたから、「ある」と言つたので、

坑など何箇所か分かれてね、選鉱でも働いていたんですよ。みんな中国人とか、今の韓国ですか、朝鮮人もああいうのも戦争の流れで働きに来たり、鉱石のああいうのを、

S—分別したり？

M—選鉱なんかをね<sup>〔4〕</sup>。だからあの頃、砂畑あたりは朝鮮人の人たちの家族がいて食べ物がないから、神子内まで野菜をとりにきましたよ。

S—買いに来たってことですか？

M—そう、お母さんは子供を腰にくくりつけてくる。日本は背負うでしょ？向こうは腰につけるんだよね、綿をちよつと出して。

S—じゃあ、ちよつと違うっていうのが見た目でわかるんですね。

うちのお母さんにそのことを話したら、「気の毒だから、持つて行つてあげろ」って言うから、昔の鞆にサツマイモを入れてさ、1貫目<sup>〔5〕</sup>くらい収容所に持つて行つて同じように柵の所で会つて、渡したもん。そしたらその人が「ありがたい。ありがとうございます、ちよつと待つていてください」って油パン。

N—油パン？

M—油パン、コッペパンっていうのかな、同じ。パンを油で揚げるんですよ、それをくれましたよ。

N—へー、なんか温かい話ですね。

M—それで「お金なんだけれども、これ」って、竜がっているお金を1枚か2枚くれました。それでパンは12、3個くれましたよ。

N—へー、そんなに。

M—沢山貰つて帰りましたよ。「ああ、ああいう人がいるんだな、ああいう所に入つてきてかわいそうだな」と思った。あとはその、日本人で親切な人がいたんですよ。砂畑の人で親切で、帰りに自分の食べ物の残つたものをあげたみたいですね。連合軍、オーストラリアの人とかそういう人にもくれたみたいですね。それで、終戦になった時に、連合軍の飛行機が飛んできて、タバコとかそういうのを落としたんです<sup>〔6〕</sup>。捕虜の人に落として行つたわけ。それで、捕虜の人たちはそれを貰つたら、「世話になった」って良くてれた人にタバコとか何やらを分けたんだよね。



「お話を聞いて」

S 一戦後直ぐにバラシユートで捕虜の人たちに嗜好品が落とされたという話は、他の方からも聞くことができ、戦後の一つの共通する風景だったようだ。また、別の複数の方から、捕虜の方に對して親切にした、酷い扱いをした話も聞くが、それらの場面が話題に出た時にどう反応しているのか分からずとにかく聞き入ってしまう。

N 一戦時中や戦後、また外国人捕虜や朝鮮人労働者の話を、実際に経験した方々から、足尾に来たことで、人生で初めて何うことができた。様々な意見や見解があり、議論が尽きないテーマではあるが、少なくとも、語られるそれぞれの事実を知ろうとする努力が今の若者に必要なんじゃないかと、若者なりに感じた。

豊かな知恵を教えてください

〔2014年7月1日 夫、妻、志村 中山〕

戦時中の暮らしを教えてくださいのために、小学生だった当時の食糧事情について尋ねた。朝鮮の方とのやり取りの話になる。

S 一やっぱり戦時中もけれども、戦後も大変な時期が続いたんですよ？

夫 一合の米にさ、水を10倍、一升入れてさ、ドロドロにして。

……（省略）……

夫 一だから、戦後はタンパク質が摂れないがね。肉と豚肉とかそういうのがないから。結局ネズミ獲って、ネズミを料理して食う人もいるし。

S 一ネズミ？

夫 一蛇を捕まえて蛇を料理して食べるとかね。

S 一そんなことしてやったんですね。

夫 一千葉県とかそういうところの農家へ行くとき、栃木県もそうだけども。農家に行けばカエルとかいろいろいるけどさ。俺そういう農家っていうの知らないから、足尾っていうのはそういう知識が無いがね。見ればハゲ山で、ススキカスカンボ<sup>8</sup>しか生えていないようなね、痩せた土地だから。結構、ネズミとか蛇はいっぱいるからね。蛇を捕まえたりさ。

S 一ネズミを食べるっていうのは初めて聞きました。

夫 一ネズミ食べたよ、食べなくちゃ。それもやっぱり食べる知恵を教えてくださいのは朝鮮人なんだよ。

S 一そうなんですか？

夫 一結局強制労働で足尾は随分朝鮮人がいたから、うちの隣も朝鮮人の家族だったけれどもみんな教えてくれたから。うん、「生きていくんだったら、タンパク質が必要だよ」って。当時はタンパク質なんてそんな言葉は使われないけれども「食わなくちゃ駄

S 一あー、おかゆとも言えない感じの？

夫 一そこに今度はイモ、サツマイモのあれを入れてさ、で塩を入れて、それですって食ったんだから。

S 一あー、そうなんですね。へー。

夫 一で、俺の弟なんてみんな栄養失調で死んだんだから。

N 一あ、そうですか。

夫 一母親が死んじゃったろ、ミルクは買えない、母親がいいるからおっぱいも飲めないから。うん。で牛乳だって、ここからだ横根山<sup>7</sup>の牧場まで買いに行ったんだけどね。何回か行っただけどもね。

S 一歩いてですよ？

夫 一歩いてだよ。赤ん坊に飲ませるために。母親が子供を産んで、すぐ死んじゃったからね。「子供には牛乳が良い」って言っていたんだけど、やっぱりね、赤ちゃんには牛乳は良くないんだよね。今はそういう風にわかるんだけど、昔はねそんな風に知識がないがね。牛乳飲ましたらみんな下痢しちゃう。腸を悪くしちゃうからね。だから結局重湯、米のない時代に重湯の上澄みを砂糖入れて飲まして、だから栄養失調になっちゃうがね。今なら、ビタミンが栄養だって、みんな認識したけれども、昔はビタミンもミネラルもそんなの分からないがね。とにかく腹きつくなれば大丈夫だろう、どうにかなるだろうっていう頭だったから。

目だよ」って。うん。早く言えば、生物。「生き物を食べなくちゃなんないべ」って言われた。「生きているもの食べなくちゃ、生きていけないんだから」って。

S 一ちなみに、ネズミって捕まえて、皮とかとってどうしたんですか？

夫 一結構美味しいんだよ。

S 一切って？

夫 一骨だってカラカラに焼いて、美味しいんだよ。

N 一俺、結構なんでも食べたことあるんですけども、ネズミはないです。

夫 一ハハハ。

N 一俺、犬もウサギも蛇も食べたことあるんですよ、カエルもある。

夫 一カエルは美味しいんだ。だから終戦、昭和21、22年頃っていうと、みんな舟石<sup>9</sup>行くと結構野生のウサギが一杯いたんだよ。そういうのを仕掛けて獲ってきて食べたりにしてね、うん。

「お話を聞いて」

S 一「朝鮮の人が教えてくれたんだから」と、改めて感心しながら話してくれたのが印象的。そして、その時にやり取りした相手の朝鮮の方がどんな人なのか知りたくなった。

N 一外国人に対する印象も人によつて違うのだと思う。この方のように近くに住んでいた朝鮮の人から知恵を得た方もいれば、あまり外国人と接したことがなかった方もいるのだと思う。

ただ、今回のような異なる文化を尊重する態度は学ぶところが多い気がした。

### 近所の人や進駐軍との交流

〔2014年7月7日 夫、妻、志村、中山〕

小学生だった頃に丁度戦争になり、鉄道を使って食料の買い出しをしていたという方のお話。子供目線で様々な場面を見ていたことがわかる。

夫―だからここの人でもほら、朝鮮人の人が砂畑に住んでいたろ。俺は朝鮮人の子供らの友だちん所にしょっちゅう遊びに行ってたから。同級生で、「お前の家に遊びに行くど」なんて言ってさ。すると瓶から食べ物を出すんだよ。

S―え？瓶から？

夫―瓶。瓶からさあ、今でいえばあれだね。

N―キムチみたいなの？

夫―ああいうところに漬けておくんだね。「うまいの食わせつか」って言うのと、今でいうキムチなんだよな。ああいうのを出してくれたり。「お前の家、瓶一杯あるな」ってやつていたんだから。

S―あー、なるほどね。瓶ごと引越して来たんだ。

夫―うん。こういう小さい瓶なんてあったんだよ。それで、一回

火事があった大変だったて友だちの家に飛んで行ったらさ、そうしたら瓶を渡してよこすんだよ。「出してくれ」って。

S―え、瓶を？

夫―ハハ。瓶とかね。棚みたいな家財道具じゃないんだよね。そういうのの中に、衣類だつてちゃんと箱に入っているんだよ。だから出してくれって。もう壺で持ちやすいものになっているんだよね。あの、だからほら、ああいう朝鮮はほら、あつちが攻めて来たり、こちが攻めて、何が来つか分からないんだってね。だから、本当に、パーってやつて持つてやつて。

S―あ、すぐに逃げられるように？

夫―逃げられるものを壺にしまつておくんだって、後で聞いたらね。だから火事の時には壺を渡して「とにかくこれ出してくれ、おっ欠くな」なんて言って。

S―瓶をこうやつて、バケツリレーみたいに？

夫―渡しながらか中身の音を聞いて「金じゃねえなあ」なんてね。火事で2、3軒燃えちゃったんだけど、お母さん、お婆さんらに「なんか持つて行つてあげられるものないけ？」って聞いて「ほら、これとこれ持つて行つてやれ」なんてさ、やつぱり持つて行つたことあったよ。「ありがとう」なんてさ。……（省略）……それで、その子が朝鮮に帰る時に家に来てね「お礼に来た」ってさ。だけど中には朝鮮をいじめた人はさ、足尾から先に逃げちゃうんだよ



S | 白人捕虜収容所跡地周辺の現在の様子。“[米国国立公文書所蔵資料]に記録されている野路又の捕虜収容所の資料には、『1943年11月10日、東京捕虜収容所第8分所として、栃木県上都賀郡足尾町野路又に開設。1945年8月、第9分所と改称。9月閉鎖。使役企業は古河鋳業足尾鋳業所。捕虜はトラックで製錬所に通って作業に従事した。終戦時収容人数245人(米210, 英32, 他3)、収容中の死者24人。』と記されています。”(大吉利一郎、『足尾町野路又にロマンを求めて』、栗野印刷、2013年、78頁)

ね、ほらいじめられたから、「あの野郎」なんつてね。でもわざわざ、「もうそろそろ、朝鮮に帰るから」なんて言って「あれしてください」なんて来てくれた。「子供らと遊んでくれてありがとう」なんて来てくれて。だから懐かしかったよね。

S「その帰ったっていうのは、終戦後すぐのことですか？それとも、月日が経ってから？」

夫「終戦すぐだね、もう暴動みたいなのが起きて、あれしちゃうてしょうがないんで、あれが来たんだよね、アメリカ人。アメリカ軍隊が。小学校に泊まって鎮圧していったんだよね。外国人捕虜などの人たちが暴れ回ったんだよね<sup>10</sup>。だからもう逃げたり、それでそのうち、ほら、朝鮮系とあれとで押さえたり何なりして。だからほら、当時外国人を使っていた人たちはみんな逃げちゃったんだよね。ほら、坑内あたりで、「この野郎、ふざけんな」なんて言って使っていた奴は逃げちゃった人がいるんだよ、いっぱい。いじめた奴は、S「何されるか分からないから。」

夫「だけどやっぱり仲良くタバコなんて目の前でパバってふかしてさ、ベツて置いて「じゃあな」なんて言つて。そうやって吸わしてやつた、そういつた奴なんかは今度は帰る時に逆にお礼に来ているんだよね。「お世話になった、班長さん」って。班長さんて言うんだよね。「班長さんにいろいろお世話になった、班長さん優しかったから」って来てね。家の親父の所とかに来てさ、だから終戦になっ

妻「みんな落っことす。

S「タバコとかそういうの？」

夫「落下傘で。」

妻「私もね、家の近くに落っことしたんで、取りに行ったことあるの。ちいちゃい時に。そうすると知らないから開けちゃうのね、中にチョコレートがあった。」

夫「そういうパラシュートで荷物が砂畑とかにね、パーって落とすだろ。それで目的地に落ちればいいけれども、こっちの方に落っこちちゃったりするんだよ。そうすると収容所の管理の人が「駄目だ」って言われつけど、後になつて「探してくれっか？」って言つて探してくんのさ。

S「どのくらいの大きさなんですか？」

妻「そんな、あんまり大きくなかったよ。」

夫「落っことす時はこんなでかい箱で落っことすんだよ。」

妻「私が覚えてるのは小さいの。」

S「で、パカって開けると中にチョコがいっぱい？」

妻「チョコ、チョコがいっぱい。」

夫「だからでかい飛行機で来るんだよ、大っきい。で、ワーッと来てポッと落っこちるんだよね。そうすると、目的地に落っこちないで風で流れちゃったりすると、山の中に落っこちちゃうんだよ、ダーンって。そうすると凄いなだよ取りに行くのが。「お前ら行っ

て、その暴動が起きてちよと収まってもう帰るつて頃になつたかね。もう、びっくりしたんだけど、豚でもなんでもぶつ殺しちゃうんだよね。牛までぶつ殺しちゃうんだから。バケツ山盛りに「肉持ってきたよ」なんて持つてくるんだから。ハハ。

S「へー、凄いですよ、ごちそうですよ。」

夫「班長さん」なんて言つてさ、「肉持ってきたから」なんてさ。

「犬じゃなかンべな」って言うのと「豚殺したから」なんて言つて。ああいう、みんな長屋で豚でもなんでも殺しちゃって食っちゃうんだもんね。だからそういうの言われて、「見に行くんべ」って言うて見に行ったこともあるもん。ハハ。見てみると上手いんだよね。豚なんか、バーッとネットかけて、こんな変な道具でバリバリバリバリ毛とっちゃってね。

N「動物を飼っていたんですか？」

S「屠場があったのかな？」

夫「いや、買い出しがなんかに行つて、ああいう所から買ってきたり。あれしたんじゃないかな。そんな屠殺場でもないんだよね。

……（省略）……

S「それと、終戦直後に外国人捕虜収容所に嗜好品が詰まったパラシュートが降ろされたと聞いたんですけれども、ご記憶ありますか？」

夫「ほら、飛行機がどんどんどん来たから。で、落下傘で。

てくれ、取りに行つてこい、手伝つてくれ」って言われて探しに行つた。で貰ってきたことある。だから落下傘の生地やなんかも「こ

んなのいんないから、みんな持って行け」って、みんな生地を切つてくれるのさ。凄い生地なんだよな。だから「リュックサックにする」と良い」って言つてみんな、同じ様な色のリュックサックを背負つてな、ハハ。笑ったんだよ。

S「へー、そんなこともあったんですね、面白い。」

夫「布をくれたんだよ、お礼に。「持つて行くか」って聞いて切つてくれて。だから進駐軍が来た時はもうそこであれしていたから、おいらの所こようやつて呼んでさ、その時初めてソフトボールとかさ、一緒にやるべつて言つてさ。」

S「え、進駐軍がですか？」

夫「うん、あの時」ああ、ソフトボールっていうのはこういうのなんだな」ってさ、ほら野球じゃないんだって。こんなにでっかいボール持つてきて、進駐軍が「野球知っているか、やったことある？」って言つて。「ソフトボール」って英語で言つて、一緒にやったことある。そしてお礼にチョコとかをくれた。で「貰つて良いのか、先生？」って先生に聞いたら「貰つて良い」って言うんで。で、学校に年中遊びに行くとき、ソフトボールとかやらせんの。ボクシングとかさ、あれ2、3回やるとへたばつてさ。ハハ。だから進駐軍が来た時にはみんな面白いことやったり、一緒に色んなことやったりして和や



かだったの。でも先生はなんか「あんまり貰わないでくれ」とかなんとか言っただけでも、「仲良くするんならいいよな、しょうがないよな」って言ったの。だから遊びにいったよ、年中。進駐軍のあそこ、学校へね。

「お話を聞いて」

S 一少し違う家の中の壺に気づいたり、パラシュートを探しに行く楽しさなど、子供目線だからその感覚。背の高い毛むくじや

らの進駐軍に驚いたとも言っていた。ネガティブな要素だけではなくて、純粋な変化に応じて新しい人や文化に入り込んでいく明るさも凄いと改めて思った。

N 一戦後の進駐軍と日本人との関係についての話は特に興味深かった。欧米人に初めて接する子供は、大人よりも無邪気に交流することが出来たのだと思う。異文化とふれあうこととなった当時の興奮が話し手の語りから伝わってきた。

1 小滝坑エリアには中国人捕虜収容所（興亜寮）跡と、朝鮮人供養塔・専念寺小滝説教所跡がある。

2 野路又の白人捕虜収容所には245人、砂畑の白人捕虜収容所には213人が収容されていた。参考：米国立公文書館所蔵資料。

3 興亜寮と呼ばれた中国人捕虜収容所には257名の人々が収容され小滝坑内外で働いていた。

4 昭和一〇年九月当時の足尾の従業員は、職員四六八、鉱員四六八七、臨時鉱員一四四一、計六五九六名で、全部日本人でしめられたが、昭和一五年から朝鮮人労働者がおもに坑内の運搬夫として使われ、一七七年からは、勤労報国隊や学徒動員の人たちが選鉱製煉を中心にとら入ってきた。（村上安正編『足尾銅山労働運動史』、足尾銅山労働組合、1958年、178頁）

5 3キログラム

6 足尾の複数の方から聞く話。資料でも、砂畑と野路又の白人俘虜収容所の屋根には、白ペンキで「P.W」マークが描かれ、せまい山あいを縫ってアメリカの飛行機が急降下し医料品や食糧などを落下傘で投下してつい先ごろまで「足尾は山の中にあるから、爆撃したくても山にぶつかってしまうので、絶対空襲はうけない」と安心して足尾町民の度ぎもを抜いた。村上、前掲書『足尾銅山労働史』、189頁などの記述がある。

7 足尾と鹿沼の間にある高原地で、開拓農家などがあつた。

8 イタドリのこと。

9 備前楯山の中腹の本山と銀山平の中間地に位置するエリア。

10 戦後の暴動に関しては、各証言や先行研究で様々な説明がある。足尾の方から聞く話では、戦時中酷い扱いを受けていた労働者が、終戦直後に意地悪をした人を探しまわったという内容。資料では、帰国の促進を求めるデモ行進や補償要求の交渉などが行われそれらを暴動とされることがあつた。参考：村上、前掲書『足尾銅山労働史』。村上、前掲書『足尾銅山史』。古庄正『足尾銅山朝鮮人強制連行と戦後処理』駒澤大学経済学会「経済学論集」第26巻第4号、平成7年3月。

— Q 5 — キラキラした石、見つけたのですが……

足尾に来たばかりの頃、鉱物の置物が観光施設や商店などに飾られていて、それなりに銅山らしさを感じていた。しかし、予想を上回ったのが各家庭に置かれる鉱物の有様。「友だちに貰った」「昔集めたのを持っている」「何処の家にもあるがね」など、いろいろな方法で手に入ったらしく、どここの家庭にもと言っているほど何らかの鉱物は見かけるし、庭先に放置されている(転がっている)ことも……。よそ者にとっては感激してしまうのに、「そういえば、家にもあるよ」と棚に埃まみれになって忘れ去られていた水晶の塊を見せられると、今でも山道などで拾えるピカピカした石(水晶などが混ざった鉱物の破片)を見つけて喜ぶ自分が恥ずかしいような、大人げない気持ちになる。

## 鉱石のような菓子

〔2013年7月11日〕兄、弟、志村、中山

昭和30年代に小滝で幼少期を過ごしたこちらのご兄弟は、トロコ遊びや、町の様子など楽しい話題で盛り上がる。鉱物の方も、「そういえば……」ということとで「瞬思い出してもらった」。

S 一足尾の人のお話しを伺うと、綺麗な鉱物を家の中に飾っていたという話を聞くのですが、そういうご記憶はありますか？例えばこういうの拾ったんですけど。〔1〕

兄 一の凄く、いっぱいありましたよね。こんなどこにでもありました。

兄 一「こんなもん」なんて感じて。鉄鉱石とかね、金色の、石の部分が無いんだから。100パーセント鉱石。

弟 一「綺麗だな」と思うけれども、それほど値打ちがあるとは思わないから。

S 一それが普通だったんですね。

弟 一多分持ち出し禁止だったんだろうな、今思えばな。それ親父なんか持ってきて、どこの家にもあったからな。ハハ。こんなでかいの、家の中に入らないだろうけれども、

兄 一だから駄目だと言いがら、堂々と持ってきていたんだろうな。本当にどこの家にもありましたよ。

弟 一あとは、足尾のお菓子屋さんでもそういうお菓子を作っていたもんね？鉄鉱石の形をした砂糖の塊(54頁参考)。本当にお菓子だか石だか分からないくらいいの。六方石みたいなのとか、

兄 一緑色のとか。

弟 一確かに、あのお菓子もどこで売っていたんだろうな。

兄 一間違いないあった。

S 一それは飴ですか？

兄 一板菓子、砂糖の固まった、板になっていて。

弟 一でもたぶん甘いだけなのかな？ハハ。

S 一よく食べていたんですか？

兄 一たまにお土産とかで貰って食べていましたよ。丁度なんだろう

S 一あし、そうなんだ。

兄 一黄銅鉱とか磁鉄鉱とか、もっとキラキラしているものとか。今言ったように、水晶とか六方石とか。引っ越しの時に全部捨てちゃったけれども。握りこぶしくらいの塊とか、大きいのだとリュックサックくらいの塊とか。六方石とかを、床の間の飾りもんにしていました。

N 一いいなあ。

弟 一確かに床の間にでつかいの、あつたような気がするんですよ。確かに床の間にいっぱいあつた記憶があります。水晶だな、きつとね。ポポポポで白い刺がき。小さいながらも立派だなと思っただけれども、どこ行っちゃったんだろうね。ハハ。

う、氷砂糖のようなものですね。

弟 一そうだ、氷砂糖だ。硬かったものね。

N 一他に足尾で作っていた製品というか、今は無くなっちゃったけどな、っていうお菓子とか何かありますか？

兄 一足尾は何もないんだよね、

弟 一何もないんだよね、そう言うのと寂しくなっちゃうけれども。

〔お話を聞いて〕

S 一全体の話の中では鉱物の話題は一瞬だけだったけれども、確かに記憶にある(そういえばね、という感じで)。私の見つけた鉱石のクズは、本当に「こんなもん」で、とても敵わない。ちなみに、鉱物のお菓子は残っていないが、現在の足尾ではあんこ玉や足字銭最中がある。

N 一鉱石を引っ越しの時に捨ててしまったということに驚いた。よそ者からすると「もったいない！」と思ってしまうが、足尾では人によっては「ありふれている」もので、そこまで固執しなかったのかなと思う。

## 喫飯所で鉱石を洗う

〔2014年3月5日〕夫、妻、志村、中山

社宅暮らしの話題の合間に、すかさず鉱物について聞いてみる。すると、別の部屋から鉱物を持って来てくれた。



鉱石菓子 銅の花 包装紙 (提供: 安塚菓子店)

S | 当時のお菓子の説明文には、「銅の花は足尾銅山から産出する鉱石を表現した砂糖菓子で真に鉱石を思わせる足尾の代表的な御土産品であります。銅山の主要鉱石の黄銅鉱とそれに伴って産する石英(六方石、水晶)方解石などを配して形とった作品であり、原料には砂糖菓子と白ざらめを使って加工したものであります。……お召し上がりときは、よく破砕していただき足尾の話でもしていただければ幸いに存じます」と記されている。お店の方の記憶では、昭和30年代から閉山時には確実に販売されていたが、いつしか作らなくなってしまったとのこと。

夫 一何の鉱石だってさ、もう良い鉱石なんてみんな持つて行っただよ。鉱物を家に飾っていた人が一杯いたんだよ。そして、飲み代にみんな売っちゃったとか、家にも親父が持つてきたでかい、こんなウワーってのがあったんだから。だけど、「飲み代にしちゃうべ」なんて言つて、ハハ。「また拾うから」なんて言つて。だから一番持つて行つたのは、他から出稼ぎに来ていた……、

N 一組ですよね。

夫 一〇組が来たもんだろ、その親父さんがそういう鉱物が好きだから買ったんだよ。

N 一買った？

夫 一閉山の前にもうほら、「あそこに酒代に持つてけよ」なんて、初めはおじさん、「いやー、俺が買うから」なんて言っただ。

S 一その鉱物をですか？

夫 一鉱石。だから、そこが今どういう風になっているんだか知らないけれども、みんな。

N 一〇組さんはもういないですよ、

夫 一いいないない。飲み代に持つて行っただよ。

……(省略)……

S 一へー、でもそこで集まった鉱物が、どっかにあるんですかね。お仕事していた時に、綺麗な鉱物とか見つけたりしたんですか？

夫 一うちの仕事は坑内じゃないから。だから手のひらくらいのなら、持つて来て箱に入れて飾つておいて置いておいたよ。

S 一あー、そんな話羨ましい。良いな。足尾に来てから、鉱物があることにびっくりしたんです。

夫 一うん、だから、棚のどこかに入っているかもしれない。だから、ああいふ所に、一つくらいポツンと置いてあるんだよ。(本当に、居間の戸棚に入っている)

N 一あ、本当だ。

夫 一昔、貰つてきて。

S 一本当だ、黄銅鉱と、なんか銀色のもまじっていますね。

夫 一そんなの、もう本当に普通でね。みんな喫飯所では凄いのを持つて来て、水場でキャッキャッキャって磨いてさ。水場に置いておくとさ、鉱石が無くなっちゃうんだよ。ハハ。

S 一へー、誰か持つてっちゃうんですか？

夫 一「お前、また誰か持つてっちゃったな」なんて言うときさ、「いいや、また良いの見つけてくらあ」なんて。初めはもう閉山が決まったら、みんな「記念に持つて行くんだ」つて、そういう。初めはそんな鉱物に振り向きもしないで。

……(省略)……

S 一それで、一つ質問があつて。その、坑内からおっきな石を運んできたなら、バレないかなと思つたんですけれども、



夫「バレちゃうがね。だから面白いんだね。ほら、組夫でもなんでもさ」「持って行けないから、ここに置いてくよ」って言って喫飯所に行くでしょ。「持って行けないから、○さんここに置いてくよ」って。ここに置くんだよ、夜番だと帰っちゃうがね、「明日、置いててくからな」って言うのと無くなっちゃうのさ。そうすると「○、誰が持っていたんだろうな」なんて、「あの野郎、きつとあの人しかいねえ」なんて言って、そこに置いてあるの。そうすると、「貴様この野郎」って、なるんだよね。

S「ハハ、そういうことになるんだ。」

夫「うん、「貴様、この野郎」って指差されるんだよね。「坑内にあるうちは古河のモノなんだけれども、外に行くと俺のモノだわ」なんて言ってね。「この野郎」なんて喧嘩になって。

S「そうなんです。喫飯所では、どんな風に鉱物が置かれていたんですか？」

夫「支柱さんだとか、車夫さんだとかが休む場所があるんだよね。仕事して、ご飯食べたり。そうすると「おう」って言って入って行くわけさ、「飯だ」なんて言って、すると水場があつてそこに飾ってあんのさ。

S「飾つてあるんだ。へー。見てみたかったな、そういうの。」

妻「ハハ。」

S「どういふ風になつていたんだろう、喫飯所の中に置かれてい

るというのは。

夫「いいな」ってなるがね。「いいんじゃないかな」なんて言って水で洗って飾っておくんだわな。だから、手のひらくらいの鉱物はもう本当に。

S「いっぱい？」

夫「めずらしくないから、持って行かないんだよね。」

S「あ、当たり前だから？」

夫「当たり前だから、「うん、まあまあだな」なんて置いて行くがね。「おう、これ貰うぞ」なんて言うのと、「ああ、持てけ」ってそういうんで。だから、手のひらくらいの石、あそこで横になって埃だらけになつていけるけれども、詰めて、木箱作って置いておいてね。

妻「でも閉山後、みかん箱って、リング箱とかの木箱つてあるでしょ、木の。それに鉱石が一杯あつたの。」

S「あ、その、いろんな綺麗な鉱物がですか？」

妻「うん、閉山までは、家にリング箱2つくらい、鉱物があつたの。そしてね、どっから学生が来るの。研究だとか、何とか言って。みんなやつちゃうの。」

夫「ほら、もう引越すんでさ、そんな重いもの持って歩けないから。」

妻「で、「この家に行けば、あるかもしれない」って、誰かが教えたんだよ。」

S「あ、いろんな人から聞いて？」

夫「鉱石とかなんとか見たいんですけれども」なんて言うがね、そうすると「ああ、向こうに行ってみろ」なんて言って。「○さんの家つて聞いて来たんだよ」って。そのうち、鉱物を見て「これはあれだね」なんて言いながら見ていくんだ。で、「一つ貰えますか？」って聞くから「ああ良いよ」って。

S「へー。えっ、でもそういう人たちがいたんですね。」

妻「いた、学生さん。」

夫「大学生、中にはね良い石があつたみたいなんだよね。小ぢやかな石でもね「これください。なんとか石つて貴重なんです」って、

S「じゃあ、石の研究している学生が来たんですか？」

夫「随分来たな。」

S「へー、そういうの想像がつくというか。なるほど、そういうこともあるのか。」

妻「で、みんなやつちゃうんだよ。」

N「高く売りつけてやれば良かったのに。」

一同「ハハハ。」

夫「そのこの机の横に埃を被つてある石はね、ただ遊びで集めたりなんかしたから。だから坑内の人は良いのが採れたんじゃないかな。坑内に入つていたから。うちらはほとんど遊びに行つて、「おう」「あ、これ貰うぞ」って貰つて。だんだん増えろと「じゃあ箱作つて入れるかな」ってこうやつておく。良いのがあると兄貴に送つてやつたり。」

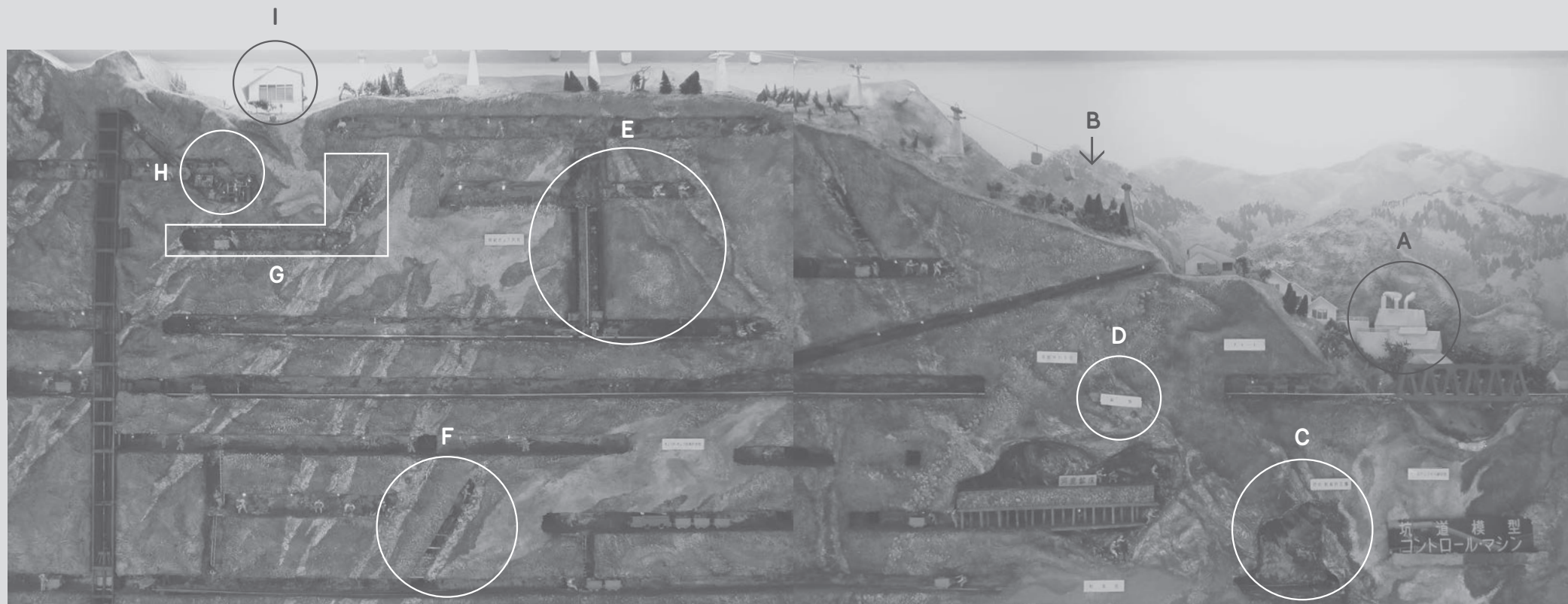
「お話を聞いて」

S「閉山後の石の買い占め、誰かが貰つて行つたという部分。鉱物に限らないことだが、気にしない現地の人感覚と、他所から目線の珍しさが合わさり、持ち去られたことがよくわかる。私も否定する気持ちはないけれども、なんか腑に落ちない気もする。今更しようがないけれど。」

N「キラキラ光る鉱石は、坑内で働く坑夫さんたちにとつての楽しみでもあつたし、もしかすると励みにもなつていたのかなと想像した。記念に飾つたり、飲み代にしたり。きつと光る鉱石を見つけたときはとても興奮し、嬉しくなつたのだと思う。」

1 備前楯山の山道などでは、赤茶色がかつていたり、水晶の破片が混ざつていような鉱石の破片が落ちて、ることがある。51頁の写真のような鉱石を割ると、黄銅鉱物や水晶が入っている。

## 坑内のしくみ



足尾銅山観光内・坑道模型コントロール・マシンより

- A 製錬所
- B 鉄索
- C ダイナマイト爆破
- D 鉱脈
- E 削岩機・トロッコ/スクレppa運転
- F 下坑口削岩機トロッコ運転
- G 上坑口削岩機トロッコ運転
- H エレベーター機械室
- I リフト機械室

最後まで読んでくださり、どうもありがとうございました。

冊子の中には、既に知られていることもあれば、ちよつと聞いたことのない場面、信じられない内容もあつたかもしれません。足尾に少しでも興味を持たれたなら、是非とも実際に足尾に足を運んで現地の姿に触れて頂けたら嬉しいですよ。

聞き取りを続けていくのは、「足尾の人は本当に足尾が好きだ」ということです。聞き取りでは、「自分が話すことなんて何も無い」「ちゃんとした資料みたいな話じゃない」と言いながらもどんどん話が広がります。また、日常の中でも足尾の場所や歴史の話題になると、周りの人が自分の経験談や知っていることを話しかけてくれます。そして、それぞれの話が濃くて果てがないので、立ち話を辞めるタイミングがなく、あつという間に時間が過ぎます。自分の暮らす場所について、こんなに話せるものかな…、といつも驚きつつ不思議に感じます。郷土愛だけではない何か、自分の住んでいる場所をもっと知りたいう気持ちや、豊かな思い出を伝えたいという想いもあるのかもしれない。そんな話し手の方の人間味もひっくり返して、聞き取りを進めていきたいです。



足尾ほぼ全域MAP『日光市足尾地域 移住促進リーフレット 足尾に、住んでいる。』（2013年、日光市）を転用



古河

足尾銅山の事業主である古河鋳業株式会社（現在の古河機械金属株式会社）のことを指す。足尾の人が話の中で使う古河には、大きく足尾銅山の事業主である古河の会社全体を指しているといえる。会社のマークは「山一筋」の意味のヤマイチ。

古河市兵衛

古河財閥の創設者。天保3(1832)年－明治36(1903)年。明治10(1877)年に足尾銅山を譲り受け、銅山経営を開始。座右の銘「運・鈍・根」にあるように数年で大直利(銅脈)を当て一気に足尾銅山を繁栄させ、鋳山王と呼ばれた。

田中正造

足尾鋳毒事件に身を捧げる。天保12(1841)年－大正2(1913)年。明治13(1880)年栃木県議會議員、明治23(1899)年に衆議院議員に当選、この年の8月に渡良瀬川大洪水がおこり、大問題になる。翌明治24(1891)年「足尾銅山の儀につき」を帝国議会ではじめて質問。明治34(1901)年12月天皇直訴、義人の名を高める。

足尾の公害

「日本の公害の原点」といわれる足尾銅山における公害は、山本(足尾やその周辺)での煙害と、渡良瀬川やその下流域での水質汚濁、土壌汚染である。自然的要因に加え、用材・坑木・薪炭材需要による森林の大量伐採(6800ha)、明治20年松木大火(1100ha)、亜硫酸ガスなど有害物質の大気中放出などにより山林が荒

廃。この煙害は、昭和31年(1956)年自溶製錬法が導入され、従来に比べ亜硫酸ガスの大幅な排出削減に成功。水害は、明治14(1881)年からの急激な産銅量の増加に合わせ、明治18(1885)年鮎大量死など漁業への被害から農作物へと、被害が徐々に現れるようになり、深刻な被害が発生したのが、明治23(1890)年の渡良瀬川大洪水の時だった。渡良瀬川、下流域での水質汚濁と土壌汚染は深刻な影響を及ぼし、大きな社会問題へと発展した。

三養会

足尾銅山生活協同組合三養会。生協の発祥と言われている。明治41(1908)年に本格活動を開始し各社宅地域に売店があり、足尾町民の生活を支えた。現在は通洞売店と渡良瀬売店の2箇所が営業。

足尾の主要な3つの坑口

足尾では備前楯山から銅を採掘していた。作業場まで入る主要な坑口は「小滝坑」、「本山坑」、「通洞坑」の3つ。各坑口周辺には銅山施設や住居施設があった。現在では通洞坑の一部が、足尾銅山観光として見学できる。

参考：ふるさと足尾歴史セミナー自主研究会(文)、足尾町文化財調査委員会(監修)、『足尾銅山百選―産業遺産保存活用の手引き』、2004年

和暦	西暦	できごと	人口
天文19	1550	銅山が発見される:古河鋳業(株)(現在、古河機械金属(株))閉山時発表	
明治10	1877	古河市兵衛が銅山を買収、経営を開始	
明治14	1881	鷹之巣坑で直利を発見	
明治16	1883	本口坑で大直利を発見	
明治24	1891	田中正造が帝国議会で鋳毒問題を質問	11,664
明治29	1896	第1回(鋳毒)予防工事命令発令(明治36年まで5回)	11,448
明治34	1901	田中正造が鋳毒問題で明治天皇に直訴	22,708
明治35	1902	足尾銅山との示談により旧松本村廃村	22,708
明治40	1907	坑夫による大暴動事件が起こる	34,824
明治41	1908	本山に生活協同組合「三養会」を開設(明治39年に三養会設立準備会発足、本山三養会一部開店)	28,618
大正元年	1912	足尾鉄道 桐生駅～足尾駅開通	29,774
大正10	1921	県内初のメーデーを足尾で開催	27,387
昭和15	1940	この頃から朝鮮人労働者が銅山の労働に従事	23,187
昭和19	1944	中国人が強制連行され坑内労働に従事	
昭和20	1945	足尾銅山労働組合同盟会結成	20,997
昭和29	1954	小滝坑廃止、フィンランドのオートクンプ社から自溶製錬技術を導入	
昭和31	1956	「自溶製錬法」、「電気集塵法」、「接触脱硫法」を応用した脱硫技術を世界で初めて実用化し、従来に比べ亜硫酸ガスの大幅な排出削減に成功	
昭和48	1973	足尾銅山閉山(2月28日)	8,699
昭和53	1978	日足トンネル開通(延長2,765m)	
昭和55	1980	足尾銅山観光オープン。坑内観光が始まる	
昭和63	1988	製錬所が事実上の操業停止	4,935
平成18	2006	今市市、旧日光市、藤原町、足尾町、栗山村が新設合併し、新たに日光市が誕生	3,196
平成27	2015	(現在)	2,287

〔典拠〕  
『足尾町閉町記念 足尾博物誌』(平成18年2月足尾町)、『足尾銅山近代化産業遺産MAP』(平成26年3月、第6刷改訂版 日光市教育委員会事務局文化財課世界遺産登録推進室)より引用。人口データは、『足尾町閉町記念 足尾博物誌』、永井護「足尾銅山の生産システムの変遷と空間的都市構造」(平成20年7月1日、日光市教育委員会足尾銅山跡調査報告書)他、広報あしお、広報にっこうを参考にしている。

ごめんください、足尾のこと教えてください！——地域おこし協力隊による聞き取り抜粋集

発行日…2015年3月30日

発行…日光市役所足尾総合支所総務課

編集…日光市足尾地域おこし協力隊

デザイン…木村稔将

協力…聞き取りに協力してくださった皆さま、古河機械金属株式会社、

新井雅之、栃木県立文書館、安塚菓子店、皆川俊平、好井裕明

写真…伊東信、新井常雄、地域おこし協力隊

●聞き取り調査の資料を閲覧希望の方は、日光市役所足尾総合支所総務課までお問い合わせください。

日光市役所足尾総合支所総務課

〒321-1514 栃木県日光市足尾町通洞8-2

TEL…0288-93-3115

©禁断断転載

「写真について」

この冊子に掲載している主な写真は、現在も足尾で暮らす伊東信さん（95歳）が撮影したものです。伊東さんは、昭和18年に鍛工として古河鋳業に入社した時に、当時高価だったカメラを中古で購入し、戦後足尾に戻ってから撮影活動を本格的に開始。仕事をしながら、休日に写真仲間と松木などの足尾のあちこちを回ったり、社宅や家族の日常を写しながら、足尾町の芸術祭やコンクールなどで発表してきました。写真の裏には撮影日や、タイトルなどがメモされているおかげで、当時を知る貴重な手がかりとなっています。（掲載写真のキャプションはメモより抜粋）最近は、お気に入りの柳の絵を描いたり、日記をつけるのが日課です。

この冊子を手にしてくださった方へ

この冊子は、平成25年度から足尾で活動する地域おこし協力隊「1」が行っている、生活史聞き取り集の続編です。冊子タイトル「ごめんく」ださい、足尾のこと教えてくさい」にあるように、私たちの聞き取りでは日常的な立ち話やお茶飲み話、時には突然お宅にお邪魔して、足尾の方の経験談や思い出を教えてください。私は何も知らないよ」と言いながらも楽しそうに話し続けてくれたり、「こんな写真があつてね」とお持ちの資料を見せてくれたり、ポロッと予想外の話題になることもあれば、複数の方から同じキーワードが出たりもします。様々な内容と話し手のお人柄は魅力的で、聞けば聞くほど、まだまだ知らない足尾の姿があることに気づかされています。

私たちの聞き取りで大切にしていることは、今、目の前で語られたその人の生き方や想いをできるだけそのままに残すことです。時には、記憶違いや間違いや一方的な見方もあるのかもしれませんが、ある人にはそう記憶され、今はそのように話してもらえることも、現在の足尾の姿だと捉えています。前回の冊子と同様に、違和感や疑問を持たれる方もいらっしゃるかもしれません、数ある足尾にある、一つの視点としての生き方や想いに、どうかご理解くださいますようお願い申し上げます。

2014年版の冊子では、公害や銅山の仕事や社宅といった、「足尾銅山といえば」に対応する疑問にまつわる内容を取り上げましたが、この続編では、治山と閉山が大きなテーマです。ハゲヤマのイメージでおなじみの松木エリアでは、明治30年代から手作業による治山事業が進められてきました「2」が、そこで働く多くは足尾の女性たちや土木業を請け負った組の方々でした。銅山と同様に、足尾地域の多くの方が関った治山事業のありようは、足尾にとって外せない要素といえます。また、昭和48（1973）年の閉山については、よそ者の私たちが安易に触れないような、あまり聞いてはいけない気がします。けれども、3年間の中で自然と耳にする機会は多く、これもまた足尾になくてはならないテーマなのだと思います。

最後に、この聞き取りの活動を受け入れ、協力してくださったみなさまに感謝いたします。

平成27年度 地域おこし協力隊 聞き取り事業担当 志村春海

1 人口減少や高齢化などの進行が著しい地域に、地域外の人材を一定期間誘致し、その地域の活性化を促進するという総務省の取り組み。

2 明治30年（1897）年、農商務省訓令により東京大林区署が「足尾官林復旧事業」を開始する。（参考…大間々官林署、足尾治山事務所「足尾の治山」パンフレットより）

02	この冊子を手にしてくださった方へ	
03	目次	
04	凡例	
05	Q6	松木ではどんなことをしたんですか？
06	松木での仕事	[2015年1月23日]
11	女性の仕事・やりくり	[2015年4月16日]
14	要領の良い人	[2015年4月27日]
16	にぎやかな松木	[2015年8月18日]
20	中学生のアルバイト	[2015年8月28日]
23	仕事と家事	[2015年9月]
29	Q7	“閉山”ってどういうことだったのですか？
30	ある坑夫さんにとっての閉山	[2014年1月10日] [2014年3月5日] [2015年5月21日]
37	残った人はいない	[2014年1月20日]
40	共同浴場での親切	[2014年10月24日]
43	現役の消防団員	[2015年5月10日]
44	引っ越し前の美容室	[2015年5月27日]
46	社宅から見た、閉山から今	[2015年6月28日]
52	猫の手も借りなくなる忙しさ	[2015年9月1日]
54	飲み方の変化	[2015年9月2日]
60	編集後記	
62	年表	
63	用語集	
64	クレジット	



## —Q6— 松木ではどんなことをしたんですか？

雪の足尾銅山 思い出の仕事（伊東信撮影）

〔写真裏面のメモより：山道作りは油断は出来ぬ 足尾松木除雪作業は女の仕事だった 昭和37.3.2日写ス〕

### 〔凡例〕

- ・文中に出てくる話し手のうち、男性はM、女性はFとなっている。複数名登場する場合は、Fa、Fbと表示。
- ・聞き手のうち、協力隊員である2名は中山（N）、志村（S）。協力者の好井先生は（Y）と表示。
- ・沈黙は、「……」。省略は、「……（省略）……」と表示。
- ・話の途中で途切れている時は、「」で終わっている。
- ・笑い声はカタカナ表記。
- ・語りの中で誰かの発言の真似などは、「」で表している。
- ・冊子全体の共通する用語は63頁の用語集に掲載。
- ・その他の用語、地名や補足には注を入れ、典拠があるもの以外は協力隊が編集している。

### 〔言葉・名称について〕

- ・本文中に出てくる固有名詞や、話し手の方々は匿名で表記しています。
- ・職種や組織の役職などは、聞き取りで使われた名称をそのまま使っています。
- ・事実確認が不十分なため、実際と違う場合もあるかもしれませんが、ご了承下さい。
- ・わかりにくい漢字、特殊な読み方をする漢字には、括弧内に読みがなをつけています。

### 〔調査方法・編集方法について〕

- ・聞き取りを行った時系列順に掲載しています。
- ・聞き取り抜粋箇所後に、協力隊2名の事後報告や感想などのコメントを掲載しています。
- ・この聞き取り事業での内容は、話し手の方の了解を得た上で文字資料化し、日光市足尾庁舎で保管しています。

### 〔掲載写真のクレジットについて〕

- ・写真のクレジットや説明は次の順序で表示しています。
- タイトル（太字、ゴシック）
- 撮影者（太ゴシックで括弧くくり）
- メモの抜粋や協力隊によるコメント（ゴシック細字か明朝体）
- 伊東信さん撮影写真のタイトルは、アルバムや写真裏面に記入されているメモから抜粋しています。
- 新井常雄さん撮影写真のタイトルは、協力隊が考えています。

足尾以外の地域で「足尾に植樹に行ったことあるよ」と話題に出る頻度は多い。協力隊も、植樹デー「1」などに参加してきたが、1日約1000人ほどの参加者が一斉に山を登り、植樹をする光景は、確かに足尾ならではの。他所からしても、足尾「ハゲヤマのイメージは定着しているのだと実感する。一方で、足尾の方にハゲヤマ（松木エリア）の話をうかがえば、植生盤「2」や砂防工事での事故、女性の働き先であった山仕事が実体験として語られる。「足尾の女に会いたければ、松木に行け」と言うこともあったらしい。現在は環境学習として浸透している「植樹」と共に、前々から続いている治山の全貌にも注目していきたい。

## 松木での仕事

「2015年1月23日」夫（M）、妻（F）、志村（S）、中山（N）

昭和30年代に、植生盤や護岸工事の委託業者として、治山の業務を請け負っていたM組。当時の写真を広げながら、業者側から見てきた松木の風景を教えてください。

S—あの、私の認識なのですが、松木の山には砂利しかなくて植物がない。だから、土を運ぶ必要があって、土と種が合体した植生盤を使ったのですね。実際こういう植生盤で植物は根付いたんですか？

M—うん、根付いたよ。

S—じゃあ、やっぱり良い方法だったんだ。

M—ほとんどはね、赤土だけで焼けた土が薄く表面に残っていて、それが風でたまったりしていたんだよね。ガラヤマだから、最初にするのは山の整地。だいたい、山がデコボコだからね。みんな削って、整地して滑らかにしていくわけ。それをするのは、春の前。だいたい1段の間が40センチから場所によっては、20センチの所もあったけれども。

……（省略）……

S—じゃあ、運んだ土を石で大きくせき止めるようにし

て、その中に更に段々に40センチくらいの土の段をつくり、そこに植生盤を敷いていくのですね。ちなみに、その植生盤の案をMさんが最初に聞いた時は、どう感じましたか？

あんなに沢山の土がないような岩場に対して植生盤の方法は業者の立場からすると「大変だな」とか、どう感じられたのかなあって。

M—仕事は大変な仕事だよ。だけれども、この仕事は金になった。

S—そうですね。へー。

M—組で請け負う山じゃない平な土地の仕事と比べると、

倍近くになったんじゃないかな。

S—それはどうして良いお金になったんですかね？

M—危険手当がつく。いつ、どこから石が転んでくるか、また下が崩れて滑ってこけちゃうかな。そういう危険手当っていうのは、非常に多かった。

N—実際に事故とか多かったんですか？

M—あった、あった。足を滑らして落ちちゃったとか。家（うち）なんかも、2人ほどケガ人を出したから。

……（省略）……

F—あとは、山の天気は危険だね。突然の豪雨の鉄砲水



植生盤の作業風景

（新井常雄撮影、栃木県立文書館所蔵）

S—植生盤を作っている様子。機械で圧縮しながら、土に含まれている水分を抜いている。できた植生盤は一人7枚ほど背負い、山の斜面へと運ぶ。係の人が運んだ枚数をきちんとチェックしていたらしい。斜面に貼り付ける際には、木の釘のようなもので止める。作業中は、日焼けをしないように手ぬぐいで顔を覆っていたり、旦那さんから地下足袋を借りて使っていたとの話も。



で、1回、新車を潰されちゃったんですね。

S—あらー、本当ですか？でも、車だけの被害だったら、良かった方になっちゃうんですね…。

M—だから、そういう時は山で雨が止むのを待っていてから行くのさ。

F—「3粒降ると、もう沢山降ってくるから松木を降りる」って、ばあちゃんがよく言っていた。

N—3粒？

F—3粒。バラバラって降るともう逃げないと。結局、枯れ山だから、ちよつと降るとドーつと流れちゃうわけだね。

S—そっか、そっか。森なら木の根っこで水も溜められるけれども、植物がないから水がバーつと来ちゃうわけですね。

M—そうそう。そういう年が5、6年続いた時があったな。

S—奥さんも、旦那さんがそういう危険な場所です働いているって思うと、心配ですよ。何かあったんじゃないですか？

F—それでね、夜遊びが好きなのよ。

全員—ハハハ。

S—そっち？そっち？

F—朝も「控えなよ」とか言おうと思うの、でも…ね、危険

な仕事だと思うから、言わず終いなさ。だってね、私が寝てから、仕事終わって帰るからね。で、朝には弁当持って仕事に行くから、段取りしなくちゃいけないでしょ。そういう点がありましたよ。普通のサラリーマンと違うから。

……(省略)……

S—他の方から、「女性で山仕事をしている人は、気が荒い人多くて大変だった」と聞いたりするんですけども、実際そうでした？

M—気が荒いといえば、足尾の人は気の荒い人が多かったんだよ。

S—へー。じゃあ、仕事場で人をまとめるのも大変だったんじゃないですか？

M—それは、班長だよな。昔は世話焼きっていう人がいて、その人が気を回していたね。で、その上で「今日はどこやれ、ここやれ」って言うのは、だいたい俺が指示をして。

N—あの、石畳は女性が運んだりもしたのですか？

M—うん。で、植生盤っていうのは、だいたい一人何枚って、

S—一日のノルマは決まっているのですか？

M—うん、一人が100枚。それを15人だと、1500枚

がその日の日当になるんだ。で、10時に雨が降って2時間くらい手がつかないとしたら、雨が降った後の1、2時間で片付けるとか。そういう、手際がよかった。

S—もし私だったら、働けるかな…。出来合制みたいなもので、大変ですよ。厳しいと言え、厳しいですよ。ちゃんと仕事を終えなくちゃならないから。

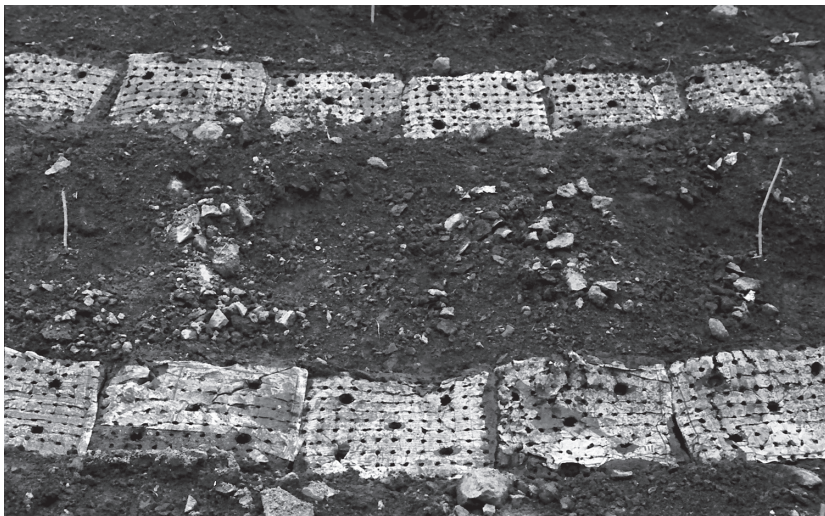
M—あの頃の女の人っていうのはね、今の男の人よりも仕事をしたな。うん。

N—まあ、でもいつの時代も、男より女の方が働くなってると思うな。ハハ。

M—で、女っていうのは根が良いから。男と違って。男は危ない所だの、高い所だのは良いかもしれないけれども、そういう長い時間やるっていうのは、やっぱり女には敵わない。今でもそうなんじゃないかな。

……(省略)……

M—それでね、作業場の松木ではその当時ウドがもの凄く沢山出たの。みんな昼休みにウド採りに行っちゃうと、集まって来て仕事をするまでバラバラで時間がかかったやう。だから俺の場合だけれども、ウドの季節になると、仕事を



植生盤の様子(新井常雄撮影、栃木県立文書館所蔵)

S | 表面の白く見えるものは新聞紙が被せてあるので、穴は機械で圧縮した跡。植生盤と植生盤の間は約40センチほど。新聞紙を切ったりする準備は、家にいた奥さんが内職でやっていたらしい。



している中から2人を必ずウド採り専門にやって、それで収穫したウドをみんなで分けてやるの。

S なるほど。ウドはみんなが欲しいから、ウド採り当番みたいにしちゃって、それでみんなで分けた。

M そうそうそう。そうするとね、うんと仕事の能率が上がる。休み無しだから。

S 確かに、バラバラでウドを採りに行っちゃうよりも良いですね。

M 30人で30分遅れてみる、仕事がいらい遅れちゃうだろう。そうすると、2人いる分よりも損が出ちゃうんだ。

S 確かに、それなら2人の当番が採ってきた方が、他の働いている人たちも安心ですよ。自分たちもウドを食べられるし。

M 貰えるからね。「もう、ウドは飽きた」なんて言うのと、「じゃあ、もうウド採りはやめだ」なんてな。

N ちなみに、ウドの他に植物っていうのは、生えていたんですか？

M 食べられるものは、別になかったな。

S では、動物っていたんですか？ 当時の山の方に。

M 当時の山もね、カモシカがたまに見えたくらい。あとは鹿だな。

S 鹿。じゃあハゲヤマでは、やっぱりその、植物とか動物っていうのは基本的にはいない？

M 閉山になったら、本山の方の人なんかが、飼っていた犬を置いて行っちゃう。足尾から引き上げるために。引越す先には連れて行けないからね。

S でも、犬も生活できないのではないですか？

M いや、犬も凄いよ。1回だけ見たことがあるのはね、犬が5、6匹で鹿追をするのを見たね。

S 犬が？

M うん。一カ所では固まらない。で何カ所かで散らばってね。山の高い所から見ている犬と、下で追っかけるやつが2匹くらいだね。鹿を追って行くのを、2匹の犬が山の上から見ているんだ。それで鹿がどっちに曲がるかを確認したら、曲がった方に降りて行くんだよね。殺し方も上手なんだ、仲間内でわかるんじゃないか。鹿1頭くらい食べちゃうんだよね。

N はー、

M 人間よりも賢かったぞ。あの時はね、6匹だか7匹いたんだよ。

S でも、その犬は全部捨てられた犬だから、雑種というか、みんな同じ種類ではなく？

M うん。で、冬場になったら寒くて死んじゃったりなんかさ。

S 凄い。でも、ちゃんと犬たちも捨てられた者どうして群れを作って、生き延びていた時期があったのですね。松木でそういうことがあったんだ…。

M 俺だってこうやって見ていて、関心したんだもの。

#### 「お話を聞いて」

S 写真から想像していた植生盤の話が、少しずつ具体化してきた。植生盤はとても素朴なアイデアに感じるが、あまり気にしなかったかもしれない。ウド当番の話も、業者ならではの考え。自分なら、M組みみたいな所で働きたい！ 効率や仕事をこなすことはもちろんだが、女性たちに気持ちよく（ウドが手に入ると安心して）働いてもらう配慮も、事業主として不可欠だったのだろう。

#### 女性の仕事・やりくり

「2015年4月16日—Fさん、志村(S)」

社宅のお母さん事情について、根掘り葉掘りいろいろ教えてくれるFさん。「植生盤の仕事は怖いから」ということで、山の道路の整地の仕事を昭和40、50年代にやっていた。

S だいたい足尾の社宅暮らしの奥さんが10人いたとすんじゃないですか、そうすると何人くらいの人働いていましたか？

F そうだね、5人は働いていた。

S あ、じゃあ、半分くらいは働いていて、半分くらいは専業主婦みたいなの？

F—そうだね。そうして女の人はお針でも編み物でも、できる人は家で内職をやっていたよ。内職みたいな、着物のね。あの頃はよく着物を着たんだよね。

S—着物の内職ですか。あと、刺繍とかもやっていたという話も聞いたことがあります。

F—刺繍みたいなものもね。見本と同じモチーフの刺繍を作るような仕事だよ。お針だのあいうのをする人は良い稼ぎをしたよね。

S—じゃあ、お針とか編み物も結構良いお金にはなったんですか？でも、やっぱり、山仕事の方が稼げるのかな。

F—そうだね。

S—じゃあ、危険が伴わない仕事という意味では、お針ができる人はその仕事の方が良いという感じ？

F—お針なんか、編み物だのがちよつとできる人は良かったよね。山に行って土方をしないだけね。

S—なるほど、内職は確かにそういうのもあったでしょうね。でも一方で半分くらいの人は、専業主婦をやられていたということですよ。その専業主婦っていう家と、働きに出る奥さんの家で、何か違いはあったんですか？例えば、同じ

やられたけれどもさ。

S—やられたって言うのは、口でいろいろと言われたということですか？

F—意地悪されたりとかさ。そして、あの「かじか荘」あるだろ？そこもA建設でやったんだから。あの舗装をずっと。で、あの辺も掘ってさ、あのU字溝を入れたりさ。ああいうのも私らが何人か出て入れたんだから。結構楽しかったよ。親方の面倒見も良かったし。とにかくね、うん。給料が月に2回になったからそれが魅力だったね。よかった。私も好きなものを買えたもんね。

S—何を買ったのですか？

F—何買ったんだろう？着物を買ったりさ、服を買ったりさ。自分のものは買ったよね。そして、とにかく段々お父さんが働いてくれるから、お父さんの給料で食べて行けたしさ。それだけ、良かったね、働いてね。倅（せがれ）におもちゃを買ってやったりさ。よかったね。

S—山仕事は何年くらい働いていたんですか？

F—そうだね。10年くらいやったか？

S—10年くらい、結構長いですね。その間に、やっぱり上手

坑夫「4」でも種類が違うとか、何が違うとか。

F—でもないんじゃないかな？

S—たまたまその家の判断で、そこでは奥さんは専業主婦をやっていたりとか。

F—そうだね。やっぱり、少しでも借金をすればさ、やっぱり払わなくちゃならないしね。それで、借金をして誰かから借りるっていうのも、「払わない」だのなんだの悪口も言われるしね。やっぱり自分で働いていれば、それだけ余裕ができるじゃない。ね、自分のものも買えるしさ。子どもが小さいうちはさ、私も家にいたけれどもさ。やっぱり子どもが学校に行くようになったら「もったいない」なんて、舗装の仕事をやってみたら、やっぱり給料が良かったものね。良かった。

S—あ、でも、山仕事はやってみたいと思っていたんですか？Fさんも。

F—うん、思っていた。

S—それは何ですか？危険そうだけれども、でも、F—うん、「舗装の仕事なら、道路で平な所だからできるかな」なんてさ。でも随分歳をとった上の人からね、随分

になっていくんですか？

F—段々ベテランになっていったね。あれだったよ、一輪車なんて押せなかったんだから。それがね、もう上手になってね。今だって上手だけれどもさ。最初はね、荷物をひっくり返してさ、本当にやられたものだよ。でも楽しかったね。結構、同じくらいの年配の人もいたからね。うん、楽しかった。仕事は楽しいよ、私。でも、南橋のあの山見てみなよ、ね。私は登れないな、怖いと思ったから。……（省略）……植生盤の仕事だと、こういう梯子（はしこ）みたいな背負子（しよこ）に、荷物を乗せて運ぶんだよね。私は「できないから」って言ってその仕事はしなかったね。で、給料が安かったといいじゃない、みんなが1000円貰う所を700円貰ったって良いじゃない、できないんだもの。ね。

……（省略）……

F—ただ、1回だけ「出てみるけ、手が足りないから」って1、2ヶ月だけれども、植生盤の仕事をしたよね。私は毎日行かなかったけれどもね。そこでは、板でできた背負子で植生盤を積んだよ。あとね、箱みたいなのがあるんだよ。箱みたいなのがあって、そこへ砂を入れてさ。砂を入れて、砂

とセメント、ほら、セメントのミキサーがあるだろ、それを混ぜるんだよ。それをヒョイっと入れたのを見たことあるの。上手いものだよ。

S「凄い、でも重いですよ。砂とかだから。」

F「うん、それでね、他の人に聞いてもね、40〜50センチくらいになっているのを背負うだろ、それをねヒョイってね。ミキサーの穴のまるくなった所に入れるんだよ。採石とね。とても上手なんだよね。私が見かけたときにね」あらー、上手いものだね」って言ったの。石だってシュって乗っけて、石垣の積む所にシュと落っこつすの。「あら、ぶつかんないかな」と思うくらい。上手にね。私にはできないと思っただよ。「あんなに大きな石がき、自分の所に落っこちて来たらどうしよう」ってね。

S「ね、経験なんですかね。」

F「そうだね、上手いものだよ。」

「お話を聞いて」

S「「シュッ」「ポンッ」と石を積んでいた様子を、ジェスチャーつきで教えてくれた。見ている方は、本当にびっくりするよ

うな身のこなし方だったのだろう。意地悪されたといった、ちよつとドロドロもあるような中でも、上手く冗談を言いながらやってのけてきた様子は、Fさんのお人柄からすぐに想像ができた。

### 要領の良い人

「2015年4月27日」Fさん、志村(S)、中山(N)

戦時の足尾で、女手一つで2人のお子さんを育て上げた方。様々な仕事をしたが、昭和30年代に「石背負い(いししょい)」と呼ばれる、石垣造りの仕事を経験「3」。

S「戦争がきっかけで足尾に戻って来てから、山の仕事をされたのですか？」

F「そう、仕事がないでしょ。その時は子どもは一人だけどもね、食べていけないじゃない。足尾の女の人が働くとしたら、植生盤ばかり。それで石背負いの働き口があったから、私もその仕事に使ってもらったの。でも、重いものを持ったことないのに、背負いを始めたんだよ。渡良瀬川の川辺から、田元の上の石垣まで石を運ぶんだけど、川石

はゴロゴロしているから背中に当たるの。それが痛いんだけど

れども、途中で離すわけにはいかないでしょ。10人ぐらいそ

ういう人が並んで、そうやって作業をするんだよ。最後

に、その石垣の所に運んだ石を落とすんだけど、最初

はどうやって落としていいのかわからないんだよ。慣れる

までは要領が悪いでしょ、まだ入ったばかりだから。要領

の良い人はね、作業前に石を配布される列に並んでいる時

に、自分が大きい石に当たるとわかると、列を抜けておしっ

こに行っちゃう。そうすると、大きい石には当たらないんだ

よね。そういう風に要領の良い人がいた。

S「なるほど。うーん、なんかありそうだな、そういうこと。人間らしいな。」

F「で、私ら新米だから分からないだろ。並んでいて、でかい石を背負うところ、体が折れるように痛いんだよ。だけ

れども、死ぬ思いで背負ってその場所まで行ってね。こう

やって、石を落とすと「ギャー」って声が出たよ。慣れないう

ちはね。慣れてくると平気だったけれどもね。ハハ。

……(省略)……

F「当時の仕事場所を通ると思う出すよ。その辛さ。まだ

30、40代くらいだったからね。辛かった。

S「でも、辞めたいとは思わなかったのですか？」

F「辞めたら食べていけないから。」

S「そうですね。それって、Fさんも事情があつて働いていて、周りの同じお仕事をしている人もいろいろな事情があつて？」

F「大変だよ、女の人ね。他に仕事がなかったんですよ。

うん。内職ぐらいはやっていたけれどもね。女の働く場所

はなかったからね。

N「お給料っていうのはどのくらいですか？」

F「詳しい金額は忘れちゃったけれど、9時過ぎからかなちよつとしか働かない。午後3時くらいには帰って来る。そうすると、一番下の子が私を待っていて、家に入ったすぐの上

がり端で居眠りしているんだよ。……(省略)……まあ

どうにかこうにか、最低の生活はできただろうね。

S「そうですね。じゃあ、短時間で稼げた。」

F「そう。だから、まあ、女の働く所としては良かったんじゃない？」



「お話を聞いて」

S「重い石が当たらないようにわざと列を抜ける人の例は、どこの時代にもそういう人がいるんだなと、しみじみ。ズルイと言うこともできるのに、要領の良い」と言い表してしまうことに、妙に関心してしまう。負けてたまるか的な根性もあつただろうし、生活のためにサクサクとこなしてしまうタフな感覚を感じた。

N「『当時の仕事場所を通ると思い出す。辛かった。』と言う言葉が印象的だった。その場所は私も普段通るのだが、何も知らずにいると気にも留めない。足尾では人々の様々な営みによって、石垣に限らず山の木々や谷の深さ、川の流れまでも変化してきたのだろうと思う。」

にぎやかな松木

「2015年8月18日」夫(M)、妻(F)、志村(S)、中山(N)、好井(Y) 6頁のご夫婦に、改めて仕事内容や、そこで働く方々の様子についておうかがいした。

Y「これ、1日仕事をしていくくらい貰えたのですか？」

M「うん、できちゃうね。山が山だから。斜面に貼り付けるんですよ、ペタンと。板に乗っけておいて。」

Y「貼り付けて、木の釘みたいなので打ち込んでおく。それを貼り付けて、その植生盤にはもう種とかは全部入っているんですか？」

M「全部、種は入っている。ヨモギとか、アカシアだのイタドリだの。木が3種類か4種類。草の種が主だね。」

S「私の印象なんですけど、植生盤って話だけだとすごく原始的というか、本当に根付くのかなと思うのですけれども、実際にどうでした？効果というのは？」

M「植生盤そのものが草の芽がね、早いからね。石山の地面があつたかいんだよ。だから、その作業をするのは6月から8月くらいまでだからね。3ヶ月目はほとんど仕上げだな。」

……(省略)……

N「台風なんかが来た日には全部流されちゃったりしたんですか？」

M「あるよ、そういう時も。川ができてちゃうんだよね。そういう所を掃除してね。」

M「家(うち)でね、450円くらい。」

Y「1日450円で、それは日給で支払われるのですか？」

M「そうそう。」

S「1日行けば帰りには450円お給料が？」

M「そういう人もいたけれども、やっぱり15日が給料日だったね。」

S「ああ、じゃあ出勤日を計算してまとめてもらうんですね。確かに、女の人に聞くとやっぱり家計の助けにはなつたし、子どもとかもいるお宅は生活が大変だったからと言っていました。」

M「下で仕事をする人は300円くらい。山に上があれば450円くらいになる。」

S「じゃあ、やっぱり山の上の方がきついというか、大変だったから給料が高かったんですね。」

M「おそらく500mくらい上がっているんじゃないかな、沢から。」

Y「あの、植生盤を一枚一枚置いて固定していくわけですよ？それって、結構技術がいるものなのですか？それともしばらくしたら身に付くのですか？」

S「やり直したかも出て来ちゃいますよね。」

M「出て来る、出て来る。だから、景気がもの凄く良かったの。」

S「足尾内の組が請け負ってそれぞれのやり方があったと思うのですが、M組は働きやすくなるために何か工夫をしていましたか？」

M「俺の所は、給料は現金であげていたからね。」

F「社長は固いけれども次男のMはやわらかいから、結構働いている人に飲ませたの。「働く人は飲み食いさせなくちゃ駄目だ」って。うん。」

M「半日ぐらいは仕事を休ませて、豚汁を作つてやつたりなんかしてね。「明日こゝまでで、明後日までにするんだから、明日から頑張ってくれよな」ってね。それが効いたんだよ。」

S「やっぱり、そういう働いてもらう人に対して、ちゃんと「ご苦労さん」とか「頑張ってくれ」って言うような配慮をされていたんですね。」

Y「ただ給料を払うだけでは駄目ということですね。」

S「人がやっぱりついてこないと。」

M「みかんをちゃんと配るだけでも、人はスツと寄ってくるからな。」

F「ちょっとした加減なんだよね、人っていうのはね。  
……(省略)……」

N「聞いたことがあるのは、「足尾の女に会いたければ松木に行け」と。それくらい、足尾の女の人は松木で働いていた。」

F「働いていた。」

M「だからM組だって、だいたい4月の後半くらいから始まるから。そうすると、常備の、常備というのは14、15人いたんだけれども、植生盤の時期には50人くらいに集めたんだから。」

……(省略)……

Y「松木の仕事をする場所まで、女性の人はどうやって行くのですか？」

M「車だね。トラックに乗せて運んで送迎をしたね。」

F「で、1週間か2週間に1回くらい、トラックの許可を貰いに行くのですよ。警察へ。」

Y「トラックの荷台に人が乗っているから許可を得るんですね。」

F「だから警察もその頃はバスもなかったから、許可はしてくれただよね。みんなね。そのうち、マイクロバスを買ってね。」

N「でも、荷台に女性たちがいっぱい乗っているバスが松木に毎日向かうっていうのは、

F「だから松木は賑やかだったと言うよ、毎朝。」

Y「夏になって、昼間男たちは銅山の中に行っていて、町の中には女の人がいなくなっている。」

F「人口があつたから昔は。あつた、あつた。」

S「いろいろな話を聞くと、女性の場合は山仕事か専業主婦か、それかちょっと内職をしたりとか、数名が三養会か事務の仕事をするみたいなの？」

F「あとは、土方ですね。それしかかったもんね、工場がないもん。」

S「そうすると、山仕事って女性にとって一番大きな働き場所だったんですね。」

M「そうだなあ。植生盤ができたから、

S「お金にもなったんですね。きっと山仕事って。」

M「だから、下で働く男の人たちと、松木の中で働く人の賃金は同じ。」

……(省略)……

M「これ(新井さんの写真)は下の方の写真だから。撮影者の

新井さんは足が悪かったから、山の上には登れないんだ。写真の風景は本当に下の方だよ。賃金が安い所だよ。」

S「じゃあ、この場所の感じは下の方だからあんまり賃金は高くない？Mさんはもう少し、高い所をやっていたのですか？」

M「最初はこの組でも高い所ばかりやっていただけけれども。俺が昭和30、31年かな、松木の営林署の作業所があつたんだよ。そこから中禅寺湖まで歩道を付けたんだよ。中禅寺まで行くと、2時間くらいしか時間がない。それで車で行けるのなら、中禅寺湖は1時間くらいで往復ができた。」

S「全然違いますね。ふーん。」

F「今でも歩いて行けるかね、中禅寺まで。」

N「今は木が茂っちゃって道がわからないんです。」

M「まあ、俺が一番奥をやった時はね、昼休みに若い人たちが中禅寺まで行って帰って来ていたよ。」

S「え、元気ですね。大変な仕事をして、昼休みにはわざわざ行つて帰って来るという。で、また仕事をするわけですよ。タフだ。」

F「昔の人は働いたもん。」

「お話を聞いて」

S「こちらのご夫婦にはいつも、「お茶飲んで行きなさい」と誘われて甘えてしまうが、組ならではの仕事や人づきあいが染み付いているのかもしれない。人の引きつけ方や、気持ちよい労働環境のためには、媚びるわけでもなく、自然な対人の気持ちが大切なのだろうと思わされる。働いている人が、休憩時間にはわざわざ中禅寺湖に行く例には、重労働の中でも山の環境を楽しむ余裕があつたことに關心してしまう。」

N「Mさんは常々「人間、結局は気持ちなんだよ」ということを言う。協力隊の2人のこともいつも気にかけて下さり、Mさん夫妻の家には来客が絶えない。きつとM組で働いていた方々も気持ちよく仕事をしていたのだろうと思う。」

Y「多くの女性を使い、山仕事を取り仕切つて来たご夫婦。明るく人をひきつける語りくちが印象的だった。植生盤を背負つて山をあがり、一枚一枚固定していくというきつい仕事をできるだけ気持ちよくやつてもらいたいという思いが、語りからもれてくる。ひとは仮にいい金になったとしても、それだけ

できつい仕事はしないだろう。その気になってもらうための細やかな配慮をしていたのだろう。出されたおいしいお漬物をほおばりながら、ご夫婦のお人柄を想像していた。

## 中学生のアルバイト

「2015年8月28日」Mさん、志村(S)、中山(N)

足尾にある植樹のNPOで長く植樹に関っている方。昭和40年代の中学生の頃には、オバチャンたちに混じって植生盤のアルバイトをしていた。

S—前に、子どもの頃に植生盤のお手伝いのようなことをしていたと聞いたのですが。

M—いやあ、バイトだからね。そういう。まだガキの頃、中学3年生くらいだね。

S—中学3年生で、植生盤のバイトをやっていたということですよ？じゃあ、もう植生盤を背負って、女性がやるみたいに山の上まで運んで？

M—一緒になって、一緒になって。

N—結構、他にも子どもがいたのですか？

N—それで、どのくらいの重さなんですか？

M—だいたい、40キロくらいじゃないかな。

S—えー。それをね、山道登るわけですからね…。

M—若いから背負えたけれども、オバチャン連中も同じだよ。結局お金になるから、それを何回かやっていたら余計みたいな感じ。1日いくらの仕事もあるんだけど、その場合には1枚くらみみたいな。職員がチェックをしていて「Mさんは30枚、Mさんは30枚だね」って記録していくんだよね、見えていね。

S—やっぱり、ちゃんとチェックをされていて、その枚数によつて、

M—そりゃあそうですよ。積んでくれてね、自分では積めないからね。積んじやうと、起きれないんですよ。重くて。二宮金次郎が苗木を背負っているような形で山頂まで積んで行くんですよ。「山頂」ってチェックをしてもらって、みんなで並んでね。今やっている足尾で植樹をする時みたいにずっと道沿いに繋がって登るでしょう。ああいうスタイル。ただ道が階段じゃないから、作られた一人専用の道路をずっと上がって行くんですよ、現場まで。だから我々も

M—子ども？まあ、仲間がね。今では足尾にいないけれども、5、6人。それで、知り合いから紹介があつて、「手伝ってもらえないかな、体力のある若い子に」って言う風にね。バイトだから当時のお金で、1回いくらだったかな。ちょっと金額的には思い出せないけれども、嬉しかったんですよ。

S—割と良いバイトだったんですね。

M—そうそうそう。ただ、過酷だったよ、正直な話。

S—どんな内容だったのですか？

M—あの、職員がね、遮光ネットがあるでしょ、あれが袋になつていてですよ。それに土を入れたり種を入れたりして、ミックスになつたものができているわけ。それをスコップで頑張つて入れて、職員がそれをやるのさ。我々はそのできたものを運ぶだけなんだけれども。それを今度は、圧着するんですよ。そうすると、厚さが30センチくらいの…、ホームセンターにある板状の芝。ああいうようなくらいの厚さになるんですよ。ピューって空気が抜けるし。それを縛って重ねたものを背負って、オバチャン連中と一緒に坂みたいな整備された道を通って現場まで運び上げる。そういうことね。だいたい30枚くらいかな。



833段の植樹地(伊東信撮影) | [写真裏面のメモより:俺は一人で登った 大畑沢 山を愛す H18.5.5日]



どんどん上から上がって行くからね。で、下の方に来ると楽なんだよ、枚数をどんどん植えられるわけ。……(省略)……テープでラインを引かれている所へ、運んだものをストックするわけ。測量の人がね、ダンダンとテープを貼ってピンで止めていくんだけど。その前段の仕事をアルバイトがしていたんだよね。

N「確か、あれですよ、夏の3ヶ月くらいの仕事だったんですよ？」

M「もちろん、そうそうそう。」

N「その、夏休み中にアルバイトをされたということですか？」

M「夏休み、夏休み。」

S「丁度夏休みなのでですね。」

……(省略)……

S「植生盤を初めてやった時ってどう思いました？仕事風景だとか、仕事のやり方とかに對して。」

M「「ああ、これを貼り付けるんだ」くらいしか思わなかったね。これを貼り付けていくと、当時の営林署の人に聞いて、「これを貼り付けたら、自然と発芽するんだよ。雨にあたっ

も種が入っているわけだからね。全部が全部発芽しなくても、だから早いのかなという気持ちがあったよね。だいたいイタドリなどだからね。あれはもう、根深く入って行くし数が増えるしね。今考えればね。繁殖率も高いしね。だから、それでやっているのかなと思うくらいですからね。」

#### 「お話を聞いて」

S「ピクニックのように植樹デーで山を登るのと、40キロの植生盤を担いで登るのでは、訳が違ふと思う。私は植樹デーでさえ疲れてしまうのに、現在70歳になるというMさんは平気な顔で一年中登っている。当時の中学生の体力にもだが、現在の体力にも啞然とする。お話の間、Mさんは終始ニコニコ顔だった。長い間、松木に向き合ってたのは、子どもの頃からの感覚があるからなのかもしれない。」

N「女性に混じって子どもが働いていたのも驚きだが、「体力のある若い子」と同じように植生盤を運んでいた女性にも驚く。聞き取り中なぜかずと、Mさんが昼休みにオバチャンたちと一緒にご飯を食べる様子を想像していた。Mさんはきつと、とても可愛がられたんだろうなと勝手に思った。」

てね」ってね。「水はやらなくて良いんですか？」と聞いたから、「水は天然だから、雨水だけで大丈夫なんだよ」って。

S「結構、植生盤のやり方に「本当に根付くのかな？」とか感じるのではと思うんですけども。」

M「それは、不思議だったよ。「これになるんですか？」という感じで。」

S「実際に効果はあったんですかね？」

M「効果が出るまでには、みんな流されちゃった。もう大雨が降れば一発ですよ。まあ、当時はね、我々もあんまりそういうのに興味も無かったから、アルバイトでお金を貰えれば良いなという感じだったからね。それでね、昼休みにオバチャン連中とご飯を食べてさ、そうするときに「今植えた植生盤がね、雨風にあたったりして芽が出てくるんだよ」っていうのは話に聞いたけれども。「ああ、そうなんだ。それを植え付けている訳なんだね。木は植えないんですか？」って聞いたから「それだと、大変な数になっちゃうから、これだと早いんだよ」ってね。植生盤だと種がいっぱい入っているからね。そうすると、群生していっぱい出てくるわけなんですよね。1本1本だと大変だからね、確かにね、10000も20000

#### 仕事と家事

「2015年9月上旬」Fさん、志村(S)」

植生盤経験者を見つけるのが難しいと予測していた所、よくお茶飲み話をさせていたでいての方が経験者と判明。こんなに近くにいるとは……と、慌てて昭和30年代の仕事についておうかがいした。

S「植生盤の仕事は、何歳くらいの時に始めたんですか？」

F「何歳くらいだろうな。……子どもらが学校に行っている時だよ。」

S「やっぱりお友だちに誘われて？」

F「そう。前橋の営林署の請け負いだっただけでね。人に頼まれてから出たから、長い期間は勤務しなかったけれども、本当に暇な時に出たくらいでね。だけれども、朝が早いからね。」

S「何時くらいに出るのですか？」

F「そうだね。8時かな。車が迎えに来るでしょ？で、社宅の人を全部拾って行くんだけど、こらだけでも5、6人いたからね。私が一番初めに車に乗って、次々寄るんだよ。」



労働 足尾の女達（伊東信撮影） | [写真裏面のメモより：足尾スノコで働く女達 昭和39、9]

S | 堆積場に溜めてある、粘土質の土を乾かすための土の掘り起こし作業の様子だと思われる。植生盤とは違う仕事だが、原堆積場などでも行われていた。戦後から昭和40年代くらいまで、足尾地域内での女性たちの働き場所として、植生盤、石背負いやイッパチ、堆積場での仕事が挙げられる。選鉱所の選鉱作業や内職の話も聞く。どの仕事も厳しい労働に感じるが、野外の仕事ではワイワイ冗談を言いあい、内職では社宅のご近所さんで集まって切磋琢磨していたなど、楽しみの要素も大きかったようだ。

S | 最初に植生盤の重いのを積んだり、岩場の斜面で働いた時って、どういう風に思いましたか？

F | その時はみんな友だちと一緒に働いていたからね。大して感じなかったね。自分一人で働いているのと違うから。友だちがみんな働いているから、もうそういうものだと思うってね。もう、その時代というかね。

S | 今話をうかがうと、「え、凄い」とびっくりしちゃうんですけども。お友だちと一緒にだし…、

F | そういうのが当たり前だと思って働いているからね、何とも思わなかったね。

S | 働いていらっしゃる方って、年齢的には何歳くらいの方ですか？ いろんな？ 結構年配の方も働いていたと聞いたんですけども。

F | そうだね。だいぶあれだね。みんな子ども関係が落ちていて、結局は友だちが働いていると、「あ、私も」ってね。みんな釣られて行く人が多かったんだろうね。

S | じゃあ、本当にある意味、暇つぶしじゃないけれども、そんな感じですよ。期間も春から夏と限られていますもんね。働くとしたら、週5日間とかそういうのではなくて？

F | 違うね。雨が降れば休み。だから、日曜でもやっている時もあるしね。雨が降ればできないから、休みになるしね。

S | じゃあ、「何日に出勤するよ」とかいったシフト制ではなくて、その3ヶ月間の雨が降らない間に行くみたいなの？

F | そうそうそう。

S | ちなみに、山の天気って変わりやすいじゃないですか。仕事中に雨が降っても続けるのですか？

F | カップを持っているから、雨合羽。リュックを背負っているんだけど、中には弁当とそういうカップは必ず持っていていた。

S | え、じゃあ、途中で雨が降ってもカップを着て作業を続けるのですか？

F | そうそうそう。少しくらいの時ね。1回は、夕立になってもやっていた時もあつたけれどもね。ある時は、仁田元の所がいっぱいの水になっちゃって通れなくなつてね。それで、ダムの上に紐を張ってもらってね、ダムの上を渡って来たことがあるね。

S | えー、ロープ伝いで、ってことですか？ 危ない…。

F | そう。ロープ伝いでね。怖かったよ。それが一番の思い

出だね。だって、普通の川だったらトラックで行ったけれども、水が多すぎてトラックが通れないだろ。だから、あそこをずっとロープ伝いでね。そうやって渡った人はあんまりいないよ。

S—ですよね…、怖いですよ、実際はね。ヒヤー。でも当時はそういうものだと思って、

F—普通なら渡らせないからね。危なくてね。今では、思っただよね。

……(省略)……

S—植生盤の仕事ではいろいろな奥さんが集まっている中で、情報交換もできたんですね。

F—そうだね。方々から来ているから、いろいろな話が聞けるんですね。

S—それはやっぱり楽しいですよ。そうすると、もちろん砂畑だったら砂畑の友だち同士だったけれども、山に行けば違う地域の人も集まっているから、初めましての人もお話しするようになって？

F—そうだね。中才の人も、遠下の人もね、みんなトラックの送迎があったから集まるんだよね。

S—と、おにぎりとかのお米ですか？

F—うーんと、おにぎりじゃなくて弁当だったかな。

S—でも、大変ですね。朝8時には家を出て、帰りが何時でしたっけ？

F—たいがい5時だね。

S—そうすると、朝は何時に起きるのですか？

F—朝はそうだね…、だいたい5時前だね。

S—え、

F—で、ガスコンロとかがあるわけではなくて、窯で料理をしていくから、早く起きないと間に合わないがね。

S—じゃあ、朝5時前に起きて、お米を炊いて？

F—前の夜にちゃんと準備をしておくんだよね。水を入れて、窯にはちゃんと新聞を入れて細かい木を仕込んでおいて、その上に火をつければすぐにできるようにね。朝にそんなことをやっていたら間に合わないから。

S—じゃあ、朝に起きたらすぐに火を入れて、米を炊いて。

F—そう。それで、今度はおつゆ。おつゆだって、七輪で火を起こしてやるでしょ。だから、昔のやり方を考えたら、今はもうまるつきり、遊びと同じようだよ。ハハ。何もしな

S—1日に何人くらい作業するのに集まっていましたか？

F—あの頃は土建会社が随分あったからね。随分あったよ。それでみんな女の人は働いたからね。植生盤はたいがい女で、男つてのはあんまりいなかったからね。監督みたいに指導をする人は男じゃないと駄目だけれども、あとはたいがい女だったね。

S—例えばなんですけれども、大変な作業じゃないですか。そういうので、トラブルじゃないけれども「もう今日は疲れたからできないよ」と言うようなこととか…、

F—そういうことは聞いたこと無いね。まあ、「疲れたね」くらいはあるけれども。

S—じゃあ、気持ちよく働けたということですね。それは、もの凄く良いことですね。

F—みんな働くのに一生懸命で、あとは食べる食料の話やらね。

S—ちなみに、お昼って何を持って行ったのですか？

F—あの頃は何を持って行ったかな。梅干しは必ず山の上だから持って行ったね。卵だってそんなに買えなかったしね。油炒めだのそういうおかずが多かったね。

いと同じような、

S—ハハ、本当にそういう風に見えちゃいますよね。だって、3時間くらいかけてご飯やお弁当を作って。旦那さんの分も作りますよね。それで、子どもがいれば子どもの分も、まあ中身は同じだけれども、お弁当を準備して朝ご飯を食べさせて、で、

F—片付けて行かないとね。帰って来るのは夕方だものね。

S—そうですね…。で、8時に車に乗って、炎天下でお仕事をして、夕方の5時くらいに家に。トラックに乗って帰って来るんですね。それで、5時にお仕事から帰って来てからは「フウ」って一息できるんですか？

F—できないね。買い物に行かなくちゃいけないからね。三養会が夕方6時までやってたのかな。そこで、ある程度の品物は買えたからね。だけれども、そうじゃなければ仕事なんて行けないよね。

S—じゃあ、本当に家に帰って来たら、お店が閉まる前に買い物をして、で戻って来て夕ご飯の準備をして、

F—で、食べて。で、お風呂に行って。お風呂も三養会の所にあったからね。共同浴場がね。



S ―お風呂は何時までやっていたのですか？

F ―お風呂は夜8時まで。

S ―ああ、夜8時まで。じゃあ、夕ご飯もかなり早く作らないといけないですね。

F ―夕方5時に帰って来て、買い物をして夕飯をして、夜8時までにお風呂に入らなくちゃならない。大変だよ。

「お話を聞いて」

S ―他の方からも、洗濯は夜のうちにやっておいたといった話を聞いた。時間の合間に家事をこなす積み重ねは、今も同じかもしれない。友だち同士でおしゃべりをしながらの植生盤の仕事は、気分転換にもなるような、季節の楽しみの一つにも感じる。

1 NPO法人足尾に緑を育てる会が毎年春に主催している、松木エリアの植樹地に実際に苗を持ち運び、植樹体験をするイベントには県内外から多くの参加者が集まる。2015年4月25日(土)、26日(日)に開催された第20回春の植樹デーには、約1800名が参加し、約8000本の苗を植えた。

2 足尾の植樹作業のためには、まず岩肌を土に運ぶ必要がある。昭和26年に考案された植生盤は、土、肥料、草木の種子、切りワラを混ぜた植樹用の土の板のようなもので、これを山の斜面に貼りつけていく。この植生盤筋作業で中心となって働いたのは、足尾の女性たちだった。(参考…秋山智英、「森よ、よみがえれ―足尾銅山の教訓と緑化作戦」株式会社第一プランニングセンター、1990年)

3 松木エリアでの治山ではないが、足尾地域内の石垣を作る際の石運びの仕事のこと。お話によると、当時女性の仕事が少ない中で植生盤と同じような良い仕事で、生活に困っているような女性には、役場から斡旋があったりもしたらしい。話し手の方は、知り合いから紹介してもらったとのこと。他にも、石垣を作る際の石運びのイッパチと呼ばれる仕事があり、植生盤とは違うが山の工事などのために砂利などを運ぶ仕事もあった。

4 「坑夫」という言葉はマスコミでは用語言い換えて、「坑員」「坑内作業員」と表記する場合があるが、この冊子では、現地の方が使ってきた言葉をそのまま掲載している。



祝貫通 足尾トンネル 昭和51年8月(新井常雄撮影、栃木県立文書館所蔵)

Q7 “閉山”ってどういうことだったのですか？

昭和48(1973)年2月28日に足尾銅山は閉山した。今から約40年前に子どもだった人も含めると、現在足尾にいる多くの方が、何かしら記憶している出来事だ。閉山前に町中でささやかれた予感や、閉山を知った瞬間、閉山後の職探しや町の取り組みなど、閉山にまつわる時間軸は長く、話題の範囲も広い。それぞれに影響があり、今にも繋がるそれらの視点は、なるべく多様な立場から集めることが大切だと思う。

### ある坑夫さんにとっての閉山

私たちの聞き取りではすっかりおなじみの元機械方のMさん。語りが魅力的なのは、見落としてしまいそうな人間らしい部分がポロツと自然に現れるからだと思う。今までの聞き取りの中であうことができたMさんにとっての閉山。

〔2014年1月10日〕夫(M)、妻(F)、志村(S)、中山(N)

F― 社宅の生活は楽しかったね。みんな仲良くなんだかなだね、あっちこっちでお茶飲みしてね。まんじゅうなんか作ってみんなを呼んだりね。

らしい顔見せられないかな」って思ったこと、いくらもあるもん。もう他所に行っちゃったから終わりなんだよね、そういう人もいるんだよね。友だちでもなんでも、親しくしても。あー、人間って案外薄情なんだな、って。

S― うーん。……(省略)……閉山の時にMさんが家族で残ろうと思った理由は何だったんですか？引越した方が多かった中で、足尾を出ようとは思わなかったんですか？

F― ま、できたら足尾に残りたいって。うん、私は思った。

M― やっぱりこっちはね、いや、行けたは行けたのさ、小山かなんかへね。家族の誘いもあったしね。だけどその時には銅山で仕事が見つかったから。俺は、閉山から8ヶ月くらい坑内に入っていたんですよ。まだ坑内に残務整理で。だから、向こうの会社で席をおいて、…坑内では5、6人で残務整理やったんだわ。坑内の荷物降ろしたり、ポンプの線を切ったりして、坑内の中が水で埋まるまでね。

S― なんかその作業っていうのも凄いですね。

N― 全部埋めたんですか？

M― ほとんどね、だから何十万円もするような機械も坑内にはまだあったから、「この中の機械を出してくれたら、一人



砂畑社宅解体中(伊東信撮影)

〔写真裏面のメモより：一棟5000円売った 49,3,17日 俺は二棟買った 色々に便利する 材料買いに来る人も 何日も居た〕

M― 一年寄りたちが集まってきたよな、ばあちゃんたちが。ある時、遊びに行くとき年寄り4、5人くらい集まっていたね、家族の話や、世間話をしながら「ガハハ」って、笑っているんだよね。……(省略)……でも閉山がなくなっちゃ良かったんだよね、閉山でほとんどの人が出て行っちゃったんだよね。私らの友だちは、ほとんど出て行っちゃったよね。だけど、閉山で二つ人間が利口になったのはさ、それまでつきあいがあった人が、引越した後に足尾に来て「お世話になったね」って挨拶に来る人はそんなにいないよ。30人に2人くらいだよ。偶然会ってね「なんだ、ちょっとく

数万円ずつやるぞ」と言われたから、「じゃ。出しちゃうか」ってやろうとしたこともあるよ。そしたら、「怪我でもしたら、大変だから止めてくれ」ってことで止めたんだけどね。だから、坑内に置いてきた機械がだいぶあるよ。何千万って。

「だからおまえら、ほら一人頭5、60万はなるからな」って言ったんだよね。……（省略）……だから最後は、「じゃあ今日はここ、明日はここ」って、モーターのケーブル線を切ったり、電気を切ったりね。みんなスイッチを切ったら、止まって終わりだからね。もう水が入っちゃうから、それを最後までやってきたんだよ。「これで終わり」って言って。ハハ、

S — 本当に最後の最後ですよ。

M — その最後をやっている時に温泉を掘ったのさ、今の「かじか荘」の。「かじかの温泉が出るまでがんばってくれや」って。このボーリングをどんどんやって、初めてお湯が出たんだよ。お湯はあったんだよ。下にも。だから坑内に入った時だって「帰りには温泉に入っていくか？」なんて、ドラム缶の温泉に入ったりして、帰って来た。

S — あ、坑内の中でってことですか？

M — 中で、ハハ。お湯がボーリングを掘った穴からどんどん

出ているんだから、坑内の中で。そういう所にドラム缶を3つ置いて温泉にしていたから、そこに入ってから、坑外に帰ってきていたんだよ。

S — 凄いい！

「お話を聞いて」

S — 引越した方を見かけた話は、足尾に残った側の素直な感情だと思う。同時に、足尾を出なければならなかった人は、気軽に声を掛けにくい気持ちもあったと想像する。どちらの言い分もわかるようで、歯がゆいような何とも言えない気がする。残務処理の話は壮大すぎて理解が追いつかない所があるの、もう少し聞き貯めたい。

N — Mさんには以前から、閉山によって人々が足尾を去る様子を聞いていたが、当時は混乱の中、毎日のように慌しく人々が足尾を出たのだと想像される。きつと気持ちの整理なども追いつかないままのことだったのだろう。閉山は足尾に残った人々にとっても、足尾を去った人々にとっても、生活を激変させた出来事なのだと思う。

「2014年3月5日」夫(M)、妻(F)、志村(S)、中山(N)

M — 俺は、閉山後の半年くらいだったけど、坑内の仕事やっていたから。それで閉山後に新しい職場に行ったら、「お前誰だ？」って言われたもんね。お母ちゃんが電話をしたらさ、「そんな人はいねえ」って言うんだもん。「Mですが、今どこですか？」って聞いたら「そんなMなんていうのはいないよ」なんて。たまげたよな。職場が変わってから1年くらいは、会議がある時ぐらいいしか顔出さなかったから。だから馴染みの人が2人くらいいるんだけど、「嫌になっちゃうよな、行くとな」なんて言ったりしたね。……（省略）……働いている頃はまださ、頭丸坊主でさ。ハハ、鉢巻してやっていたから、一目置かれていたんだよ。それで、職場内で弱い人がいじめられていると、その人のことを親戚だって嘘を言っちゃうんだよ。「親戚だぞ、あんまりあれしないでくれよな」って言う、次の日から変わったみたい。ハハ。そういうのでもん。……（省略）……

M — だから坑内の仕事とは違うよね、坑内っていうのはどうなのかな。

F — やっぱ、気が強いっていうのかな。ほら、命が危険で

すよね。

S — あー、

F — 今日坑内に入ればさ、こういうことがあるのかわからない。

M — こんなこと言ったこともあったよ。「お前、坑内の横間歩」1入って7時間でも8時間でも仕事してみろ、担架に乗って帰って来るようだよ」ってね。坑内で2時間も仕事をやたらもう汗でびしょりなんだよ。仕事をする場所なんか、もう真夏なんてもんじゃないからね。シャツ1枚着ていたって、ものの1時間もすれば汗だくになってシャツを絞るようだから。「おまえそういう仕事したことあるか？」って。毎日命がけだよって。「だから違うんだよって、お前らと」って。……（省略）……

M — 他所の炭坑で働いていた係長が職場にいたんだよ。その人の炭坑が閉山になったから足尾に来たんだよ。坑内で事故があった時にその人が「Mさん、やっぱ坑内だね。俺、炭坑にいたけれども、やっぱ違うわ」って言っていたね。坑内で働いている俺らは仕事に、友だちがぶ倒れたっていうと、飛んで抱えてくるがね。血なんかが出ていても坑内で



見つけたりすればね。例えば癩癧(てんかん)の人が倒れているだろ、みんな「うわー」って逃げちゃうんだから。けど中には「何やっているんだ」って助けに行ける人が何人かはいるよね。やっぱり、そういうので気の強い人はいるんだね。それで、初めて「Mおまえ、初めはわかんなかったけれども、凄いな。あの血だらけになった友だちを抱えてくんだもんな」なんて言われたんだよね。……(省略)……でも、自分の倅(せ)がれかなんだとしたら、やつていられないべなって思っただよ。本当のこと言う。だから、気がなんだかっていうか、わかんないな、そういうことあったよね。……(省略)……

N 山の男がっこいいですね。

F いやあ、山の男ね。坑内はね、私らもよくわかんないよね。

M みんな怪我しても、炭坑の人はみんなで助け合ったんだよね。そうすると、「Mさんは、山の人だな、やっぱり坑内の人だね」って。……(省略)……坑内と炭坑とかで働いた人はみんな、何か事故があれば引きずり出したりして、助け出す人が多いって。「山で命張っているんだね。鉱山で働いている人は、そうやって助け合っているんだよね」なんて。

N 今こう、うん、うん、って聞いているけれども、自分の立場になったらどうなんだろうって思っちゃうもん。……(省略)……

M 閉山になれば、それは凄いわ。子どもだって影響しちゃうよ。「親父、なんで引越さないんだ」なんて言い出したりしてさ、「大丈夫だよ、俺は。家(うち)はこうだから」って言うたりしてさ。だから近所にね、「いいね、Mさんは仕事があるから」って言われたり、憎まれたりな。「なんで、ああなんだよ」って。……(省略)……幹旋先の会社見学があって、「こ行つて、見てくれよな」って言われて行けば、「いいですよ、いつでも来てください」って言われたけれど、「そんな所まで行けっかよ」って帰って来たりな。……(省略)……東京に職場見学に行った時に、吉祥寺に古河の寮があったから、帰りにみんなで泊まって来たんだけど、そこに他の炭坑から来ていた人が「いやあ、足尾はまだ閉山が決まっていなから良いよね」なんて言われて、切ない気持ちだったよ。……(省略)……

M 最終的には「足尾で働けや」ってことで、足尾に残ることになってね。閉山で、周りは一軒一軒引越して行っちゃう

んだもんね。かわいそうだよ。その度に引越しを手伝ってな。閉山で退職した人は、退職金などを元に引越し先に家を建てた人もいたんだよね。その人を手伝いながら、「なんだ、こんなに良い家に引越すんだ」って考えていたんだよ。で、後から訪ねて行くと「20年もたったら、ガタガタになって家に入れないよ」って。そういう造りの家なんだね。大急ぎで粗末な唐材で作ったような家だから。

S そんなことあるんですか？

M うん、だから2階なんて風が吹いたら響くようだよか、ごまかされて買ったんだか。「Mちゃん、来なくてよかったよ」なんて言われてさ、「なんで、良い家だべ」って言った「良い家かな？ 段々住むようになったら、10年も住んだら、2階なんて揺れるような家だ」って。……(省略)……やっぱり惨めだ。本当に、足尾の人は大変だ。なってね。

「お話を聞いて」

S 坑夫の仕事感は消滅してしまっただなとじんわり伝わる。足尾以外の鉱山の人や足尾を離れる人、残った人、それぞれに影響があった。私は足尾を離れた方の話を聞くこと

はできないし、よそ者が安易に聞けるものでもない気がするけれど、足尾に残った人・出た人の関係はどういうものなのだろう、と気になった。

N Mさんの言葉からは、一緒に働いた仲間たちを懐かしむ、また仲間たちと離れてしまった寂しさのような気持ちを感ずることができた気がした。

「2015年5月21日」夫(M)、妻(F)、志村(S)、中山(N)

M だから、残務整理をやったのは10何人かだからね。

S え、足尾の中で10何人ですか？ それは凄くないですね。通洞だけで？ それとも本山とか全部合わせて？

M 全部あわせてね。残務整理っていうか、ほとんど、要するに会社から「ポンプのモーターを上げるのに残ってくれ」とかね。

N どのくらいの期間がかかったのですか？

M だから、初めは「4ヶ月か？」って言ったけれども、俺は半年以上。……(省略)……

S その残務処理をやることになったのは、閉山前後に、

「やってくれ」みたいな話があったのですか？

M—そうそうそう。もう閉山で、みんな仕事がね。「お前は、どここのセメント工場ではなく、鉄管工場に行ってくれ」とかね。仲間にやつたりね。「それなら、俺が行くよ」「駄目だ」「いや、待ってくれ」とかさ。そういういろいろなのがあったんだよね。……（省略）……だから、主に機械方が足尾に残って、残務整理って坑内に残っている巻き上げ機とかをばらしたりね。閉山の日は俺はいなかったんだよ、その日からパタンと今度は誰もいないから。

N—その様子が、だって銅山で働いていた時は、音だったり、人が作業している音とか、巻き上げる音とか、凄く想像ができてるんですけども。

S—賑やかでしたよね。

M—もうなにもない。もうその日から誰も入らないからね。

S—じゃあ、もうシンとしていたんですか？

M—シンだよ。ただ、水が入るから。坑内の水が下にどんどん溜まるから。……（省略）……だから、周りをこう決めてさ、「1、2、3でお前が今度巻き上げのポンプの運転やってくれ」と役割を決めて、かわりばんこで仕事をやって

いたね。……（省略）……残務処理では、坑内の中に残っている機械もそのままにしておいてケーブルだけは上げちゃうんだよ。プツンって切ってね。それで、ケーブルを切っちゃうと、もう時間との問題なんだよね。水がくるから。

S—私、ちょっとわからないのですが、水がどんどん入っちゃうっていうのはどういうことですか？

M—そこらへんの河原で穴を掘っているのと同じで、段々掘って行くと水が出てくるがね。

S—で、閉山前まではその水を排水していたけれど、そうやらなくなったから水が溜まる。

M—雨が降る訳だがね。それが全部入っている訳だよ、坑内に。だから中には、水が溜みたいになっている所もあるんだよ。

S—坑道の中で？ 滝？ ハハハ、

M—あの、でかく掘っちゃうがね。そうするとでっかい滝になるんだよ。「あれはなんとかの滝だ」なんて名前がついているんだ。……（省略）……

「お話を聞いて」

S—使われなくなった坑内は空洞ではなく、水が溜まってい

るというのは、予想外だった。聞けば聞くほど、更に坑内の謎が深まる。Mさんが坑内について語る時には、擬音や何とも言えない言葉で表され、わかるような、わからないような……。壮大な空間、閉山後のシンとした空気感、坑内に水が溜まって行く様子や滝の流れる音は、言葉や文字で置き換えることは不可能な世界なのだろう。

N—Mさんの記憶にある坑内の風景を、そのまま映像や絵が何かにしてじっくり見てみたい！それが、残務整理のみならず坑夫さんの仕事をMさんから聞き続けてきて一番強く想うことだ。まさに想像を絶している…。

残った人はいない

「2014年1月20日」夫(M)、妻(F)、Faさん、志村(S)、中山(N) あるご夫婦から紹介していただいたFaさんは、山形県の永松鉱山閉山「2」がきっかけで中学生の頃に足尾に引っ越して来た。2つの閉山を経験した方の視点。

Fa—私は、昭和36年の5月に永松が閉山になって足尾に来たんですよ。まだ春先の中だけでも、山形には雪が

沢山残っていたので、雪の中を歩いてきたんです。お友だちが「さよなら」って、みんな段々にいなくなっちゃうんですよ。順番に銅山を出るでしょ？ いっぺんに出ないからね。みんな行き先が決まって、順番に出るんです。……（省略）……そんなことで、「さよなら」って、5月に電車に乗って足尾に来て、通洞駅に降りたら道がとにかく広くてびっくりした。通洞駅の階段を降りて、下降したらもう広くてびっくりました。で、砂畑の住宅の風景も凄かったんですけれどもね、3列で、「い・ろ・は」と並んでいてね「3」。私は、その中の「ろ」列の一番最後の方の住宅に住んだのですけれど、そこまで行く距離が長かったです。ずっと歩いて。あんまり広くて、道が長くてね。

S—足尾に来られたのは、親戚がいるなどのきっかけがあったのですか？

Fa—その時残っていた、古河の関連鉱山だった飯盛、久根「4」、足尾の3つの鉱山から選ぶように古河の方から言われて、それで父は山形に近い方が良いと思って「んじゃあ、栃木の足尾でいいか」と決めて。引っ越し先は、古河からこっち、あっちって指示されたのではなくて、選べたらいいですね。

**N**—和歌山も静岡にも鉾山が…?

**Fa**—そうです、古河の鉾山です。永松では私のクラスは20人くらいいたのかな、同じ学年が。それで、閉山でいろんな所に分かれて、足尾に来たのが2、3人だったんですが、結局、今の足尾には私しか残っていないです。引越した先の飯盛も久根もその後閉山になって、で、みんな足尾に来た人もいれば、他の仕事を見つけた人もいるし。足尾が一番最後に残ったんで、父の選択は正しかったのかなって思うんですけどもね。結局足尾も閉山したけど、私は足尾の地の人と結婚したので、ハハ。足尾が良かったのかなと思うんですけども。でも最初はあれでしたね、言葉も違いますし。だからどうしても中学1、2年は内気で。元々内気な性格だったので、人と交流ができてなくて淋しかったです。でも何人かお友だちができたんですけども。今でもその人たちとは、お友だちです。……(省略)……

**Fa**—ふるさとを離れないですつというられるというのは良いですよ。私はいつも思うんですけども、主人が羨ましい。だって、ここで生まれ育って、ずっとここにいられるんだもの。まあいろいろ変わるけれども、ね。「私にはふるさとがな

い」って、いつも言うんですよ。帰れるふるさとが無いんですよ。そこが無くなっちゃたから、そうですね。……(省略)……

**S**—足尾に引越して来る前に、足尾について何か聞いていましたか？

**Fa**—全然聞いていない、引越し先として、3つの候補地から選ぶことになって、一番近い足尾に決めたんですよ。何もわからず、親の言うところについて行くだけでしたね。どんなところかも調べもしないしね、小さかったしね。そんな感じてしたね。

**M**—そこに、残った人はいたの？

**Fa**—残った人はいないです。最後まで残った人は、最後まで誰かはいたとは思ってんですけども、結局は閉山で。その、民家がないから。全部古河関係の社宅や持ち物ですものね。……(省略)……

**S**—…そのFaさんが住んでいた山形の鉾山も、閉山で残ることができなくなっちゃったことですよね。

**Fa**—そう。全部、それにそこはお店も全部古河。足尾いう三養会みたいなものしか無かったし、後はなんにも、とに

かく民家が無い。全部古河の人だから。全部って言っても、まあ出て行くのは徐々にですけれども。だから私が足尾

に来た時には、全部いっぺんに「さよなら」じゃなくて、徐々に髪の毛が抜けるように、一つ一つ抜けていった。そうやって、人が出て行ったんです。だから、最後がどうだったのかは私らもわからない。

**S**—ちなみに、足尾と山形で全然状況が違うと思うんですけども、足尾で閉山になった時に、山形の閉山と重なる部分っていうのはありましたか？

**Fa**—全然ないですね。

**S**—そうですか。

**Fa**—足尾は閉山になったけれども、みんな外に出て行く訳ではない。住宅の家からは引越しましたけれども、足尾に残りましたね。……(省略)……

**F**—今市や大間々に行くときね、なんかね「うわー、なんでこんなに空が広いんだろう」ってね、すごくストレス解消になるんですよ。足尾にいたときね、とにかく空が狭いんですよ、もう山がね。「いやあ、空はこんなに広いのか」と、解放されるというか。だからね、たまには気晴らしに良いんですけども。

**Fa**—ずっとは嫌だね。足尾がいいですね。

**F**—帰って来ると、今度は山に入ると安心感がね。神子内(みこうち)まで来ると安心感があるんですよ。向こうの今市に行ってから、戻って来るとやっぱり足尾がいいなと思うんですけども。でもFaさんのふるさとの話を聞いていたら、もっと足尾を大事にしないとと思いました。

**Fa**—私もね、最初は足尾が好きになれなかったんですけども、神子内にお嫁に行ってから、家の周りが山の中だから。周りに山形と同じような自然があるんですよ。山菜もあるし、春になったらそれこそゴギミ、ゼンマイ、ワラビ、フキノトウも出るしね。ここじゃ、町ではそういうのはあんまりね。だから神子内にね、お嫁に行つて良かったなと。ハハ。いくらか永松にいたような感じが味わえているから、良いのかなと思つて。だからね、今は足尾が大好きです。

「お話を聞いて」

**S**—「永松と足尾の閉山は重ならない」と即答していたのが印象に残っている。足尾だけではないということ、強く意識させられた。Faさんの話は、永松鉾山の雪や、山の豊かな自然の



生活の話が多く、それほど跡形もなくなってしまうたふるさへの想いが強いかもしれないし、もしかしたら現実離れとなっているからこそ、綺麗な記憶として残っているのかもしれない。

N—Faさんは二度も閉山を経験し、きつと多くの寂しさや辛さを知っているのだと思う。そんなFaさんが話すふるさとへの想いには重みがあった。ベッドタウン育ちの私にとって、無機質なコンクリート、他人を気につけない人の距離感、電車や車の音、好き嫌いは別にして、その空気が一番安心する。でも今では、宇都宮インターに入って山に向かう時、日足トンネルを通過して山に入る時、「帰ってきた、落ち着く」としみじみと感じる。私も足尾が大好きだ。

## 共同浴場での親切

「2014年10月24日」Mさん、志村(S)、中山(N)、好井(Y)昭和30年代に坑内で働いていたMさんは、労働環境のあり方に違和感を持ち、組合活動に加わった。その後、突然解雇となり、それを不服として仲間とともに裁判を行う「5」。Mさんにとって、閉山前後と、解雇されてから苦勞し、やりくりしていた時期は、重なっている。

やって帰ればいいか聞く人がいたんですよね。……(省略)……坑外への帰り方が分からないわけ。坑内は分かっているから、入り組んでいるから。そうすると、「俺帰るから、じゃあ一緒に帰ろう」ということで一緒に帰ってきたりね。

……(省略)……

M—私が組合支部の執行部に入った時に、運動方針の中に、社外工も個人の組合員として入れるという内容を加えたの。そして、昭和41年に解雇されたんです。……(省略)……そのヘイクロウ「9」とか警察沙汰になった人とかが対象だと聞いていたんだけど、25名の解雇通知の中に私の名前も入っていたんですよ。……(省略)……解雇とは、次の日の生活を奪うということでしょう、仕事が無くなるということはその人の生活が無くなるわけだから。ところが、まさかね、自分たちがなるとは思わないよね、ハハ。

S—本当にびっくりという感じだったんですね。

M—解雇されてからは、今度は仲間間で意識的に疑っちゃうんですよ。例えば、通洞の共同浴場に入るでしょ、そうすると私が行くとお風呂から出て行っちゃうんですよ。

S—えー、嫌だな、そういうの。

S—同じ坑内の仕事をしていても、喫飯所で休憩したり、仕事後にお風呂に入れないような人たちがいたのですか？

M—そういう人たちは組夫「6」なの。何でもやる。間接の方「7」はずっとは、やれない。技術があるから自分の専門分野の仕事をやっていたの。組夫は分野が別れていないので、仕事の全行程を一緒にやるっていうね。だから仕事は大変だったね。だから働く場所も条件の悪い坑内の下へ下へ行ったからね、湿度の高い所とか。気の毒といったら気の毒、その点があったよね。だから帰りは、作業員が濡れたら濡れたて帰ってくるでしょ。そうすると、普通の工員の人は帰って来たらちゃんとお風呂に入ったり、下着を取り替えて帰るでしょ。組の人たちは仕事を終わって坑内から出ると、お風呂に入れないんです。だから乾燥室も使わない。お風呂と乾燥室がそなえられていて、ちゃんと作業着を乾燥室に入れて、お風呂に入って自分の脱衣所で着替えて帰って行くんだけれども、組夫の人はないんですよ。直接自分の家に行くか、飯場「8」に行くか。私がある時、仕事帰りに、組夫の人たちと一緒にになったことがあるんですよ。中には、坑内からどう

M—私が風呂に入っていくでしょ、そうするとみんなが下を向いてサーッと、ぽつんぽつんと風呂から出ちゃうの。俺としゃべると支障が出るんじゃないかと思って、避けるんだよね。猜疑心になっちゃうの。ほら、私と何かしゃべったら、その人が何か言われるんじゃないかって。何か支障が出るんじゃないかな、ってね。本当にあれだったよ、最初は。

S—そういうのがあるんだ…。

Y—それ、やっぱり昭和41年くらいからあたりでしたか？

M—そうですね。

Y—その前はそういうことはなかったですか？

M—ないですね。そういうことはないですね。我々が解雇されてからです。それで、今度はお風呂の券を作るようになったんです。社宅の共同浴場の券、

S—あ、じゃあお風呂に入るのに、無料じゃなくなっちゃうってことですか？

M—うん、結局、解雇された私たちが入らないように、券制度になった、月別に。そのお風呂の窓口の人、いわばね、お風呂場の管理人がいるんですよ、昔は。その人が窓口において、券に判子を押すんですよ。そうすると、解雇されてしまった

から、私の家は該当されないですよ。そうすると子ども券もないんですよ。でも、子どもにはそんな関係ないがね。そうするとその人はいいい人でね、子どもが風呂に行く時に、誰かが券を忘れたとすると、わざとそれをとっておいて、家(うち)の子どもの名前を書き換えて、子どもに渡したの。子どもはそういうの、全然分らないから。そういう中で、そうやって守ってくれた人もいる訳。……(省略)……他の例だと、社宅の中の本通りがありますよね、そこを歩いていて私の姿が見えると、通る予定だった道を変えてすーっと違う道に行っちゃうんですよ。ハハ。顔を見るも駄目。……(省略)……裁判が始まって判決が出て、だいたい筋がわかった頃に、ある人が「ただ、なんて言っているのかわかんなかった」って。「嫌で避けたのではない、激励していいのか、慰めの言葉を言っているのかわからないので、私は避けていた。かわしていたんだ」という話をされたね。それを聞いて、ちょっと救われたけれどもね。

#### 「お話を聞いて」

S ー裁判の実体験を聞き、自分が持っていた裁判に対するイ

きあっていた方がいいのかという当時の周囲の人びとの戸惑いを思いやり、気づかうMさんの優しさだ。

#### 現役の消防団員

「2015年5月10日」Mさん、志村(S)

現在60代で消防団員を約50年続けていらっしゃる方のお話。

M ー昭和50年代の消防団は、県の操法大会「10」では1、2位だからね。

S ーそうなんです、県の中で1位か2位を争うほど…。それは、足尾の消防団が優秀だったということですよ。人も沢山いたし、訓練とかも一生懸命やっていて技術が高かった？  
M ー部が沢山あって、そこから若い衆を集めてやっていましたよ。大会にもたいがい行くからね。足尾の場合は、結構、頑張っていたから。

S ー町の人も安心というか、凄い誇りですよ。消防団の人たちも。

M ー昔はほら、消防分署というのがなかったから。プロがいなかったから。冬場なんかは詰所に詰めてね、毎日交代

メージが大きく変わった。とにかく、エネルギーが必要で、維持するのは並大抵のことではない。Mさんはあつけらんとか苦しい時期の話をしてくれながら、当時の問題点が次から次へと熱く発せられ、時間がたっても収まらない気持ちを感じた。お風呂でのそれぞれの反応・対応は、自分もやってしまいうてもある。本当に辛い時の優しさや、弱い立場の人の側に立つということ、人が見えない場所で人柄が現れることを、よく表している例が沢山あった。

N ー裁判が行われている時は、古河の従業員の人たちにも複雑な想いがあったのだと思う。Mさんも大変な疎外感を持ったのだろうと想像する。そんな中、最後まで裁判を行えたのは、仲間の存在や、日常に感じる些細な人の優しさが大きな支えであったのだらうと思う。

Y ー銅山で労働運動を熱心に進め、閉山前に突然解雇され、その不当性を訴え、長年裁判闘争してきたMさん。初めて聞き取りにうかがった私も氣さくに受け入れ、ぶしつけな問いかけにも快く語ってくれる。彼の語りからは、解雇されたことへの憤り、不正への怒りが透けてみえる。しかしMさんの語りで印象深かったのは、解雇された自分とどのようなにつ

でさ。冬場は、今の通洞駅前にあったんだけど、夜は詰めてね。今は楽だよ、やっぱり。昔と変わったことは、消防団員による夜勤がなくなったということですよ。泊まりに行かなくて良いから。一冬に多い時には10回以上かな。そこに行つて、朝に帰つて来てから、そのまま仕事に行つたのさ。そういうのもなくなったから楽だよ。

S ーかつては県で1、2位を争うような消防団で団員も沢山いた時から、閉山や人口も減少して、現在になっているんですけれども、昔から今にかけてどう感じられますか？  
改めて思うこととか…、

M ー改めてつても。なにがなんでも、あれだよ。人口が少ないっていうのがあるよね。人口が増えればさ、若い衆が増えればさ、俺らも消防団員をやらなくて済むんだよ。

S ーフツ、

M ー笑われちゃうよね。はっきり言うよと笑われちゃうよ。俺らが消防団員をやっているなんて。年金生活をしているのにさ、消防団員をやっているなんて言ったら笑われちゃうもんね。「関心する」じゃなくて、笑われちゃうよ。

S ーでも、やっぱりそうせざるを得ないっていうかね、今それが

M—「そうなんだよ。動けるうちはさ、」

S—「活躍していただいて。」

M—「動ける」って言っても、やっと動いているんだけどもさ。」

「お話を聞いて」

S—「終始、笑いながらユーモラスに話が続いたが、「こんな歳でも、消防団をやっているなんて笑われちゃう」と言う一言には、今のいろいろな足尾の様子が示されている。この日の数週間後、一人暮らしのお婆さんの家が火元の火事があり、そのお婆さんは亡くなってしまった。火災にすぐ対応できる体制の維持がますます難しくなっていく中では、お話のとおり、歳だからといって消防団を抜けることはできないだろう。ちなみに、協力隊に着任した当初から消防団に加わったNさんは3回の消火活動を経験していて、凄いなあと思う。」

番外編「消防団に参加して」

N—「Mさんの言うとおり、足尾消防団は人員が不足し、また高齢化が進んでいます。これは深刻な問題で、若者の入団と世代交代が必要であることは、間違いありません。しかし、個人

たのかわからないよね。みんな出て行く人で。足尾から出て行くから、」

S—「最後に髪を切る、ということですね。」

F—「うん。パーマをかけて、みんな綺麗にして出て行っちゃった。」

S—「えー、そうなんだ。ちゃんと引越す前に髪を綺麗にしてから、奥さんたちは出て行っただ。」

F—「うん、出て行っただもんね。だから美容師の私は手を使えどろ、手が痛くて筋肉痛になったよ。」

S—「それほど、沢山の人が引越す前に髪を切りに来たんですね。閉山のことは、あまりイメージとかできないんですけども。どんな人が引越して行く中で、でもそうやってパーマをかけて出て行っただと思うと、なんか……。髪を切ってもらった時って、お話をしたりするじゃないですか。」

F—「さんも、お話しながら？」

F—「その時だって、話をしながらやっただけでも、」

S—「どういってお話をしていたんですか？」

F—「閉山で他所に行ってから、体に気をつけなね」とかね、いろいろなうわさ話がありましたよ。新しい仕事先では、勤務時間が長いでしょ。だから随分苦労して、嫌で帰って

的なわがままを言えば、大先輩の団員の方々には、是非、体にムチを打って、まだまだ団員として活躍していただきたいです。」

おつかない団長と副団長には規律を学び、副分団長には節度を学びました。分団の方々も、いつも私のことを気にかけてくれます。部では陽気な分団長、優しい部長、実はいつも真剣なMさん、みなさんに消防のことだけでなく足尾のこと、人生のことなど、多くのことを教えていただいています。とっても楽しいです。だから、(怒られそうですが)カッコいいおじ様方には、これからも頑張ってくださいたいです。」

引越す前の美容室

「2015年5月27日—Fさん、志村(S)」

昭和20年代に美容師の修行に出た後に、足尾で美容室を開業した方。銅山ならではのお客さんの様子や、女性目線の店や町の話題の中で、閉山の一場面も語られた。

F—「美容室は夜もやっていただけでも、テレビがどんどん普及してからは、夜のお客さんが少なくなったよね。昼間は結構やっていてね、それで閉山になる時には一日に何十人やっ

来た人もいるし、大変だったみたい。」

S—「ね、きつと美容室に来る奥さんたちは、奥さんたちかなりの心配とかが、いろいろとあったんでしょね。」

F—「そうそう、あったからね。新しい所に行くんだからね。でも、向こうに行って、向こうの人と仲良くやっている人もいるけれども。逆に、なんか意地悪された人もいるみたいよ。話の様子では。」

S—「そうですか。」

F—「水とか、どぶがとか、なんかいろいろ話を聞いたことがある。」

S—「どぶ？」

F—「うん。どぶが使えなかったり。水底に使えなかったりとか。なんかって意地悪されたって。」

S—「新しく来た人っていうことで、受け入れづらかったんですかね。」

F—「いろんな所があったみたいね、里もね。小山の方へ行ったり、埼玉の方に行ったりしているんだよね、みんなね。」

S—「なんか、その閉山になるとわかって、そうやって、奥さんたちがパーマ屋さんに殺到している時に、Fさんはどうい



気持ちだったり、どういう風に感じながらお仕事をしていたんですか？

F—だから行っちゃってから、お客さんが少なくなっちゃうしさ、あれかなと思っただけでも、行っただけでも、何年ぐらいたろう、何年かはまあ良かったけれども、だいぶ少なくなっちゃって寂しくなったよね。それでほら、みんな同級生なんかも行っちゃうし。だいたい私らと同じくらいの年代の人が行っちゃったから。だから寂しかったよね。今になってその人たちが同じくらいの歳だから、「どうしたろうね」って聞いてみたりするけれどもね。

S—：閉山の時か。想像がし尽くせないな。

F—そうだね。その時に足尾にいない人にはわからないよね。

#### 「お話を聞いて」

S—引つ越し前に髪を切る奥さんの様子は、妙にリアル。また、どぶの掃除といった細かい部分での不都合に気づくアンテナは、女性ならではの情報収集力。そういう嫌な部分は、ずっと覚えている気がする。いろいろな所で足尾から引つ越した

方が話題になるが、その人たちそれぞれがどうだったのか気になるけれども、全くイメージができないまだ。

#### 社宅から見た、閉山から今

「2015年6月28日」Fさん、志村(S)、好井(Y)」

社宅に閉山後も暮らしていた奥さんのお話。

S—閉山のことはなかなかイメージできなくて、本当にいろいろな人が突然足尾を離れて行ったと思うんですが、Fさんの周りの方はどうでしたか？

F—他の所は影響があっても、近所さんはみんな同じ場所に勤めていたから、定年までいましたよね。

S—あ、じゃあFさんや周りの方は、大丈夫だったのですね。ただ、引つ越したかはなかったけれども、同じ町で閉山の影響があったということは？

F—そうそう。ちょっと寂しかったですよ。だから「いずれは：」って気はありましたけれどもね。

Y—それは社宅の人はやっぱり、どんどん人がいなくなっていくという？

F—ええ、近所では引つ越しはなかったんで、そんなには感じなかったんですけれども。

S—：閉山はよく話題になったのですか？

F—ええ。寂しかったですよね。

Y—やっぱり、こう、町全体を見たら、どんどん変わったという印象がありますか？

F—ええ、ありますよね。お店も段々と少なくなるし、人も少なくなっちゃいますから。だから、そういう寂しさはありましたよ。段々と、本当に人口が少なくなるからね。

……(省略)……

S—閉山になって数年経つと、閉山後の3本柱で、観光開発や企業誘致を始めたり、日足トンネルができてきましたよね。そういう変化っていうのは、どう生活に影響があったと感じましたか？

F—私、のんきね。あんまりそういうのを感じなく過ごしてきましたけれども。でもね、よく出かけるのに、細尾峠があったでしょ、山を回って行くからね。車を買ってから、何回か行きましたけれども、トンネルができたら、不便だった所から便利になったんですね。日光方面が通れないと、鉄道

の足尾線だけになっちゃうでしょ、一方方向になっちゃうでしょ。だから、「足尾は孤島の土地になっちゃう」なんて心配したんですけれども、トンネルができたらうんと変わりましたよね<sup>[11]</sup>。

S—実際、日光の方と桐生の方で、トンネルができる前後で行く回数というのは変わりましたか？

F—桐生の方へは年中行けたけれども、日光・今市方面はあんまり行たことがないから、うんと遠いように感じましたよ。

S—ああ、やっぱり。

F—日光の方へはあまり行かないですよ、山を越えて行くのに大変だったから。……(省略)……だから、トンネルができてない頃は、そういうような感じてした。日光は遠いような感じてした。桐生の方が多かったですよ、桐生、大間々とかね。

S—学校とかも、例えば高校生とかは、桐生の方に行くか、足尾高校ということですね。

F—そうですね。

S—それを考えると、日光市に合併したって凄いですよね。



平成10年11月15日 伊東信撮影



平成10年2月21日 伊東信撮影

[アルバム内のメモより]

表紙に記述:

足尾通洞解体始める。

平成10年2月21日より写ス。

社宅解体後にマンションが立つ。

裏表紙に記述:

思い出の社宅が消える。

F6マンションが出来た。

変わり行く通洞F3近く二棟出来る。

通洞社宅跡にマンションが出来る。

平成10年9月15日



F「そうですね。今は日光の方にばかり買い物に行くから、日光の方が近いように感じますけれども。今はちょっと、乗り物が不便になってきているけれど。」

……(省略)……

Y「さっき、閉山の話がうかがったんですが、例えば閉山の後に三養会のサービスが変わったとか、そういうのはありますか？」

F「段々と品薄になりましたね。愛宕下(あたごした)の三養会がなくなつて、今度は赤倉がなくなつてついで。今なんて2つだけです[12]。閉山後は、段々と本当に、目に見えるように寂れて行くのはわかりましたけれどもね。」

S「なんか、漠然とした質問になつちゃうんですけども、今つて本当に三養会が2つしかなくて、お店もポツンポツンじゃないですか。どう思いますか？」

F「若い人たちは車だから、年中買い物に行っているんですけどもね。今ね、コープが来ているでしょ。そういうのが来る時に一緒に頼んでいるんですけども。うん。ここはお店もないしね、不便です。」

F「でも、あそこに足尾双愛病院ができたのでうんと助か

るんですよ[13]。桐生まで、病院に行っていたんですよ。S「閉山後に総合病院が足尾にできたので、あれがあるのとないのでは全然違いますよね。」

F「そうですね。会社関係の通洞病院があつたけれど、なくなつたので、足尾双愛病院ができたので助かりました。S「やっぱり、あそこに入院されている人も沢山いらつしゃいますもんね。」

……(省略)……

S「閉山前の社宅での生活で覚えていることはありますか？」

F「飲み会で、隣が喧嘩している時があるの。そうすると奥さんが「Fさんちよつと、家(うち)の人が喧嘩始めちゃったから、止めて、止めて」つてね。みんな背が高い人ばかりで、お父さんは小柄だったものだから、「やだ、家(うち)のお父さんが行ったら飛ばされちゃうよ」とか言つたけれども。今となつては楽しい思い出ですね。そういうことがありましたが、社宅から引越してからは本当にね、「しばらく見ないけれども、あの人は元気ですか？」とか言われたりね。だから、「誰々さんがあれなんだけれども」なんて言う

たりね。……(省略)……あんまり話つていうのも出ないですもんね。昔はね、社宅にいる時は「いる〜？」なんて言うて戸を開けてきちゃうけれども、今はピンポンをならさなくちゃいけないでしょ。だからみんな玄関先くらの話だけで、そういう親しみつていうのが段々薄らいじやつてね。」

……(省略)……

S「逆に私なんかは鍵を閉めるのが当たりまえの世代なので、何て言うか信じられないというか、

F「社宅にいる時は鍵なんて持っていないかつたですよ。ええ、

S「そういうことなんだな、つて思っちゃいますね。」

F「だから、洗濯物やなんかがあると、雨が降ってきたりしたらみんな入れてくれたり。戸を開けて、ほおり投げて行くてくれたりしてましたけれども。会合かなにかの集まりがあると、みんな誘い合うんですよ。もう時間だから行くう」つてね。今はそういうあれはないですね。朝晩に行き会つと「こんにちは」「おはよう」つて言うくらいで。あんまり人通りつていうのがないから。「あの人大丈夫かしら、しばらく行き会わないけれども」とか言う人もいますけれどもね。

Y「私は大阪生まれなんですけれども、Sさんは世代が違

うけれども、わかるような気がして。大阪市の市営住宅の平屋で育つたのですが、そうすると、隣の家との塀があんまり高くなって、家の中が見えちゃうんですよ。で、隣の人が何をしているのかわかる。」

F「そういうの、ありましたよね。」

Y「ありましたね。それが昭和30年代ですから。それも大阪の市内でもそうです。だから、普段のまさに醤油のやり取りもやっていましたし、貸し借りみたいなものも。」

F「今の住宅ではそういうものもないし。よく私らは、すぐに三養会に走つて、足りないものを調達したんだけど、店が閉まっているとお隣さんに「あら、今日使おうと思つたら、お店が閉まっていたの」つて貸してもらつたり。そういうのはありましたね。だから「会計までにちよつと3日あるんだけど、家(うち)にこれが足りないんだけど」つて言うのと、「家(うち)にあるから、じゃあ会計までいいわよ」なんてね。そういう貸し借りがありましたね。」

「お話を聞いて」

S「「こんなこと…」とはにかみながら、丁寧にお話をしてく



店の様子について。当時は30代。

れたFさん。主婦ならではの生き生きとした社宅の生活感が伝わる。文字化のための校正の際、Fさんには「顔から火が出るほど恥ずかしい」とまで言わせてしまったが、無理を言って掲載させてもらった。Fさんに限らず、自分の話が文字化される側だったら、確かに驚いたり、慎重になったり、恥ずかしい気持ちになる方は多い。けれども、あえて私の立場からは、その内容が「こんなこと」ではなく「面白い視点や気づき」として、迷惑がかららない程度に聞き集めていきたい。

Y「社宅ですつと暮らしてきた女性。普段の様子をいろいろと語っていただいた。二つの社宅を移った歴史。語りからは社宅ごとかなり生活の事情が異なっていたことがわかる。一口で「社宅の暮らしは」と言えないことが実感できた。少し控えめだがしっかりと丁寧な語りの中に、女性が社宅の日常で他の女性たちと関係を築き、地域の活動も進めてきたという誇りのようなものを感じ取れた。

### 猫の手も借りたくなる忙しさ

「2015年9月1日」Fさん、志村(S)

足尾にとっておなじみの食堂の奥さんから見た、閉山後の

食堂に来てご飯を食べて行くとかね。出入りが激しく、店の段取りが追いつかないくらい大変で、店の仕事に追われて過ごしましたね。

S「じゃあ、それまでは坑夫さんとかが仕事帰りに使ったり、家族が食べに来たりしますよね。閉山の時は、さらにいっぱい人が殺到したみたいな？」

F「そうそうそう。結局、閉山は2月だったろ？4月に間に合うように、どんどん引越して行く人ばかりだから、学校の黒板には「誰が何処に行く」って記録されてね。だから、子どもが、「母ちゃん、俺たちはいつ引越すんだ？」って聞いてくるような、もう引越しが当たり前だって会話が家庭でされたという話だよ。引越しとなると、家(うち)みたいな店にお昼を頼むとか、「夜に一杯飲ましてくれ」とか。それでもう大忙しだったよね。

……(省略)……

S「閉山の前後で、例えば人の働き方や生活習慣だとかリズムが変わったと感じられたり、気付いたことはありますか？」

F「子どもの頃には本山にいたけれども、朝6時半といえ

F「以前の足尾には小学校が5つ、中学校が3つあり、昭和28年に中学校が合併して1学年10クラス程の大勢の生徒と70人からの先生を抱えた県下一のマンモス校でした。大勢の人がいたけれど、閉山後は年々学校も縮小されて、今では1学年7、10名ほど。部活も限られるようですね。でも、他へ行くことも不可能でし、全国的に少子化の波の中にいるのですから、今は子どもたちの幸せを祈るのみですよ。……(省略)……高齡化した今、足尾の商店も大変ですよ。人口は減るし、商いも以前ほどじゃなく不景気になり、後継者も考えられず廃業を余儀なくされてね。今は観光町とはいえ、食べる場所も限られていますよね。地下資源を頼って生活する人々にとって、避ける事のできない現実でしょうか。

……(省略)……

S「閉山直後には、何か商店に影響がありましたか？」

F「とにかく、閉山直後は忙しさが大変だった。引越す家ばかりで、もう自分の家で料理をやってられないから、

ば、働いている人の通勤があったんだよね。通路に、もう朝6時半といえ、真冬でも真夏でも、行列をなしてみんなが通っていたね。通勤の時間で、「ああ、ほら1の方(いちのかた)14」が入るんだぞ、起きろや」って言うのが親の口癖くらいだったね。みんなカンテラを下げてね。その列が閉山でまづいなくなったよね。閉山の後は今度は、引越しをする人の車の列が半年くらいはずっと続いたしね。

……(省略)……

F「閉山で仕事を辞めて足尾から離れた方々は、埼玉県とかに集団就職みたいな形でまとまって雇用先に行ったみたい。「あれもいるから、俺もそこに行くべ」とかね。そういう話はお風呂でしたみたいですよ。

S「そうか、銅山関係の人は、共同浴場の中で就職活動の情報交換をしていたと。そうですね、お風呂で一緒になったら「どうだい？」って話になりますよね。

F「うん。これが一番大きいみたい。そういう話題を作る所では。あとは、組合の詰所ね。「どういう所、良い所、無いけ？今日はどこか新しい就職口ないか？」ってね。町場の人っていうのは、全然そういうのに関係ないから。「かあちゃ

ん、俺どこどこに就職決まったよ」って風に報告に来てくれる人はいた。「世話になったね。俺、いついつに発つからね」ってね。……(省略)……引越しの時にいらぬ物はそのまま置いておけるから、道路の隅には多くの家具や鍋、窯や冷蔵庫などが山のように並んでいましたね。それでも、古河にいた人は衣食住が保障されていましたから、社宅に残って暮らしたいという気持ちは強かったと思うよ。血と汗で働いた人たちにとって、新天地に向かう意気込みと足尾を離れたくない複雑な気持ちが入り乱れて、名残惜しうに足尾を離れて行っていましたよ。残された人たちにとっても、年をとった人というのは親を置いては行けない人たちなどで、町に起こされた企業に就職したとしても、慣れない仕事に苦労したと思いますよ。

#### 「お話を聞いて」

S — 食堂を営んでいた方だからこそ、細やかな視点で、はっきりと意見を言ってお下さるFさん。昔に限らず、今に対する問題意識を持ち、包み隠さず正直にユーモラスに伝えてくれ、私自身がズキつと思ひ知らされてしまう。閉山という微

妙な出来事にも、真つ正面から向き合い、今までの足尾に寄り添って来たからこそ、優しく堂々としたお人柄になっていったのかなと感じる。

#### 飲み方の変化

「2015年9月2日」Fさん、志村(S)」

同じく足尾の名店であるホルモン屋さんも、「閉山直後は案外忙しかった」とのこと。お店のカウンターから見ていた当時の様子。

S — 閉山の頃って、どんな感じだったか覚えてらっしゃいますか？  
F — 社宅関係はあんまり出入りしていないから、わからないうですけれども。閉山の時にはまだ、町には女性のいるお店屋さん。風俗関係のお店屋さんは何件ありましたかね、結構あったんですよ。それで、風俗関係は、11時が閉店の時間なんで、家(うち)らは風俗ではないから、夜2時頃まで許可をとって営業していたんですよ。まあ、実際は2時くらいまではお客様の数は少ないですけれども、でも1時くらいまではやっていましたね。風俗関係のお店さんは、

閉山でお互いに別れ別れになるせいか、結構お客さんが来ていたんですね。その人たちのお店が11時で終わりですから、それから家(うち)に来れるように、女性が家(うち)に場所取りに来ていました。ハハ

S — そんなことがあったんですか。

F — そんなことがあったんですよ。うん。閉山の後にね。

S — じゃあ、閉山で足尾を出なくてはならないってことで、最後にお別れをするようなことだったのですかね。

F — 別れを惜しんで飲み歩いていたのかね。2年間はそんなような状態で。「6畳の部屋の方に座りたい」とのことで、場所取りに来てね。ほとんど一杯になりましたね。

……(省略)……

S — じゃあ、閉山の前後では、お客さんの客層だったってお店の使い方は変わりましたか？

F — 客層はやっぱり足尾の方ですからね。みなさん、何て言うのか、意外と労働者の町っていうのは飲み方が荒いんですよ。荒いんだけど、閉山後はそういう雰囲気はなく、飲んでいましたね。うん。別れを惜しむというのか、どういうんでしょうね。

S — スミマセン、飲み方が荒いっていうのは、ワイワイ、ガヤガヤ？

F — 以前はね。やっぱりあの、労働者同士だから、飲んだ後は喧嘩をするとか、ちよつともめるとかそういうことは往々にしてあるんですけれども、閉山後の飲み方はそういう荒々しさはなく、楽しくというか、飲んでいました。

S — ふーん。そうなんですな。

F — 名残を惜しんで、別れを惜しんでというかね。うん。いつもの雰囲気とは違いますね。

……(省略)……

S — 常連さんも結構足尾を離れたんですか？

F — 随分ね。結局は年配者の方、そろそろ定年になるようなそういう方たちは「今さら、出て行くのも大変だ」ということで、残ったんでしょうけれどもね。若い方たちはこれからお仕事をしなくちゃいけないのね。

S — 子どもも育てていかなくてはいけませんしね。

F — そんなんで、でも、その時はまだ景気が良かったので、会社見学をして、好みの所に就職をしたということですけども。今ではできないことですよ。

S—そうですね。今だと、選んでられないという感じがすよね。

F—だからそういう点ではラッキーかな、悲しみの中でもラッキーな、

S—Fさんから見て、足尾を離れなくちゃいけなくなった人たちはどんな風に見えましたか？

F—間近にそういうのは見ていないからわからないですけど、やっぱり厳しかったですね。みなさんね、これから他所に出て新たな生活をしていかなくちゃいけないので。それで、あの、足尾の町では部屋は他と比べて広いんですよ？ 引越しの前のゴミ捨て場には、何か家財道具が多くて、家財道具を持って行かない。

S—あ、次の家に？

F—ええ。それで引越しの際には、随分家財道具があちこちに捨ててありましたね。

S—あ、そうなんですか。持ち運べなくて？

F—そうそう。家具。タンスとかね。いろんな家具があちこちで、山のように置かれて行きましたよね。

S—そうなんですか。へー、引越ラッシュですかね。

はみんな手伝いに行くとかね。……(省略)……

S—閉山後に、観光開発ということで銅山観光などができましたよね。そういった、観光にいくアイデアはどう感じられますか？

F—やっぱり賑やかになることは良いことですよ。一時、随分減ったわけですからね。賑やかになることは良いことで、栄えてもらうことは嬉しいことですよ。あとは、人の出入りが無ければお互い困りますからね。

S—そうですね。それと、閉山に関らずなんですけれども、今までのお客さんの出入りみたいなもの、どう変わってきたというか。例えば閉山直後というのは忙しい時期だったんだけど、ある程度落ち着いてきた時期っていうのはあったのですか？

F—そうですね。他所の店はわからないですけど、やっぱり人家が減るというのは八百屋さんにしろ、一般的に頼る人がいない訳ですから。どこも一緒でしょうね。ましてや、若手がいなくなるというのはね、即、店屋さんも影響するわけですよ。

S—ですすよね。かといって、足尾にずっと住んでいた人も若

F—なので、それを見た時にやっぱり、「どうなるんだろう」と思うですよ。家族の方たちもね。道具って、段々増えるのが普通であつて、急にタンスを一竿、二竿置いて行くとか、その他の細々としたものを置いて行くというのは…。結局住宅関係か何かはわからないけれども、狭いからその道具を持って行かれないかなってしょうね。

S—じゃあ、足尾はそういう意味で、家とかも住みやすかったんでしょかね。広かったりとか、

F—広かったんでしょかね。それだけの家財道具を捨てて行かなくちゃならない状態なんですもんね。まあ、行く先の住まいは狭すぎたのか、そのことは良くわからないですけどもね。

S—でも、一人二人ではなく町中でそうだったとしたら、いろいろな事情で捨てなくちゃならないということですよ。…あと、社宅の人たちは毎日のように引越しがどこかにあつて、お手伝いを合ってた聞いたんですけれども、

F—そうでしょうね。やっぱり、みんなさん何て言うかな、こう、友だち関係の範囲が広いですからね。みんな足尾の家族みたいな感じなんですよ。だから、知っている人

い人は外に出ちゃう。そうですね。

F—だから平均年齢が高いですよね。足尾は。

S—残れなかったっていう感じなんですかね。

F—職場がないということですよ。職場があればね、みなさんやっぱり好きな足尾だから、携わりたかったんでしょけれどもね。

……(省略)……

「お話を聞いて」

S—普段お店とはちよつと違う、Fさんの表情や話し方が新鮮だった。閉山のキーワードとして、女性の店や筆筒が真つ先に出たのが意外だったが、どちらも町部だからこそ気付いた確かな閉山の変化。荒々しい鉾山の飲み方を、親しみを込めて懐かしんでおられたが、今まで様々な場面(修羅場)があつたのだろう。今はそんな飲み方は皆無だが、行けば誰かしらの常連さんが一人でくつろいでいたり、町内の何かの集まりがあつたり、評判を聞きつけて遠くからのお客さんがいたりする。ちなみに、私はこの豚足が好物だ。



- 1 間歩（まど 鉱山の坑道で地表にぬけているものをいう。『金属鉱山研究会編集「鉱山用語集」』東  
甲社、1976年、13頁）
- 2 山形にある永松鉱山は、明治24年に古河の経営に移り、昭和36年に鉱業所廃止。（参考…古河  
鉱業株式会社「創業100年史」昭和51年）
- 3 同じ作りの長屋社宅が並んでいるため、社宅は「いろはにほへ」と手前から順に呼ばれてい  
た。住所の番地のようなものらしい。
- 4 静岡県にある久根銅山は、明治32年に古河の経営に移り、昭和45年に久根鉱業所操業休止。  
和歌山県にある飯盛鉱山は、大正8年に古河が譲り受け、昭和43年に飯盛鉱業所廃止。（参  
考…古河鉱業株式会社、前掲書）
- 5 昭和41（1966）年7月21、22日、古河鉱業株式会社足尾鉱業所が事業合理化のために労働  
者25名を8月1日付けて解雇。うち、7名が足尾銅山不当解雇反対同盟を結成し裁判闘  
争に入る。昭和45（1970）年1月10日、宇都宮地裁では申請人の主張をほぼ全面的に認め  
た形で判決が下され、企業側はこの判決を不服として控訴。昭和48（1973）年8月6日、  
東京高等裁判所第7回目の和解斡旋により合意。
- 6 銅山労働をする方の中で正式な職員ではない社外坑夫のことを指す。下請けなどで一定  
期間足尾銅山で働いている方のこと。足尾出身ではなく、全国から働きに来ていたが、仕事  
のやり方や労働環境は大きな違いがあった。組夫（くみぶ）明治期には職夫二類夫に当り、  
大工、煉瓦職、左官、石工、土工、鳶、畳職、樵職、炭焼、使夫等が相当する。戦後は、鉱山と  
請負組との契約の下で作業をする人をさすようになった。（村上安正『足尾銅山史』、随想舎、  
2006年、617頁）
- 7 技術関係の仕事（電車、機械、測量など）を担当する作業員のこと。直接の場合は、進鑿（しんさ  
く）、支柱、運搬、線路などの作業を指す。
- 8 飯場（はんば）採鉱と製錬に作業員を調達して作業請負を行う下請け組織。単身就業者  
のために宿舎と食事賄いを提供して労働と日常生活の管理を行った。（村上安正、前掲書、  
618頁）

- 9 平九郎（へいくろう）仕事を休むこと。またはよく欠勤する作業員をさす。欠番、バツタする。『  
（金属鉱山研究会編集、前掲書、83頁）この言葉は差別用語だと主張される場合がありますが、当  
時の状況を語っていたという意義を重視し、そのまゝの言葉を掲載しています。』
- 10 操法とは、消防訓練における基本的な器具操作・動作の方式のこと。足尾町消防団は伝統的  
によく訓練され、昭和36年2月には日本消防協会より優良消防団として表彰旗を授与され  
た。昭和39年8月には、県下消防団ポンプ操法競技大会可搬ポンプの部で優勝、昭和43年3  
月には、模範消防団として消防庁長官より竿頭緩を授与された。（足尾町郷土誌編集委員会編  
集『足尾郷土誌』、（有）不二工房、平成5年、35頁）
- 11 細尾峠は道幅が狭く、62カ所に及ぶヘアピンカーブがあり、特に冬季は通行に難渋をきたし  
た。台風時には、道路崩壊で足尾が陸の孤島と化すこともしばしばであった。陸の孤島から  
の脱出と、町の振興発展のために、長年にわたり「日足トンネル」の早期完成を町民の悲願と  
して各関係機関に働きかけた。昭和47年に栃木県が主体となつて着手する運びとなり、足尾  
銅山閉山の年、昭和48年10月22日から約6年の年月を経て、昭和53年3月30日ようやく開  
通した。参考…足尾町郷土誌編集委員会、前掲書、58頁）
- 12 銅山最盛期には足尾地域内に9店舗あり、町の消費の約7割を占めていたといわれる足尾銅  
山生協「三養会」は、閉山後の人口減少や日足トンネル開通による他地域への大型店を利用す  
る人が増えたことなどから、店舗が減少。2015年現在は、通洞売店、渡良瀬売店の2店舗  
の営業となっている。
- 13 昭和55（1980）年に足尾町砂畑地区に開設された足尾双愛病院は、24時間体制での救急  
対応を行う総合病院。通院、入院で利用することはもちろんのこと、足尾内の方が働く貴重  
な勤め先にもなっている。
- 14 銅山で働く人は3つの勤務時間に分けられていた。方（か）はその呼び方。方（か）は操業上の  
就業区分で1日3区分の場合は、1の方、2の方、3の方とした。通常2の方が日勤の就業区  
分になるが、管理部門は1時間繰り下げている。（村上、前掲書、615頁）

## Sより

志村春海〔平成25年〜27年度足尾地域おこし協力隊〕

『小滝坑 みたい姿は こけの奥』この川柳は足尾に来たばかりの頃に思いつきましたが、今も同じ気持ちです。足尾での話の内容や今の現状を知るたびに、「みてみたかった」と思うことが沢山あります。ちなみに、3年間の聞き取りの感想を川柳に表すなら、『目の前に いない人まで 主人公』となります。聞き取りでは、私自身が会えない方々（例えば、閉山で足尾を離れた方、外国人労働者、亡くなった方）が登場します。その存在に気づけたことが、私にはとても大切なことです。これからも聞き取りで、目の前にあるありのままの声や姿、その背景にも注目していきたいと思います。

足尾の方の協力はもちろん、活動の意義に共感し、アドバイスや、荒々しい原稿案を丁寧確認・校正してくれるなど、沢山の方に助けていただきました。本当にありがとうございます。ございました。

## Nより

中山京〔平成25年〜27年度足尾地域おこし協力隊〕

足尾に赴任してから3年間、大変多くの方々に足尾のことを教えて頂きました。みなさんにとっては日常で当たり前のお話なのかもしれませんが、私にとっては驚きが多く、みなさんの話によって日々足尾への関心が深まり、足尾への愛着が増していきました。

知っても知っても、まだまだ奥が深い足尾の生活史を今後も聞き続け、記録に残していくことが大切だと思います。また、町の方々の記憶は、まさにそれ自体が足尾の資源です。貴重な記憶を私たちの中にだけ留めず、いかに外に発信していくかも重要だと思います。足尾にある記憶はきつと多くの人たちを魅了すると信じています。

私たち地域おこし協力隊を温かく受け入れて、多くのことを教えてくださったみなさんに、心より感謝しております。ありがとうございます。これからも宜しくお願いします。

## Yより「暮らしの語りを聞き取る意味」

好井裕明〔日本大学文理学部社会学科教授〕

志村さんたちの聞き取りのお手伝いを始めて数年が過ぎています。銅山関連、山仕事などさまざまな場で仕事をしてきた人たちの語り、自宅で毎日の暮らしをたててきた女性の語りなどと出会い、足尾にも、分厚く多様な「人びとの歴史」が息づいていることを実感しています。

普通、地域の歴史を考える時、当時のできごとを伝える新聞記事や文書や写真など記録された資料をもとに考えようとしています。状況を客観的に判断できる重要なものだからです。でも近年、人びとの生活史そしてライフストーリー（人生の物語）を聞き取り、人びとの語りや記憶から地域の歴史、人びとの歴史を考えようとする動きが盛んに行われてきています。いわば地域で生きてきた一人一人の主観的な記憶、考え、価値観などを丁寧に聞き取り、そこから地域を捉え直すとする動きなのです。

個人的な記憶をいくら聞いても、それはあくまで「その人」にとつての主観的な世界のことだけじゃないだろうかと思うかもしれません。確かにその通りなのですが、人びとの暮らしの語りには、決して記録された資料や写真などだけではわからないさまざまな「生活の知恵」「暮らしの価値」が含まれているのです。また主観的な世界にしても、ただ個人のものとしてではなく、まさに「足尾という地域」で生き暮らしてきたという意味で地域に根差し、地域の中でさまざまな他の人びととともに暮らしてきた個人の主観的世界なのです。だからこそ、足尾で生きてきた人びとが語る「暮らしの語り」を丁寧に聞き取り、それを重ね合わせていくことで、さまざまな視点からまなざされた「生活の場」としての足尾の姿が確実に姿を現していくだろうと思っています。

冊子を読まれ、語りに共感される方、あるいは「いや、ちょっと違うかな」という違和を覚える方もおられるでしょう。それが自らの生活史をふりかえる大事なきっかけです。みなさんも足尾で生きてきた自らの歴史を語ってみませんか。

緑化の歴史（治山、植生盤、山仕事、植樹）

昭和31(1956)年に自熔製錬法による煙害防止への具体的な取り組みが始まるのと同時に、本格的な荒廃地の緑化に着手。荒廃した山地に、治山ダムや緑化工などを配置し、山崩れの防止や緑のダムとしての水質源の確保をする治山事業と、土石流などを止めるための砂防堰堤設備を配置したり、土砂を押さえるための山腹緑化を行い上流域の土砂災害と下流域の洪水氾濫を防止する工事方法がある。この冊子で主に取り上げられる植生盤とは、植樹用の種の入った土の板上のものを指し、これを人力で荒廃地の斜面に止めていった。人間の力が及ばない場所には、ヘリコプターを使って肥料や種の散布を行う方法がとられた。平成8(1996)年からはNPO法人「足尾に緑を育てる会」、平成17(2005)年からはNPO法人森びとプロジェクト委員会が活動を開始し、環境学習や植樹体験イベントを通し緑化活動を行っている。

閉山

戦後、世界的に貿易の自由化が進み全国の鉱山にも影響が出始め、昭和47(1972)年11月1日、古河鉱業では鉱山部の廃止(製錬所は存続)という閉山計画を発表。町で設けた閉山問題特別委員会や、銅山労働組合、「閉山反対町民大会」などによって、従業員の転職の斡旋や、過疎化の阻止や地域振興について話されたが、閉山自体を阻止することはできず、昭和48(1973)年2月28日に閉山した。

閉山後の3本柱

閉山後の基本対策として、栃木県が主となり足尾町振興緊急措置計画が昭和48(1973)年2月に策定された。『町の基盤整備』『企業誘致による産業開発』『観光資源の開発』の3本の柱を元に、県と町が7カ年計画で昭和55(1980)年の完成を目指された。足尾トンネルの開通や観光開発などが実施されたが、実現されなかった計画もあった。

新日光市誕生

平成11(1999)年ころから国の方針で市町村合併が推進され、日光地区5市町村(今市市・日光市・藤原町・栗山村・足尾町)でも合併の気運が高まる。平成15(2003)年、「日光地区合併協議会」設立。平成18(2006)年3月20日に、新「日光市」が誕生。

〔参考〕

ふるさと足尾歴史セミナー自主研究会、『足尾銅山百選——産業遺産活用の手続き』、平成4年。足尾町郷土誌編集委員会、『足尾郷土誌』、(有)不二工房、平成5年。足尾町、『足尾町閉町記念「足尾博物誌」』、平成18年。

和暦	西暦	できごと	人口
天文19	1550	銅山が発見される：古河鉱業(株)(現在、古河機械金属(株))閉山時発表	
明治10	1877	古河市兵衛が銅山を買収、経営を開始	
明治14	1881	鷹之巣坑で直利を発見	
明治16	1883	本口坑で大直利を発見	
明治24	1891	田中正造が帝国議会で鉱毒問題を質問 足尾鉱業所が初めて砂防工事に着手する	11,664
明治29	1896	第1回(鉱毒)予防工事命令発令(明治36年まで5回)	11,448
明治30	1897	農商務省訓令により東京大林区署が「足尾官林復旧事業」を開始	27,426
明治34	1901	田中正造が鉱毒問題で明治天皇に直訴	22,708
明治35	1902	足尾銅山との示談により旧松木村廃村	22,708
明治40	1907	坑夫による大暴動事件が起こる	34,824
明治41	1908	本山に生活協同組合「三養会」を開設 (明治39年に三養会設立準備会発足、本山三養会一部開店)	28,618
大正元年	1912	足尾鉄道 桐生駅～足尾駅開通	29,774
大正10	1921	県内初のメーデーを足尾で開催	27,387
昭和20	1945	足尾銅山労働組合同盟会結成	20,997
昭和26	1951	前橋営林局の川端勇作が植生盤を発明する	
昭和29	1954	小滝坑廃止、フィンランドのオートクンプ社から自溶製錬技術を導入	
昭和31	1956	「自溶製錬法」、「電気集塵法」、「接触脱硫法」を応用した脱硫技術を世界で初めて実用化し、従来に比べ亜硫酸ガスの大幅な排出削減に成功	
昭和48	1973	足尾銅山閉山(2月28日)	8,699
昭和53	1978	日足トンネル開通(延長2,765m)	6,426
昭和55	1980	足尾銅山観光オープン。坑内観光が始まる	6,078
昭和63	1988	製錬所が事実上の操業停止	4,935
平成8	1996	「足尾に緑を育てる会」の活動が始まる(平成14年、NPO法人に認証)	4,077
平成18	2006	今市市、旧日光市、藤原町、足尾町、栗山村が新設合併し、新たに日光市が誕生	3,196

〔典故〕

『足尾町閉町記念 足尾博物誌』(平成18年2月足尾町)、『足尾銅山近代化産業遺産MAP』(平成26年3月、第6刷改訂版 日光市教育委員会事務局文化財課世界遺産登録推進室)、『森よ、よみがえれ——足尾銅山の教訓と緑化作戦』(秋山智英、1990年4月、株式会社第一プランニングセンター)より引用。人口データは、『足尾町閉町記念 足尾博物誌』、永井護「足尾銅山の生産システムの変遷と空間的都市構造」(平成20年7月1日、日光市教育委員会足尾銅山跡調査報告書)他、広報あしお、広報にっこうを参考にしている。



ごめんください、足尾のこと教えてください！—その2  
地域おこし協力隊による聞き取り抜粋集—2015

発行日…2016年2月11日

発行…日光市役所足尾総合支所総務課

編集…日光市足尾地域おこし協力隊

デザイン…木村稔将

協力…聞き取りに協力してくださったみなさま、

古河機械金属株式会社、新井雅之、伊東幸一、栃木県立文書館、好井裕明  
写真…伊東信、新井常雄

日光市役所足尾総合支所総務課

〒321-1514 栃木県日光市足尾町通洞8-2

TEL…0288-93-3115

© 禁断断転載

## 執筆者の紹介

好井裕明(よしい・ひろあき)

日本大学文理学部教授。大阪出身の社会学者。志村が、著書『「あたりまえ」を疑う社会学』(光文社、2006年)を読み(短くてとても読みやすいのでオススメです)、語りから考えていく手法など(エスノメソドロジー、そしてライフストーリーと言うらしいです)を知る。足尾での様々な要素を扱う際に、アドバイス相談の連絡をしたことがきっかけで、足尾の活動に協力。足尾での聞き取りはもちろん、かじか荘の温泉も楽しみに足尾に通い続けている。研究代表者。

三浦一馬(みうら・かずま)

日本大学大学院文学研究科博士後期課程社会学専攻。足尾を含めた過疎地域の研究をしている。北海道大学在学時に偶然出会った志村と炭鉱について話したことがきっかけとなり、足尾へ。そのときの縁で現在の大学院に進学することとなる。定期的に足尾に通い、聞き取りを続けている。調査協力者。

中村哲也(なかむら・てつや)

宇都宮市在住。志村が協力隊で足尾に在籍している頃から、「足尾が面白い！」「地域おこし協力隊が聞き取りをやっているのも面白い！」と様々な形で応援。働きながらも、独自に活動する研究者でもあり、自身も足尾にまつわる研究を行った。現在は社会福祉協議会に在職している。調査協力者。

志村春海(しむら・はるみ)

足尾について「公害の街」という教科書程度の知識しか持ち合わせないまま、2014年、足尾地域おこし協力隊の一員として派遣される。その後、現地で見聞きして得た足尾に関する資料を自分の手元に留めておくのはもったいない……という気持ちから、聞き取り事業を担当することになる。2016年から地元の宮城県に戻っているが、ときどき足尾を訪れては、そこでの滞在を満喫している。調査協力者。

## コラム 執筆者の紹介

市之瀬昌弘(いちのせ・まさひろ)

平成28年度足尾地域おこし協力隊として勤務。現在は地元の埼玉県で働いている。短い期間ではあったが、三養会の閉店時という貴重なタイミングに立ち会うことができた経験をレポートでまとめた。今後も足尾を訪れたいと考えている。

中山貴仁(なかやま・たかひと) 長澤美佳(ながさわ・みか)

足尾にとって第4期目となる地域おこし協力隊。1年目の夏には、足尾庁舎にて、松木溪谷で撮影された熊の写真を集めた企画「足尾の熊」展を開催。今までの協力隊と違う目線で、聞き取りを継続してくれている。平成30年度には足尾の商店や町部の文化をテーマにした冊子を発行予定。

中山京(なかやま・けい)

志村と同じ時期に足尾地域おこし協力隊として勤務し、寺子屋などを実施。退職後も足尾に住みながら、プライベートでも塾をやり続けている。中国留学や得意な外国語、旅の経験や考えを子供達に伝えたりする。過疎の現在の足尾でも、子供達の選択肢が広がるような方法を、自分の得意なことを生かしながら、できることを実践中。

「写真について」

前回の冊子と同様に、掲載している写真は新井常雄さん(1946-2013年)、伊東信さん(1919-2015年)が撮影したものです。お二人は写真撮影仲間で、生前には休日にお弁当を持って一緒に足尾町内の撮影をしていたそうです。伊東信さんは、ご自身の写真を見せてくれたり、経験談を話して下さるなど、私たち協力隊の活動にご協力をいただいております。2015年3月に永眠され、ご自宅には多くの写真やネガなどが残りました。ご遺族のご理解そして栃木県立文書館からのご協力を賜り、新井常雄さんの写真が収蔵されている栃木県立文書館に、伊東信さんの写真類も寄託される予定となっています。

## ごめんください、足尾のこと教えてください！ —科研版—

---

発行日 2018年12月30日

発 行 好井裕明

編 集 好井裕明、三浦一馬、志村春海

執 筆 好井裕明、三浦一馬、志村春海、中村哲也、市之瀬昌弘、中山貴仁、長澤美佳、中山京

デザイン 合同会社デザインナギ

協 力 聞き取りに協力してくださった皆様、日光市役所足尾行政センター

写 真 伊東信、執筆者

〒156-8550

東京都世田谷区楢上水3-25-40

日本大学文理学部社会学科 好井研究室

hyoshii@chs.nihon-u.ac.jp

© 禁無断転載